福岡市西区

四箇周辺遺跡調査報告書

(1)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1977

福岡市教育委員会

福岡市西区

四箇周辺遺跡調査報告書

（1）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集

1977

福岡市教育委員会

序　　文

近年の産業経済の発展に伴う諸開発事業によって，消滅する遺跡の数は増加の一途をたどっています。福岡市もその例外ではなく 福岡市西南部の環境の変化は，著しいものがあります。

当教育委員会では，やむをえずして保存できない文化財については，事前の発掘調査をもって記録保存につとめています。特に四箇周辺地域には貴重な遺跡が埋蔵されており，これらの遺跡の重要性が指摘されています。

今年度から四箇周辺部においても宅地造成がなされる地域について，事前に同地域に存在する遺跡の調査を当教育委員会が主体となり，国庫補助事業により実施することになりました。

調査に際しては，地元及び各方面の御協力により，杭列・木製品などの出土をみ，予期以上の成果を上げることができました。これも関係諸氏の埋蔵文化財への深い御理解と御協力によるものであって，深甚の敬意を表するものであります。

本報告書が福岡市のため，市民各位の文化財保護思想への育成に広く御活用いただくとともに，学術・研究の分野においても役立つことを願うものであります。

昭和52年３月

福岡市教育委員会

教育長　戸田成一

例　　言

1　本書は四箇周辺地域における宅地造成等の開発事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を行なうことを目的とし，国庫補助を受けて昭和51年度に実施した四箇周辺地域内緊急調査の報告書である。

2　事業は福岡市教育委員会文化課が行なった。発掘調査・資料整理・報告書の作製は柳田純孝・二宮忠司が担当し，事務は三宅安吉・国武勝利が担当した。

3　本書の執筆は柳田・二宮が分担して行ない，一部は塩屋勝利・力武卓治・渡辺和子の協力を受けた。山本輝雄，畑中健一，粉川昭平氏には各専門分野からの報告を受け掲載した。

4　挿図のうち遺構の実測は柳田・二宮が行なった。遺物の実測は柳田・二宮のほか塩屋・力武・渡辺・藤好史郎・谷　芳樹の協力を得た。トレースは二宮が行ない，渡辺が協力した。

5　遺構・遺物の写真は二宮の撮影による。航空写真は福岡市航空消防隊の協力を受け柳田が撮影した。

6　本書の編集は二宮と協議して柳田が行なった。

7　本年度の調査地点は発掘調査の際四箇南遺跡と仮称していたが，今後継続される四箇周辺遺跡の調査を考慮し，第１図のように地点を呼称することとした。発掘当時仮称していた地点を本報告では次のように改めた。

四箇南遺跡**Ｎｏ．１地点**⟶**Ｊ－10区（Ｊ－10ａ地点）**
Ｎｏ．２地点⟶Ｊ－10区（Ｊ－10ｂ地点）
Ｎｏ．３地点⟶Ｊ－９区（Ｊ－９ｂ地点）
Ｎｏ．４地点⟶Ｊ－９区（Ｊ－９ａ地点）
Ｎｏ．５地点⟶Ｊ－10区（Ｊ－10ｅ地点）
Ｎｏ．６地点⟶Ｊ－10区（Ｊ－10ｆ地点）
Ｎｏ．７地点⟶Ｊ－10区（Ｊ－10ｇ地点）
Ｎｏ．８地点⟶Ｊ－10区（Ｊ－10ｃ地点）
Ｎｏ．９地点⟶Ｊ－10区（Ｊ－10ｄ地点）

8　本年度発掘調査した各地点は宅地造成され，旧状は失われた。出土遺物・図面・写真は現在調査継続中の四箇遺跡現場事務所に収蔵・保管している。

本 文 目 次

第1章　はじめに……11
1　発掘調査にいたるまで……11
2　調査の組織……14
3　遺跡の立地と環境……16

第2章　発掘調査の概要……20
1　J－9区の調査……20
(1)　J－9 a地点……20
(2)　J－9 b地点……20
2　J－10b～e・g地点の調査……21
(1)　J－10b地点……21
(2)　J－10c地点……21
(3)　J－10d地点……21
(4)　J－10g地点……21
(5)　J－10e地点……22
(6)　土器……25
(7)　木器……27
3　J－10a・J－10f地点の調査……28
(1)　土層……28
(2)　J－10a・10f地点杭の分類……31
(3)　J－10a地点の杭列……32
(4)　J－10f地点の杭列……38
(5)　J－10f地点の横木……48

第3章　出土遺物……51
1　土器……52
(1)　縄文時代後期・晩期……52
(2)　弥生時代前期……52

(3) 弥生時代中期……54
(4) 弥生時代後期……56
(5) 古墳時代土師式土器……58
2 石器……60
3 木器……62
(1) 農具……62
(2) 容器……63
(3) 網枠……63
(4) 用途不明木器……65
4 杭……66
5 建築部材……68

第4章 四箇J－10区出土建築用部材への一理解……山本輝雄……73
1 はじめに……73
2 建築用部材の分類……73
3 材端部の工作について……74
4 一端が鋭く尖ることについて……75
5 おわりに……76

第5章 福岡市四箇J－10区の花粉分析……畑中健一……78
1 試料および方法……78
2 結果および考察……78
3 まとめ……80

第6章 福岡市四箇J－10区の種子分析について……粉川昭平……83

第7章 まとめ……88

挿 図 目 次

第１図　緊急調査地点と四箇地区の遺跡……（縮尺1/15,000）……12
第２図　四箇周辺の遺跡……（縮尺1/25,000）……17
第３図　緊急調査地点位置図……（縮尺 1/2,500）……20
第４図　Ｊ－10ｅ地点土層実測図……（縮尺1/60）……22
第５図　Ｊ－10ｅ地点杭出土状態……（縮尺1/50）……23
第６図　Ｊ－10ｅ・10ｇ地点杭実測図……（縮尺 1/5）……24
第７図　Ｊ－10ｂ～10ｅ・10ｇ地点土器実測図……（縮尺1/2・1/3）……26
第８図　Ｊ－10ｅ地点木器実測図……（縮尺 1/4）……27
第９図　Ｊ－10ａ地点（南－16）土層柱状図……（縮尺1/20）……29
第10図　Ｊ－10ａ地点杭列出土状態……（縮尺1/50）……32
第11図　Ｊ－10ａ地点杭実測図－１　丸木杭……（縮尺 1/5）……35
第12図　Ｊ－10ａ地点杭実測図－２　割杭－(1)……（縮尺 1/5）……36
第13図　Ｊ－10ａ地点杭実測図－３　割杭－(2)……（縮尺 1/5）……37
第14図　Ｊ－10ｆ地点南側横木出土状態……（縮尺1/50）……折り込み
第15図　Ｊ－10ｆ地点南側杭列出土状態……（縮尺1/50）……39
第16図　Ｊ－10ｆ地点北側横木出土状態……（縮尺1/50）……折り込み
第17図　Ｊ－10ｆ地点北側杭列出土状態……（縮尺1/50）……43
第18図　Ｊ－10ｆ地点杭実測図－１　丸木杭……（縮尺 1/5）……45
第19図　Ｊ－10ｆ地点杭実測図－２　割杭－(1)……（縮尺 1/5）……46
第20図　Ｊ－10ｆ地点杭実測図－３　割杭－(2)……（縮尺 1/5）……47
第21図　Ｊ－10ｆ地点横木実測図－１……（縮尺 1/5）……49
第22図　Ｊ－10ｆ地点横木実測図－２……（縮尺 1/5）……50
第23図　土器実測図－１……（縮尺1/2・1/3）……53
第24図　土器実測図－２……（縮尺 1/3）……55
第25図　土器実測図－３……（縮尺 1/3）……57
第26図　土器実測図－４……（縮尺1/6・1/3）……59
第27図　石器実測図……（縮尺 1/1）……61
第28図　木器実測図－１……（縮尺 1/4）……折り込み

第29図　木器実測図―２……（縮尺 1/4）……64
第30図　木器実測図―３……（縮尺 1/5）……65
第31図　流木群の杭実測図……（縮尺 1/5・1/10）……69
第32図　建築部材実測図―１……（縮尺1/10）……71
第33図　建築部材実測図―２……（縮尺1/10）……72
第34図　Ｊ―10ａ地点（南―16）の花粉ダイアグラム……折り込み
第35図　Ｊ―10ｅ地点（ＢＴ―１）の花粉ダイアグラム……折り込み

図 版 目 次

PL. 1　　J－10区発掘調査風景　（1976年5月・6月）

PL. 2　(1)　四箇周辺遠景……（後方は博多湾　南から　1976年11月）

　　(2)　四箇周辺遠景……（手前は室見川　西から　1975年6月）

PL. 3　(1)　四箇周辺全景……（南東から　1976年11月）

　　(2)　四箇J－10区発掘地点全景……（発掘終了後　南東から　1976年11月）

PL. 4　(1)　J－10a地点全景……（南西から）

　　(2)　J－10a地点全景……（北西から）

PL. 5　(1)　J－10a地点流木群出土状態……（南東から）

　　(2)　J－10a地点流木群出土状態……（北東から）

PL. 6　(1)　J－10a地点流木群出土状態……（西から）

　　(2)　J－10a地点A列南側の杭及び流木出土状態……（南から）

PL. 7　(1)　J－10a地点遺物出土状態……Ⅵ層出土の土師式土器（第26図－41参照）

　　(2)　J－10a地点遺物出土状態……Ⅵ層出土の三又鏃（第28図a－15参照）

PL. 8　(1)　J－10a地点杭列と土層（北断面）の関係……（南から）

　　(2)　J－10a地点杭列と土層（東断面）の関係……（西から）

PL. 9　(1)　J－10a地点南断面（南－16）の土層と土壌採取風景……（1976年5月28）

　　(2)　J－10a地点流木群取上後の旧河道と杭列の関係……（南東から）

PL. 10　(1)　J－10f地点全景……（南西から）

　　(2)　J－10f地点全景……（南東から）

PL. 11　(1)　J－10f地点の杭列……（北西から）

　　(2)　J－10f地点北側A・B列の杭と横木出土状態……（北から）

PL. 12　(1)　J－10f地点南側A・B列の杭と横木出土状態……（南から）

　　(2)　J－10f地点流木群出土状態……（南から）

PL. 13　(1)　J－10f地点遺物出土状態……Ⅵ層出土の網枠（第29図f－367参照）

　　(2)　J－10f地点遺物出土状態……Ⅵ層出土の容器（第29図f－368参照）

PL. 14　(1)　J－10f地点東断面の土層……（西から）

　　(2)　J－10f地点東断面の杭出土状態……（西から　p. 30参照）

PL. 15　(1)　J－10e地点AT杭出土状態……（東から）

　　(2)　J－10g地点全景……（北東から）

PL. 16　J－10区出土土器－1 ……（第7・23図参照）（縮尺1/3）
PL. 17　J－10区出土土器－2 ……（第7・23・24・25図参照）（縮尺1/3）
PL. 18　J－10区出土土器－3 ……（第7・25・26図参照）（縮尺1/3）
PL. 19　J－10区出土土器－4 ……（第7・26図参照）（縮尺1/3）
PL. 20　J－10区出土石器……（第27図参照）（縮尺1/1）
PL. 21　J－10区出土農具……（第28図参照）（縮尺1/4）
PL. 22　(1)　J－10e地点出土木器未製品……（第8図参照）（縮尺4/5）
　　(2)　J－10f地点出土容器……（第29図参照）（縮尺4/5）
PL. 23　J－10f地点出土網枠とその細部……（第29図参照）（全形は縮尺1/4）
PL. 24　J－10区出土用途不明木器－1 ……（第8・29図参照）（縮尺1/2）
PL. 25　J－10区出土用途不明木器－2 ……（第29・30図参照）（縮尺1/4・1/5）
PL. 26　J－10区出土建築部材－1 ……（第32図参照）（縮尺1/10）
PL. 27　J－10区出土建築部材細部……（縮尺不統一）
PL. 28　J－10区出土建築部材－2 ……（第33図参照）（縮尺1/10）
PL. 29　J－10e・J－10g地点出土杭……（第6図参照）（縮尺1/5）
PL. 30　J－10a地点出土丸木杭……（第11図参照）（縮尺1/5）
PL. 31　J－10f地点出土丸木杭……（第18図参照）（縮尺1/5）
PL. 32　J－10a地点出土割杭－1 ……（第12図参照）（縮尺1/5）
PL. 33　J－10f地点出土割杭－1 ……（第19図参照）（縮尺1/5）
PL. 34　J－10a地点出土割杭－2 ……（第13図参照）（縮尺1/5）
PL. 35　J－10f地点出土割杭－2 ……（第20図参照）（縮尺1/5）
PL. 36　J－10f地点出土横木－1 ……（第21図参照）（縮尺1/5）
PL. 37　J－10f地点出土横木－2 ……（第22図参照）（縮尺1/5）
PL. 38　J－10区出土流木群の杭……（第31図参照）（縮尺1/5・1/10）
PL. 39　J－10区出土種子－1
PL. 40　J－10区出土種子－2
PL. 41　J－10区出土種子－3
PL. 42　J－10区出土種子－4
PL. 43　J－10区出土種子－5

表　目　次

第１表　Ｊ－10ｅ・10ｇ地点杭一覧表……25
第２表　Ｊ－10ａ地点杭一覧表……33
第３表　Ｊ－10ｆ地点南側杭一覧表……40
第４表　Ｊ－10ｆ地点北側杭一覧表……41
第５表　Ｊ－10ｆ地点横木一覧表……48
第６表　流木群の杭一覧表……66
第７表　建築部材計測値一覧表……70
第８表　*Oryza. Triticum* の全イネ科花粉に対する比率（％）……80
第９表　Ｊ－10ａ地点　南－16トレンチの花粉分析表……81
第10表　Ｊ－10ｅ地点　ＢＴ－１トレンチの花粉分析表……82
第11表　Ｊ－10ａ・ｆ地点杭一覧表……91
第12表　Ｊ－10区出土土器一覧表（表土中の土器を除く）……93

付　図　目　次

付図－１　Ｊ－10ａ地点土層実測図……（縮尺1/60）
２　Ｊ－10ｆ地点土層実測図……（縮尺1/60）
３　Ｊ－10ａ・Ｊ－10ｆ地点流木群出土状態……（縮尺 1/100）
４　Ｊ－10区調査地点（Ｊ－10ｄ地点を除く）位置図……（縮尺 1/200）

泥炭層について

四箇周辺地域では低地性遺跡という自然環境を反映して，旧河道や凹地に泥炭層が形成されていることがあるので，本文中で記述した泥炭層について一言ふれておく。

渡辺　誠氏は『桑飼下遺跡』の報告書の中で特殊粘土層について次のように記している。[註(1)]——本層は植物遺体の包含が顕著であり，その状態は東北地方に特に発達している特殊泥炭層に，きわめて類似している。この種の遺跡を代表する青森県八戸市是川遺跡の発掘報告において，甲野　勇氏は自然層である泥炭層と区別し，植物残滓の廃棄等の人為的条件によってできた泥炭層を特殊泥炭層と名づけた[註(2)]（甲野1930）。筆者は，この例にならい，自然層である粘土層と区別して，特殊粘土層と名づけたのである。——

四箇遺跡A地点の泥炭層はこれに類似し，植物遺体のほか縄文時代後期の土器・石器・獣骨・木製容器・添器などが出土しており，特殊泥炭層として区別すべきであろう。

これに対し，今回報告する**J—10a・10f地点の泥炭層**は自然層にあたる。泥炭層の区分については阪口　豊氏らの説明があるが[註(3)]，「構成植物がおもにアシ・スゲなどである泥炭を低地泥炭，おもに樹木の落葉や落枝からなるものを中間泥炭または森林泥炭，ミズゴケを主とするものを高位泥炭という」分類[註(4)]によれば四箇J—10区の泥炭層は中間泥炭または森林泥炭に相当するものである（第9図・PL．9参照）。従って，泥炭層があるからといってそのまま現地が湿原のような環境であったと速断することはできない[註(5)]ことは本文中でも指摘したとおりである。

註(1)　渡辺　誠『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館　1975年

(2)　甲野　勇『青森県三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報』史前学雑誌2—4　1930年

(3)　阪口　豊『泥炭地の地学』—環境の変化を探る—東大出版会　1974年

(4)　『世界大百科事典』平凡社　1972年

(5)　北九州大学畑中健一氏の御教示による。

第1章　はじめに

四箇は福岡市の西南部，早良平野の奥深い水田地帯にある。1975年3月，早良郡が福岡市と合併するまでは早良平野部における福岡市域の最も南に位置し，早良郡と境を接していた。

それ以前は明治22年町村制がしかれて以来，昭和35年に早良郡金武村が福岡市に合併編入されるまで，金武村の一部を構成していた。戦後の生活改善運動の一つとして昭和24年発会した四箇新生会の歌に「四ケ村よいとこ良い村よ朝は早起き野良に出て昼は鋤鍬たゆみなくかへる夕べにや風呂煙」[註(1)]とあるように，この一帯には農業を基盤とした生活が展開されていた。

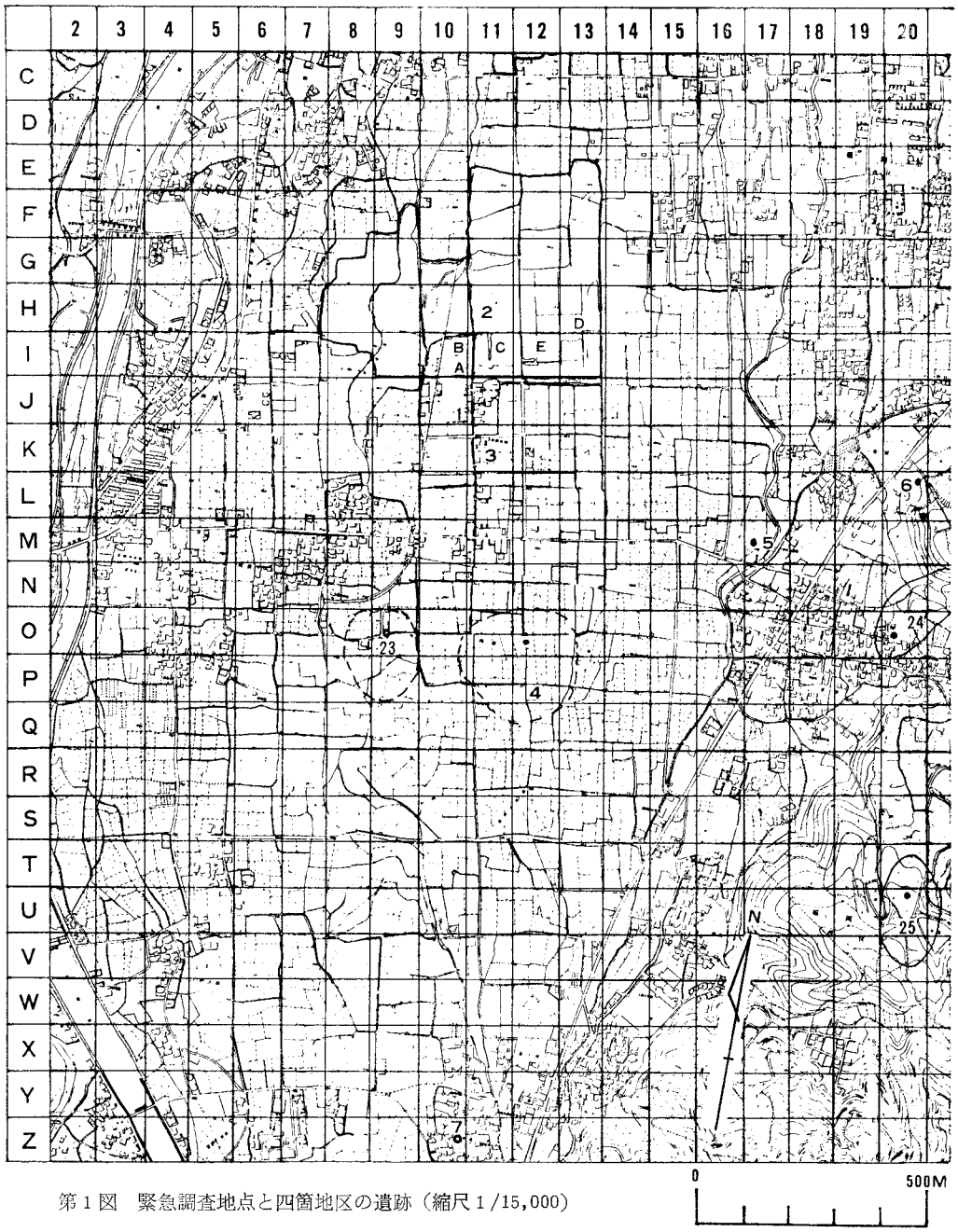
土地の古老には今なお「四箇村」と呼ぶ人が多い。四箇村の由来について江戸時代の国学者貝原益軒はその著『筑前国続風土記』の中に，「村民の説に，凡田十二町を一名とす。此村に四名あり。故に四箇村と名付く。有久名十二町，新原名十二町，榊名十二町，薦田名十二町是也。」と記している。江戸期の四箇村は，慶長古図によれば1036.949石，元禄14年（1701）の筑前古図では1162石余，天保5年（1834）には1198.735石とあり，平均して千石以上の収量を期待できる農村だったようである。四箇に隣接する大字田にはL3型の鍵屋形式の民家が残っており，[註(2)]わずかに江戸期の農村のおもかげをとどめている。

1　発掘調査にいたるまで

福岡市域の開発の波は，このような水田地帯であった四箇周辺にも及び，周囲の景観を急変しつつある。日本住宅公団が大字四箇・大字田の約24万㎡の土地を取得し，1975年から2,300戸のマンモス団地の造成工事に着手して以来その傾向は一層急なものがある。

早良平野は条里制の残りのよいとことされている。日野尚志氏は早良平野の条里についてN—10°—Wの同一方向に統一施行されており，坪並は東北隅を一の坪，西北隅を三十六の坪とする連続式であることを指摘している。[註(3)]条里の北限と考えられている下山門遺跡では条里の方向にほぼ一致する杭列が確認されている。[註(4)]城角には一ノ坪の字名が，四箇には三十五，五ノ坪の字名が残っており，四箇周辺地域は早良平野の条里復元の基準となっているところでもある。日本住宅公団の造成工事に伴ない福岡市文化課は，条里制遺構の検出を主とする埋蔵文化財の発掘調査を1975年2月より開始した。

同地域内の発掘調査は1977年2月で3年目を迎えひきつづき行なわれているが，これまで縄文時代後期の集落址（A地点），弥生時前期後半から中期の溝・住居址（B地点），弥生～古墳時代の杭列（B・C・D・E地点）などが検出されている。1976年3月，四箇遺跡A地点から南へ200m離れた四箇東遺跡の調査（第一次）では縄文時代後期の包含層が確認され，この一帯には縄文～古墳時代の遺構，遺物が保存良好な状態で残っていることが判明した。特に



第1図　緊急調査地点と四箇地区の遺跡（縮尺1/15,000）

1. 四箇J—10区
2. 四箇遺跡（A・B・C・D・F地点）
3. 四箇東遺跡
4. 四箇船石遺跡
5. 灰（拝）塚
6. 重留遺跡（箱式石棺）
7. 中通遺跡
23. 古河遺跡
24. 後谷古墳群
25. 三郎丸古墳群

これまで福岡市域内では縄文時代の一つのまとまりをもつ遺跡の発見は海岸部の貝塚を除いてほとんどみられなかっただけに重要である。[註(5)] 更に四箇東遺跡から南へ450m離れた大字四箇字船石には早良平野で現在唯一の支石墓が残っている。これらを含む付近一帯には縄文～古墳各時代の遺跡の存在が予想されるところである（第1・2図参照）。

一方，日本住宅公団の造成工事に並行して周辺地域では民間業者による宅地造成，個人住宅の建築などが相次ぎ，かつての水田地帯は家並で埋めつくされようとしている。1975年6月には，四箇遺跡A地点と四箇東遺跡の中間地点に約3,000㎡の建築申請が出されたため，発掘調査の必要が生じた。これが本年度緊急調査の原因である。

福岡市博多区板付では，1973年度から板付遺跡調査事務所を設け，板付遺跡の史跡指定事務と板付周辺地区の発掘調査を行なっているが，これにならい，四箇においても四箇遺跡の調査と並行して国庫補助事業による四箇周辺地域の発掘調査を行ない，急テンポな宅造工事に対処する必要がある。本年度の緊急調査は四箇周辺遺跡調査の第1年次にあたるものである。四箇周辺の調査区域は日本住宅公団の造成地をとりまく市街化区域を中心とし，四箇東遺跡，船石支石墓などを 包含する低平多湿な水田地帯で，南北は大字田から早良町大字東入部までの約2.6km，東西は室見川から西油山山麓までの約2.5kmの範囲である。この範囲に100×100mのグリットを組み，北西隅を基準とし，東西を1～29，南北をA～Zとし，たとえば発掘調査地点をJ—10区などと呼ぶこととする。

本年度緊急調査したのは次の地点である。

J—9 a地点	四箇451—2	1125㎡	発掘面積	60㎡
J—9 b地点	四箇451—3	743㎡		80㎡
J—10 a地点	四箇502—2の内	2470㎡		270㎡
J—10 b地点	四箇454	250㎡		100㎡
J—10 c地点	四箇503—5	447㎡		90㎡
J—10 d地点	四箇503—9	184㎡		50㎡
J—10 e地点	四箇502—8	264㎡		90㎡
J—10 f地点	四箇503—8	396㎡		248㎡
J—10 g地点	四箇502—2の内	2470㎡		300㎡

註(1)　金武村役場『村誌』　1960年
(2)　太田静六『福岡県の民家とその周辺』　福岡県教育委員会　1974年
(3)　日野尚志「筑前国早良郡の条里」『史学研究』第99号　1967年
　　日野尚志「律令時代における早良平野の開発」『有田遺跡』所収　1968年
(4)　福岡市教育委員会『下山門遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973年
(5)　副島邦弘「福岡県縄文時代研究史」『九州の原始文様展』図録　佐賀県立博物館　1977年

2　調査の組織

1975年に始まった日本住宅公団造成地域内の発掘調査では住居址などの遺構のほかに低平多湿な地形を反映して，杭列，泥炭層，流木などが出土し，考古学以外に地質学・花粉分析・種子分析・樹種同定など関連自然科学の協力が必要とされた。同地区の調査は各時代の種々の遺構・遺物の分析，指導助言が得られるよう次のようなスタッフで進めている。

調査指導委員

考古学	鏡山　猛（九州歴史資料館）	森　貞次郎（九州産業大学）
	岡崎　敬・西谷　正（九州大学）	賀川光夫・橘　昌信（別府大学）
	藤井　功（福岡県文化課）	三島　　格（福岡市立歴史資料館）
	渡辺　誠（平安博物館）	
建築史学	沢村　仁（九州芸術工科大学）	
	土田充義・山本輝雄・佐藤　浩（九州大学）	
地質学	浦田英夫（九州大学）	遠藤　　尚（宮崎大学）
花粉分析	中村　純（高知大学）	畑中　健一（北九州大学）
	安田喜憲（広島大学）	
プラント・オパール分析	藤原宏志（宮崎大学）	
灰像法	松谷暁子（東京大学）	梅本光一郎（京都薬科大学）
種子分析	笠原安夫（岡山大学）	粉川　昭平（大阪市立大学）
樹種同定	嶋倉巳三郎（元奈良教育大学）	西田　正規（近畿大学）
^{14}C 測定	坂田武彦・黒田登美雄（九州大学）	

本年度国庫補助事業によるＪ－９ａ・９ｂ地点，Ｊ－10ａ～Ｊ－10ｇ地点の緊急調査は四箇遺跡の調査と併行して進めることとなったが，今回の緊急調査では上記の調査指導委員のうち，次の先生方の協力・指導助言を受けた。

建築史学	山本輝雄（九州大学）
花粉分析	畑中健一（北九州大学）
樹種同定	嶋倉巳三郎（元奈良教育大学）
種子分析	粉川昭平（大阪市立大学）
^{14}C 測定	黒田登美雄（九州大学）

また，四箇東遺跡第二次調査の行なわれた1976年９月２・３の両日，上記の調査指導委員のうち，賀川光夫・橘　昌信（別府大学），遠藤　尚・藤原宏志（宮崎大学），中村　純（高知大学），畑中健一（北九州大学），笠原安夫（岡山大学），粉川昭平（大阪市立大学）の先生

方の参加を得，四箇遺跡A地点，四箇東遺跡第一次調査の中間報告・検討を目的として「シンポジュウム・四箇遺跡」を開催した。遠藤先生からは四箇遺跡周辺の地質調査の概要について，畑中先生からは四箇南No.5地点（J—10e地点）の花粉分析結果の中間報告などがあり，種々の御教示を受けたことが資料整理の上で参考となった。

更に各分野の分析の進行状況などの報告をそのつど連絡していただいていることも，四箇遺跡及び四箇周辺地域の遺跡の性格やあり方を考える上で見のがすことのできない大きな力となっている。記して感謝の意を表する。

このほか発掘調査から資料整理まで多くの人々の協力・支えがあった。関係者は次の通りである。

調査担当　福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係

事務担当　清水　義彦　三宅　安吉　国武　勝利　窪田千恵子

発掘担当　柳田　純孝　二宮　忠司

資料整理　橘　昌信・谷　芳樹（別府大学）　藤好　史郎（九州大学）

塩屋　勝利・力武　卓治（市文化課）　渡辺　和子（調査補助員）

相川　明美　大江　和代　大穂　明子　奥村千枝子　添田　純子

土生　裕子　原田　順子　深見まさ代　藤崎　文江　山田　雪代

調査協力者　末永久米夫　真鍋　栄　寺坂　政広　牛尾　洋祐　広橋　勝則

池　関次郎　牛尾　準一　尾崎　吉信　菰田　重美　榊　光雄

池　シズエ　尾崎　八重　菊地　栄子　菊地　キミ　菊地ミツヨ

金子ヨシ子　菰田オリエ　菰田　洋子　榊　ツイ　榊　静子

下郡フミ子　谷　ヒサヨ　谷　フミエ　野田部コト　藤崎テル子

又野　栄子　真名子千恵子　真名子ゆきえ

稲尾産業KK　福島建設

3　遺跡の立地と環境（第1・2図，PL．2・3）

早良平野における開発の波は急テンポで進み，これに伴ない記録保存を目的とした埋蔵文化財の発掘調査が相次いでおり，数多くの報告書が刊行されていることはすでに指摘されているところである。特に平野の北側に位置する有田・小田部周辺，野方・十六町周辺地区での調査例が多く，早良平野の歴史的環境については，すでに言及された感がある。その主なものを列挙すれば，『下山門遺跡』[註(1)]，『今宿バイパス』第1集・第3集・第4集[註(2)]，『宮の前遺跡（A～D地点）』[註(3)]，『牟多田遺跡』[註(4)]，『野方中原遺跡』[註(5)]，『有田遺跡』[註(6)]，『鶴町遺跡』[註(7)]などがある。

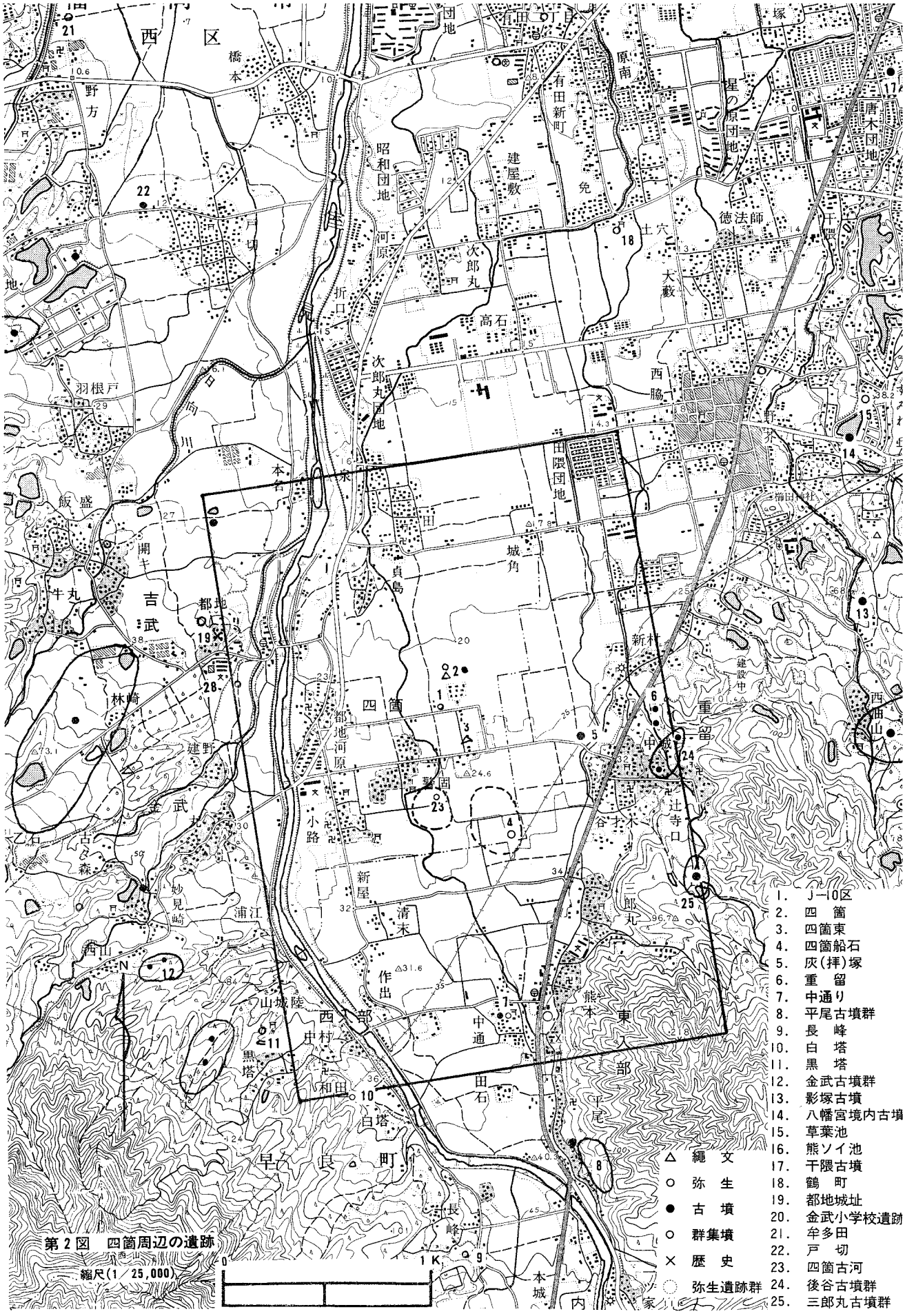
一方，早良平野での中央部以南における調査例は少なく，低平多湿な水田地帯の調査は鶴町遺跡，原・談儀遺跡[註(8)]，を除けば，四箇及び周辺地域の調査をもってはじめとする。ここでは上記の報告書，特に『有田遺跡』，『宮の前遺跡（A～D地点）』を参考とし，その後の知見を加えながら四箇及び周辺遺跡の調査と関連する縄文～古墳時代の概要を整理しておこう。

福岡市西区大字四箇は，国土地理院発行の1/25,000の地図では「福岡西南部」の中央部南の標高20～25mの地点に位置する。南は背振山系で限られ，東は荒平山・西油山に，西は西山・飯盛山の山並によって三方を山で囲まれ，北は博多湾に面した低平な平野としてひらけている。背振山系に源を発し，早良平野をうるおす室見川は，四箇の西側を北流しながら博多湾にそそぐ。

四箇周辺は標高20～25mの高位扇状地で，等高線は北東から西南方向にゆるやかなカーブをえがき，荒平山から西南方向へ扇形に広がる。荒平山山麓の数多い網目状の小さな水路をあつめて，四箇の西には田村川，東には金屑川が北流する。四箇は田村川・金屑川にはさまれた低平多湿な一帯である。

(1)　縄文時代

早良平野の縄文時代の資料はこれまで草場池の曽畑式土器，熊ソイ池の押型文土器・石匙など，あるいは小松ケ丘古墳群・広石古墳群の調査のように円墳の墳丘から散発的に発見される程度であったが，最近の調査により湯納遺跡では前期の轟式土器を伴うドングリを貯蔵する内形ピットが，小田部の西側丘陵端部では中期の阿高式土器を伴なうピットが発見されている。晩期の夜臼式土器は湯納・牟多田・原談儀・鶴町・石丸古川などの各遺跡から出土している。一方，住宅公団造成工事に伴なう四箇遺跡の調査では，B地点から縄文前期の曽畑式・轟式土器が，D地点より後期前半の南福寺式土器の土器が発掘されているほか，A地点では縄文後期後半の泥炭層を伴なう集落址の一部が確認され，四箇東遺跡では縄文後期三万田式土器の包含層が調査された。[註(9)]このように少なくとも縄文後期の段階には四箇周辺部の低平な微高地に集落



第2図　四箇周辺の遺跡

縮尺(1／25,000)

△ 縄文
○ 弥生
● 古墳
○ 群集墳
× 歴史
弥生遺跡群

1. J-10区
2. 四箇
3. 四箇東
4. 四箇船石
5. 灰(拝)塚
6. 重留
7. 中通り
8. 平尾古墳群
9. 長峰
10. 白塔
11. 黒塔
12. 金武古墳群
13. 影塚古墳
14. 八幡宮境内古墳
15. 草葉池
16. 熊ソイ池
17. 干隈古墳
18. 鶴町
19. 都地城址
20. 金武小学校遺跡
21. 牟多田
22. 戸切
23. 四箇古河
24. 後谷古墳群
25. 三郎丸古墳群

がいとなまれていたことが確認されている。

(2) 弥生時代

早良平野ににおける弥生時代の発展過程については，地域的密集性を基準として七つのグループに分けられている。[註(8)]まず海岸に近いラグーンに面した西新・藤崎地区，有田・小田部地区に前期初頭の遺跡が出現し，四箇のような標高20mを超える高位扇状地に集落が出現するのが前期末の段階とされている。前期末から後期におよぶ金武都地遺跡や，四箇遺跡B地点の前期後半から中期におよぶ溝・住居址をもつ集落址はこれを裏付けるものであるが，遺物の中には板付Ⅱ式土器があり，四箇周辺地域における弥生時代遺跡の出現の時期を現段階では前期後半の時期までさかのぼらせることができる。中期は早良平野全体に遺跡の広がりが認められる時期である。四箇周辺では四箇船石遺跡の支石墓の近くから中期の甕棺が表採され，四箇古川遺跡からは前期末から中期の甕などが表採され，中通の老松神社裏からも中期の甕棺が発見されている。*室見川左岸には金武高木・浦江などの遺跡が知られており，黒塔の大円寺裏，[註(10)]長峰から[註(11)]も中期の甕棺が発見されている。後期の遺跡としては茎に人面陽鋳した銅戈を出土した白塔が著名で，金武都地などは前期末からひきつづき後期にまで及んでいる。四箇周辺の平野部では今回調査したJ—10区の10—f地点などから後期の土器が出土しているが，この時期の住居址・遺構などは今のところわかっていない。

(3) 古墳時代

古墳時代になると，前期では重留の箱式石棺がある。[註(6)]丘陵先端に占地し，石棺内に埋葬された人骨は古墳人より弥生人に近いことが指摘され，副葬された4個の管玉も弥生時代のものに近いとされている。重留の箱式石棺は弥生時代終末から古墳時代にかけての集団墓から個人墓への発展過程（藤崎→宮の前1号墳→重留→五島山）をしめす一つとして考えられている。[註(3)(5)]金屑川の左岸に位置する灰（拝）塚は今は削平されて旧状をとどめないが，航空写真等により径30m程の周溝をもつ円墳であったことが知れる。内部主体は割石積の竪穴式石室であろうと考えられる古墳である。横穴式石室を内部主体とする後期古墳は西油山の北西山麓部に群集している。駄ケ原古墳群・霧ケ滝古墳群・西油山古墳群，[註(12)]影塚1・2号墳[註(13)]などがこれである。西油山から荒平山の早良平野に面した西側山麓部にかけては旧早良郡に含まれていたために福岡市の分布調査が行なわれていないことなどから実態は不明な点が多いが，最近の踏査では重留後谷や三郎丸で後期の円墳が確認され，群集墳としてのまとまりをみせるようである。[註(14)]室見川左岸の山麓部では金武1・2号墳，[註(15)]乙石古墳群・萩原古墳群・鳥越古墳群[註(16)]などがあり，北にゆくと羽根戸古墳群[註(17)]・小松ケ丘古墳群[註(18)]などがある。

＊　『有田遺跡』などに記されている「四箇遺跡」がこれに相当する。

このように見てくると，四箇のような平野の中でも弥生時代前期後半（板付Ⅱ式）の段階には微高地に溝や住居址をもつ集落が出現し，低平多湿な自然環境を改変しながら稲作を基盤とする生活が徐々に展開されていったと考えられる。四箇遺跡E地点の弥生時代中期と考えられる杭列はその証左の一つであろう。中期の甕棺墓地は認められるものの，現在後期の遺跡が欠けているが，共同作業による治水潅漑等により農業に依存する度合は更に強くなり，やがて重留の箱式石棺の被葬者のような首長の成長をもたらしたと思われる。更に灰（拝）塚→西油山山麓部の後期群集墳へと関連づけることができるようである。四箇周辺地域は西を室見川で限られることもあって東側山麓部に埋葬された人々の主産可耕地であった可能性が強いとみることができよう。

この付近の条里制がいつ頃から行なわれたか興味ある問題であるが，これまでの四箇及び四箇周辺地域の調査では，条里の方向と一致するような杭列は発見されていない。

註(1)　福岡市教育委員会『下山門遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973年
(2)　福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集　1970年
福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集　1973年
福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集　1976年
(3)　宮の前遺跡調査団『宮の前遺跡（A～D地点）』　1971年
(4)　福岡市教育委員会『牟多田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　1974年
(5)　福岡市教育委員会『野方中原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集　1974年
(6)　福岡市教育委員会『有田遺跡』　1968年
(7)　福岡市教育委員会『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集　1976年
(8)　原・談儀遺跡。1975年夏調査会によって発掘調査された。
(9)　柳田純孝「福岡市西区四箇遺跡の調査」九州史学会昭和50年度研究発表要旨『九州考古学』51　1976年
柳田純孝「福岡市四箇周辺における縄文遺跡の調査」日本考古学協会昭和51年度大会発表要旨　1976年
(10)　黒塔遺跡。1976年の土取り工事の際，牛尾準一氏により発見され，出土遺物が採集されている。
(11)　長峰遺跡。1971年頃付近を踏査した渡辺和子氏により確認されている。
(12)　福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表』総集編　福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　1971年
(13)　福岡市教育委員会『影塚1号墳発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集　1972年
(14)　石津　司「早良町の遺跡」福岡考古学墾和会会報第2報　1975年
(15)　福岡市教育委員会『金武古墳群発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集　1971年
(16)　小松ケ丘古墳群。1972年と1974年の2回にわたり調査会により発掘調査された。
その後福岡市教育委員会が1976年に補足調査した。

第2章　発掘調査の概要

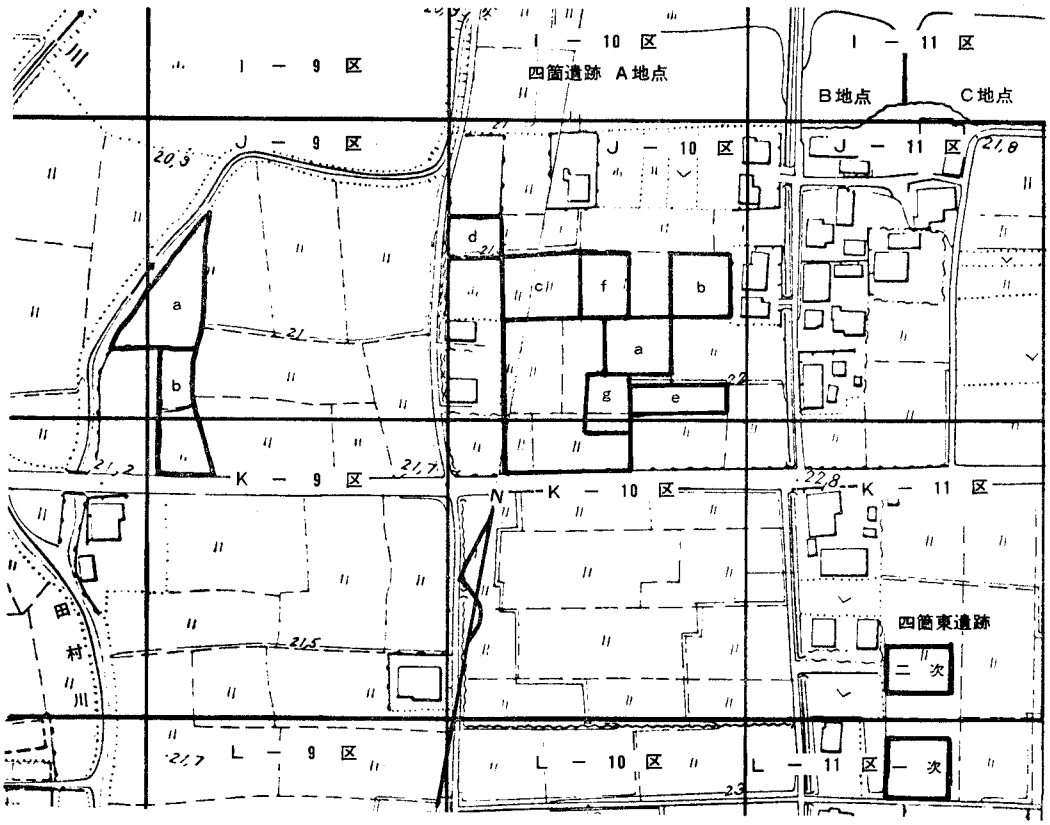
1　J－9区の調査（第3図，PL．3）

(1)　J－9a地点

田村川の支流東岸に位置し，標高21.20mの水田地帯である。2×15mのトレンチ2本を入れ試掘調査を行なったが，現水田面より30cm下は砂礫層で遺構・遺物はなかった。

(2)　J－9b地点

J－9a地点の南側に隣接した調査区をJ－9b地点とした。J－9a地点同様砂礫層が水田耕作土下にあり，遺構・遺物はなかった。J－9a・9b地点の基盤を構成する礫層の標高は20.80mである。なお，1976年K－8区の田村川の改修工事の際の観察でもJ－9a・9b地点の状況と大差なく，遺構・遺物の存在は期待できないことが確められた。



第3図　緊急調査地点位置図（縮尺1/2,500）

2　J—10b～10e・10g地点の調査（第5図，PL．3）

J—10区の6カ所を試掘または発掘調査した。このうちJ—10a地点・J—10f地点の杭列は，連続する杭列の一部分である。J—10e地点・10g地点からも少数の杭が検出されたが，遺構としてまとまるものではなく，J—10a・10f地点杭列との関係は不明。このほかJ—10b・10c・10d地点からは少量の土器が出土したが杭などは検出されていない。以上のような状況からJ—10区の調査のうち遺構を伴わないJ—10b～10e・10g地点を一括し，J—10a・10f地点は次項でまとめて記述する。

(1)　J—10b地点

250㎡の範囲に3つのトレンチを設け試掘調査を行なった。この地点は四箇遺跡A地点（J—9区）のすぐ南に位置していることから，(1)四箇遺跡A地点の微高地が本調査区まで広がっているかどうか，(2)J—10f地点の杭列と関連する遺構の広がりが認められるかどうかを究明することを目的とした。その結果，トレンチの北側に微高地の端部があり，これより南に落ち込んで砂礫層に達しており，縄文時代の遺構（四箇遺跡A地点）をのせる微高地は南はJ—9b地点まで広がることが確められた。しかし，J—10f地点杭列と関連する遺構はなかった。

(2)　J—10c地点

J—10f地点の西側に隣接する地点で，3つのトレンチを設け試掘調査した結果，トレンチ中央では標高20.18mに砂礫層があり，遺構・遺物はなかった。微高地はトレンチ中央から西へ広がりをみせ，東へ落ち込んで砂礫層に達する。J—10a地点からJ—10f地点南西隅へつづく微高地の端部はJ—10c地点中央へつづいていることが確められた。

(3)　J—10d地点

J—10c地点の北西側に位置する。試掘調査の結果水田耕作土の下はすぐ砂礫層となり，微高地のつづきであることをしめしている。遺構・遺物はない。微高地の東側端部はこの地点より東側にあると思われ，J—10a・10f・10c地点へとつづく微高地の東側端部はJ—10a・10f地点とほぼ平行するように北西方向へつづいている。

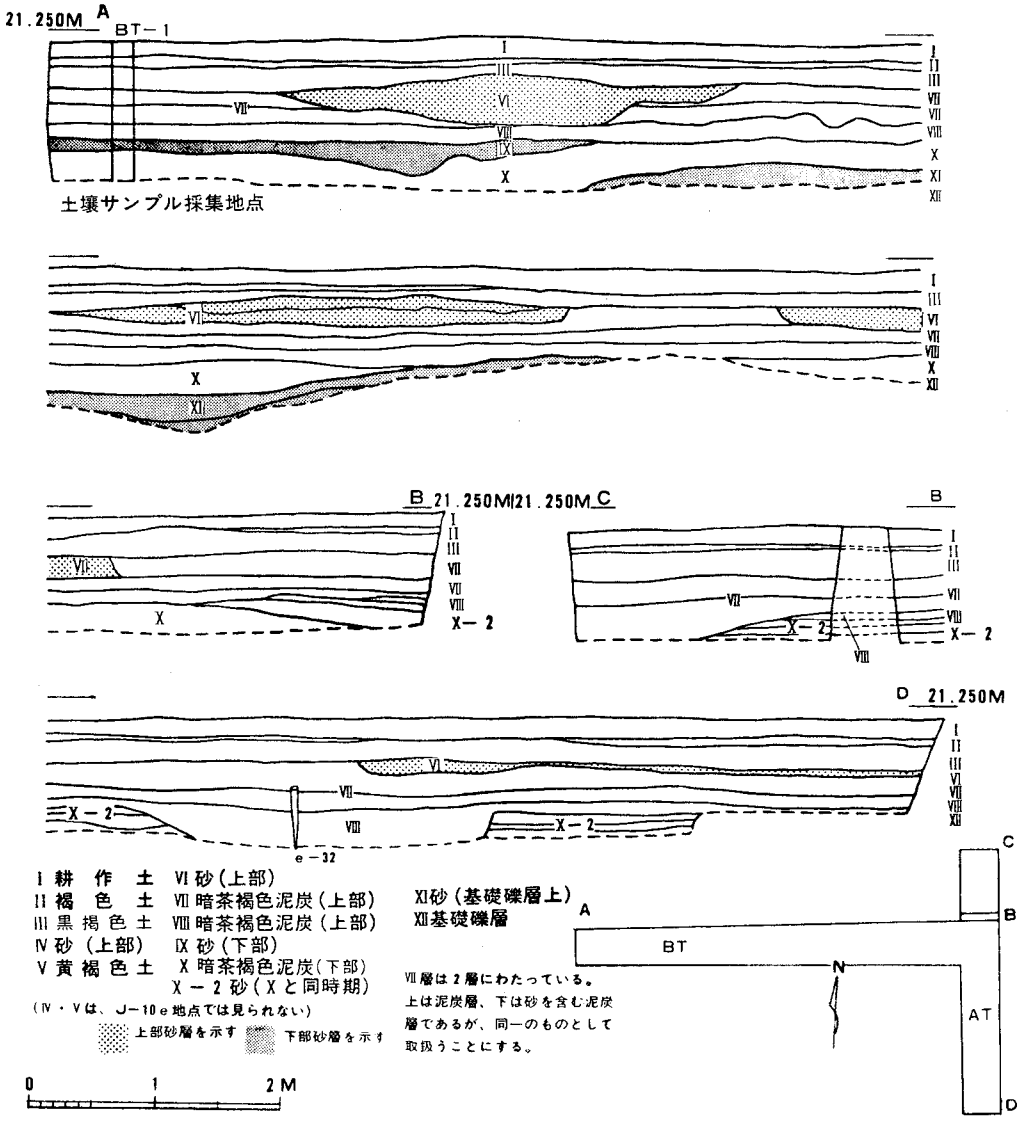
(4)　J—10g地点（第6図，第1表，PL．15）

J—10a地点の南側に隣接した地点で，J—10e地点の西側に位置する。J—10a地点中央から西へ微高地が広がっていることから，遺構・遺物の検出は期待できなかったが，微高地の南端をおさえることができた。J—10a地点中央部に認められた微高地の東端は南に3mほどつづき，J—10g地点の北側で西へまわり，更にJ—10a地点南西隅へつづく。この微高地の西端に沿ってJ—10g地点の北西隅から南東隅にかけて幅3mほどの浅い流れが認められた。

J—10g地点東側には狭い微高地があり，その北側端部と南端に数本ずつの杭が打込まれているが，まばらで時期は不明。土器は出土していないが，第28図g—18にしめした三又鍬の刃部が出土している。現長は22.2cmである。

(5)　J—10e地点（第4～6図，第1表，PL．15）

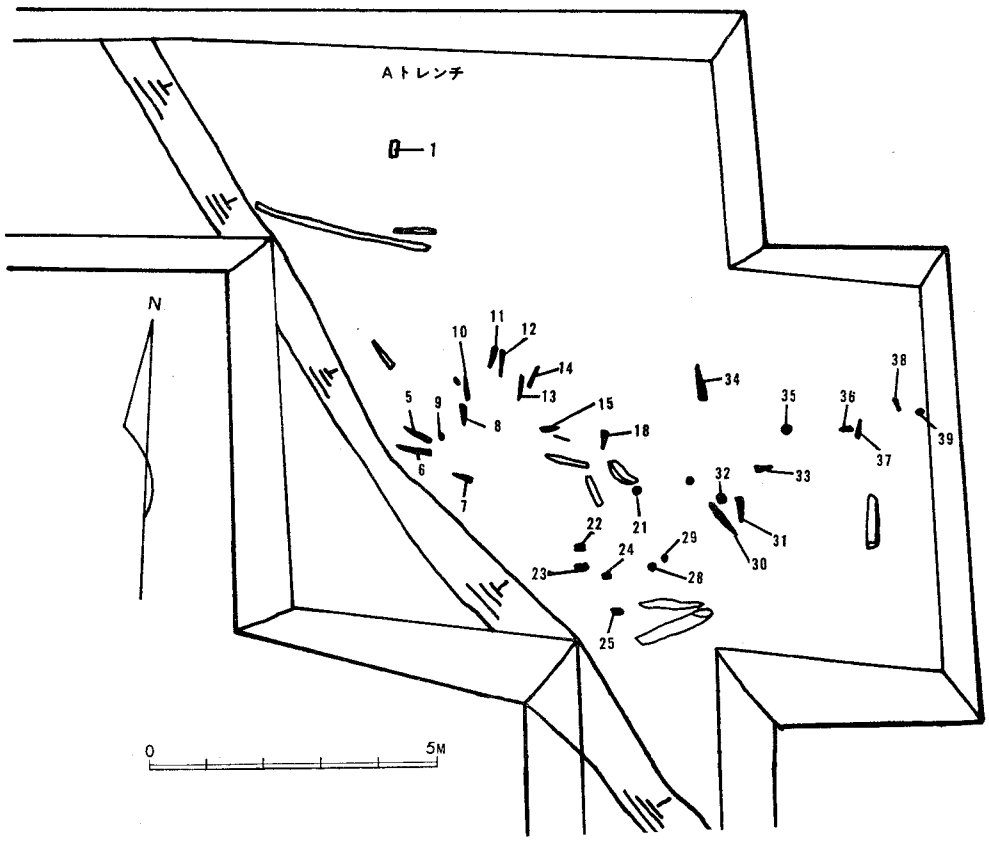
J—10g地点の東側に隣接する地点で，J—10a・10f地点中央の流れの延長線上に位置する。現地表は標高21.15～21.20mで，調査地点に3つのトレンチを設け試掘調査を行なった。



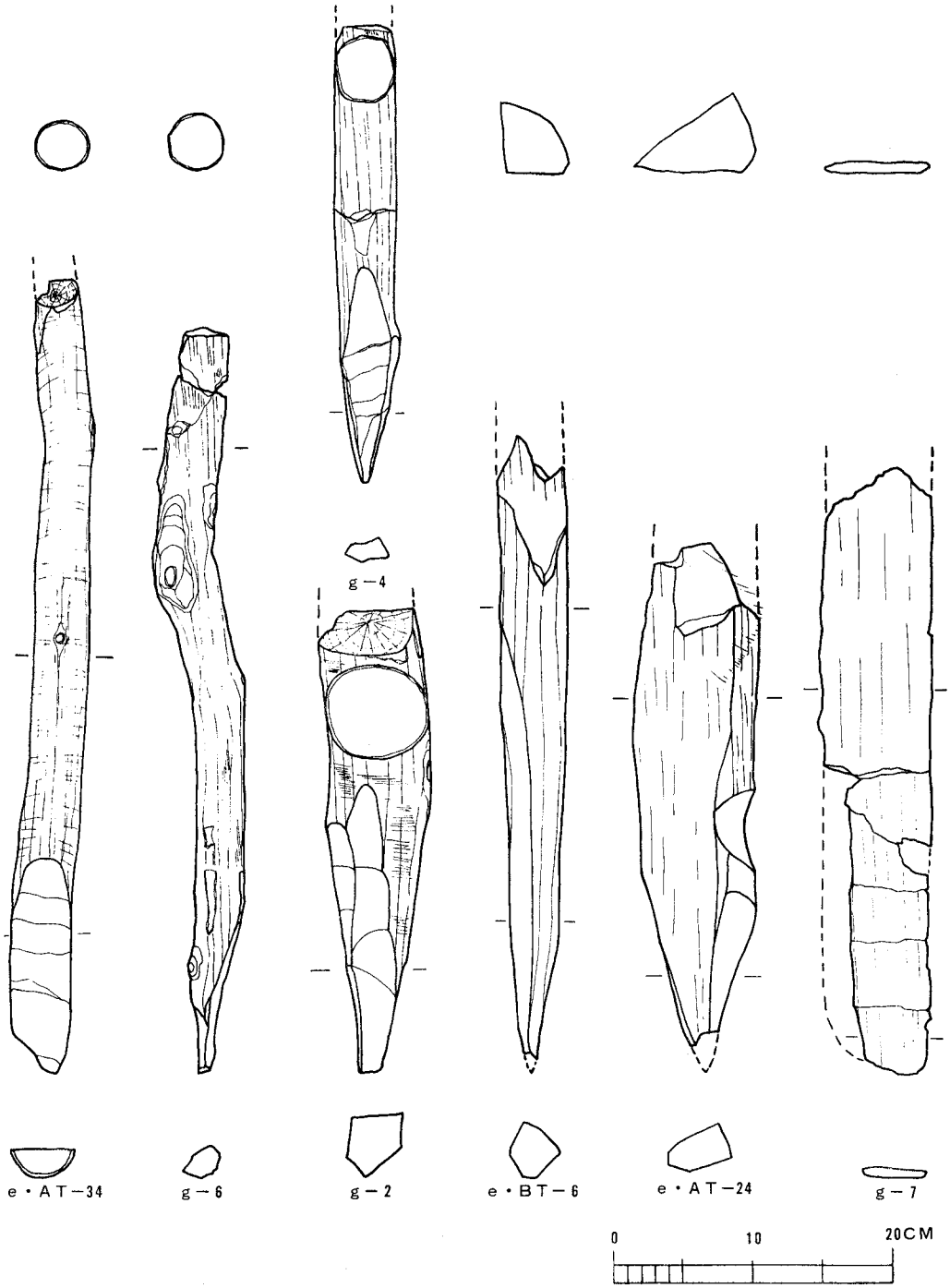
第4図　J—10e地点土層実測図（縮尺1/60）

土層は第４図のように複雑で，Ｊ－10ａ・10ｆ地点と同様な堆積状況をしめす。Ｂトレンチ北西隅では花粉分析のため土壌採取を行なった（ＢＴ－１，ｐ．78）。ＢＴ西側のⅥ層はＪ－10ａ地点南東隅へつづく上部砂層である。西北隅の標高は20.05ｍで，Ｊ－10ａ地点南東隅よりわずかに高い。東へ９ｍまではほとんど同レベルで西北隅より９ｍ東からしだいに高くなり，最も高いところでは20.48ｍを測る。北東隅は20.25ｍ，南東隅は20.45ｍで，Ｊ－10ｅ地点の中央から東側はせまい微高地を形成する。Ａトレンチの中央部には杭があり（第５図）微高地東端より東へつづくと思われるが，２×４ｍの範囲内に限られ，杭の中には上端を欠失し，先端のみのものが多い。Ｊ－10ａ・10ｆ地点の杭列とは方向を異にすること，第４図のようにⅦ層（上部泥炭層）から打込まれていることから，Ｊ－10ａ・10ｆ地点より新しい時期のものであろう。

Ｊ－10ｅ・10ｇ地点の杭を第１表にまとめた。10ｅ地点の杭33点のうち先端のみで形態不明な８点を除くと20点が丸木杭，５点が割杭で，丸木杭のうち大半は径3.0㎝以下の細枝である。10ｇ地点は13点のうち８点が丸木杭，３点が割杭，他は形態不明。矢板状の割杭－２は１点もない。そのうちの５点と流失したと思われる２点（ｇ－６とｇ－７）を第７図にしめした。



第５図　Ｊ－10ｅ地点杭出土状態（縮尺１/50）



第6図　J－10e・10g地点杭実測図（縮尺1/5）

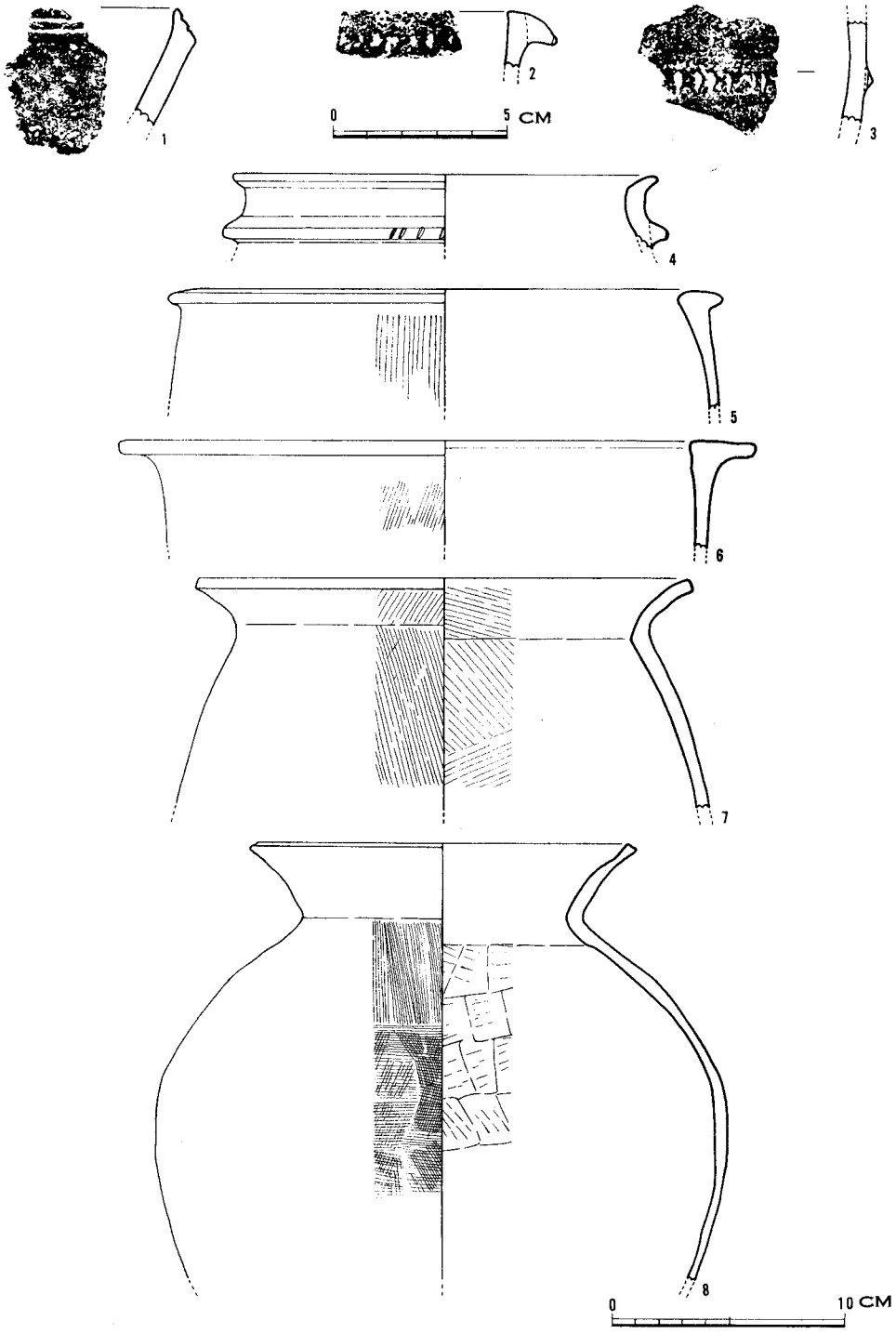
第1表　J—10e・10g地点杭一覧表

地点	NO	杭の分類	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
J—10e	AT—5	①	9.0			2.0	×			
	6	①	23.0			2.0	○			
	7	①	21.0			2.0	×			
	8	—	6.0			—	—			
	9	①	32.0				○			
	10					2.0				
	11	①	10.0			1.5	○			
	12	①	8.0			1.5	○			
	13	①	8.0			1.5	○			
	14	①	14.0			1.5	○			
	15	①	12.0			1.5	○			
	18	②	10.0			1.5	○			
	21	—	26.0	5.5	3.0		×			
	22	—	17.0			—	—			
	23	②	15.0			—	—			
	24	②	36.0	8.5	5.5		×	第6図	PL. 29	
	25	①	35.0	6.0	4.0		○			
	28	②	33.0			4.5	○			
	29	①	33.0	5.0	4.5		×			
	30	①	26.0			2.5	×			
	31	①	18.0			3.0	×			
	32	①	35.0			4.0	×			
	33	—	14.0			—	—			
	34	①	57.0			3.5	○	第6図	PL. 29	
	35	①	30.0			4.5	○			
	36	①	38.0			3.0	○			
	37	①	27.0			1.5	○			
	38	—	5.0			—	—			
	39	—	4.0			—	—			
J—10e	BT—4	①	26.0			3.0	×			
	6	②	45.0	5.0	4.5		×	第6図	PL. 29	
J—10e	CT—1	—	5.0	—	—		—			
	2	—	15.0	—	—					
	4	①	62.0			5.0	○			
J—10g	1	①	31.0			4.0	○			先が細い
	2	①	33.5			7.8	○	第6図	PL. 29	
	4	①	33.0			4.5	○	第6図	PL. 29	
	5	①	10.5			4.5	○			
	9	①	13.0			4.0	○			
	11	②	12.0	3.5	2.5		×			
	12	②	8.0	4.0	3.0		×			
	13	①	26.5			3.0	○			
	14	—	39.0	—	—		—			
	15	①	48.0			4.0	○			先が細い
	16	②	28.5	4.0	3.5		○			
	17	①	54.0			6.0	×			先が細い
	19	—	25.0	—	—		—			

(6)　土器（第7図，PL. 16～18）

J—10b～10e・10g地点から出土した土器は，表土中のものを除けばいずれも砂層から出土したものである。出土遺物のないJ—10d地点を除いた出土点数は第12表（P. 92）のように多くない。このうち8点を図示した（第7図）。

1はJ—10b地点表土から出土した口縁部片で，表裏とも明褐色を呈し，内外ともよく研磨された精製土器である。く字形に肥厚した口縁部に二条の沈線文を施すが縄文はみられない。2はJ—10b地点表土から出土した甕の口縁部片で，口縁端部が下がり刻目を施す。3はJ—

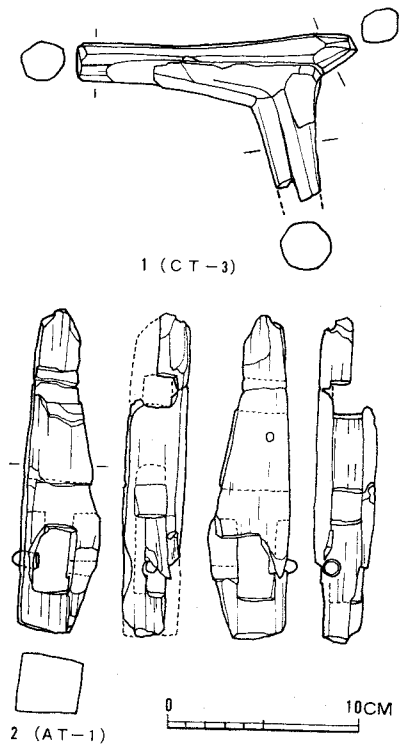


第7図　J—10b～10e・10g地点土器実測図（縮尺1/2・1/3）

10e地点Bトレンチ砂層から出土した甕の胴部片で，三角突帯に刻目を施し，外面は黒色で煤が付着している。4はJ—10b地点表土中のもので，口縁部の下に断面が台形に近い突帯に刻目を有する。口縁径は18.8cmを測り，焼成は良好。内面は灰褐色，外面は赤褐色を呈し，内外とも横ナデ調整。5は口縁端部に短かいはり出しを有する甕で，端部は丸味をもつ。口縁径24.0cmを測り，内面は横ナデ，外面はたて刷毛目調整。6は口縁部が逆L字形の平坦なはり出しをもつ甕の口縁部片で，内面は横ナデ，外面はたて刷毛目のあと横ナデ調整，焼成は良好。7はJ—10c地点微高地東端より東側の砂層から出土した2点の甕の一つで，口縁が外反し，内外とも刷毛目調整で，焼成良好。他も同形で胴部外面に煤が付着している。8はJ—10b地点砂層出土でく字形に外反する口縁部がわずかに肥厚し，球形胴部の土師式土器である。内面はたて・よこ方向の篦削り，外面は刷毛目調整で器壁はうすい。口縁内外はナデ調整，全体が灰褐色を呈し，焼成は不良。1は縄文時代後期後半，2～5は弥生時代中期前葉，6は中期中葉，7は後期の終末期のものである。8は古墳時代の5c前半のものであろう。6はJ—10b地点表土中のもので，他に弥生時代中期の器台もあり，J—10b地点砂層からはいわゆる「鋤先」状口縁の広口壺も出土している。

(7)　木器（第8図，PL.22・24）

1は手斧柄の未製品と考えられるもので，幹と枝が分れる二又の部分の幹の両端を切断して頭部とし，枝を柄部としているが，柄部の先端は欠けている。頭部はていねいな削りが施され断面は多面形をなす。頭部と柄部との角度は100°で，頭部には石斧を着装するような加工はまだ施こされていない。2は全長17.2cm，最大幅4.2cm，厚さ3.2cmのほぼ完形品である。先端から3.4cmと9.3cmのところに上は正方形，下は長方形の枘穴が穿孔し，先端から11.7cmのところには断面長方形の枘穴が2列の枘穴と直交する方向に穿孔され，下の枘穴とはT字形に連結されている。枘穴中央部の両端には径0.95cmの小円孔があり，砲弾形の小片を押込むことにより枘穴に挿入される材を固定するような細工がみられる精巧な加工製品である。建築部材の一種かと思われるが用途は不明。1はJ—10e地点AT，2はBT砂層の出土で，出土遺物が少なく時期は明確でない。



第8図　J—10e地点木器実測図
（縮尺1/4）

3　J—10a・J—10f地点の調査

J—10a地点は西区大字四箇502—2のうち約270㎡発掘した地点である。51年4月から発掘作業を開始し，5月下旬終了した。J—10a地点の北東隅には3列の杭列が認められ，北西側と南東の両方向につづく杭列の一部と考えられた。J—10a地点の発掘作業中に北西側に近接する大字四箇503—8を宅地造成する計画なので早急に発掘調査をしてほしい，との地主の要望があった。5×20mのトレンチを設け試掘調査をしたところ，杭列が確認され，杭列はJ—10a地点の杭列方向につづくことがわかり，これをJ—10f地点として5月中旬より発掘調査を行なった。J—10aとJ—10fの中間に位置する大字四箇503—2番地の調査をしていないが，J—10f地点の調査により，J—10a・J—10f地点の杭列は連続するものであると考えられるので，ここでまとめて記述する。J—10a地点とJ—10f地点の位置関係は付図—4の通りである。

(1)　土　　層

J—10a地点の土層（第9図，付図—1，PL.8・9）

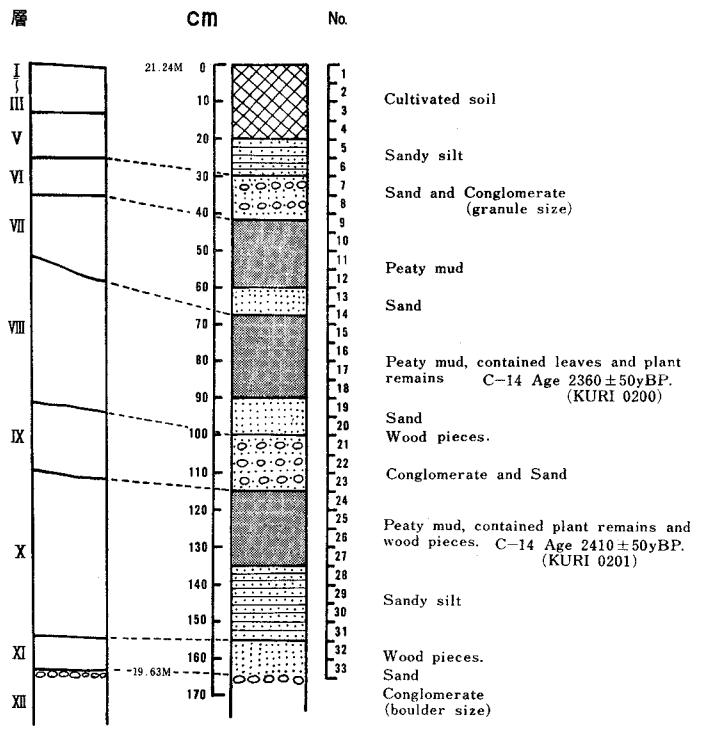
土層は低湿地性の立地条件を反映して複雑である。最近まで水田耕作されていた現地表面は標高21.23～21.28mである。地表から15～20cmが水田耕作土（Ⅰ～Ⅲ層）で，糸切の土師器皿などの破片が少量含まれている。その下の10～20cmの間に黄褐色粘質土層（Ⅴ層）があるが，遺物は含まない。Ⅵ層からこの一帯の基盤を構成する礫層（Ⅻ層）までの100～150cmは砂と泥炭質土との互層といってもよく複雑な堆積状況をしめしている。

基盤となっている礫層のレベルは北東隅で標高19.80m，南東隅で19.95m，南西隅で20.00m，北西隅が20.00mとほとんどかわりがないが，南壁の中央部から西壁の中央から北西隅にかけては標高20.50～20.65mを測り，わずかな微高地を形成している。狭い微高地のつづきはJ—10f地点南西隅へ更にJ—10c・10d地点へとつづき，北西方向への広がりをしめしていることはすでに述べた（p.21）。

J—10a地点の土層図は付図—1のように砂と泥炭層の互層によって形成されており，複雑である。基本的な層序はⅫ層がこの一帯の基盤を構成する礫層で，その上に10～15cmの浅い砂層（Ⅺ層）があり，その中には縄文時代後晩期・弥生時代前期の土器がある。その上は40～50cmの下部泥炭層（Ⅹ層）で，植物遺体や材の残存状態は良好である。Ⅸ層は厚さ10～20cm前後の下部砂層で，Ⅹ層を切って堆積しており，多くの材がこの中に含まれる。北西隅の杭列のうち杭の上端はⅨ層かⅩ層に位置するから，Ⅸ層が堆積する以前に打込まれたものであろう。杭列のうち流失したり，斜めに傾斜した杭はⅨ層の堆積の原因となった氾濫の被害を受けたもの

と思われる。その後再びⅦ・Ⅷ層（上部泥炭層）が形成されたあと，大量の土砂が流出してⅥ層（上部砂層）を形成する。Ⅶ・Ⅷ層には弥生時代後期の土器があり，Ⅵ層には縄文・弥生・古墳各時代の土器が混在する。Ⅵ層中の最も新しい時期の土器は内面篦削の甕で，須恵器は出土していない。 Ⅺ層は西側の微高地を除いた各断面の礫層上に認められ， Ⅸ層は杭列の位置する北西隅では標高20.20～20.45ｍの間にほぼ水平に堆積しているほか，各断面で観察できるが，入りみだれており Ⅷ層，及び上部砂層（Ⅵ層）と区分しがたいところもある。これに対しⅥ層は南東隅と北壁中央部に集中しており，南西隅より北断面中央部にかけて大量の土砂の流れがあったことをしめしている。 南東隅から中央部にかけて約130点の材が集中しているが，長い材の中にはＳＥ－ＮＷ方向に主軸をもつ材が多く，Ⅸ層及びⅥ層の流れの方向と一致している。流れの方向をしめす基盤礫層のレベルは南東隅が19.95ｍに対し，北壁中央部は19.63ｍとわずかに低くなっている。北断面Ａ列の杭の上にもⅧ層を切った上部砂層（Ⅵ層）が認められる。以上のように遺物を含む砂層には大別して礫層上の砂層（Ⅺ層），下部砂層（Ⅸ層），上部砂層（Ⅵ層）の三つがあるが，その区分は明確でない。その上にはⅤ層（黄褐色粘質土）を切った新しい時期の砂層（Ⅳ層）もある。

南側断面の比較的土層の乱れの少ないところを選んで，花粉分析と種子分析のために土壌を採取し，土壌サンプル中の二資料について ^{14}C の年代測定を行なった（南－16）。第９図の左は付図－１の一部分で，右は堆積状況をしめす柱状の模式図である。下に砂がかたまり，その上にピート層が形成されるというパターンがＸ層・Ⅷ層・Ⅶ層で認められる。これによれば，Ⅷ層の ^{14}C 年代は2360±50ｙ．Ｂ．Ｐ，Ｘ層は2410±50ｙ．Ｂ．Ｐとなっている。一



第９図　Ｊ－10ａ地点（南－16）土層柱状図（縮尺１/20）

方，Ⅸ層中の最も新しい遺物の時期の流出堆積によって形成されたとすれば，Ⅸ層は弥生時代中期の氾濫をしめすことになる。同様にⅥ層は古墳時代の氾濫と考えられる。とすれば，Ⅷ層・Ⅹ層の泥炭層を構成する植物遺体・材などは上から流されてきて堆積したものが含まれていることをしめすのであろう。

J—10f地点の土層（付図—2，PL.14）

現地表面は標高21.10～21.12mでJ—10a地点よりわずかに低い。Ⅲ～Ⅴ層までは20.80前後でJ—10a地点とかわりがない。南東隅の基盤礫層のレベルは標高19.73m，南西隅が20.37m，北東隅が19.70m，北西隅が19.60mである。南西隅は微高地のつづきで高く，南東隅から北西隅の方向へわずかに低くなっている。

J—10f地点の土層は付図—2のとおり，J—10a地点と同様な堆積状況をしめしているが，全体としてはJ—10a地点より層序の乱れが少ないことが指摘できる。Ⅸ層は各断面にみられるが東断面の標高20.20～20.37mの間に分布するⅨ層はJ—10a地点北東隅からのつづきで，北断面の中央から北西隅につづいており，A・B・C列の杭列上に堆積している。杭列と土層の関係を北断面でみると，B列—357，C列—123・124のように杭の上端はⅩ層にあり，Ⅸ層より前に打込まれたことが知れ，Ⅸ層より上に位置する杭はみあたらない。C列南側の杭が少ないのは，Ⅸ層の被害によるのかもしれない。北西隅に近いⅦ層には弥生時代後期の高杯が含まれている。Ⅵ層は北東隅にみられるほか南断面中央部から西断面へ続いている。南断面では幅4.5m，厚さ30cm，西断面では幅が3.0m，厚さ35cmと狭くなっている。J—10a地点との関係をみると，J—10a地点南東隅からJ—10f地点南断面にかけて幅を広げたⅥ層はトレンチの中央から西の方向へ転じ，西断面では幅が狭くなっている。J—10f地点の流木群は南東隅から中央部に集中しており，Ⅵ層の流路の方向と一致する。杭列は中央部で方向をかえているため，中央部が最も南西側へ張りだしているが，その部分の杭が少なく，流木群が集中しているのは，Ⅵ層の被害が大きかったことをしめすものであろう。Ⅵ層にはJ—10a地点同様縄文～古墳時代の遺物が含まれている。しかし，J—10f地点南断面から西断面へつづくと考えられるⅨ層の堆積があることも注意しなければならない。これはⅥ層の流れの方向と重複するもので，J—10f地点中央部の全ての遺物がⅥ層によるものではなく，Ⅸ層によるものと混在していることを示唆するものである。

なお，東断面中央部には礫層に達しない2本の杭がある（f—364・365）。1点は上端がⅢ層に接し，先端がⅦ層中に位置しているからA～C列の杭列より新しい時期のものであるが杭のまわりに雑草かと思われる植物をたて・よこに編んだ状態がみられた（PL．14）。立杭を横木などと緊縛したり，雑草などで補強したりするためのものと注目しておきたい。

(2)　J—10a・10f地点杭の分類

J—10a・10f地点杭列遺構の説明の前に，その前提となる杭の分類について ふれておこう。

福岡市域でも平野部の水田地帯の発掘が徐々に増えつつある。早良平野では1972年に下山門遺跡，1972～73年にかけて湯納遺跡，1973年に牟多田遺跡，鶴町遺跡，1974年に戸切遺跡，[註(1)] 1975年に原・談儀遺跡，1974年以降四箇及び四箇周辺遺跡（現在調査継続中），1976年に石丸古川遺跡などが調査されている。このうち杭の分類については1976年相ついで刊行され湯納遺跡・鶴町[註(2)]遺跡および板付[註(3)]遺跡の各報告書に記述されている。

湯納遺跡では第5次で出土した水田地域の杭列の杭を丸木杭，割材1（割材），割材2（矢板）に3分類している。板付遺跡では「丸木の先端をとがらせた丸木杭，原木を裂いた材で作った割杭・角杭・板状杭など」が出土しており，これらの杭のつくり方を模式図にまとめA～F類に分類している。鶴町遺跡では出土した木製品のうち「農具と生活用具を除いて，木取りにより」，「割り材をA類，芯持ちの丸太材をB類とし」，A類は木取りの方法によって，B類に含まれる立杭と堤防状遺構建築材の形態の違いによってそれぞれ細分している。いずれも丸太材（丸木杭）と割材（割杭）に2分し，割材（割杭）を2～5に細分する点では一致している。ここでは上記3遺跡の報告書を参考とし，分類にあたっては杭をつくる作業工程を基準として丸木杭と割杭に2大別し，割杭を2つに分類した。

①丸木杭　原木はそのままで先端のみをとがらせ杭としたもので，多くは樹皮が残っている。

②割杭-1　原木を½～⅛に分割し，先端をとがらせて杭としたもので，多くは樹皮面を残している。湯納遺跡の割材—1（割材），板付遺跡B・C・D—1～D—4，Fの各類，鶴町遺跡のA—4がこれに相当する。

③割杭-2　原木を½～⅛に分割したあと，更に加工整形したもので，矢板状・角柱状を呈し，多くは樹皮面を残さない。湯納遺跡の割材—2（矢板），板付遺跡のE類，鶴町遺跡のA—1～A—3がこれにあたる。

湯納遺跡で丸太材としたものを丸木杭とし，割材—1・割材—2としたものを割杭—1・割杭2としたのは次の理由による。丸木杭の用語は板付・鶴町両遺跡でもみられるが，当遺跡では大半が最大径が5.0㎝未満の小木（立杭の丸木杭128点中118点）で，最大径は7.0㎝と丸木と呼ぶ方が適当と思えること，割杭としたのは他から転用したものは少なく割材と呼ぶより割った杭，割ったものを更に削った杭と呼ぶ方が適当であろう。本報告では以上のように丸木杭と割杭に大別し，割杭を割杭—1，割杭—2に小分類して説明する。

註(1)は1974年，註(2)は1976年に福岡市文化課が発掘調査を行ない，現在報告書作成中。

(3)　福岡市教育委員会『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976年

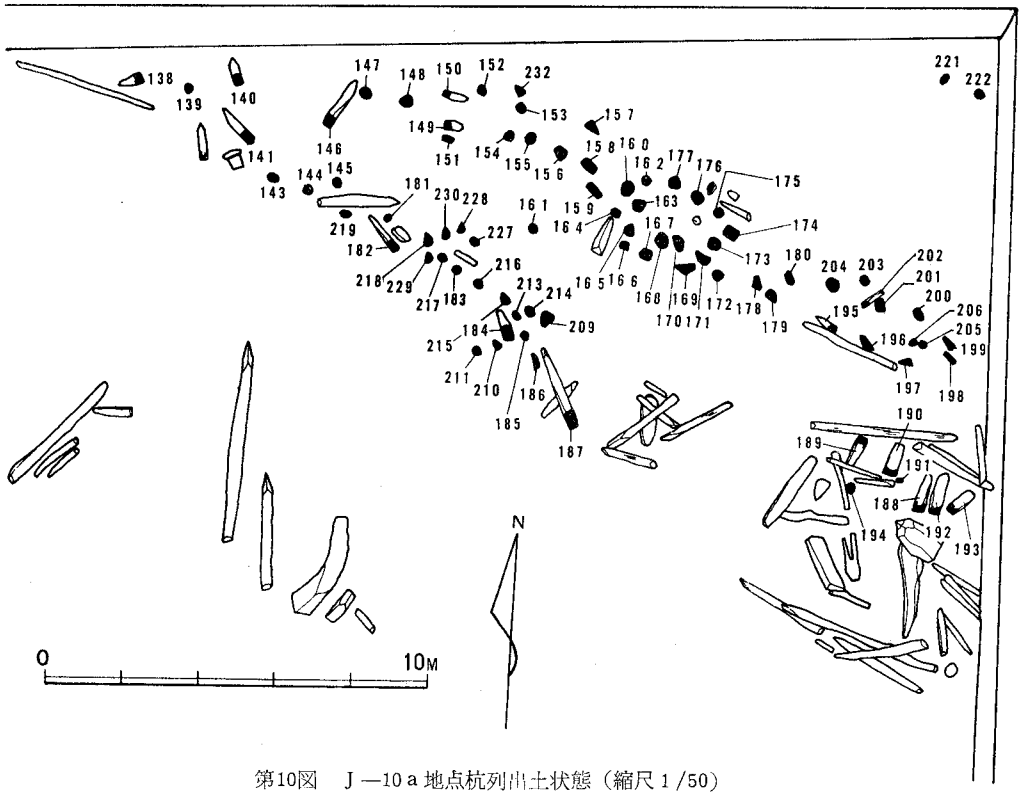
(3)　J—10a地点の杭列（第11～13図，第2表，PL．30・32・34）

J—10a地点の立杭には2種類ある。一つは西側微高地上及び微高地の端部に打込まれた10本の立杭（234～243）で，他は北東隅に集中しており，3列の杭列を構成する。

西側微高地上の杭（第2表）はまばらに点在しており（付図—3），北東隅の杭列とは異なる。同一時期のものか不明である。

北東隅の立杭は南東から北西方向へつらなり，延長線上のJ—10f地点の立杭につづくものである。J—10f地点の立杭との関係から，西側よりA列・B列・C列と呼ぶ。A列は北西側の残存状態は良いが，南東側の立杭は欠失し，流木群が集中している。A列は西側の流れに沿っているため被害を受けやすい状態をしめしている。A列の立杭は35本と少ない。これに対し，B列の立杭は47本あり残りが良い。B列には上端に打ち込みの痕を残す完形品が2点ある（第11図）。a—154は長さ53.5cm，a—170は長さ38.0cmで特に長くない。

A列とB列の幅1.0mの間には横木と認められるものはない。1—108，1—231，1—225のように横木らしきものがあるが，これも流木である。A列南東側の立杭が欠失し，流出していることから，A列～B列間の横木も流失したと思われる。C列は北東隅の2点のみであるが，J—10f地点との関連からこれをC列とした。B列とC列の幅は1.5mである。



第10図　J—10a地点杭列出土状態（縮尺1/50）

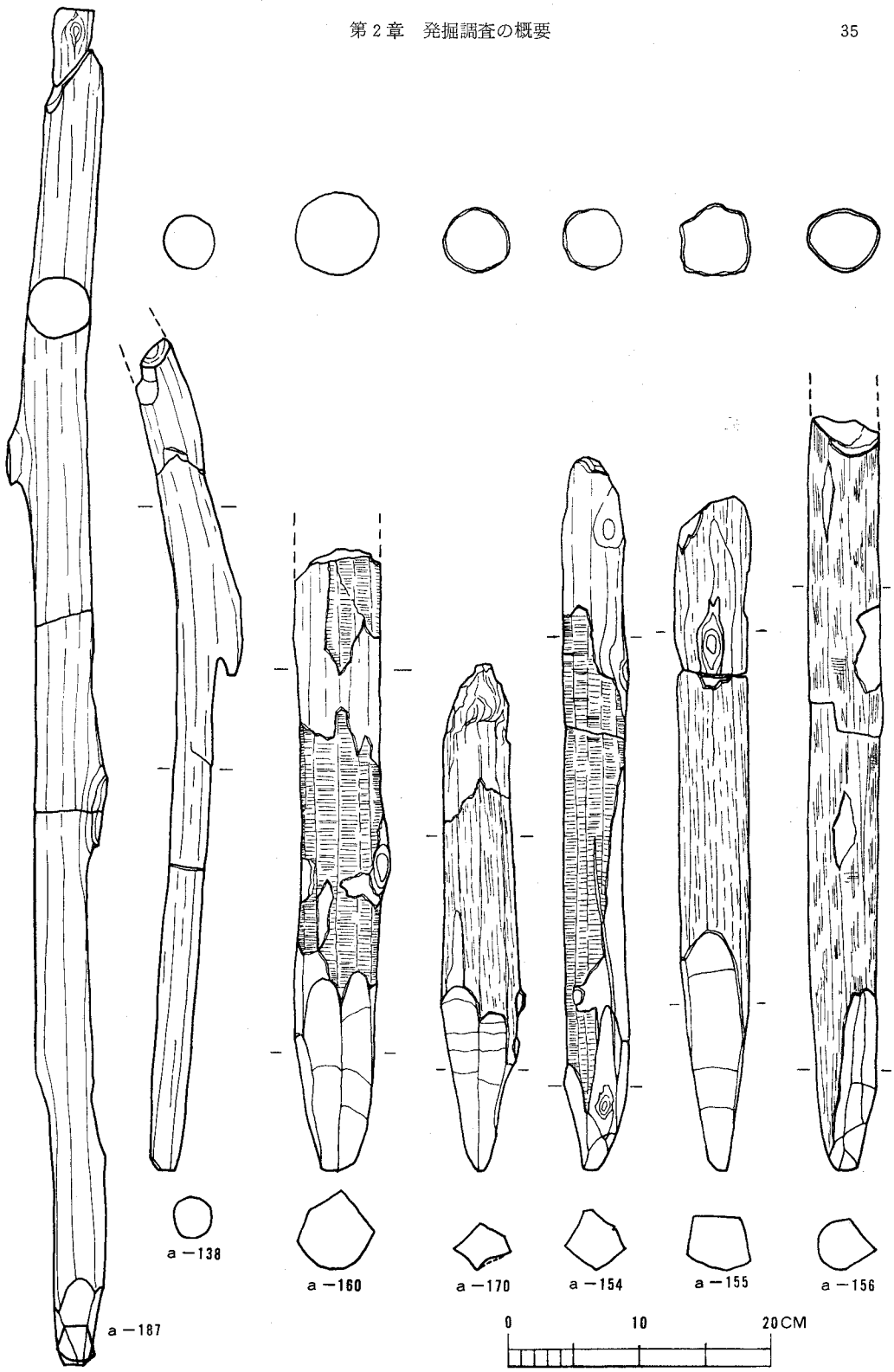
第2表　J—10a地点杭一覧表

地点	NO	杭の分類	法量 (cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
A列の杭	a— 138	①	62.5			3.8	○	第11図	PL. 30	先が細い　斜め
	139	①	50.0			1.5	○			小枝
	140	①	60.0			3.0	○			両端折れ　斜め
	141	①	85.0			3.5	○			先が細い　斜め枝を切落す
	143	—	8.0	—	—		×			先端のみ
	144	①	61.5			4.0	○			先が太い
	145	①	42.5			2.0	○			小枝
	181	①	26.0			2.0	○			両端折れ　小枝斜め
	182	①	82.0			3.5	○			先が細い　斜め枝を切落す
	183	①	19.0			4.5	×			先端のみ
	184	①	95.0			4.0	○			先が細い
	185	①	49.5			3.0	×			
	186	—	20.0	—	—		×			先端のみ
	187	①	103.0			4.5	○			先が細い　枝を切落す
	188	②	51.5	7.5	4.0		○			
	189	②	38.0	5.5	3.5		×			
	190	②	47.5	7.0	6.5		○	第12図	PL. 32	
	191	—	9.0	—	—		×			
	192	②	53.5	6.5	4.5		○	第12図	PL. 32	
	193	②	53.0	5.5	3.5		×			
	194	①	20.5			2.5	○			先端のみ
	209	①	20.5			—	○			先端のみ
	210	—	17.5	—	—		×			先端のみ　数回の削り
	211	—	14.0			4.5	×			両端折れ
	213	①	32.0			4.5	○			先が太い
	214	①	19.0			5.5	×			加工あり　（転用か？）
	215	①	41.5			3.5	○			先が太い
	216	①	39.5			3.2	○			先が細い
	217	①	24.5			5.0	○			加工あり
	218	②	29.5	5.5	2.5		×			
	219	①	15.0			3.5	×			先端のみ
	227	—	19.5	—	—		×			先端のみ
	228	—	20.0	—	—		×			先端のみ
	229	②	31.0	5.0	3.0		○			
	230	②	32.0	5.5	2.5		○			
B列の杭	a— 146	①	60.5			3.0	○			先が細い
	147	②	23.0	4.0	3.5		×			
	148	②	54.5	7.0	4.5		×			
	149	②	25.0	5.5	3.0		○			両端折れ
	150	②	37.0	6.5	4.0		×			
	151	②	25.0	5.5	3.0		○			先端折れ
	152	—	16.5	—	—		×			先端のみ
	153	②	24.0	5.0	4.0		×			両端折れ
	154	①	53.5			4.5	○	第11図	PL. 30	先が細い　焼け　完形
	155	①	50.5			5.3	○	第11図	PL. 30	先が細い
	156	①	56.5			5.3	○	第11図	PL. 30	先が細い
	157	②	26.0	6.5	4.5		○			先が細い
	158	②	35.5	7.0	2.5		○			
	159	②	29.0	7.0	3.0		○			
	160	①	46.5			6.3	○	第11図	PL. 30	先が細い
	161	③	34.0	4.0	3.0		×	第13図	PL. 34	加工材か
	162	①	38.5			4.5	○			先が太い
	163	—	19.5			—	○			先端のみ
	164	—	14.5	—	—		×			先端のみ
	165	②	15.0	6.0	3.0		○			両端折れ
	166	②	32.0	5.0	4.0		○			
	167	③	36.0	2.5	2.5		×	第13図	PL. 34	加工材か
	168	②	38.5	6.5	4.5		×	第12図	PL. 32	
	169	②	37.0	7.3	3.3		○	第12図	PL. 32	
	170	①	38.0			5.0	○	第11図	PL. 30	先が太い　完形
	171	②	38.5	4.5	4.0		×			先端のみ
	172	—	16.5	—	—		×			

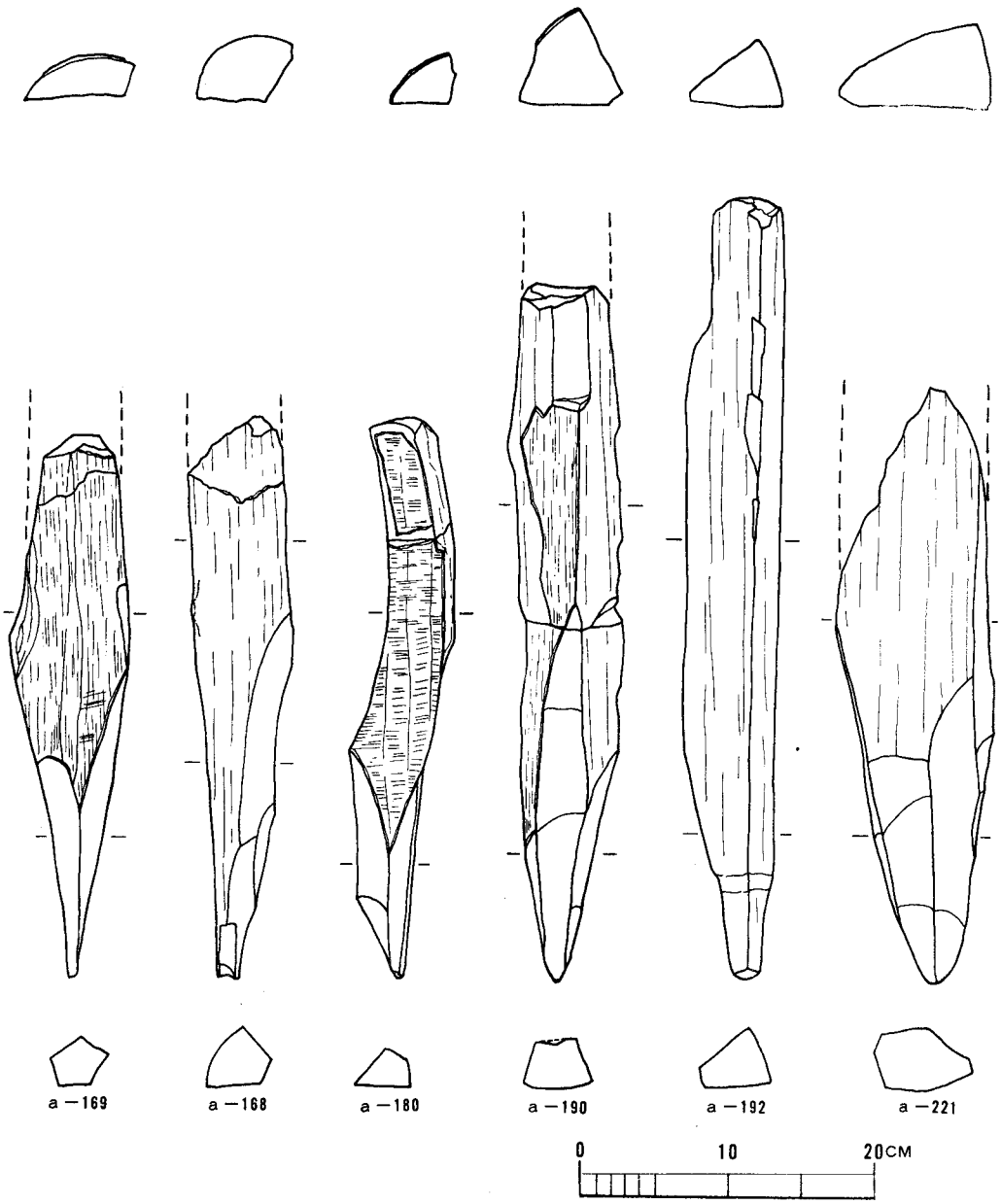
地点	NO	杭の分類	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
B列の杭	a— 173	③	13.0	—	—		×			先端のみ
	174	①	37.0			5.0	○			先が太い
	175	①	30.0			6.0	○			先が太い
	176	①	45.5			3.5	○			先が細い
	177	①	35.5			3.5	○			先が太い
	178	①	37.0			4.0	○			先が太い
	179	③	23.5	5.0	3.5		×	第13図	PL. 34	先端のみ
	180	②	38.3	4.5	3.5		○	第12図	PL. 32	
	195	③	27.3	7.0	1.5		×	第13図	PL. 34	矢板の先端のみ
	196	②	26.0	6.0	4.0		×			先端のみ
	197	②	30.0	5.0	4.5		×			
	198	③	32.0	7.5	5.0		○	第13図	PL. 34	
	199	②	38.0	4.5	4.5		○			
	200	①	45.0			5.5	○			先が細い
	201	②	43.8	4.0	3.0		○			
	202	①	19.5			2.0	○			両端折れ
	203	①	14.5			—	○			先端のみ
	204	③	37.0	6.0	4.5		○			
	205	①	6.0			3.0	○			先端のみ
	206	—	11.5	—	—		×			
	232	③	25.5	5.0	3.5		×			先端のみ
C列の杭	a— 221	②	40.7	10.3	6.3		×	第12図	PL. 32	
	222	③	19.0	4.5	3.5		×			先端のみ
西側台地上の杭	a— 234	①	19.5			3.5	×			先が細い
	235	—	9.0	—	—		×			先端のみ
	236	③	46.0	9.0	4.0		×	第13図	PL. 34	
	237	③	49.0	11.0	6.3		×	第13図	PL. 34	
	238	②	33.0	4.0	3.0		×			焼けている
	239	—	12.0	—	—		×			先端のみ
	240	①	6.5			2.5	×			先端のみ
	241	①	14.0			3.0	○			先が太い
	242	①	11.5			3.0	×			
	243	①	11.0			2.5	×			

A列では35点のうち20点が①類，8点が②類，7点が先端のみで分類できないもの。B列では48点のうち16点が①類，②類19点，③類8点，不明5点。C列は②類と不明が各1点である。A列では①類（丸木杭）が多く，B列では①類より②類（割杭—1）の方が多く，③類もあり，A列とB列では杭の種類が異なっている。

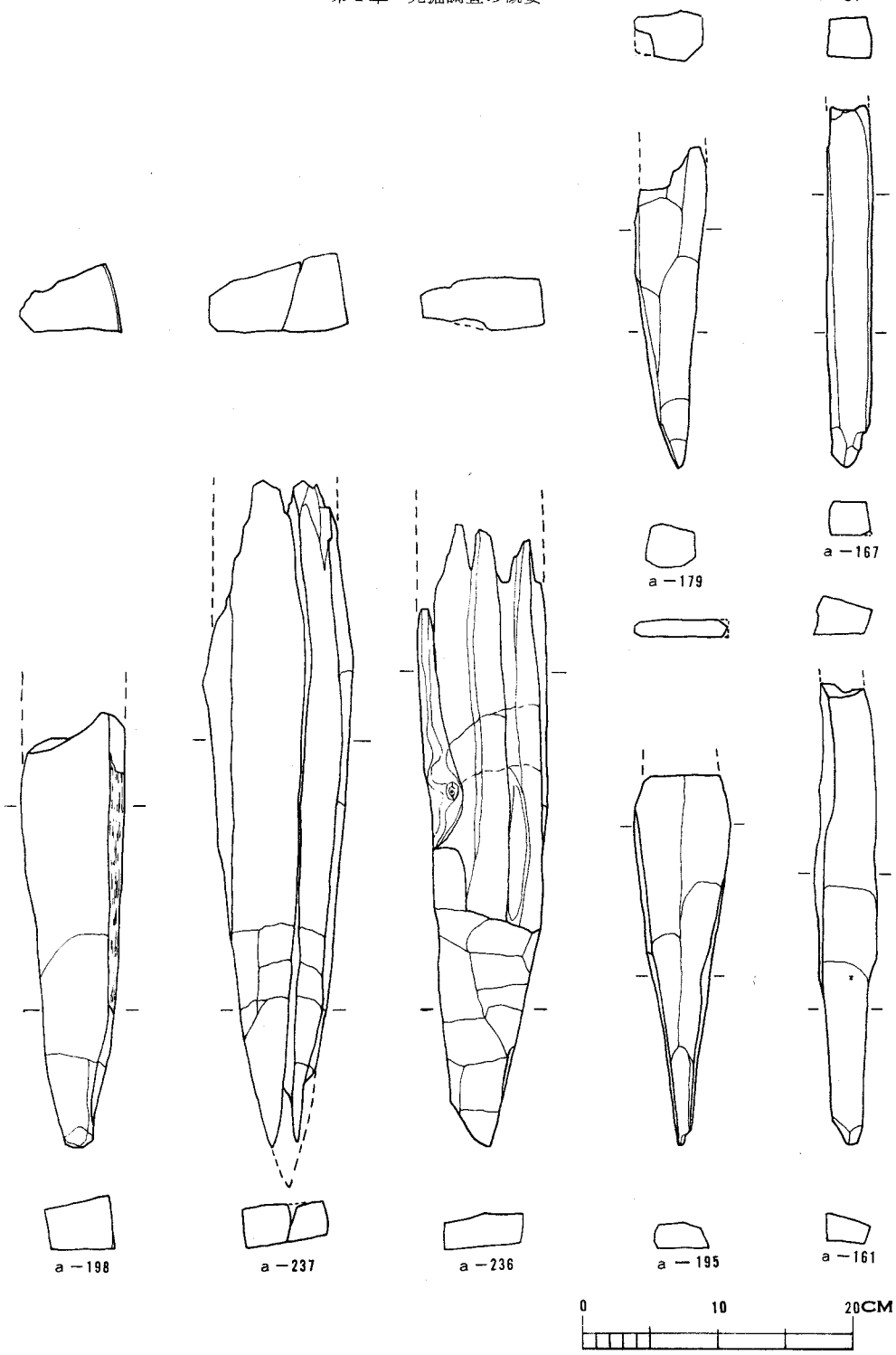
A列～C列の杭のうち代表的な20点を3つに分類して図示した（第11～13図）。第11図（丸木杭）のa—187は立杭のうち最も長いものであるが，斜めに倒れた状態で出土した。a—154 a—170は上端に打込む際の打撃痕を残す完形品で，a—170はわずか38.0cmの長さしかない。第12図（割杭—1）は丸木杭を½～⅛に割ったもので，樹皮面を残し，割る以外の加工はほとんどみられない。第13図（割杭—2）は割った材を更に削ったり，整形して矢板状にしたものである。a—198は樹皮面を残しているが内側から削りを加えている。他は周囲を削り，樹皮面を残さない。a—161，a—167は断面が角柱状をなし，周囲がよく整形されているところから，木器か建築部材などから転用して杭としたものであろう。このほか①類のa—214・a—217にも加工痕が認められる。



第11図　Ｊ―10ａ地点杭実測図―１　丸木杭（縮尺１／５）



第12図　J—10a地点杭実測図—2　割杭—(1)（縮尺1/5）



第13図　Ｊ—10ａ地点杭実測図—３　割杭—(2)（縮尺１／５）

(4)　J—10f地点の杭列

J—10f地点はJ—10a地点立杭の延長線上にあり，発掘区の南東隅から北西隅へ連続する杭列で，西側よりA列・B列・C列と呼ぶ。A～C列の立杭のほかに，西側台地の端に2本の立杭（f—33・35）があり，東側台地の端部にも1本の立杭（f—148）がある。これはA～C列の立杭から離れており，同時性に乏しいと思われるので区別して扱うことにする。B列とC列の間にはB列よりわずかに東に偏して打込まれているものもあるが，これはB列として取扱った。

A列とB列の幅は1.0mとほぼ一定している。この間に多くの杭が打込まれ，横木もある。B列とC列の幅は約3.0mであるが，南側のf—150付近では2.0mと狭くなり，J—10a地点では1.5mと更に狭くなっている。後述するようにA・B列とC列の間が溝か水路となっていたと考えられ，杭はその水利施設構築のために打込まれたものであろう。

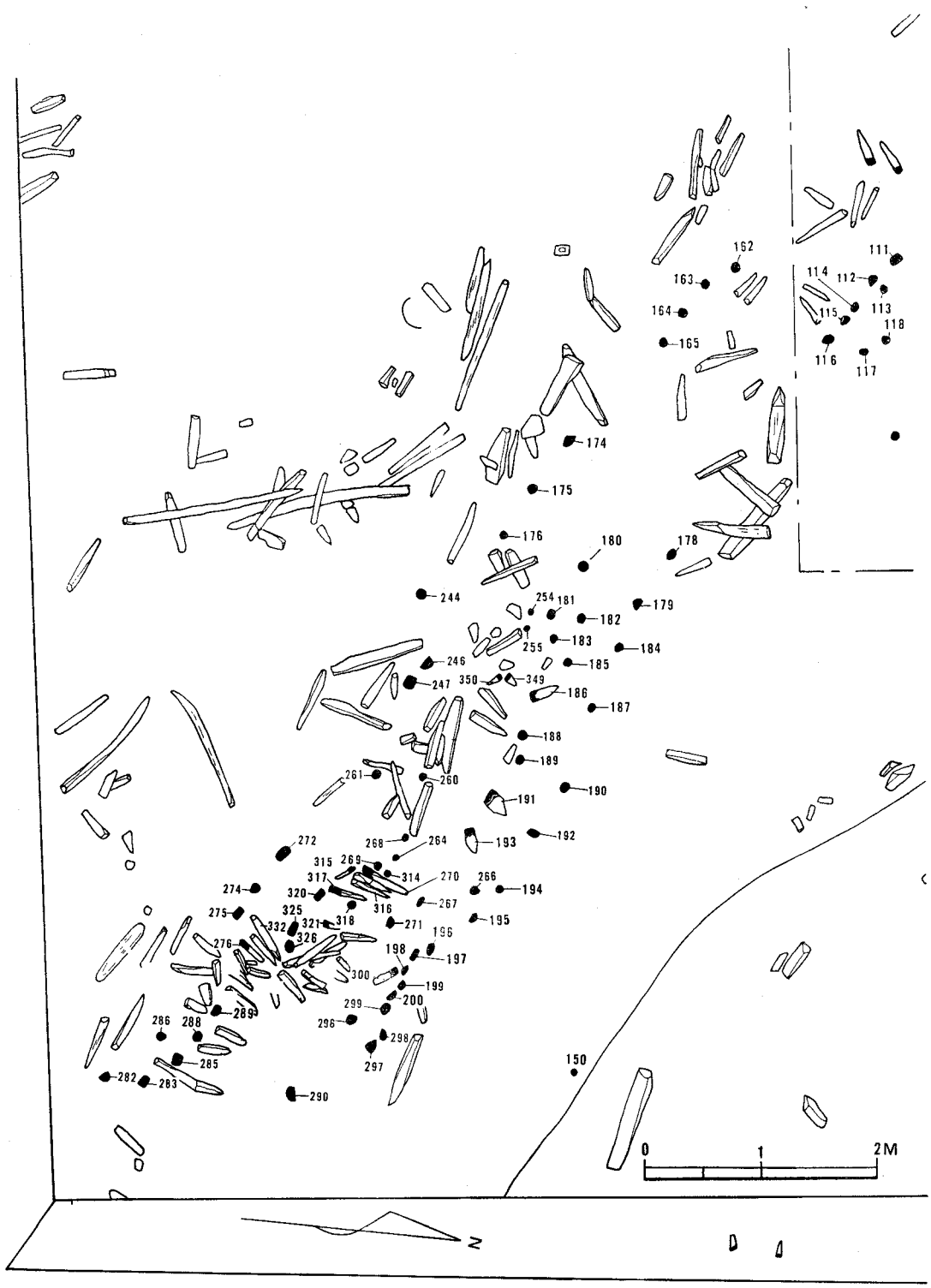
A列・B列は発掘区の中央部の立杭が少なく欠失している。残存している杭も上端を欠き，先端のみである。流木群がこの部分に集中していること，A列ではf—153付近が最も西寄りに張り出していることから，西側の流れはA・B杭列中央部に大きな被害を与え，そのあとに流木群が堆積したものと考えられる。A列に杭の先端だけのものが多いこともこれを裏付けている。C列は中央より北が残存状態がよいのに対し，南側ではf—150の1本を残すのみで，大半が欠失したものであろう。J—10a地点北東隅からJ—10f地点北断面の中央部と北西隅にかけては下部砂層（Ⅸ層）が杭列をおおうように堆積しており，杭がⅨ層以前に打込まれていることから，Ⅸ層の被害を受けて欠失したと考えることもできる。

このように発掘区の中央部を境として北側は残存状態が良好なのに対して，南側は被害を受け残存状態はよくないという相異が指摘できるので，立杭の出土状態を図示する都合から杭列を北側と南側に分けて説明することにする。

南側の杭（第15・18～20図，第3表，PL．31・33・35）

J—10f地点の流木群は中央部と南東側に集中しており，これによりA列南側の立杭は多くが流失していると思われ，24本しか残っていない。このうち9点は先端のみで上端を欠く。第3表にしめしたように9点が①類，4点が②類，2点が③類である。B列は比較的残りがよく6点の完形品を含む46点あるが，うち10点は先端のみで形態不明である。①類が15点，②類が14点，③類が7点である。C列はf—150の1点しかなく，特に残りが悪い。これはf—312・313のように北東隅より北側へ流れ込んだものと，中央部より流れ込んだ流木群の状態から考えて（付図—3），特にこの部分の被害が大きかったのであろう。北側の立杭同様A列はほとんど丸木杭で，B列・C列は割杭が多い。B列の中央寄りは割杭が優勢で，南側になると丸木杭が増えてくる。

第14図　J－10ｆ地点南側横木出土状態（縮尺１/50）



第15図　Ｊ—10ｆ地点南側杭列出土状態（縮尺１/50）

第3表　J—10f地点南側杭一覧表

地点	NO	杭の分類	法量 長 (cm)	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
A列の杭	f— 162	—	10.0	—	—		—			先端のみ
	163	③	24.0	4.0	3.0		×			先端のみ
	164	—	17.0	—	—		—			先端のみ
	165	—	20.0	—	—		—			先端のみ
	174	—	9.0	—	—		—			先端のみ
	175	—	17.0	—	—		—			先端のみ
	176	②	15.0	6.0	5.0		×			先端のみ
	244	②	38.0	5.0	4.0		×			
	246	①	28.0			5.0	○			先端のみ
	247	①	40.0			4.5	○			先が太い
	261	①	9.0			—	—			先端のみ
	272	—	15.0	—	—		—			先端のみ
	274	②	18.0	5.0	3.0		×			先端のみ
	275	①	46.0			4.0	○	第18図	PL. 31	完形
	276	③	27.5	5.5	4.0		×		PL. 35	
	282	—	8.0	—	—		—			先端のみ
	283	①	39.0			5.0	○			先が細い
	285	①	17.4			4.0	×			
	286	①	9.0			3.5	×			先端のみ
	288	①	14.0			4.5	○			先端のみ
	289	—	12.0	—	—		—			先端のみ
	320	—	5.0	—	—		—			先端のみ
	325	①	47.0			6.0	○			先が太い
	326	②	44.0	6.0	3.0		○			
B列の杭	f— 178	—	22.0			—	×			先端のみ
	179	②	41.0	9.0	3.0		×			
	180	—	18.0	—	—		—			先端のみ
	181	①	22.0			6.0	○			両端折れ
	182	③	40.5	7.5	3.0		×	第20図	PL. 35	
	183	③	34.0	8.5	4.0		×	第20図	PL. 35	
	184	—	16.0			—	—			先端のみ
	185	③	44.0	5.0	4.5		×	第20図	PL. 35	完形か
	186	②	65.0	8.0	3.0		×			
	187	②	43.0	5.0	4.0		×			
	188	②	62.0	6.0	4.0		×			完形
	189	②	52.0	10.0	4.0		×	第19図	PL. 33	完形
	190	②	38.0	7.5	4.0		×			先が太い
	191	②	56.0	6.0	4.0		×			
	192	②	32.0	5.0	3.0		×			
	193	②	53.0	8.5	4.0		×			
	194	③	21.0	5.0	4.0		×		PL. 35	先端のみ
	195	②	41.5	5.5	4.0		×	第19図	PL. 33	
	196	①	18.0			4.0	×			先端のみ
	197	①	31.0			4.0	○			
	198	①	18.0			2.0	×			先端のみ
	199	②	34.5	6.0	5.0		○			
	200	①	53.5			3.0	×			先が細い
	254	①	14.0			4.0	○			先端のみ
	255	—	34.0			—	—			両端折れ
	260	—	24.0	—	—		×			先端のみ
	264	②	51.5	6.7	4.0		○	第19図	PL. 33	
	266	③	37.0	6.5	3.0		×	第20図	PL. 35	完形
	267	③	45.0	10.0	3.0		×	第20図	PL. 35	完形
	268	①	50.0			5.0	○			先が太い
	269	①	39.0			4.0	×			
	270	②	44.5	5.5	2.5		×	第19図	PL. 33	完形
	271	②	56.0	7.0	5.0		×			
	290	①	30.0			2.5	×			先が細い
	296	①	16.0			5.0	○			先端のみ
	297	—	11.0			—	×			先端のみ
	298	①	17.0			3.0	×			先端のみ
	299	③	19.5	—	—		×		PL. 35	先端のみ・先を焼く

地　点	NO	杭の分類	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備　考
B列の杭	f— 300	—	17.0	—	—		×			先端のみ
	314	①	12.0			2.5	×			先端のみ
	315	—	24.0			—	×			先端のみ
	316	①	33.0			6.0	○			先が太い　先端を焼く
	318	①	40.0			4.0	○			
	321	①	30.0			4.0	×			
	349	—	10.0			—	—			先端のみ
	350	—	11.0			—	—			先端のみ
C列の杭	f— 150	—	4.0			—				先端のみ

北側の杭（第17～19図，第4表，PL．31・33）

北側の立杭はA・B・C列とも残りが良い。A列では27点のうち2点の完形品がある。B列は67点と東側にはりだした6本を加え73点あるが，この中に2点の完形品がある。B列の東側にはり出した6点は，P．38で説明した52・53・54・119・120・121であるが(第16図)，P．48のようにA・B列とC列の間を水路か溝と考えれば，あるいはこれらの杭はあとから打込まれたものかも知れない。C列は16点である。A列は27点のうち16点が①類，②類は0点，2点が③類で，9点は不明である。B列の北ほど①類（丸木杭）が多く，中央部にゆくほど割杭の方が多くなる。C列は16点のうち①類は全くみられず，全て割杭である。②類が12点，③類が2点，2点が不明である。

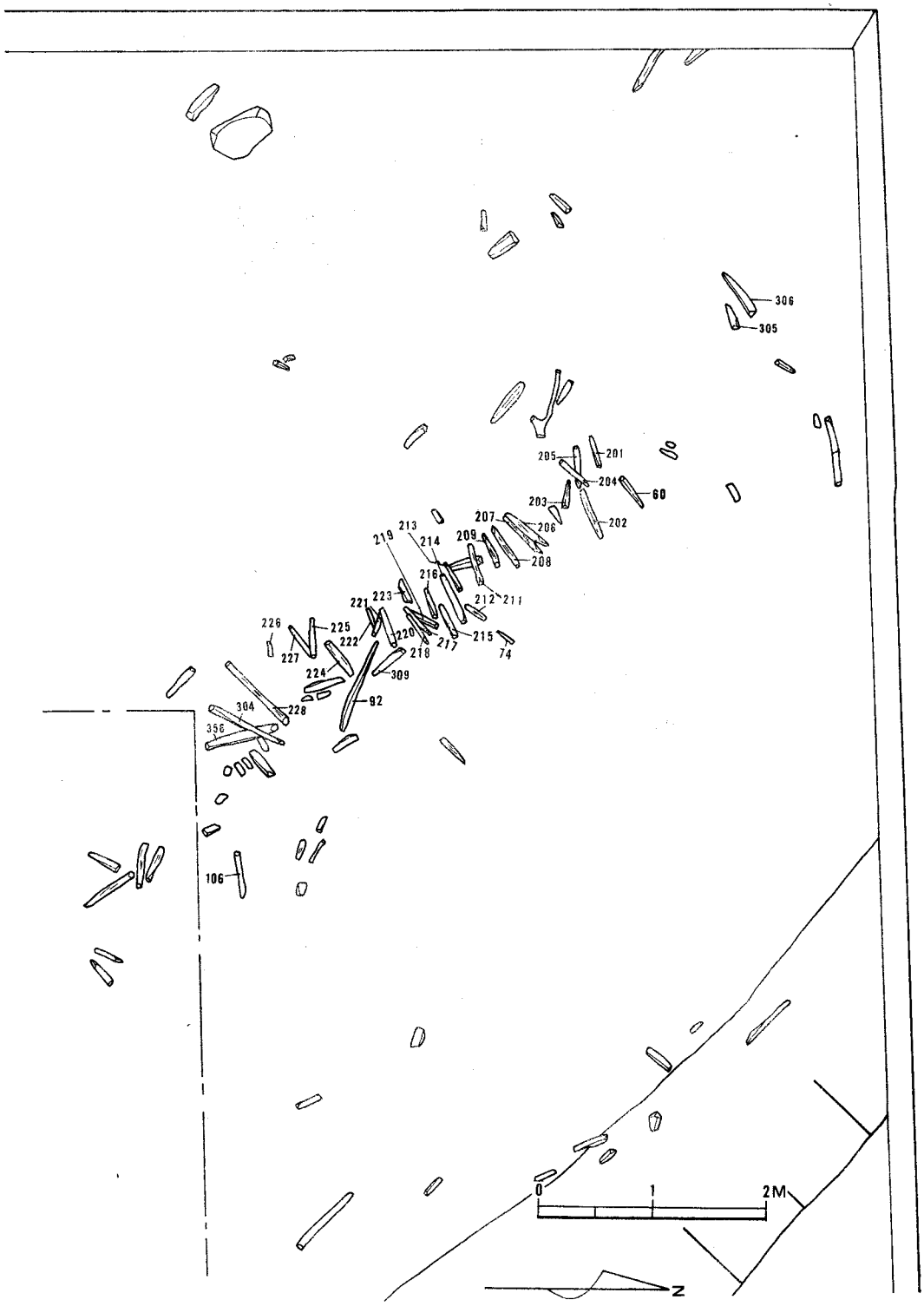
このように分類すると各列で杭の種類が異なる点が注意される。A列の2点(f－6・8)，B列の2点（f—68・341）は完形であるが，その上端はいずれもX層中に位置しており，Ⅸ層より以前に打ち込まれた杭であることをしめしている。

A列ではほとんどが丸木杭で，C列は割杭に限られている。B列のうち北側は丸木杭が多く割杭が点在する程度であるが，中央部にかけては丸木杭が少なくなり，割杭が多くなっている。これは各列によって杭の形態が選択されている結果とみることができるであろう。A列に先端のみで上端を欠く杭が9点も含まれているのは，A列が流れに面して流水の被害を受けやすかったことをしめすものであろう。

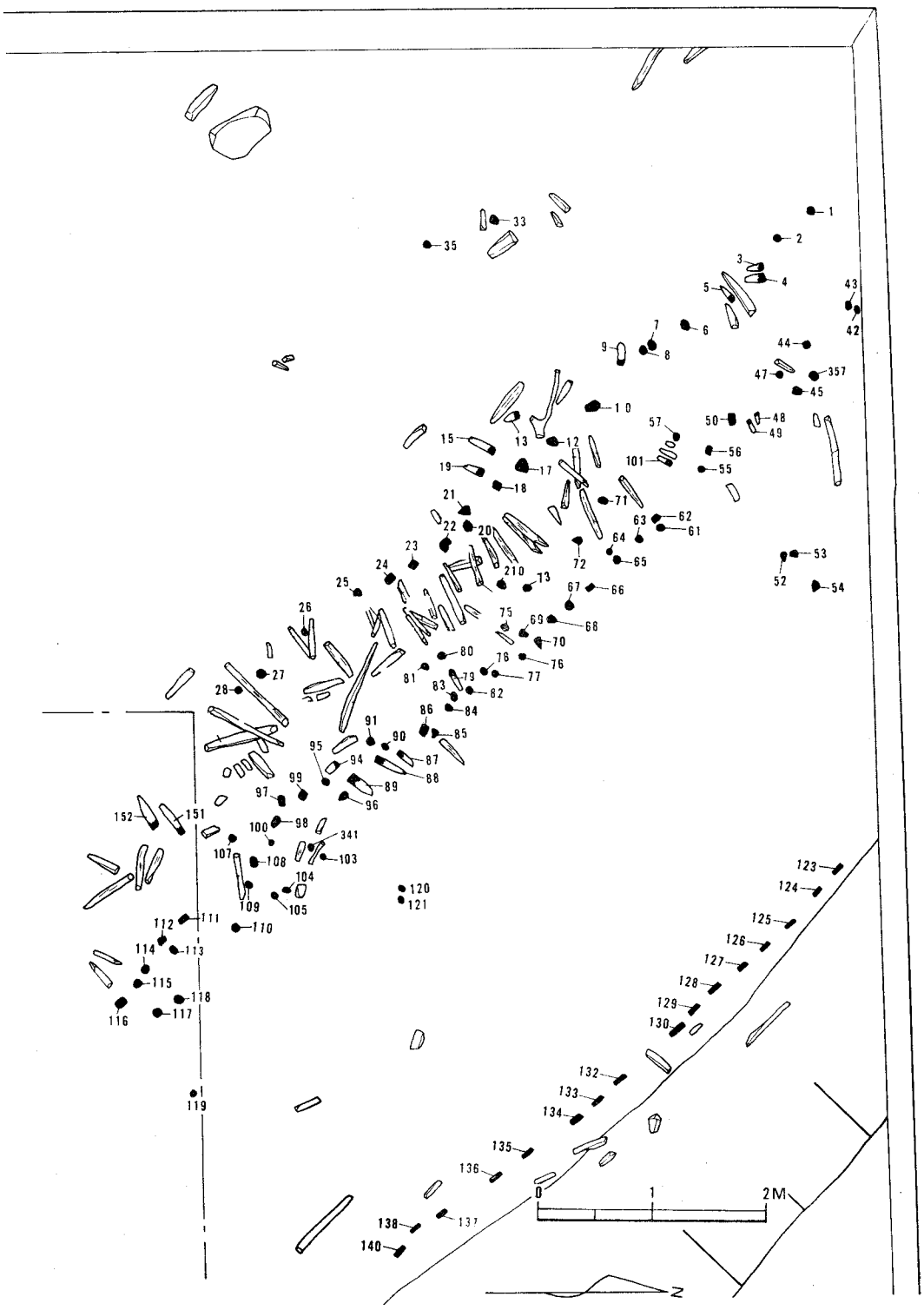
第4表　J—10f地点北側杭一覧表

地　点	NO	杭の分類	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備　考
A列の杭	f— 1	①	60.0			6.3	○	第18図	PL. 31	先が細い
	2	—	9.0	—	—		—			先端のみ
	3	—	19.0	—	—		—			先端のみ
	4	①	56.0			6.3	○	第18図	PL. 31	先が細い
	5	—	17.0	—	—		—			先端のみ
	6	①	56.3			5·5	×	第18図	PL. 31	完　形

地点	NO	杭の分類	法量 長 (cm)	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
A列の杭	f— 7	①	57.5			4.0	×	第18図	PL. 31	先が細い
	8	③	23.0	6.0	2.5		×		PL. 35	完形
	9	①	47.0			5.5	○			
	10	—	13.0	—	—		—			先端のみ
	12	—	13.0	—	—		—			先端のみ
	13	①	25.5			4.0	○			両端折れ
	15	①	48.0			4.5	○			先が太い
	17	①	31.0			6.0	○			
	18	—	12.0	—	—		—			先端のみ
	19	①	17.0			3.5	×			先端のみ
	20	①	30.0			4.0	○			先が細い
	21	①	9.0			4.0	×			先端のみ
	22	①	28.0			6.0	○			先端のみ
	23	—	11.0	—	—		—			先端のみ
	24	①	39.0			4.0	○			
	25	—	12.0	—	—		○			先端のみ
	26	①	23.0			5.0	○			
	27	③	9.0	2.0	2.0		×			先端のみ　加工あり
	28	—	14.0			—	—			先端のみ
	151	①	35.0			6.0	×			加工あり
	152	①	46.0			4.0	×			先が細い
A列西の杭	f— 33	①	20.0			3.5	○			
	35	①	34.5			4.0	○			
B列の杭	f— 42	①	19.5			4.0	○			先が太い
	43	②	28.0	6.0	3.0		○			
	44	①	11.0			4.0	×			先端のみ
	45	①	28.0			5.0	○			
	47	①	26.5			2.0	○			小枝
	48	①	22.0			2.0	○			
	49	①	29.5			7.0	○			先端のみ
	50	①	22.0			5.0	○			先端のみ　先が太い
	52	①	25.5			5.0	○			先端のみ
	53	①	70.0			5.0	×			先が太い
	54	①	11.0			3.5	×			先端のみ
	55	—	8.0			—	—			先端のみ
	56	②	20.0	6.0	2.0		○			先端のみ
	57	①	26.5			4.0	○			両端折れ
	61	①	25.5			2.0	○			小枝
	62	②	22.0	5.0	2.5		○			両端折れ
	63	①	21.0			3.0	○			
	64	①	17.0			4.5	○			両端折れ
	65	①	36.5			2.5	○			
	66	①	27.0			3.5	○			
	67	①	36.0			4.0	○			
	68	①	35.5			3.5	○			先が細い　完形
	69	①	24.0			2.5	○			両端折れ
	70	①	44.5			5.5	○			先が細い
	71	①	30.5			3.5	○			先端のみ
	72	①	29.0			4.0	○			先端のみ
	73	①	21.0			5.0	○			先端のみ
	75	—	10.0			—	○			
	76	①	45.5			5.0	○	第18図	PL. 31	
	77	②	45.0	8.0	3.5		○			先が細い
	78	①	37.0			2.5	○			
	79	①	23.0			4.0	×			先端のみ
	80	①	16.0			4.0	×			先端のみ
	81	①	33.0			3.0	○			先が細い
	82	③	25.0	3.5	3.0		×			先端のみ
	83	①	24.0			4.0	×			先端のみ
	84	①	8.0			2.5	×			先端のみ
	85	①	18.0			4.0	○			先端のみ　先が細い
	86	①	39.0			6.0	○			



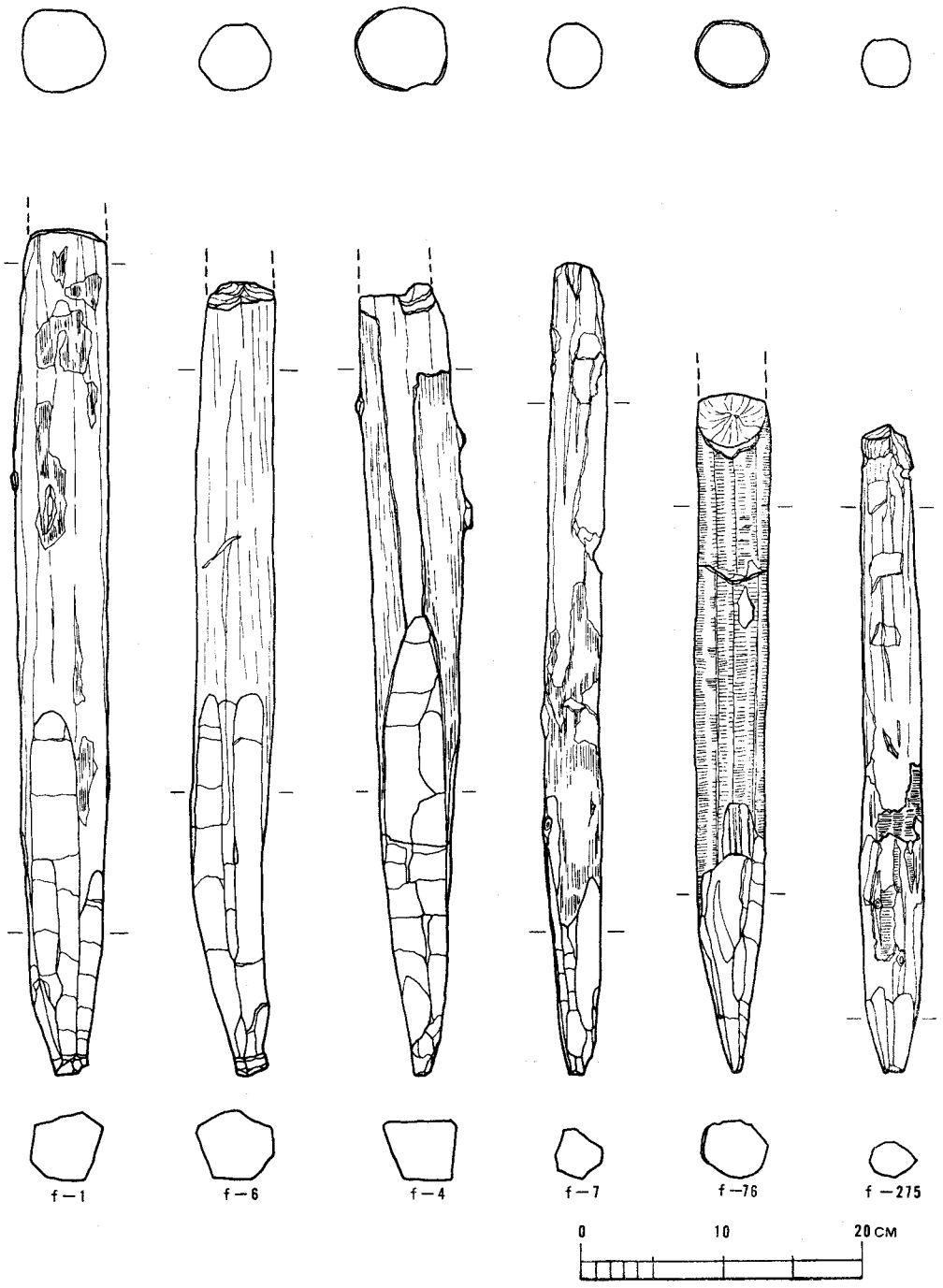
第16図　J—10 f 地点北側横木出土状態（縮尺1/50）



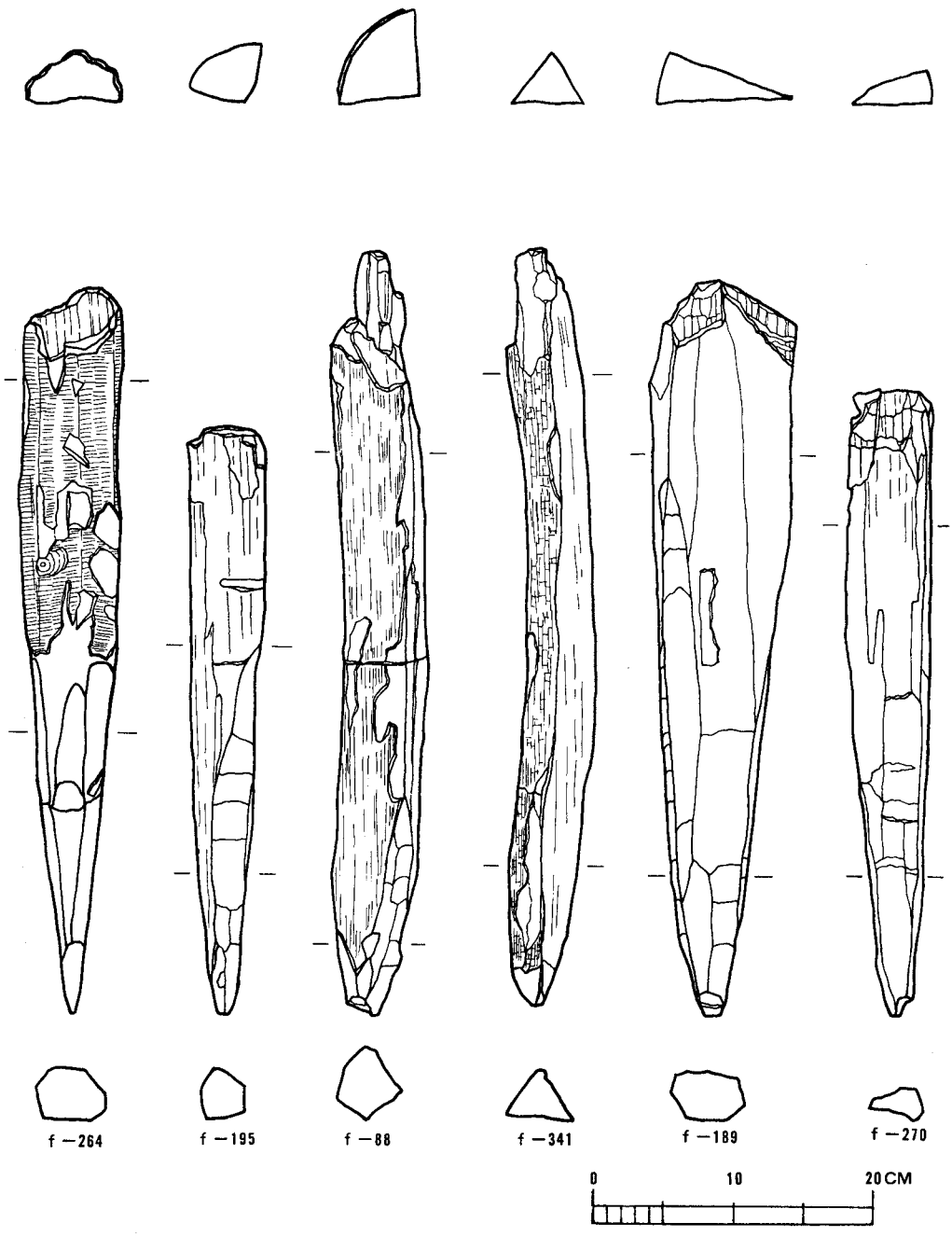
第17図　Ｊ―10ｆ地点北側杭列出土状態（縮尺1/50）

地点	NO	杭の分類	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
B列の杭	f— 87	①	21.0			4.0	○			先端のみ
	88	②	54.5	6.5	6.5		○			
	89	②	39.5	5.5	4.5		×	第19図	PL. 33	
	90	①	34.5			4.0	○			先が太い
	91	①	8.0			3.0	○			先端のみ
	94	①	34.0			4.0	×			
	95	①	34.0			3.0	○			先が細い
	96	②	56.0	6.0	6.0		×			
	97	①	30.0			2.0	×			小　枝
	98	①	17.5			2.0	○			両端折れ
	99	①	25.0			4.0	○			先端のみ
	100	②	27.0	6.0	3.0		○			先端のみ
	101	②	32.0	6.0	3.0		○			
	103	①	16.5			3.5	×			先端のみ
	104	①	18.3			6.0	○			先端のみ　先が太い
	105	②	48.0	5.5	4.5		×			
	107	①	33.0			4.0	○			先が太い
	108	②	27.5	6.0	3.0		○			先が細い
	109	—	12.0	—	—		—			先端のみ
	110	①	21.0			4.0	○			先端のみ
	111	②	21.0	5.5	3.0		○			先端のみ　先が太い
	112	②	22.0	6.5	5.5		○			先端のみ
	113	①	27.5			2.0	×			小　枝
	114	②	29.0	6.5	4.0		○			
	115	①	34.0			3.0	○			先が細い
	116	②	22.0	6.0	3.5		○			先端のみ
	117	①	32.0			3.0	×			先が細い
	118	①	25.0			4.0	×			先端のみ　先が太い
	119	①	32.0			2.5	×			
	120	②	37.0	5.0	1.5		×			
	121	①	23.0			2.5	×			
	210	①	23.0			3.0	×			
	341	②	54.0	5.0	3.5		×	第19図	PL. 33	完　形
	357	①	36.0			6.0	○			先が太い
C列の杭	f— 123	②	52.0	5.0	4.0		×			
	124	②	59.0	6.5	5.0		×			
	125	②	61.0	9.0	6.0		×			
	126	②	27.0	4.5	3.5		×			
	127	②	40.0	6.0	3.0		×			
	128	②	33.0	4.0	3.0		○			
	129	③	16.0	8.0	2.0		×			
	130	③	20.0	8.0	2.0		×			
	132	②	39.0	6.5	3.5		○			
	133	②	18.5	7.0	3.5		○			先端のみ
	134	②	21.0	5.0	5.0		○			
	135	②	11.5	4.0	3.5		○			先端のみ
	136	—	10.0	—	—		—		PL. 35	先端のみ
	137	②	18.0	2.5	2.5		○			先端のみ
	138	—	9.0	—	—		—			先端のみ
	140	②	23.0	3.5	3.5		×			
C列東の杭	f— 148	②	12.0	3.0	3.0		×			両端折れ

J—10f地点立杭のうち代表的なもの17点を第18～20図に図示した。第18図のf—275はA列丸木杭の完形品で，全長46.0cm，上端に打込みの打撃痕が残る。第19図は割杭—1であるが杭の作り方はJ—10a地点と同様に，½～⅛に割って杭としたもので樹皮面を残している。f—189・341は完形であるが，全長は52.0cm・54.0cmと長くない。第20図は割ったあと更に周囲を削った矢板状のもので，f—266・267は完形である。f—266は全長37.0cmしかない。丸木

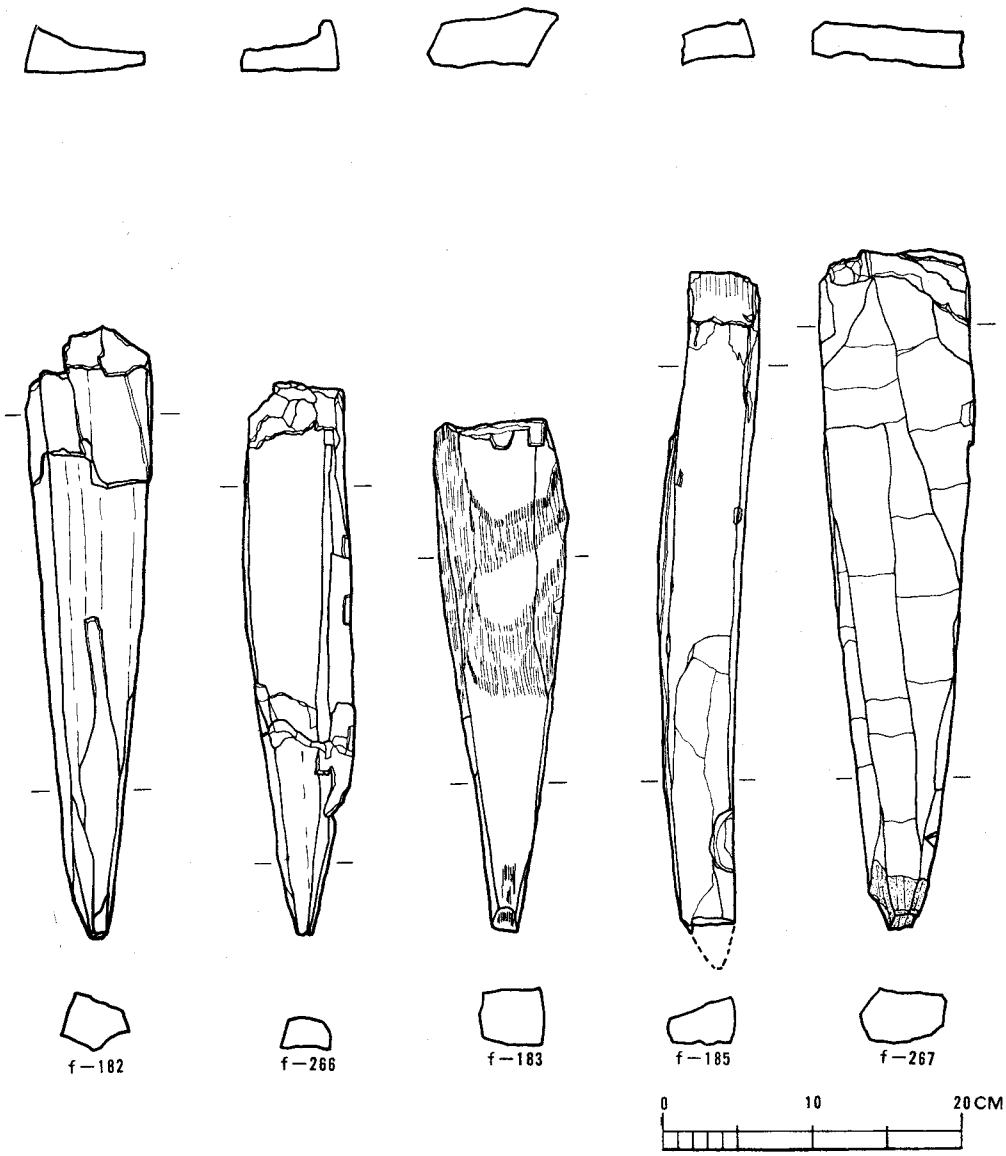


第18図Ｊ―10ｆ地点杭実測図―１　丸木杭（縮尺１／５）



第19図　J—10f地点杭実測図—2　割杭—(1)（縮尺1/5）

杭の中にはｆ—47・61・97・113のように径2.0㎝程度の小枝を杭としたものがある。これはB列に多くみられる。杭の中にはｆ—151のように上端に加工痕をとどめるものがあり，他から転用したものであろう。ｆ—299・316の２点は杭の先端が焼けている。



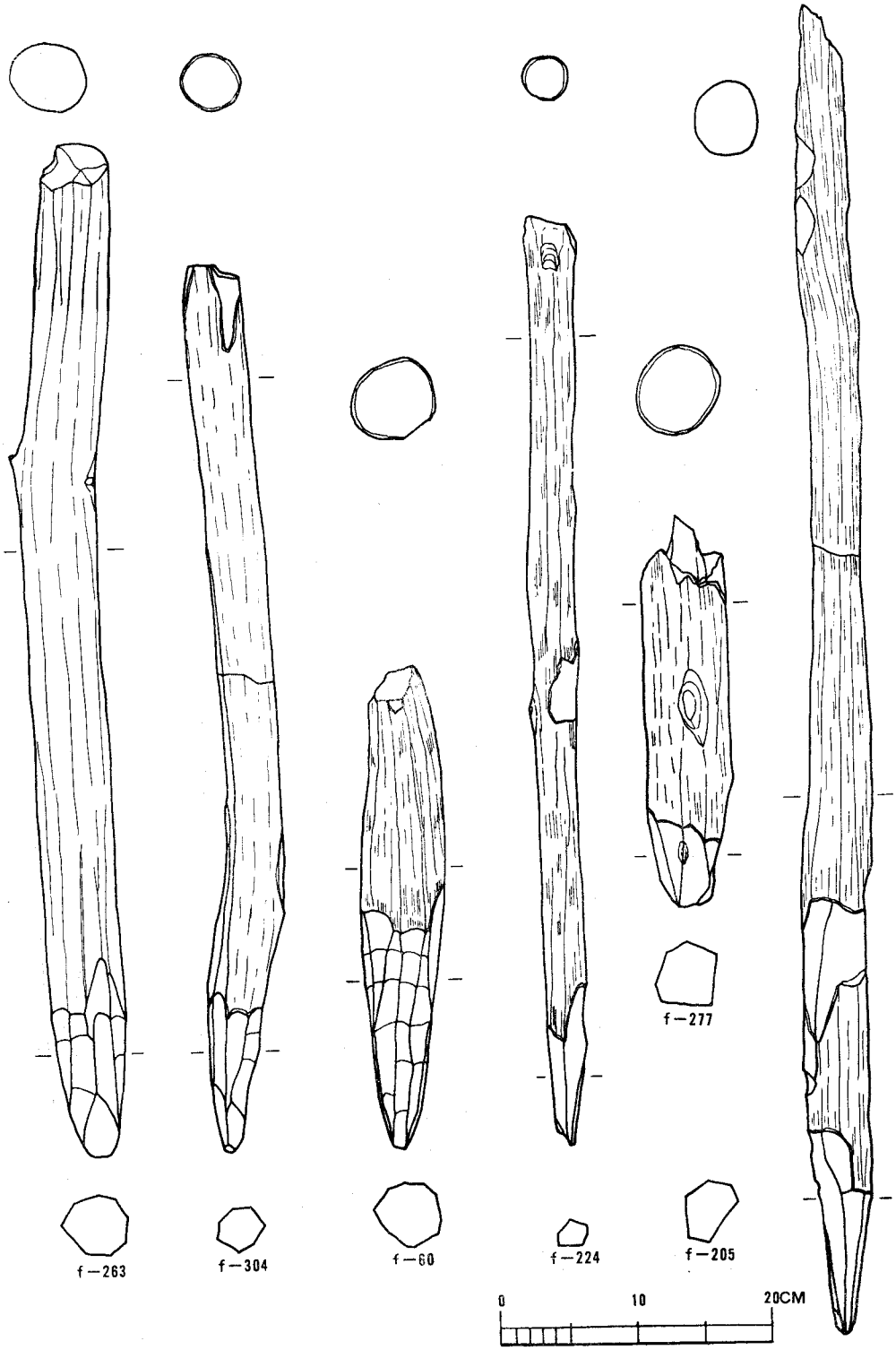
第20図　Ｊ—10ｆ地点杭実測図—３　割杭—(2)（縮尺１／５）

(5)　J—10f地点の横木（第14・16・21・22図，第5表，PL．36・37）

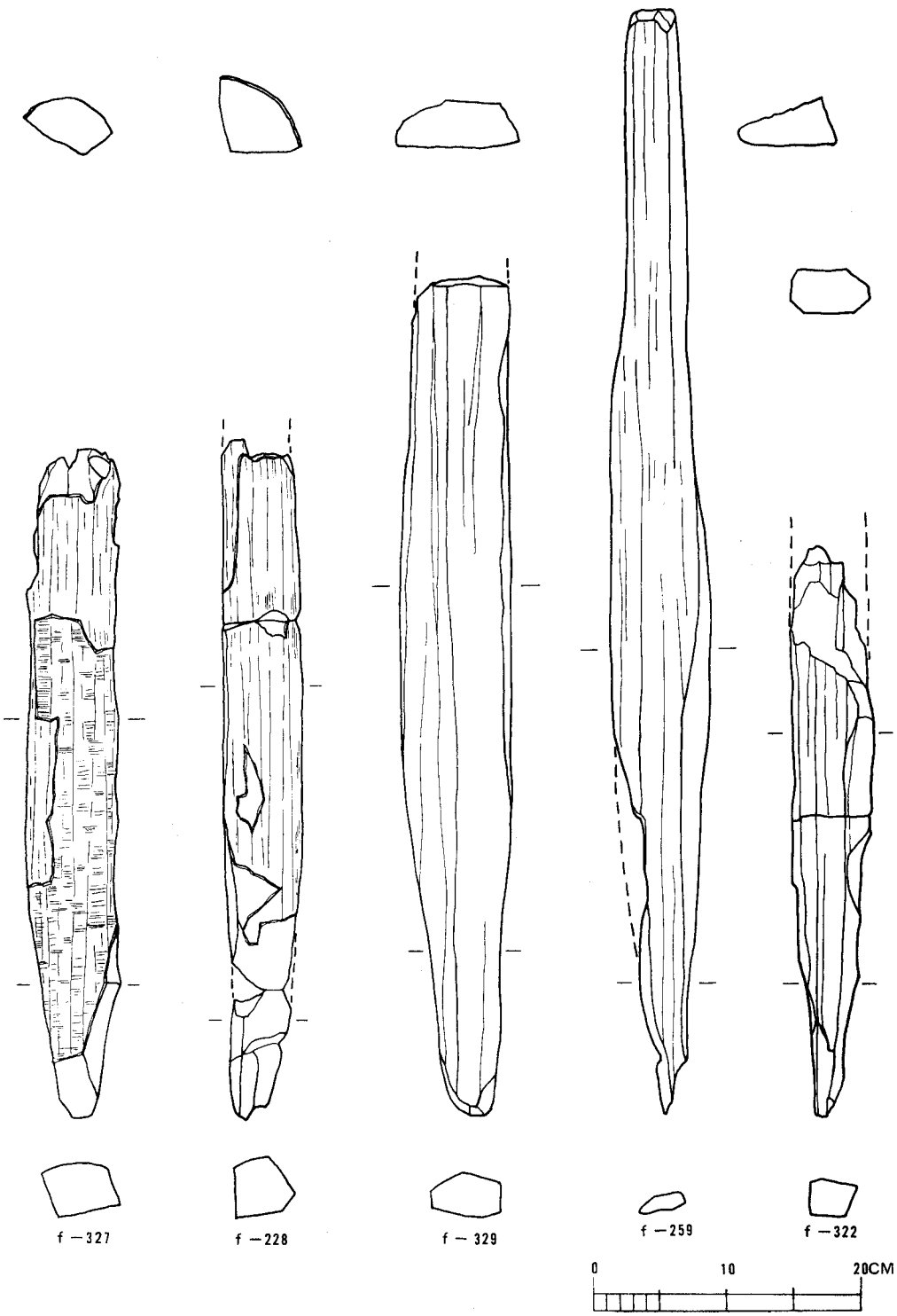
A列・B列の間には杭列の方向と直交するように 横木と思われるものがある。一部にf—92・93・309のように杭列と平行するものもある。中央部より北側は残りがよいが，南側では多くが流出して数が少ない。横木は杭の上端より下にあり，A・Bの杭列の間に横にわたし杭を固定する役割を果すためのもので，その上に土を盛ったのではないかと思われる。従ってA列とB列は横木によって補強されていたことになり，残存状態のよい北側のf—23とf—77の間では幅1.30mを測り，1.3～1.5m幅の土堤状を呈していたのであろう。

第5表　J—10f地点横木一覧表

地点	NO	杭の分類	法量 (cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
南側の横木	f— 256	—	71.5	—	—		○			
	259	③	83.5	7.0	4.0		×	第22図	PL. 37	
	263	①	75.0			5.0	○	第21図	PL. 36	
	277	①	29.0			6.0	○	第21図	PL. 36	
	278	②	34.5	6.5	2.5		×			
	287	②	42.0	4.0	3.0		○			
	291	①	60.5			5.0	○			
	292	②	28.0	7.0	3.5		×			
	293	①	61.0			4.0	×			
	295	①	52.5			4.0	×			
	322	③	42.5	6.0	3.0		×	第22図	PL. 37	
	323	①	40.0			2.5	×			
	324	①	28.5			4.0	○			
	327	②	50.0	7.0	3.5		○	第22図	PL. 37	
	328	①	46.5			5.0	○			
	329	③	63.0	7.5	3.5		×	第22図	PL. 37	
	332	—	66.0	—	—		×			
	333	①	49.0			4.0	×			
	334	①	12.5			3.0	×			
北側の横木	f— 60	①	36.0			6.0	○	第21図	PL. 36	
	74	①	21.0			3.5	×			
	92	①	93.5			4.0	×			
	106	①	51.0			3.5	○			
	201	①	29.0			4.5	×			
	202	②	45.0	6.5	4.0		×			
	203	①	36.0			3.0	×			
	204	①	39.0			4.5	○			
	205	①	99.0			4.5	○	第21図	PL. 36	
	206	①	67.0			3.0	×			
	207	①	57.5			3.5	○			
	208	①	58.0			2.5	○			
	209	①	45.5			4.0	○			
	211	①	46.0			3.5	○			
	212	①	31.0			3.5	×			
	213	①	61.0			4.0	○			
	214	①	81.0			3.0	○			
	215	①	27.5			3.5	○			
	216	①	55.0			4.0	×			
	217	①	57.5			2.5	○			
	218	①	70.0			3.0	×			
	219	②	26.0	4.0	2.5		×			
	220	①	38.0			2.0	×			
	221	①	33.0			3.0	○			
	222	①	52.0			3.5	○			



第21図　Ｊ―10ｆ地点横木実測図―１（縮尺１／５）



第22図　J—10f地点横木実測図—2（縮尺1／5）

地　点	NO	杭の分類	法量 (cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備　考
北側の横木	f— 223	①	39.5			3.0	×			
	224	①	69.5			3.5	○	第21図	PL. 36	
	225	②	50.0	4.5	2.5		×			
	226	①	66.0			3.5	×			
	227	①	15.0			3.0	×			
	228	②	51.0	7.0	5.0		×	第22図	PL. 37	
	304	①	66.0			4.0	○	第21図	PL. 36	
	305	①	24.0			3.0	×			
	306	①	47.0			4.0	×			
	309	①	33.0			3.5	×			
	356	①	81.5			4.0	×			

横木は北側から36点，南側から19点合わせて55点が出土した。いずれも先端を尖らせたもので，杭を転用したと思われる。横木のうち第22図は丸木杭状のものであるがf—263やf—205は長さが 75.0cmと99.0cmを測り， 第33図の建築部材ではないかと思われるものに類似しており，建築部材を転用したのかも知れない。第22図は，割杭状のもので，断面形はJ—10f地点の割杭（第19・20図）と同様で杭を転用したものであろう。f—327とf—228は②類（割杭—1）に，f—322は③類（割杭—2）に分類できる。 横木とした53点のうち①類（丸木杭）が42点と大半を占め，②類8点，③類3点，割杭は合わせて11点である。

第3章　出土遺物

表土中の遺物まで含めると縄文時代から現代まであるが，表土中のものを除きⅥ層以下の出土遺物を土器・石器，木製品を木器・杭・建築部材に分けて記述する。表土からは糸切底の土師器皿などが出土した。

J—10a・10f地点の遺構は杭列だけであるが，その他に土器・石器・木器・杭・建築部材・自然流木などが出土した。いずれも流れ込みと思われるもので，これらを一括して流木群とよぶ。流木群中の材は2種類以上がある。多くは南東から北西方向の流れに沿って，一時的な大量の砂の流出によって二次堆積したものと思われるもので，J—10a地点南東隅から10f地点中央部に集中しているが，J—10a地点25や30（付図—4）のようにSE—NWに主軸をもつ材が多く，南東からの流れの方向をしめしている。他に杭列中の立杭や横木が流失したものも混在していると思われる。出土土器の大部分は磨滅している小片であるが，中にはJ—10c地点砂層出土の甕（第7図）のように口縁部から胴部まで残るものもあり，J—10a地点の土師式土器（第26図）はほぼ完形の状態で出土した。これら出土遺物は砂層から出土したものが多く縄文時代から弥生・古墳時代に及んでいるが，第26図の土師式土器の甕が最も新しい時期のものと考えられ，古墳時代より新しい遺物は含まれていないようである。

1 土 器

J—10a・10f地点から出土した土器は第12表のようにかなりの点数となるが，そのほとんどが流れ込みと思われるもので，杭列遺構に伴なう遺物がそのうちのどれなのか明確でない。弥生土器が最も多く，その中でも中期の土器が大半を占める。弥生土器に対し土師式土器は少ないが，須恵器を含まない点が注目される。J—10a地点に対し，10f地点の出土量は半数以下と少ない。

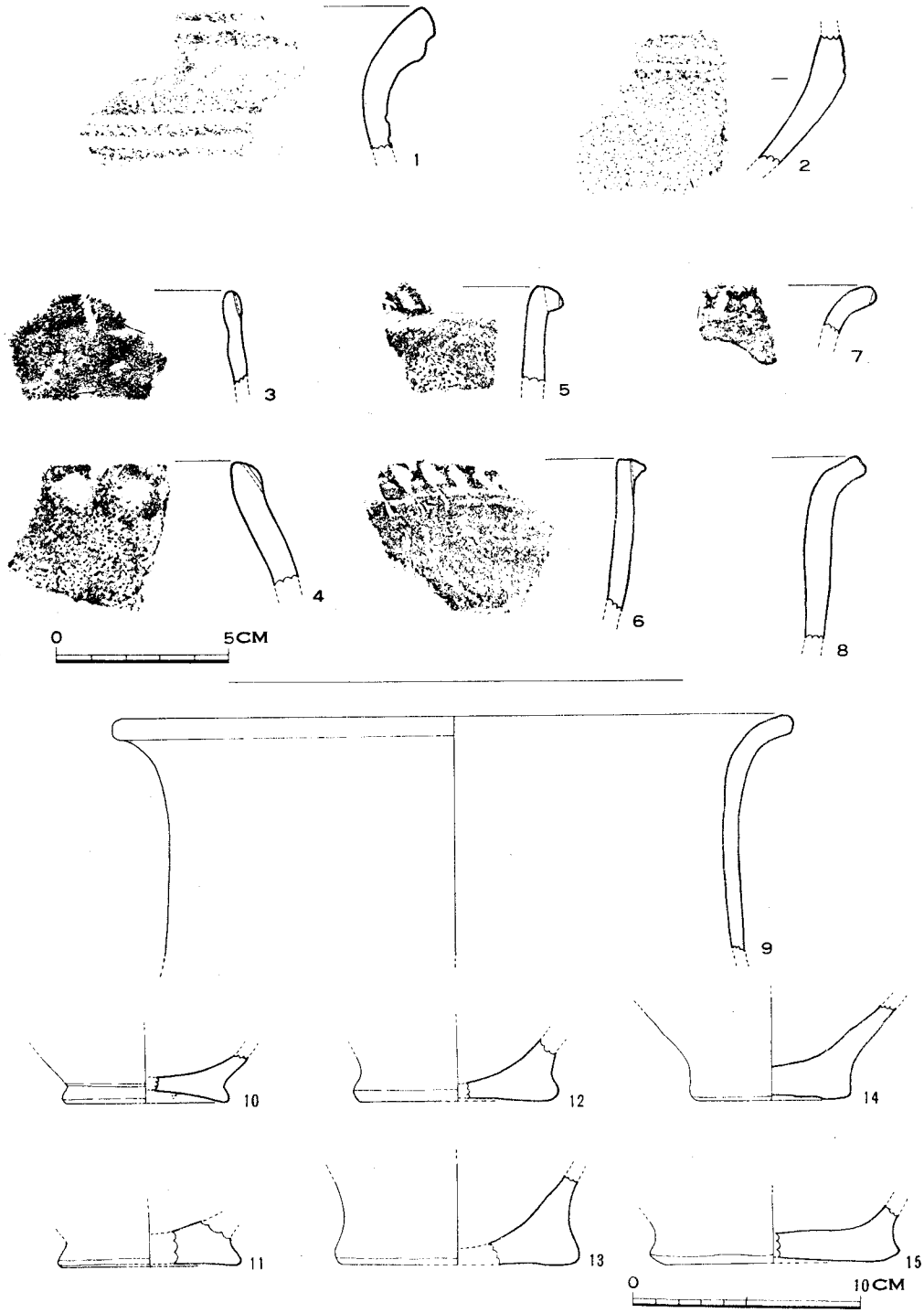
(1) 縄文時代後期・晩期（第23図1～6・9，PL．16）

1は頸部から大きく外反する口縁部片で，肥厚した口縁部に縄文を施し，口縁に沿って一条の沈線文がめぐる。頸部には二条の沈線文がめぐり縄文を施す。内外とも暗褐色を呈し，器面は磨消している。全形は4つの波状口縁をなす深鉢形の磨消縄文土器である。2は精製浅鉢の胴部片で，肩に二条の沈線文がめぐる。暗褐色で砂粒を多く含む。まわりは磨滅して丸くなっている。 1はJ—10f地点上部砂層出土で後期前半， 2はJ—10a地点砂層出土で後期後半（三万田式土器）のものである。

3～6は夜臼式土器と考えられる甕形土器の口辺部であるが，いずれも磨滅し小片となっている。3，4は刻目凸帯が口縁端より下がるもので，3の刻目は鋭く，口縁内面が凹状となり器壁も薄いという特徴をもっている。4の凸帯部は刻目というよりもむしろ指頭などで押圧したようである。 5，6は刻目凸帯が口縁と同高のもので， 5は右下がりの刻目が施されている。6も同じような刻目があるが篦状のものでかなり鋭利につけられている。これら3～6の土器はJ—10aの同一地点の砂層より出土したもので，6はC杭列より出土している。9は口径30cmのかなり大型の壺口辺部で，直立ぎみの頸部にやや肥厚ぎみの口縁がつき，丸くおさめている。調整痕は磨滅のため不鮮明であるが内外面ともに丁寧なナデ調整が加えられているようである。胴部より下部が失われているので時期を決定することは困難であるが，頸部が直線的に内傾せず，口縁との境も明瞭でないことから夜臼式土器と考えた。内外面とも淡茶褐色を呈しており丹塗りの痕跡は認められない。J—10aの砂層より出土している。

(2) 弥生時代前期（第23図7・8・10～15，PL．16・17）

甕形土器　7は小さく外彎する口縁に浅い刻目があり，外面は縦の刷毛目後に横ナデを加えている。8の口縁には刻目はなく凹状をなしており，器壁の調整は内面が右下がりのナデ，外面は縦のナデで煤が付着している。7はJ—10f地点上部砂層より出土し，8はJ—10a地点砂層より出土している。これらの時期は7が前期前半，8が前期後半と考えられる。



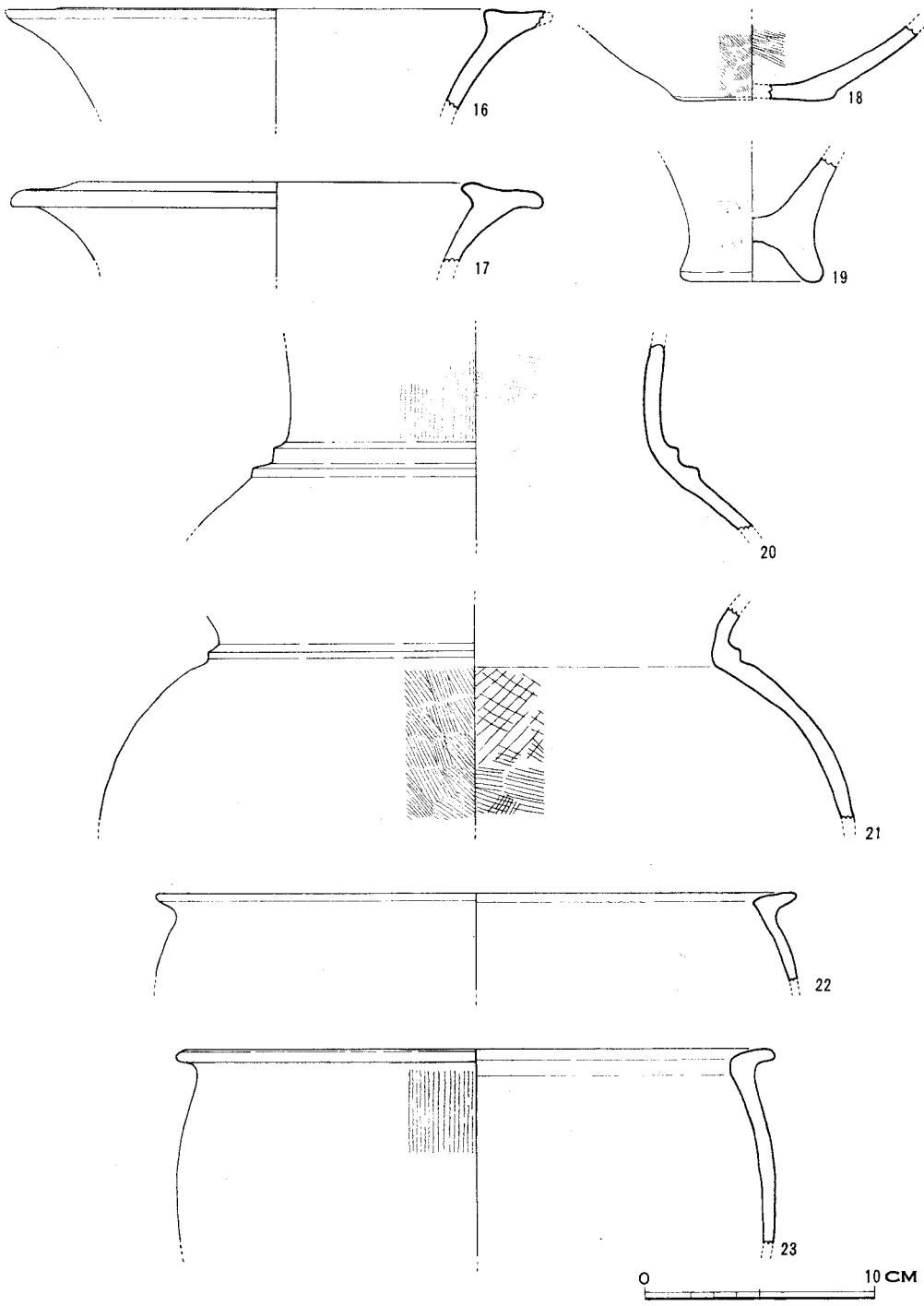
第23図　土器実測図—1（縮尺1/2・1/3）

底　部　10，11，13，14はJ－10a地点出土で15は同地点C列より出土，12はJ－10f地点より出土した底部である。10は，上げ底で端部は外側へ突出しており，胴部へとつながる。11は10が薄めの器壁をなすのに対し，かなりぶ厚いつくりをなしやや上げ底ぎみであるが，端部は同じような特徴を持つ。12，13ともにわずかに上げ底で端部の突出は小さく丸みがある。14は壺形土器の底部で内面にナデ調整が加えられており底部端の突出は認められない。15も内面にナデ調整が見られるが，全体的に粗雑なつくりをなす。上げ底で底部端の突出する10，11は夜臼式土器，突出部がなく円盤貼付状の14，15は弥生時代前期，12，13はその中間に位置づけることができよう。いずれも磨滅はげしく砂粒が露出している。

(3)　弥生時代中期（第24図16～第25図27，PL．17）

壺形土器　16，17は広口壺の口辺部で，J－10a地点の砂層より出土しており著しく磨滅している。16は朝顔状に開く頸部に，いわゆる鋤先状の口縁がつく。口縁の上面はやや凹状をなしており，内面への突出は小さく丸みをおびる。17も同じような形態で口縁上面が凹状をなすなど類似する特徴を持つが，内面への突出大きく，口縁端はやや下がりぎみとなる。口径約23cmを測る。20，21は口辺部と胴部下半部を欠く。20は頸部の粘土接合部より割れているが，16，17のような口辺部がつくのであろう。頸部と胴部の境には2条の断面三角形の貼付凸帯がめぐっている。この部の内面には指頭大の押圧痕が認められる。頸部は内外面とも刷毛目調整がなされている。20も頸部と胴部の境に貼付凸帯がめぐり，頸部は大きく外彎しながらのびている。胴部は内外面ともに刷毛目調整が施されており，外面は右下がり，内面は互いに斜交する粗い刷毛目である。貼付凸帯部での径は，20が18cm，21が23cmである。18は底径6cmを測る壺形土器の底部で，胴部でゆるやかに内彎しながら大きく開いている。外面は細かい刷毛目調整で，内面は左上がりの細かな篦磨きを加えている。18，20，21ともにJ－10a地点砂層からの出土で同じように磨滅を受けている。

甕形土器　19，25はJ－10f地点上部砂層，22，24，26はJ－10a地点砂層出土で，23はJ－10a地点C列より出土した。いずれも磨滅を受けた小破片で，口径はすべて復元値である。22は口径28cmで内傾する口縁端は丸みをおび，内側は横ナデによりかなり鋭くなっており，最大径は胴部上位部にある。23は口径26cmで，口径と胴部最大径がほぼ等しい器形をなしている。胴部外面は縦刷毛目の後にナデて消しており，内面は右上がりのナデで調整している。24は口径25.4cmで逆L字形の口縁をもつ。口縁上面は，横ナデでやや凹状をなす部もあるが平坦面をなすと言ってよく，両端とも丸みをもつ。口縁下の凸帯は磨滅しているために不鮮明であるが，貼付の口唇状断面をなすのであろう。口縁より内面は横ナデ調整の痕跡が認められるが，丹塗りの痕跡は残存部にはない。25は口径32cm，24と同じような特徴を持つ口縁であるが内側への突出が鋭い。割れ口は磨滅しているが内外面ともに横ナデの調整痕がよく観察でき



第24図　土器実測図―２（縮尺１／３）

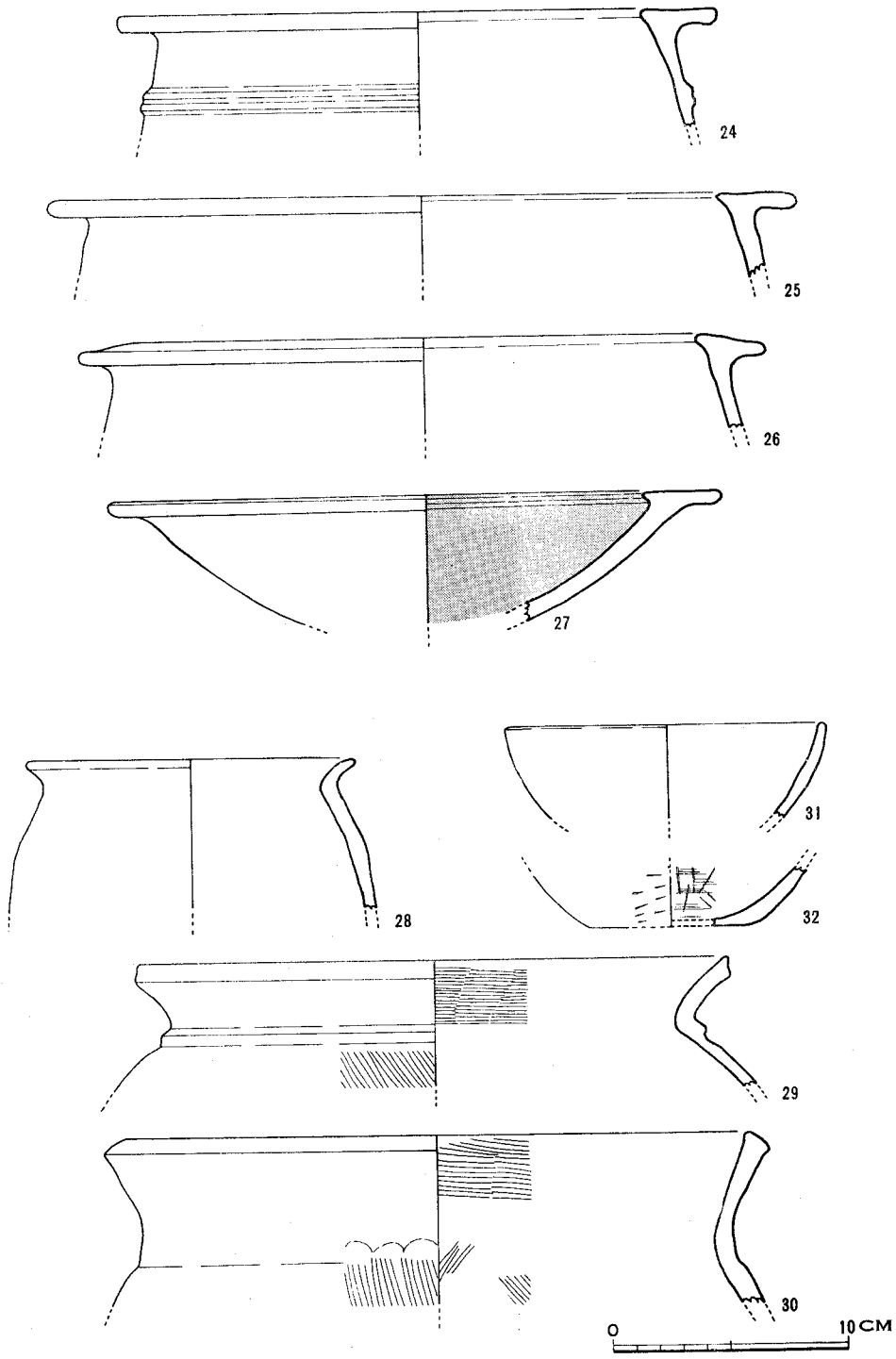
る。破片のため24と同じような口縁下に貼付凸帯をめぐらしていたかは不明である。26は口径29.2cm，口縁上面は，横ナデ調整のため中央部がわずかに凸状をなしており，24，25のように水平ではなく口縁外側が下がっており外傾する口縁をなす。内側の突出は丸みがあるがわりに大きく，逆L字形よりもT字形に近い形状を呈している。19は中期前半の特徴的な底部で底径6.4cmを測る。上げ底の深さは1.8cmあり，胴部とのくびれ部は極端でなくゆるやかに胴部へつながっている。調整痕は磨滅のために不鮮明だが，くびれ部にわずかに指圧痕が見られる。

高杯形土器　27は口径25cmの高杯の杯部で脚部を欠失する。口縁上面は，ほぼ平坦面をなし，内側に小さく突出する。この部分に丹塗り痕が認められ，現在は磨滅のため砂粒が露出しているものの内外面ともに丹が塗布されていたものであろう。J—10a地点A列より出土した。

(4)　弥生時代後期（第25図28～第26図36，PL．18）

甕形土器　28はくの字形に外彎する短い口縁部をもち，端部を丸くおさめる。体部は肩が張らず，ゆるやかにカーブする。口縁部は内外面ともに横ナデ，体部はナデ調整を施す。胎土の石粒は少なく，焼成は普通，器面は茶褐色を呈す。復元口径14.0cm。29はくの字形に外彎する口縁部直下に断面三角形の貼り付け突帯を施す甕形土器で，口縁端部はやや凹み，体部は肩が大きく張る。口縁部外面は横ナデ，内両は横方向の刷毛目を施し，体部外面は刷毛目の後を横ナデ，内面はナデ調整している。胎土，焼成ともに普通で，内外面ともに暗褐色を呈する。口辺部全体の3分2を欠き，復元口径25.0cm。30は，くの字形に外反する口縁部から体部にかけての破片であるが，29に比べて口縁部が長く，屈曲はあまり大きくない。口縁部下位は薄く上端部にかけて肥厚する。口縁部外面は横ナデ，内面は横方向の刷毛目を施し体部外面は縦方向の粗い刷毛目，内面も部分的に刷毛目調整の痕跡を残す。胎土，焼成ともに普通であり，器面は茶褐色を呈す。復元口径28.4cm。28～30はいずれもJ—10f地点上部砂層より出土し，28，89は後期初頭～前半，30は後期後半代に位置づけられよう。34はJ—10a地点の砂層より出土し，復元口径46.0cmを測る大形の甕形土器の破片である。口縁部はやや内彎気味に長く立ち上がり，くの字形に屈曲して体部につづくが，外反度は小さく，体部の開きも小さい。口縁上端部は平坦面を有し，口縁部と体部との接合部には貼り付けの刻目突帯をめぐらしている。口縁部外面は横方向の叩きを縦方向の粗い刷毛目で消し，内面は斜めの粗い刷毛目調整を施す。体部外面も叩きの上から刷毛目を施し，内面は刷毛目調整である。また，口縁部上端面には櫛状施文具による連続刺突文を配している。胎土に粗い石粒を含み，焼成は普通で，器面は明褐色を呈する。弥生時代終末期のものであろう。

壺形土器　32は底部の破片で，薄い器肉の底から丸底気味に胴部に立ち上がる。外面は箆による調整痕を残し，内面は横方向の刷毛目の上から上下の箆による調整を施している。石粒を多く含み，焼成は普通，色調は茶褐色を呈する。33は大形の壺形土器の口辺部の破片あり，復



第25図　土器実測図―３（縮尺１／３）

元口径46.5cmを測る。頸部から朝顔形に開きながらのび，口縁部でいったん段をつくって立ち上がり，端部は内傾気味に平坦面をつくっている。口縁端部外面は中央部を凹ませ，上下で刻目をめぐらしており，内面は明瞭に段をなす。頸部外面は上位に横方向の粗い刷毛目，下位には細かい刷毛目を交互に施し，内面では上位に縦方向の刷毛目，下位は外面と同様である。また，口縁部上端面には粗い刷毛目を施している。胎土に粗い石粒を含み，焼成は不良であり，器面は暗い赤褐色を呈する。いずれもJ—10a地点の砂層から出土。終末期に位置づけられる

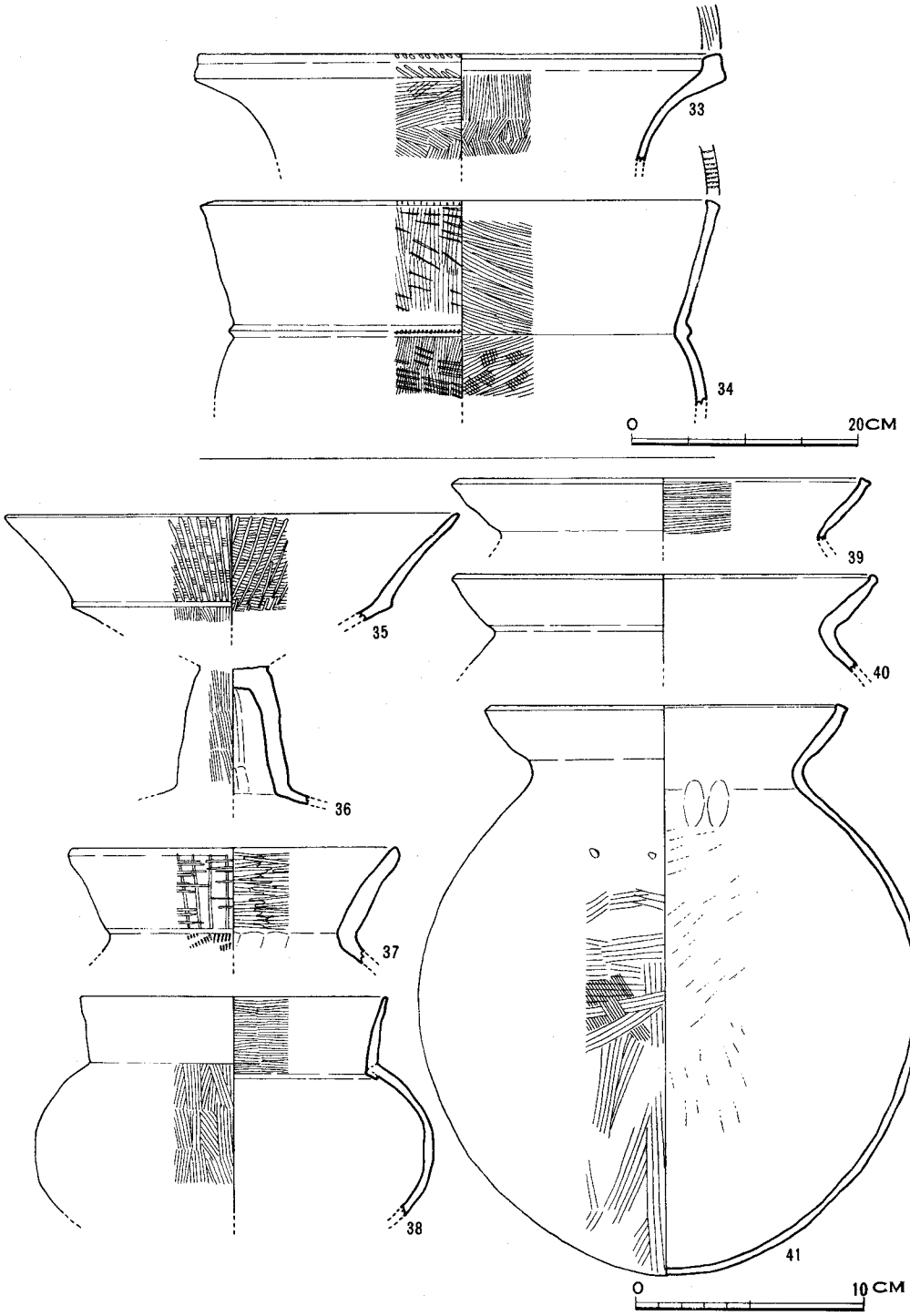
鉢形土器　31はJ—10f上部砂層より出土し，復元口径13.0cmを測る。底部から内彎気味にカーブしてのび，そのまま口縁部を丸くおさめる。内外面ともに上位は横ナデ，下位はナデ調整である。疑問が残るが終末期に位置づけられよう。

(5)　古墳時代土師式土器（第26図，PL．19）

甕形土器　37は復元口径14.2cmを測る口縁部の破片である。くの字形に外反してのびる口縁部は器肉が厚く，端部は丸くおさめている。外面は縦方向の篦による凹線の上に，横方向の篦研磨によって暗文をなし，内面は横方向の篦研磨を施す。体部外面は櫛による押圧，内面は篦削りが認められる。胎土は精良であるが焼成は不良，色調は灰褐色を呈す。J—10f地点砂層出土で，前期に位置づけられよう。39～41はくの字形に外反する口縁部がやや内彎気味に開き，口縁内端部をはね出す特徴をもつもので，布留式の範疇に属するものである。39は口縁部のみの破片で，外面は横ナデ調整，内面は横方向の細かい刷毛目を施す。胎土に細かい石粒を含み，焼成は普通，色調は灰褐色を呈する。復元口径17.5cm。40は口縁部から体部にかけての破片で，39に比べ口縁部の肥厚が大きい。口縁部内外面とも横ナデ調整，体部は外面に刷毛目，内面は篦削りを施す。41は全体を復元でき，口径16cm，器高25cmを測る。口縁部の特徴は39に類似し，体部との境のくびれが著しい。体部の器肉は薄く，球形の胴部から丸く底部に続く。口縁部は横ナデ調整，体部外面は刷毛目，内面は胴部に篦削りを施す。胎土に細かい石粒を含み，焼成は普通，色調は灰褐色を呈す。これらはいずれもJ—10a地点砂層より出土し，5世紀前半代に位置づけられよう。

壺形土器　38はやや外彎気味に口縁部がのびる直口丸底壺の破片で，復元口径13.4cmを測る。口縁部との接合部内面に折り返し痕を残す。調整は口縁部外面は横ナデ，内面は横方向の刷毛目を施し，体部外面は縦方向の刷毛目，内面は部分的に篦による調整痕を残す。胎土，焼成ともに良好で赤褐色を呈す。J—10a地点砂層出土。

高杯形土器　35は坏部の破片で復元口径19.8cmを測る。底部との接合部に鈍い段をつくって外彎して開き口縁部をおさめる。内外面ともに横方向の刷毛目に縦方向の篦による凹線を施す。胎土，焼成ともに良好で赤褐色を呈する。J—10a地点砂層出土。前期に位置づけられよう。36は脚部の破片で，脚が短かく裾部は屈曲して開く。5世期後半以降に位置づけられよう。J—10a地点上部砂層出土であるが，一点のみで上から混入したものであろう。



第26図　土器実測図―４（縮尺１/６・１/３）

2　石器（第27図，ＰＬ．20）

石器は，いずれもＪ—10ａ地点・Ｊ—10ｆ地点から出土したものである。これらの石器の稜は，ローリングを受け磨滅が著しい。石器の形態・技術等から見ると縄文時代の特徴を持つものもあるが，いずれも砂層の中から出土し二次堆積と考えられるものであり本来の包含状態・共伴の資料などは明らかでない。

1は黒曜石製の小石核である。裏面の打撃方向は打面からである。裏面あるいは側面の剝離終了後に表面の剝離を行ない，上位打面からの剝片の剝離に困難を生じ下位の平坦な自然面を打面とし剝片を剝取している。一定の法則性をもった石核である。

2は黒曜石製の半円錐形の石核である。甲板の部分は平坦な自然面よりなり，側面にも一部自然面を残している。全ての剝離面は甲板の方向を打面としている。フルーティングは短く，しかも整っていないため細石刃の利用は考え難い。一般に細石核と呼ばれるものに形態の類似は求められるが，従来の細石核とは異なった特徴を持つ石核である。

3は黒曜石の残核である。裏面は下位の平坦な自然面より剝離が行なわれ剝離面にステップフレーキングが生じたことによって剝離を終了している。次に右側面を打面となる上位から調整，その後表面へと剝離工程を移している。表面では上位の自然面を打面とし剝離がなされている。このように上・下位からと一定の法則性を持った剝離がなされていた石核であると考えられる。

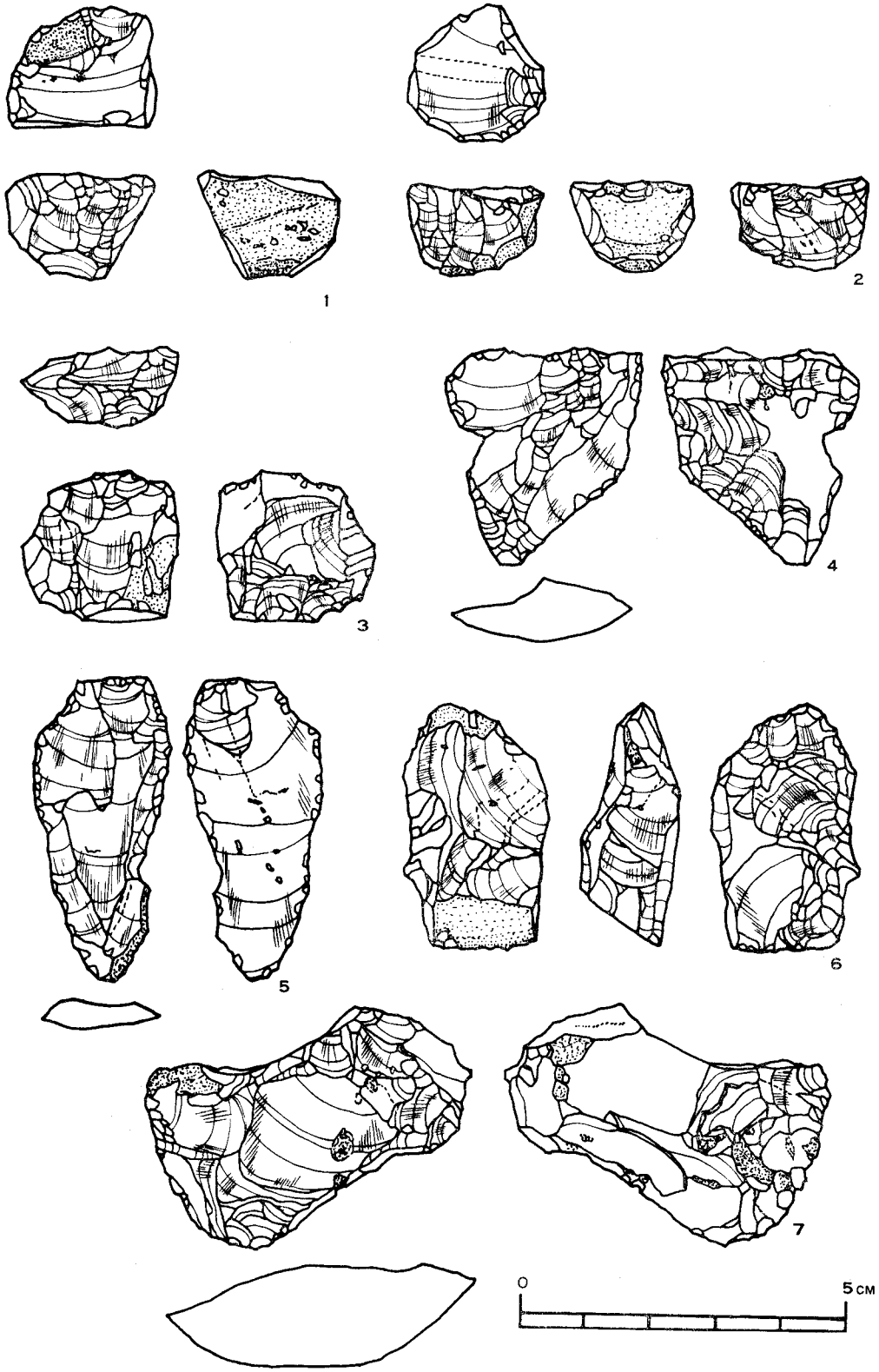
4は黒曜石の不定型な剝片を利用したサイド・スクレイパーである。主要剝離面の側辺部は大まかな連続的剝離によって調整され，素材である剝片の半分近く剝取して刃部が形成されているためバルブはわずかしか観察できない。もう一方の側辺部は調整のため不規則な小さい剝離が見られる。主要剝離面と背面は上・横位の一定方向からの大きな剝離面よりなる。側辺部には，部分的に細部剝離がされている。

5は打撃方向が一定している黒曜石の縦長剝片を素材とした二次加工石器である。一部に自然面をもち背面の右側辺部中位に細かな剝離と左側辺部に使用痕的細部剝離が見られる。

6は石核再生剝片を利用した黒曜石製のサイド・スクレイパーである。主要剝離面，側面には二方向による一定の法則性を持った剝離がなされている。その後に主要剝離面の側辺部を小さな剝離で調整し刃部を形成しサイド・スクレイパーとして使用したと考えられる。

7は黒曜石の角礫を使用した不定型な石核である。剝片剝取は片面のみで上・下・横位の三方向から剝片が剝取されているが，主要な剝離方向はもたず法則性のない石核である。打面は自然面を利用し，裏面は自然面である。

1・3・4・5・6はＪ—10ａ地点出土で，2・7はＪ—10ｆ地点出土である。



第27図　石器実測図（縮尺１／１）

3 木 器

J—10a・10f地点出土木製品には立杭・横木以外に木器・杭・建築部材・加工小片・自然流木などがある。J—10a地点で取り上げた245点のうち立杭を除いた148点を，J—10f地点では取り上げた370点のうち立杭・横木を除いた125点を流木群として取り上げた。その内訳は下のとおりである。このうち加工小片・自然流木を除いた木器・杭・建築部材について説明する。加工小片はPL．40にしめしたような長さ15cm以下の加工痕のある小片である。

出土地点	木　器	杭	建築部材	加工小片	自然流木	計
J—10a	9	85	5	4	54	148
J—10f	6	50	4	1	65	125

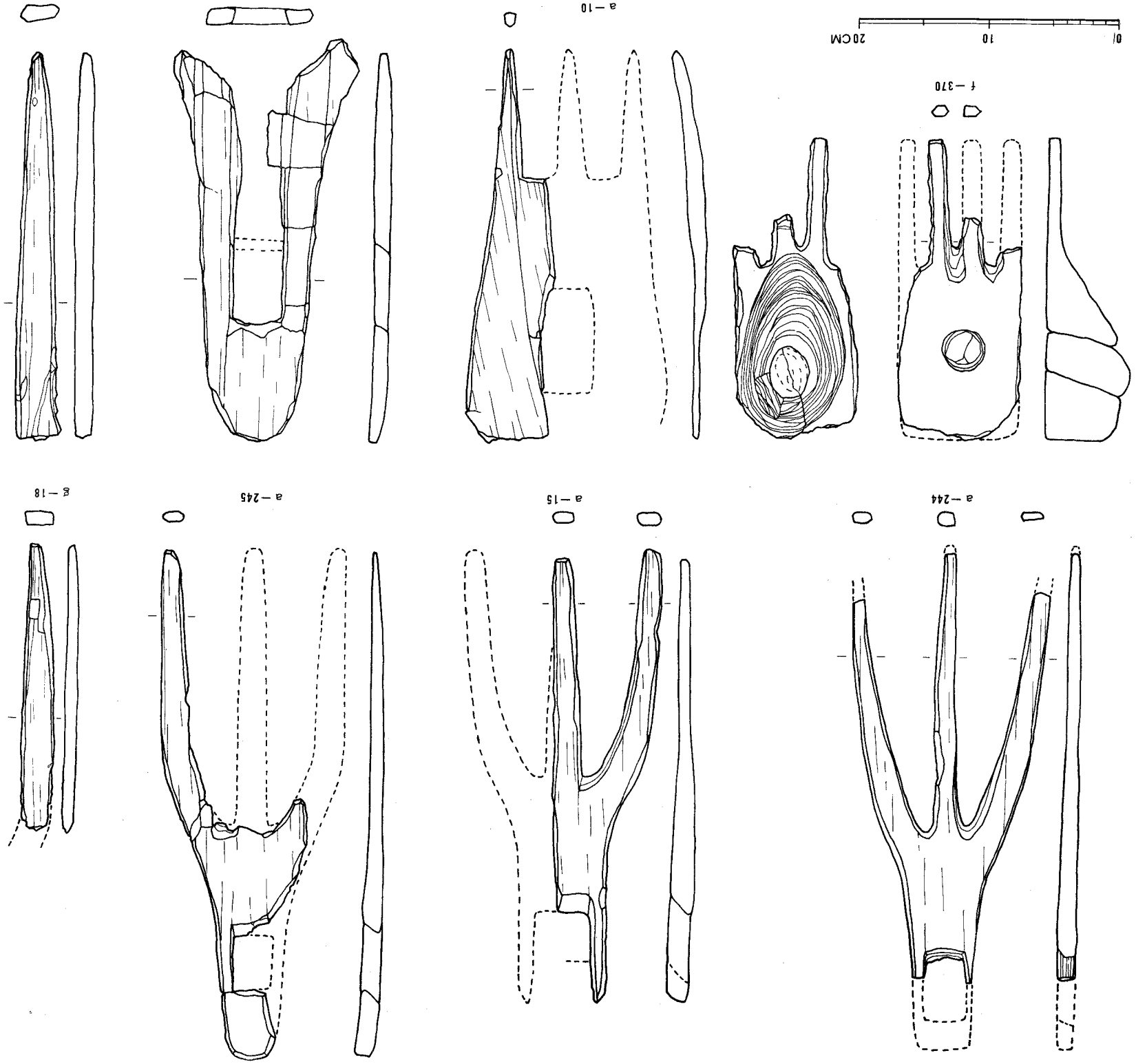
木器としたものは15点あるが，用途別に農具・容器・網枠・用途不明のものに分けた。

(1) 農　具（第28図，PL．21）

J—10a地点の5点のうち123はA列付近の流木と，他は中央部の流木群とともに出土し，J—10f地点の250はA列南側の杭の近くから，370はA列西北端の西より出土したもので，いずれも流れ込みによる二次堆積と思われるものである。7点のうち5点は三又鍬，1点は四又鍬，他は三又鍬の刃部の一部である。

a—244は現長33.1cmで頭部，刃先の一部を欠く。復元長は約38.6cmと思われる。頂部を欠くが柄孔は幅3.4cmで長方形と思われる。柄孔付近は幅4.6cm，厚さ1.4cm，孔の傾斜は42°である。刃部の最大幅は14.8cmを測る。a—15は縦に割れて半分しか残っていない。現長34.6cm，柄孔は約3.5×5.0cmの長方形と推定される。柄孔の傾斜角は40°で柄孔から肩にかけては厚さ1.9cm，刃先は1.0cmの厚さとなっている。a—245は刃部と頭部の一部を欠くが全長が知れる。全長38.6cmで頂部は丸くなる。柄孔は3.5×5.0cmの長方形を呈し，柄孔の傾斜角は48°，厚さは1.5cmである。a—123は刃部の欠失した現長31.1cmの三又鍬である。頂部が丸く，柄孔に幅4.0cm，長さ約5.7cmの長方形で傾斜角は54°を測る。柄孔付近の幅は8.0cm，厚さ1.1cmである。形態の類似するa—245は肩が全長のほぼ中心であることから推定すると復元長は60cmを越えると思われる大形品である。

f—250は現長29.5cm最大幅3.5cm，厚さ1.5cmで，三又鍬の刃部と考えられるものである。a—10は現長30.2cmを測る。刃部の残りが良いのに対し，頭部は乾燥でひずんでいる。残り具合から頂部は丸みを持ち，柄孔は長方形を呈する三又鍬と推定した。長さ9.9cmの刃部に対し



第28図　木器実測図－1（縮尺1／4）

頭部に最大幅があり，長さ20cm以上と大きい点に特徴があり，他とは形態を異にする。f—370は頂部と刃部の一部を欠くが全長23.0cmを測る。頭部13.0cmに対し刃部が10.0cmと小さく頭部の幅は9.3cmである。頂部から8.0cmまでは厚さ5.8cmと頭部裏側の舟形突起が部厚くつくられ，これから刃部にかけて細く尖らせている。刃部は四又に分れる。柄を着装した傾斜角度は70°と鋭角で，柄は鏃身に挿入したままの状態であるが，長さ6.0cmで折れている。下部砂層出土。

以上7点のうち6点が三又鏃（1点は刃部のみ），1点は四又鏃であるが，三又鏃は形態により二つに分類することができる。一つは肩のはる三又鏃で肩が全長のほぼ中心に位置するものである。これにはa—15・244・245のように全長が40cm以下のものとa—123のように全長が60cmを超える大形品がある。f—250は刃部の長さが約30cmで，a—123と同類の大形品である。二つは刃部に対し頭部が2倍以上と長く大きいもので，a—10がこれである。乾燥によりひずみ全形は明らかでないが，f—370のように頭部が部厚くなるものであろう。柄孔はいずれも長方形を呈する。

四又鏃（f—370）の頭部は船形突起を部厚く作り出すもので，柄孔は円形をなす。船形突起をなす鏃は鹿部山遺跡から出土している。これは長さ24.5cm，最大幅11.5cmの平鏃（狭鏃）であるが，長さはf—370と同じくらいである。[註(1)]

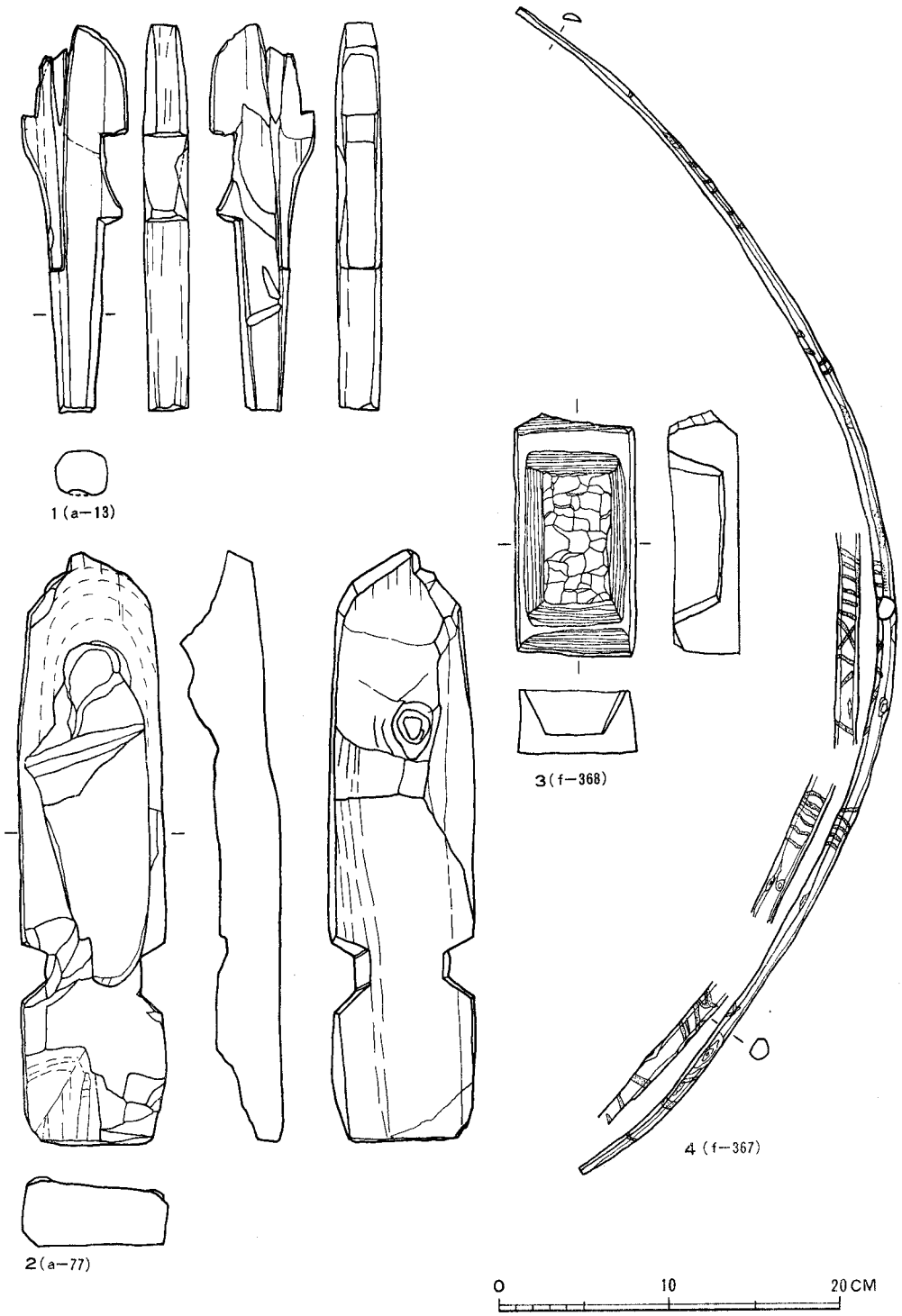
(2)　容　器（第29図3，PL．13・22）

全長14.3cm，最大幅7.1cmの長方形で，厚さ4.1cmを測る。中央に10.2×6.0cm，深さ3.0cm削り込みがある。削り込んだ下面は7.7×4.0cmである。周囲はていねいな削りがみられる。J—10f地点中央部の上部砂層から流木群とともに出土したもので，時期は不明。近くから網枠と思われるものも出土している。

(3)　網　枠（第29図4，PL．13・23）

断面は半円形を呈する丸木材で，長さ約72.0cmを測る。最大幅は中央部にあり，径は1.3cm両端部はわずかに細くなり，径1.0cmである。内面は削りを加えて半円状を呈するが，まわりもていねいに整形している。外面の数カ所に幅2.0mmほどの緊縛したあとが観察できる。用途は定かでないが，外面に緊縛した痕が残っているから，両端を曲げて網枠としたものであろう。J—10f地点中央部の砂層から出土たもので時期は不明。類似資料としては板付遺跡[註(2)]や里田原遺跡[註(3)]に出土例があるが，細部加工は異なる。板付遺跡の網枠は長さ147cm，径2.6～3.0cmを測り，里田原のものは長さ約145cm，径2.0～2.5cmで，本例は長さ・径とも小形である。

註(1)　九州大学考古学研究室『鹿部山遺跡』日本住宅公団　1973年
(2)　福岡市教育委員会『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976年
(3)　長崎県教育委員会『里田原遺跡展』　1975年



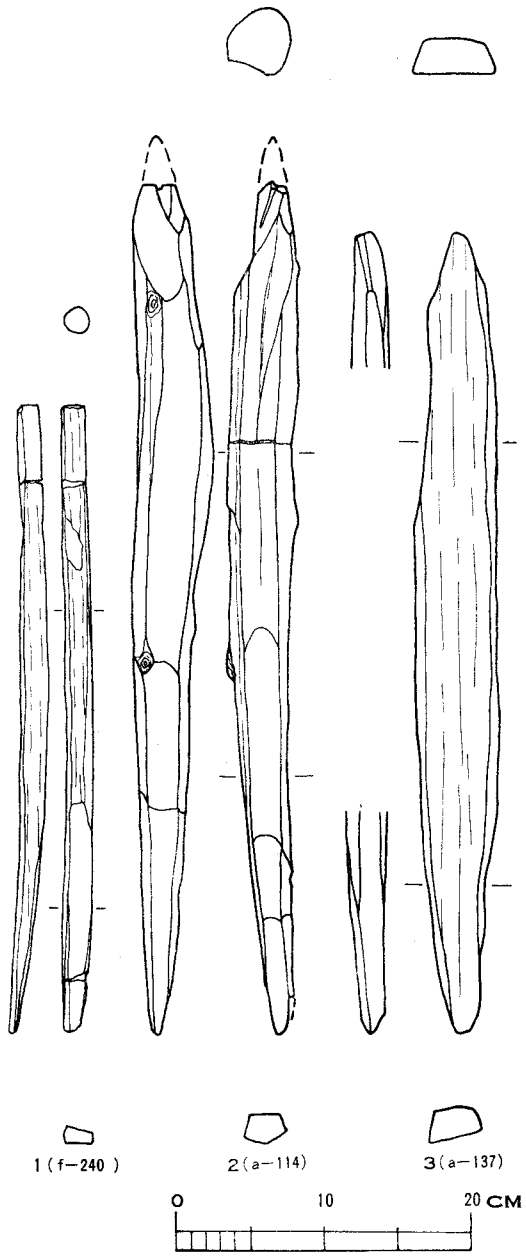
第29図　木器実測図—2（縮尺1／4）

(4)　用途不明木器（第29・30図，ＰＬ．24・25）

第29図１はＪ－10ａ地点の中央部南の流木群中含まれていたもので，現長22.7㎝を測る。頂部は丸みをもち幅3.6㎝，厚さ2.6㎝である。頂部から6.5㎝のところを1.5㎝欠きこみ，11.5㎝のところに幅1.0㎝の突起をつくり出す。一面は頂部から14.3㎝まで真直に削り，頂部近くに長さ4.6㎝，厚さ1.0㎝の楔状の小片をはさみ，その外側に長さ12.5㎝，最大幅 1.8㎝のつくり出しある加工材を合わせて中央に透しのある製品としている。先端を欠くがていねいに整形され，断面は丸味をもつ。第29図２は 全長34.6㎝の未製品で一部に樹皮面を残す。横断面は幅8.6×厚3.5㎝の長方形を呈し，下から10㎝のところに両側面より幅3.3～4.0㎝の欠きこみがある。Ｊ－10ａ地点砂層出土で，何の未製品か不明。

第30図１は全長38.0㎝で，径 1.8㎝に丸く削り，先端部は両面から削り，平らに仕上げている。

第30図２・３は両端が尖るもので，２は現長57.5㎝，中央部径5.0㎝である。３は全長54.3㎝で，中央部は最大幅5.5㎝厚さ2.5㎝と扁平で，両側面を削り，台形に整形している。２はＡ列の流木群より，３は北西側の微高地東端部の流木群中より出土した。Ｊ－10ａ地点Ｂ列の161・167（第14図）はともに上端を欠くが，第30図－３と類似しており，加工材を転用して杭としたものであろう。時期・用途とも不明であるが，湯納遺跡 第109図の木製串としたものに類似しており，下山門遺跡からも類似資料が出土している。



第30図　木器実測図－３（縮尺１／５）

4　杭（第31図，第6表，PL．38）

流木群を押流した砂層が一部でA・B・C列の杭列をこわし，そのあとに流木群中の農具・木器・杭・建築部材・自然流木などが堆積していることから，J—10a・J—10f地点流木群中の杭には2種類あると思われる。一つはA・B・C列の立杭が流失したもの，他は農具・木器・建築部材などとともに上流から押し流されて堆積したものである。しかし，発掘作業によってこれを区分することはできなかった。J—10f地点ではA・B列間に杭を横木としたものがある（P．48）ことから，流木群中の杭としたものには横木に相当するものが含まれている可能性もある。J—10a・J—10f地点流木群中の杭を一覧表にまとめると第6表のようになる。先が尖り杭と思われるもののうち形態分類できないもの及び両端を欠失し杭かどうか不明なものは除外し自然流木として扱った。

第6表　流木群の杭一覧表

地点	NO	杭の分類	法量 (cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
J—10a	1	①	64.0			5.0	×			
	4	③	38.0	8.0	2.5		×			
	5	①	109.2			8.5	×	第33図	PL. 28	建築部材か？
	7	①	75.0			3.5	×			焼けている
	11	③	84.5	5.5	3.0		×			
	12	①	25.5			2.5	×			
	16	②	53.5	5.0	3.0		×	第31図	PL. 38	
	17	①	145.0			4.0	×			
	19	①	107.0			4.0	×			建築部材か？
	20	①	26.0			3.5	×			
	21	②	63.5	4.5	3.0		×			
	22	②	26.0	3.5	3.0		×			
	25	①	168.0			6.0	○	第33図	PL. 28	建築部材か？
	27	①	118.0			5.5	×			建築部材か？
	28	①	115.0			5.0	×			建築部材か？
	29	①	149.0			6.0	○	第33図	PL. 28	建築部材か？
	30	①	298.0			8.0	○			建築部材か？
	31	①	111.0			7.0	○	第33図	PL. 28	建築部材か？
	32	①	45.5			5.0	×			
	33	①	86.0			5.5	○			
	34	①	73.5			5.0	○			
	35	②	36.0	7.5	6.5		×			
	38	③	24.5	7.0	1.5		×			焼けている
	39	①	118.0			5.0	×			建築部材か？
	40	①	38.5			5.5	×			
	45	①	90.0			5.5	○			
	47	②	115.5	5.5	3.5		×			
	49	①	104.0			5.0	○			
	50	①	114.0			6.0	○			建築部材か？
	51	②	70.0	4.0	3.5		×			
	53	①	63.5			5.0	○			焼け
	55	②	45.5	4.5	4.0		○	第31図	PL. 38	焼け
	56	①	121.0			4.0	○			建築部材か？
	57	①	150.0			5.0	○			建築部材か？

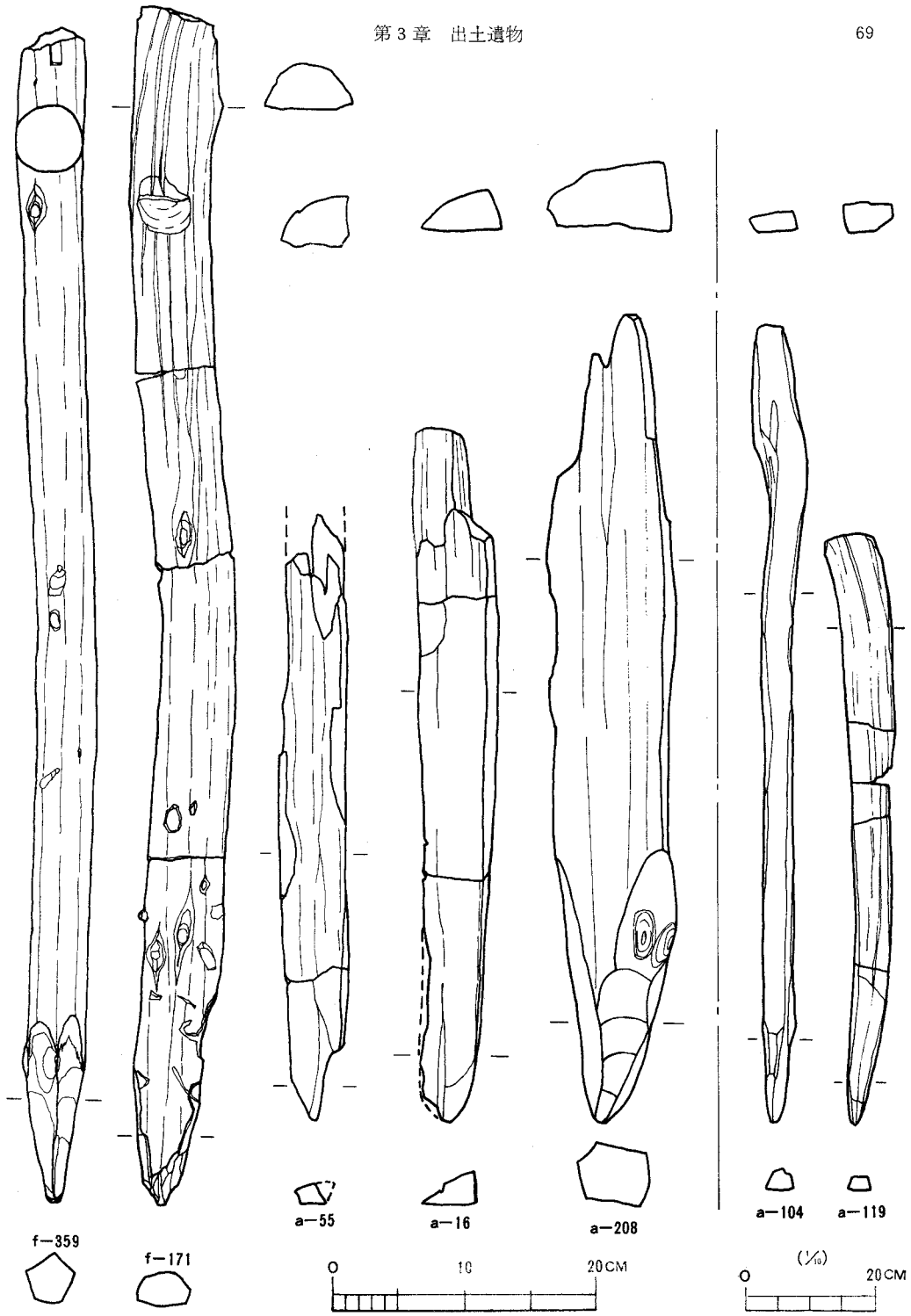
地　点	NO	杭の分類	法量 (cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備　考
J—10 a	59	③	11.0	7.5	2.0		×			
	62	①	108.5			6.0	×			
	63	①	23.5			3.0	×			先が太い
	64	①	79.5			2.5	×			
	66	①	83.0			5.5	×			
	73	①	132.0			5.5	×			建築部材か？
	74	①	80.0			5.0	×			
	75	③	10.0	6.5	1.5		×			矢板の先焼け
	76	③	19.5	4.0	2.5		×			先端のみ
	80	②	54.0	5.0	3.0		×			
	83	②	21.0	4.0	3.5		×			先端のみ焼け
	84	①	132.5			4.0	○			建築部材か？
	85	②	23.5	5.0	2.0		×			
	86	③	26.0	7.0	2.0		×			
	87	③	55.0	8.0	2.0		×			
	89	①	206.0			5.5	×			建築部材か？
	90	①	71.5			4.0	×			建築部材か？
	91	③	46.5	3.5	2.5		×			焼　け
	95	①	100.0			6.0	×			先が太い
	96	②	66.0	6.5	3.0		×			
	98	①	71.0			4.5	○			
	99	③	144.0	6.5	3.0		×			建築部材か？
	101	①	67.0			3.5	×			
	104	③	120.7	6.5	3.5		×	第31図	PL. 38	完　形
	108	①	71.5			3.0	×			
	110	①	65.0			4.5	×			
	112	①	34.0			3.0	×			
	115	①	60.0			4.0	×			
	118	②	37.0	4.0	2.5		×			焼　け
	119	③	83.0	7.5	4.5		×	第31図	PL. 38	完　形
	122	①	94.5			6.0	○			
	126	①	61.0			3.5	×			
	127	①	18.0			3.0	○			
	128	③	63.0	6.0	3.0		×			
	129	①	66.0			5.0	×			先が細い
	131	③	30.0	4.5	2.5		×			焼　け
	132	③	54.5	9.0	3.0		×			
	133	②	90.0	4.5	3.0		○			
	134	①	84.5			5.5	○			
	207	②	88.0	5.5	3.5		×			
	208	③	61.0	9.5	6.0		×	第31図	PL. 38	矢　板
	223	②	16.5	6.0	3.0		×			杭
	224	②	24.0	6.5	5.0		○			杭
	231	①	27.0			4.0	×			杭
J—10 f	14	②	41.5	3.5	3.0		×			
	30	②	51.0	7.0	5.0		×			
	34	②	17.0	4.0	3.5		×			
	36	①	69.0			6.0	×			
	41	①	17.0			3.0	×			
	51	③	20.0	10.0	3.0		×			焼けている
	102	②	21.0	5.0	2.0		×			
	122	③	13.5	14.5	2.0		×			
	155	③	38.5	4.5	4.0		×			
	160	①	51.5			4.5	×			
	161	①	27.5			4.0	×			焼けている
	166	①	53.5			3.5	×			
	167	①	29.5			3.5	×			焼けている
	169	②	63.5	6.5	3.0		×			
	170	②	74.0	5.0	4.0		×			
	171	②	90.0	6.5	3.0		×	第31図	PL. 38	
	172	②	81.5	5.0	3.0		×			
	173	①	45.0		2.0		○			

地点	NO	杭の分類	法量 (cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL.	備考
J—10 f	177	①	33.5			3.0	○			焼けている
	229	①	119.5			5.0	×	第33図	PL. 28	建築部材か？
	231	①	71.0			2.5	×			
	235	③	26.0	10.0	3.0		×			
	237	①	174.0			7.0	×			建築部材か？
	239	①	55.0			4.0	○			
	241	①	46.0			5.0	○			
	243	①	6.5			3.0	×			建築部材か？
	245	①	103.0			6.0	×			
	248	①	39.5			4.5	○			建築部材か？
	249	①	103.0			4.5	×			
	262	③	48.5	8.5	2.5		×			
	280	①	23.0			3.5	×			
	301	①	62.5			5.0	○			
	302	③	16.0	8.0	2.0		×			
	308	①	29.0			5.0	○			
	311	②	44.5	5.0	2.0		×			
	317	①	39.0			3.0	×			
	319	②	28.5	4.5	3.5		×			
	330	①	43.0			4.5	×			
	331	②	23.0	5.0	2.0		○			
	338	①	14.0			3.0	×			
	345	①	61.0			2.5	○			
	346	③	35.0	7.0	2.5		×			
	348	②	39.0	5.0	3.5		×			焼けている
	351	①	30.0			2.0	○			
	358	①	110.0			5.0	○			建築部材か？
	359	①	88.0			4.5	×	第31図	PL. 28	
	362	—	106.0			—	—			建築部材か？
	364	①	13.0			3.0	×			新しい立杭
	365	①	34.5			3.0	○			新しい立杭

J—10a地点では78点のうち建築部材かと思われる17点（ゴチック体）を除外すると①類（丸木杭）が30点，②類（割杭—1）が16点，③類（割杭—2）が15点である。J—10f地点では47点のうち建築部材かと思われる6点を除けば，①類が22点，②類12点，③類7点である。J—10a・J—10f地点を通じて①類は杭の径が2.0～6.0cmの範囲に，②類には断面形が半割したものから⅛より少に割ったものまであり，立杭②類の傾向と大差ない。③類では14.5cmと幅広い矢板がある。これら杭のうち7点を第31図に図示した。全長の知れる完形品が2点ある。ともに割杭でa—104は全長120.7cm，a—119は全長80.5cmである。立杭のうち最も長いのが103.5cm（a—187）であることから，杭のうち長いものはもとの長さが100～120cm程度であったと考えてよいであろう。

5　建築部材（第32・33図，第7表，PL. 26・27・28）

J—10a・10f地点の流木群の中には杭のほかに，建築部材と考えられるものが含まれている。建築部材としたものは先端を欠く2点（f—38・f—242）を除けば，いずれも先端が尖るもので，上端に欠き込みをもつ5点を第32図に，上端が二又に分かれる2点を第33にし，これら7点の計測値は第7表にまとめた。



第31図　流木群の杭実測図（縮尺１／５・１／10）

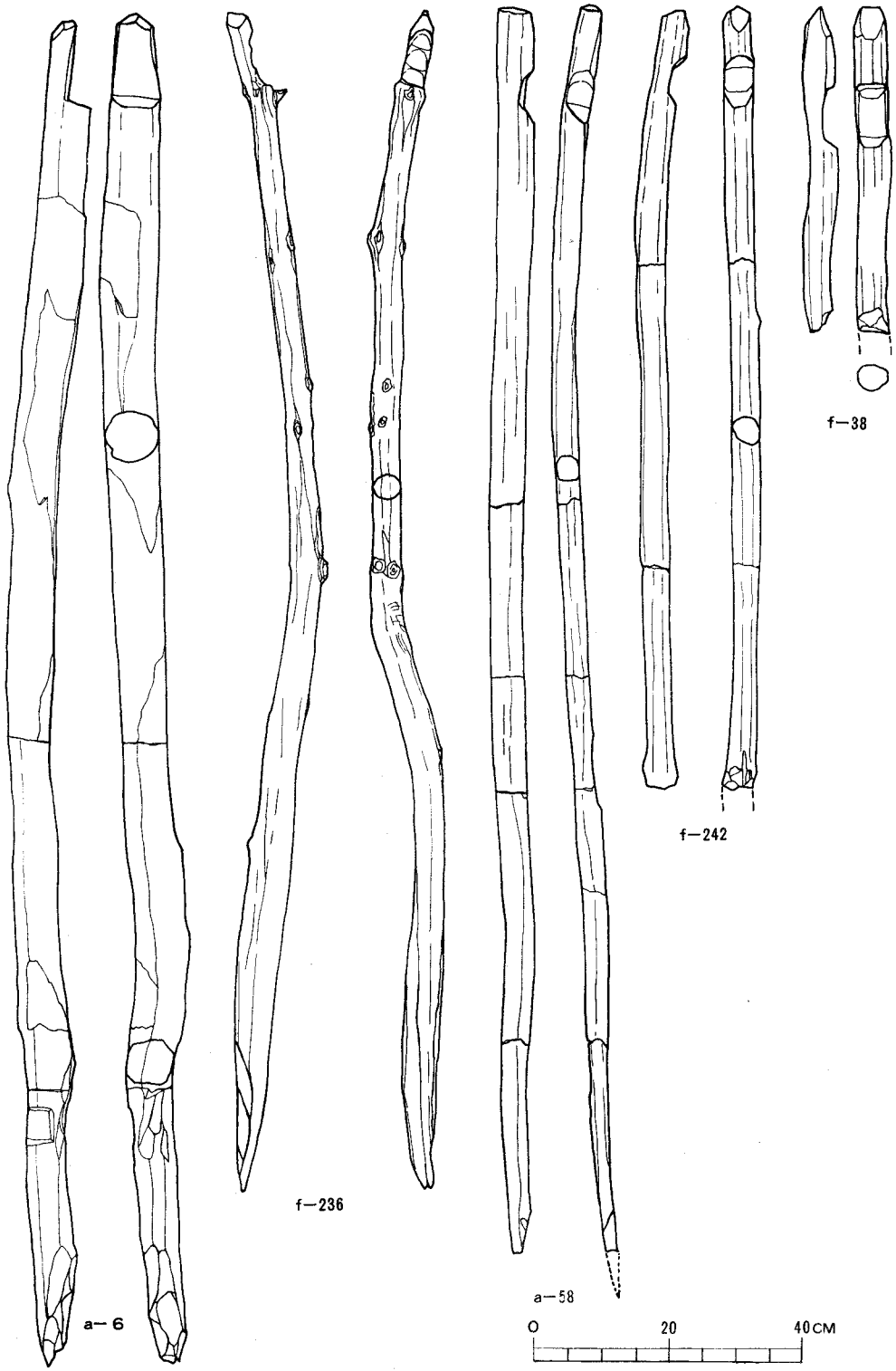
a－6は上端部に長さ11.0cmの平坦な欠き込み面をもつもので，直径8.5cmの真直に近い丸太材である。上端部は両側面から切断し，端を細く整形している。f－236・a－58・f－242・f－38は上端部近くに欠き込みをもつもので，a－58は半割した割材，他は丸太材である。f－236は枝の基部の上に長さ9.0cm，深さ2.0cm欠き込みをもつ。先端の方が太く直径6.5cm，上端近くは3.5cmと細い。a－58は割材で，先端の一部を欠くが復元長186.5cmを測る。f－242・f－38は上端を切断し，上端近くに欠き込みがある。先端を欠くがa－6・f－236・a－58が171.5～196.0cmとほぼ共通する長さをしめすので，これに近い長さに復元することができよう。上端が二又に分かれるものは2点（第33図）で，a－65は上端部が焼けており，二又の先をわずかに欠く。二又に分かれる2点は上端に欠き込みをもつ5点（第32図）より短い点で共通している。以上の7点はいずれも先端が尖り建築部材と思われるが，上端に欠き込みをもつ5点と二又に分かれる2点では長さにちがいがあることから前者と後者は使用部位が異なることをしめすものであろう。

第6表の流木群中の杭一覧表の中には上端を欠くが，建築部材と推定できるものがあり，これをゴチック体でしめした。建築部材と推定した根拠は，J－10a及び10f地点A～C列の立杭のうち最も長い杭が103.0cmであること，流木群中の杭の完形品の長さが83.0cmと120.7cmであることから，杭の長さが100～120cmを超えないと思われる。従って，100cm以上の比較的直径の大きい丸太材は建築部材の可能性が大きいと考えた。これら建築部材ではないかと推定した25点（第6表のゴチック体）のうち5点を第33図にしめした。a－5は真直な丸太材，他はかなり彎曲した丸太材で，a－29は全体が，a－25は上端が焼けている。

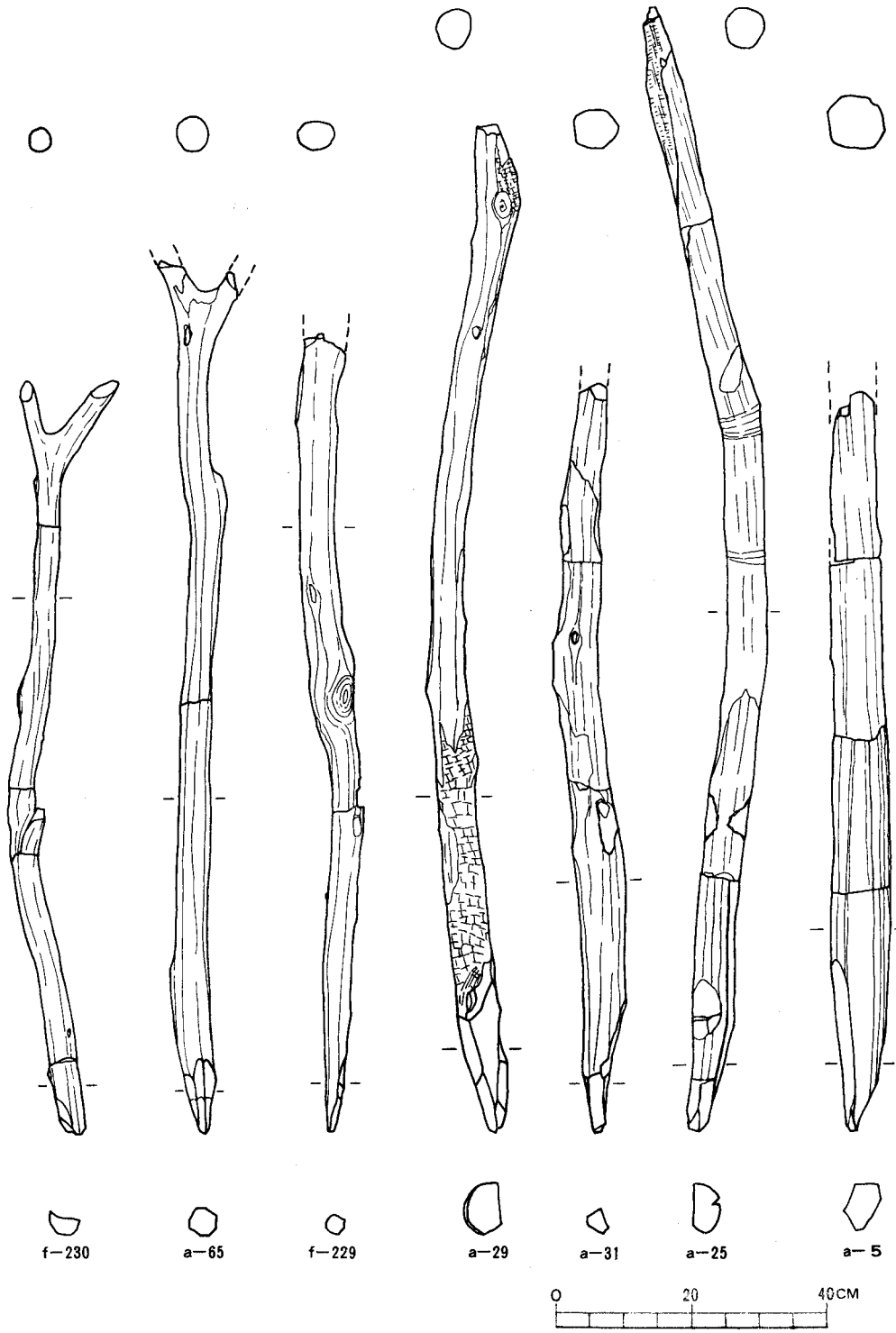
第7表　建築部材計測値一覧表

土地地点	法量（cm）		欠き込み部（cm）			備考	
	長さ	径	位置	長さ	深さ		
J－10a－6	196.0	8.5	上端部	11.0	4.0	完形	丸太材
J－10a－58	181.0	5.0×3.5	上端から 9.0	7.5	2.0	先端折れ（復元長186.5cm）	割材
J－10f－38	47.0	4.5	〃 11.0	9.0	2.0	先端折れ	丸太材
J－10f－236	171.5	5.0	〃 2.5	9.0	2.0	完形（枝のところを欠き込む）	丸太材
J－10f－242	114.0	4.5	〃 6.0	7.5	2.0	先端折れ	丸太材
J－10a－65	129.0	4.5	上端が焼けている			上端が二又に分かれる	
J－10f－230	112.0	4.0				同上	

（先端を欠くf－38，f－242以外はいずれも先端が尖る。）



第32図　建築部材実測図―１（縮尺１/10）



第33図　建築部材実測図－2（縮尺1/10）

第 4 章　四箇J—10区出土建築用部材への一理解

山本輝雄（九州大学）

（昭和51年12月13日，四箇J—10a・10f地点から出土した木材のうち，建築用部材ではないかとして7本が示された。この7本について，建築歴史学の立場から，類例を拾って私考してみる。）

1　はじめに

原始家屋の実態解明に必要な出土建築用部材の報告は，増えつつあるので，類例が集積される過程の中で，建築歴史学上の疑問点解決のための暗示が与えられる日が必ず来ることを切望している。それだけに一片の出土木材でも建築用部材と分れば，私にとっては，重要なのである。

2　建築用部材の分類

出土木材の中には，「山木遺跡」[註(1)]の高床式倉庫における柱・羽返し・梯子や「湯納遺跡」[註(2)]の棟木[註(3)]のように，今日に遺る家屋史料より推して，使用部位の判明する建築用部材もあるが，その殆んどは明確さを欠く。

それら明確さを欠くものの中には，「湯納遺跡」の≪①，整形された木材≫のように，その使用位置については明言できないとしても，建築用部材であることに異論はないものもある。

また，整形材ではなくとも，出土丸太材の中には，端部に造り出し，欠き込みや枘状のもの等をもつものがあり，これらは出土状態，太さと長さおよび工作のあり方等から，建築用部材であることは間違いないと考えられるものがある。

このような丸太の建築用部材の実相をよく見ることのできた「鶴町遺跡」[註(4)]は，当四箇遺跡のすぐ近くにある。

当遺跡出土の7本の木材も，この「鶴町遺跡」出土の建築用部材の分類の中に該当させることができる。

以下のごとくである。

a）材端近くに側壁が傾斜している浅い欠き込みをもつもの（『鶴町遺跡』の76pの(ハ)—(iii)，

B－15に分類）

- 1－58
- 6－38
- 6－242

b）材端近くに欠き込みをもち，その側壁の一方が垂直で一方が彎曲するもの（『鶴町遺跡』の78pの(ハ)—(vii)，B－13に分類）

- 6－236

c）一端が柄状になっているもの（『鶴町遺跡』の74Pの(イ)—（ii）B－8に分類）

- 1－6

d）一端が又木状になっているもの（『鶴町遺跡』の74pの(イ)—(ｉ)，B－7に分類）

- 1－65
- 6－230

註(1)『伊豆/山木遺跡』（後藤守一編，昭和37年9月，築地書館発行）中の「第十建築用材」（関野克，伊藤要太郎）

(2)『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集——福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査——』（昭和51年3月，福岡県教育委員会発行）中の「第3－3建築部材」（拙稿）

(3)「5c前半の棟木について——福岡市西区湯納遺跡出土建築用部材より——」（昭和50年10月，日本建築学会大会学術講演梗概集，拙稿）

(4)『鶴町遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集，昭和51年11月，福岡市教育委員会発行）中の「第Ⅸ章福岡市鶴町遺跡出土の建築用部材に見られる原始家屋の建築技法について」（拙稿）

3　材端部の工作について

上記の分類について，類例を集めて，記述する。

a）1－58，6－38，6－242のもつ欠き込み形態は，丸太材には多用されており，[註(5)]丸太材同志の組合わせ用の欠き込みと考えるが，他にも利用されるのかも知れない。[註(6)]

b）6－236の欠き込みは[註(7)]美しい円孤面はもたないが，小枝をわずかに突出させて残し，ここに材軸と直角な面を作っており，「鶴町遺跡」のB－13に分類した。この欠き込み形態は当四箇遺跡D地点出土の055にも見られる。ただし055は不整形断面の角材である。この欠き込みは「山木遺跡」で断定できた高床式倉庫の柱の上端近くにあるものであり，欠き込みの用い方も考え易いのであるが，いまひとつ明確さを欠く。

c）1－6のように，枘状のものが片側に偏して存する木材は，周辺遺跡からも出土しているが，[註(8)]その枘様のものを差し込んで合う枘穴は見つかっていない。

d）1－65・6－230 のような又木が，支柱として使用されている家屋例は，今日も見られる。

註(5)　類例は以下に見られる。

- 「鶴町遺跡」のB－15
- 「湯納遺跡」の⑦のうち，053・022・192等
- 「津屋井田遺跡」の138Pの8（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集，昭和50年3月，福岡市教育委員会発行）

(6)　以下のものは，私は実見していないが，太さにおいて，当遺跡出土のものより小さいようである。

- 小型丸木弓……『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊，京都帝国大学，昭和18年3月，桑名文皇堂発行）の第76図の90・91
- たもの枠……『里田原遺跡展――弥生工人のむら――』（1975年，長崎県教育委員会発行」の31Pの写真

(7)　類例は以下に見られる。

- 「鶴町遺跡」のB－13
- 「湯納遺跡」の⑦のうち230
- 『伊豆／山木遺跡』（前掲書）の柱うち，図版第41の5・9等

(8)　類例は以下に見られる。

- 「鶴町遺跡」B－8のうち，W－106（丸太材）等
- 「湯納遺跡」の①のうち300（断面太鼓形材）
- 「板付遺跡」のW－2405（不整形角材）（『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集，1976年，福岡市教育委員会発行）

4　一端が鋭く尖ることについて

全7本が建築用部材であることは，ほぼ間違いないとしても，出土状況が流木中であることを思うと，先端の折れて欠失している材を除いて，一端が尖っていることは気になる所である。今日の草葺屋根の小舞材には，丸太にて先端が鋭く尖っていることは，材の切断の方法として理解し得る。

しかし，当出土材には他材との接合のための工作があるため，常識的には，他端にも他材との接合方法を示す工作を見ることが，建築部材としては理解し易い。尖った一端を他材へ突き差して使用する（例えば挿首(さすじり)尻）ことも，確かに実例があり，可能なことではある。ただ不安

なのは，出土状況が流木中ということであり，「古照遺跡」[註(9)]のように，建築材が堰の斜杭として転用された例を見ると，杭として後に先端を尖らせることも苦慮される。

原始家屋の建築様式を目で見得る資料のうち，先端の突き出している材（例えば銅鐸[註(10)]の線刻高床式家屋の屋根材や家型埴輪の棟上の突出材等[註(11)]）には，先端の尖った材の存在が窺える。

神社建築の千木の先端も尖った形態である。

「湯納遺跡」の建築部材のうち，⑥の073は完形であるが，一端にはくびれ部を作り，他端から少しは入った所に材当りの欠き込みがあるので，この二箇所で他材と接合して建築部分を構成しており，さらに材先端は飛び出す恰好になることが明白であるが，その先端を見ると，鋭く尖っていないが，削ぎ落すように切断してある。

以上のように見てくると，先端が尖っていること自体は，原始家屋においては，建築用部材たることを妨げない。

以上，先端が鋭く尖る建築用部材について，考える史料を提出しておく。今後類似資料の検出を待って再検討されることを望む。

註(9)　『古照遺跡 KODERA SITE』（古照遺跡調査団編集，昭和49年3月，松山市文化財協会発行）

(10)　東京都大橋八郎氏蔵の伝讃岐国出土銅鐸

(11)　『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳附録埴輪家聚成』（帝室博物館学報第6冊，後藤守一，昭和8年4月，帝室博物館発行）中の附図版第6の71，94および附図版第7の112等

5　おわりに

7本の建築用部材の推定年代は，前記報告にあるように5c代と思われる。これらの材と類似の建築用部材は，近くの「鶴町遺跡」や「湯納遺跡」で出土しているが，丸太材に対するこれら種々の技法は，古い建築様式を伝える現存の建築遺構の建築材には見出し難く，建築技法としては消滅し去ってしまったのではないかとさえ思える。

しかし，発掘木材の中には，時期判定は不明瞭であるけれども，「藤原宮跡」[註(12)]や「鳥羽離宮跡」[註(13)]の発掘においても，類似形態の丸太材のくびれ部（ただし，今回の四箇遺跡出土の建築用部材にはない）が出土していることから見ても，かなり後まで丸太に対する同様な木工技法が使用されたのではないかと思われる。

註(12)，註(13)，ともに実現しておらず，建築用部材かどうか不明である。

註(12)『藤原宮』（奈良県史跡名勝天記念物調査報告第25冊，奈良県教育委員会編　昭和44年3月，大和歴史館友史会発行）のPL．16の6

⑬『史跡西寺跡・鳥羽離宮跡』（京都市埋蔵文化財年次報告，1973－Ⅲ，昭和50年3月　京都市文化観光局文化財保護課発行）の16Pの写真29の「不明加工木片」

⑭　建築部材以外を含めると，丸太端部のくびれは所謂民俗資料の紐掛け部分にしばしば見られる。

以上，貴重な原始家屋用部材の報告に添えて，求めに応じて，類例を拾い集めて，考えてみた。

（昭和52年1月20日了）

第 5 章　福岡市四箇 J —10区の花粉分析

畑中健一（北九州大学）

四箇 J —10区においては，a～g の各地点で考古学的調査が実施されているが，はっきりした遺構は確認されていない。土器等の出土も少ないことから遺跡の特徴や時代を推定する資料にとぼしいが，このうち2カ所のトレンチ壁面から得られた試料の花粉分析を行ったのでその結果について報告する。

1　試料および方法

分析試料は J —10 a 地点南—16トレンチおよび J —10 e 地点 B T — 1 トレンチの壁面から 5 cm毎に採取した。両トレンチとも地表から15～20cmまでは耕作土である。中層から下層にかけては，砂質シルト・泥炭質泥土・シルト・砂（部分的に礫を含む）の互層で，かなり複雑な堆積環境を暗示している。

試料はすべて常法のごとく，KOH処理，アセトリシス，塩化亜鉛溶液による比重分離をおこない，グリセリンゼリーで封入した。

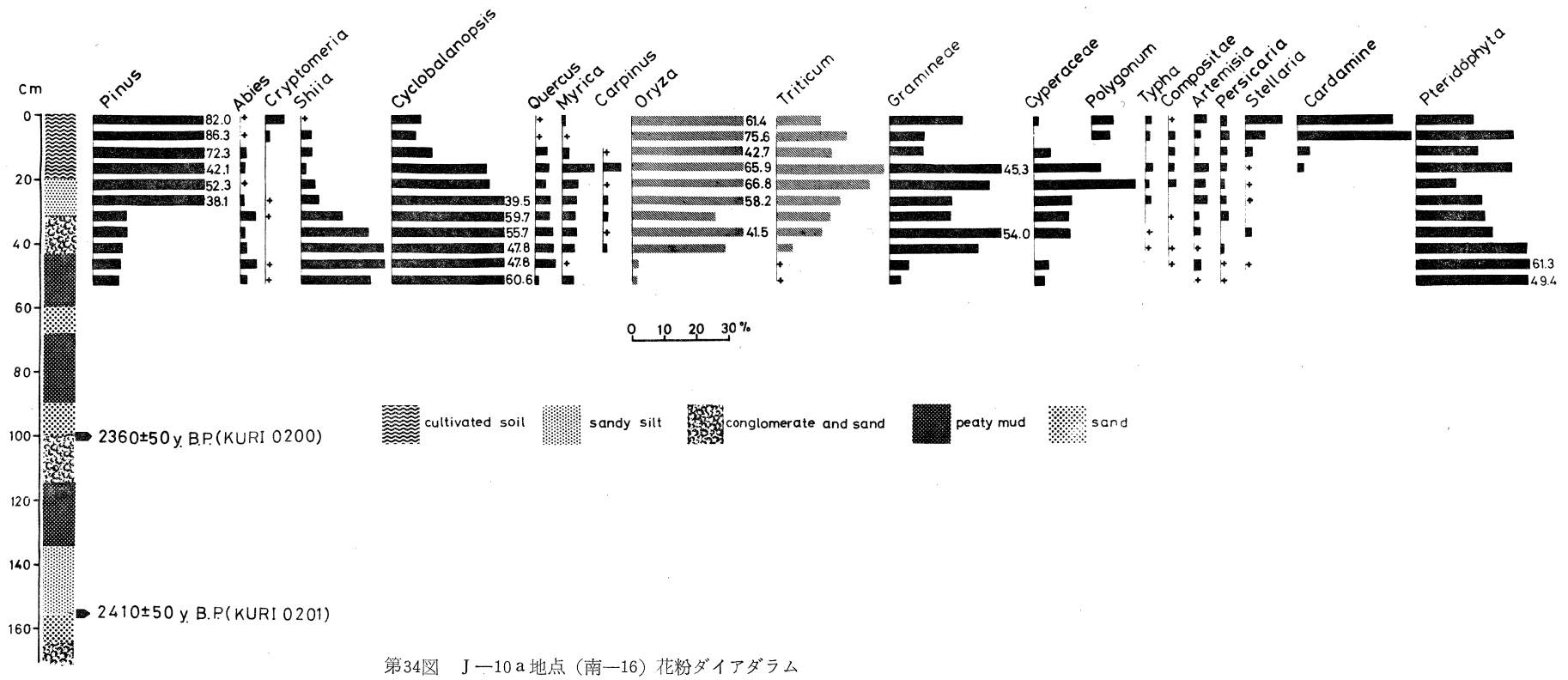
分析結果は，AP（木本花粉）を基本数として各種類ごとの頻度（%）を求めた。また，*Oryza*（イネ）・ *Triticum*（コムギ）の全イネ科花粉に対する比率についても検討した。

2　結果および考察

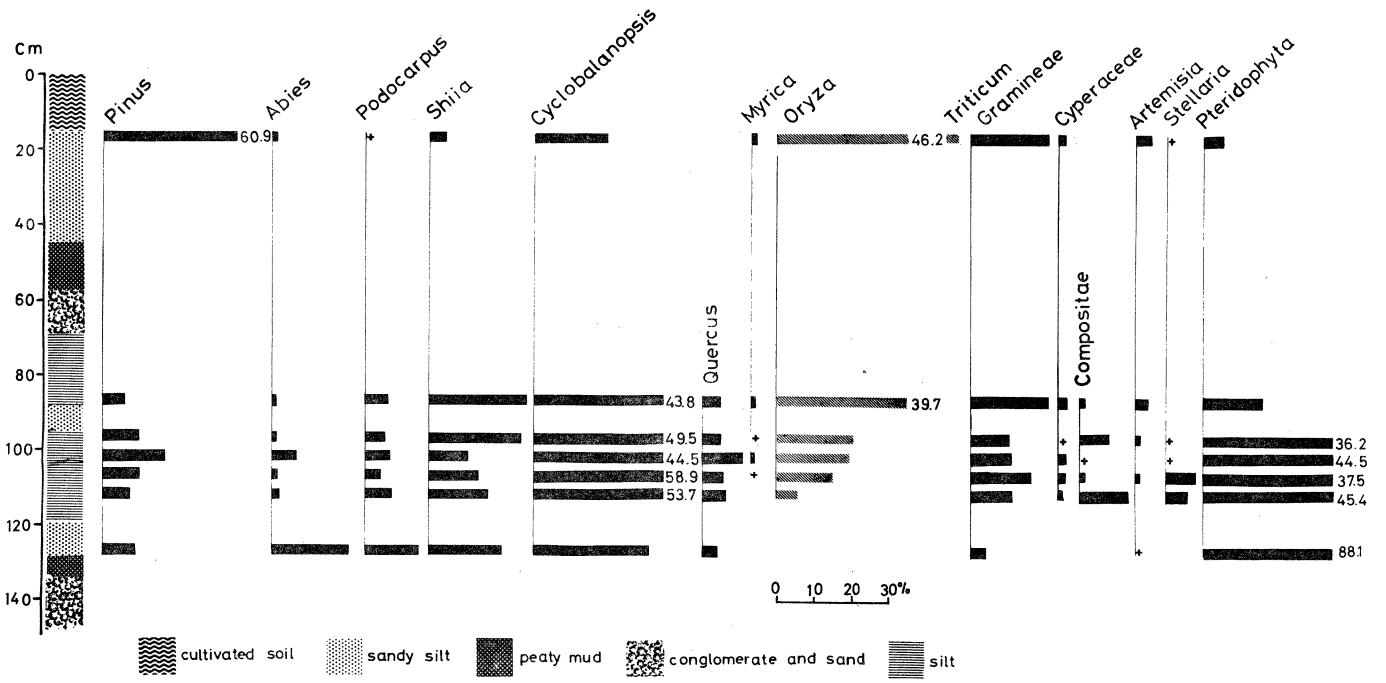
J —10 a 地点南—16トレンチ

木本花粉25種類，草本花粉21種類を検出した。主要花粉の消長は第34図に示した。花粉化石は表層の水田耕土を含めて—50cmまで連続的に出現するが，中・下層部は無花粉帯である。花粉を含む表層部の堆積物はその花粉組成から上・下2層に区分できる。

下部では *Shiia*（シイ類）・ *Cyclobalanopsis*（常緑カシ類）など常緑広葉樹が優勢で，これに反し針葉樹では *Abies*（モミ）がわずかに出現するにすぎず， *Pinus*（マツ類）もいたって劣勢である。シイ・カシ類を主とし，わずかに *Myrica*（ヤマモモ）や *Quercus*（ナラ類）を伴う照葉樹林が周辺にあったと推定される。上層では *Pinus* が圧倒的に多く，一方 *Shiia*・*Cyclobalanopsis* はしだいに減少し，表層では極めて低率となる。このことは，本地域の気候



第34図　J—10a地点（南—16）花粉ダイアダラム



第35図　J—10e地点（BT—1）の花粉ダイアグラム

的極相であるシイ・カシ林が人為的に破壊され，その跡地にアカマツの二次林が急速に拡大したことを物語るものである。

つぎに，*Oryza* の花粉の消長についてみると，0～—50cmの花粉帯最下部では1.7%にすぎないが，—40cmからしだいに増加する傾向を示し，表層部では野生型のそれをしのいでいる。*Triticum* も *Oryza* とほぼ同じ傾向で出現するが，*Oryza* に比し低率である。

ところで，*Oryza* 花粉の全イネ科花粉に対する比率は第8表・Aに示すごとく，シイ・カシ類の優占する時代には50%以下であるが，0～—25cmのマツが優勢な時代では46～70%に達している。また，表層の水田耕土からは *Polygonum*（ミチヤナギ類）・*Stellaria*・（ハコベ類）*Cardamine*（タネツケバチ類）など耕地性雑草も出現する。

トレンチ壁面から採取した木片の^{14}C年代測定結果は，—155cmで2410±50 y. B. P.,—100cmでは2360±50 y. B. P. である。これらの年代値から推定すると，本トレンチの堆積時代は縄文晩期以降と考えられるが，*Oryza*・*Triticum* など栽培植物の出現する層準については，考古学的資料もとぼしく，時代を判断するに足るデーターは得られていない。

J—10e地点，BT—1トレンチ

木本花粉23種類，草本花粉21種類を検出した。主要花粉の消長は第35図に示した。花粉化石は水田耕土直下（—15cm）と下層（—85～—125cm）のシルト層から検出されるが，中層部は無花粉帯である。下層はいわゆるシイ・カシ帯で，J—10a地点南—16トレンチの上層下部の花粉組成に類似しているが，*Podocarpus*（ナギ類）はやや多く，一方 *Myrica* は散発的に出現するにすぎない。

第8表　*Oryza*・*Triticum* の全イネ科花粉に対する比率（%）

A．J—10a地点，南—16トレンチ

Depth（cm）	0	—5	—10	—15	—20	—25	—30	—35	—40	—45	—50
Oryza	62.7	70.1	60.3	45.5	52.6	60.4	42.6	38.0	47.0	31.3	30.8
Triticum	14.4	20.1	24.9	23.2	22.8	20.3	27.2	12.6	7.8	6.3	7.7

B．J—10e地点，BT—1トレンチ

Depth（cm）	—15	—85	—95	—100	—105	—110	—125
Oryza	66.1	66.3	67.2	64.3	50.0	38.9	—
Triticum	4.8	—	—	—	—	—	—

Oryza は最下層（—125cm）の砂質シルトからは検出されないが，—110cmから出現し始め，上層に向かって漸次増加の傾向を示している。その全イネ科花粉に対する比率は第8表・Bに示すごとく，—110cmでは39%にすぎないが，—105cmでは50%，—100cm以浅の層準では60%

以上に達し，イネの集約的栽培を示唆している。また，—110cmの層準からは，イネのほか *Stellaria*・Compositae（キク科）など雑草の花粉が検出されることもイネ栽培に伴う耕地化を暗示していると考えてよかろう。

3 まとめ

J—10a地点南—16・J—10e地点BT—1トレンチの花粉分析を行い，*Oryza* 花粉の消長を中心に考察した。

1. J—10a地点南—16トレンチでは，0～—50cmの全試料から *Oryza* および *Triticum* の花粉が検出された。特に *Oryza* 花粉の全イネ科花粉に占める比率から推定すると，—30～—50cmの層準でやや粗放な栽培がはじまり，0～—25cmの層準では集約的栽培に移行したと判断される。本トレンチの堆積時代は，下層から採取された木片の ^{14}C 年代測定結果からあきらかに縄文晩期以降とみなされるが，イネ・コムギなど栽培植物の花粉が出現しはじめる層準（—50cm）の絶対年代については今後の検討にまたねばならない。

2. J—10e地点BT—1トレンチでは，—110cmの層準からイネの栽培がはじまり，—100cmの層準から本格的な耕作に移行したと推定される。

本トレンチにおいては，イネの栽培が開始されたと考えられる層準（—110cm）の年代を明らかにする必要があるが，これも今後の研究課題である。

調査の遂行に当り，花粉分析につき御指導をたまわっている高知大学文理学部中村純教授に謹んで感謝の意を表する。また分析試料の採取に格別のご配慮をいただいた福岡市教育委員会柳田純孝，九州大学大学院黒田登美雄両氏に厚く御礼申し上げる。

第9表　J—10a地点南—16トレンチの花粉分析表

Depth (cm)	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
Pinus	82.0	86.3	72.3	42.1	52.3	38.1	10.1	10.5	9.1	9.0	7.9
Abies	0.4	0.4	2.3	1.9	0.4	1.4	4.3	1.6	2.2	5.0	2.1
Tsuga				1.9	0.4		0.7		1.1	0.5	0.4
Cryptomeria	6.1	1.8				0.5	0.7			0.5	0.4
Podocarpus	0.4		0.8	0.5	0.8		0.7				0.4
Shiia	0.4	3.1	3.4	1.9	4.2	5.1	13.0	21.0	25.4	26.1	26.1
Cyclobalanopsis	9.0	7.1	12.4	29.9	30.2	39.5	59.7	55.7	47.8	47.8	60.6
Quercus	0.4	0.4	3.4	4.2	3.1	4.6	4.3	5.2	5.8	6.8	1.2
Fagus					0.8			0.4	0.4		
Myrica	1.1	0.4	2.3	9.8	5.0	4.6	4.0	4.4	4.0	0.9	3.3
Carpinus			0.4	5.6	0.8	1.4	1.1	0.8	1.1		
Celtis					0.4	2.3	0.4				
Ulmus				0.9	0.4	0.9	0.4	0.4	1.1	0.5	2.1
Zelkova					0.4	0.9					
Pterocarya					0.4						0.9
Acer	0.4									0.5	
Symplocos										0.4	0.9
Ilex		0.4									0.9
Melia						0.5					
Styrax										0.7	
Ligustrum				0.5							
Rhus									0.7		
Salix			2.6	0.9	0.4	0.5	0.4				
Aesculus									0.4		
Ericaceae			0.4		0.4		0.4				
Oryza	61.4	75.6	42.7	65.9	66.8	58.7	25.9	41.5	28.3	2.3	1.7
Triticum	14.0	21.7	17.6	33.6	29.0	19.7	16.5	13.7	4.7	0.5	0.4
Gramineae	22.4	10.6	10.5	45.3	31.3	18.8	18.3	54.0	27.2	4.5	3.3
Cyperaceae	1.8		5.6	20.6	31.3	11.9	10.8	10.9		4.1	3.3
Typha	1.8	1.3		1.9	1.2	1.8		0.4	0.7		
Compositae	0.7	1.8	1.9	1.4	2.3		0.4		0.4	0.5	
Artemisia	4.3	2.7	1.5	5.1	3.4	3.7	1.4	1.6	0.7	2.3	0.8
Polygonum	7.2	6.6									
Persicaria	2.5	2.7	2.3	1.4	1.2	1.4	2.5		1.5	0.9	0.8
Chenopodium	2.5	0.9				0.5				0.5	
Stellaria	11.2	6.6	2.6	0.5	0.4	0.9		1.6		0.5	
Haloragis		0.4		1.4	0.4	0.9					
Blyxa				0.9					0.4		
Rotala	1.1	1.3									
Cardamine	31.4	42.0	3.8	2.3							
Epilobium				0.5		0.9	0.4				
Umbelliferae					0.8	0.5	1.1	2.4	1.1		0.4
Gleichenia	5.4	1.3		0.5	0.8	0.9	0.4				
Pyrrosia	0.7	0.4	0.8	0.9			0.4	0.8		7.2	5.8
monolete type	10.5	19.5	16.1	20.6	8.8	15.6	14.8	19.4	23.2	36.5	32.4
trilete type	2.5	8.9	3.0	7.0	2.3	4.1	5.8	3.6	11.6	17.6	11.2

第10表　J—10e地点BT—1トレンチの花粉分析表

Depth (cm)	15	85	95	100	105	110	125
	%	%	%	%	%	%	%
Pinus	60.9	6.7	9.1	17.0	10.5	7.8	8.3
Abies	2.0	1.5	1.4	6.6	2.0	2.4	21.6
Tsuga	0.3	0.8		0.4		1.5	
Cryptomeria	1.4	1.5					0.5
Podocarpus	0.3	6.7	5.5	6.1	4.4	7.3	14.2
Shiia	4.2	26.2	24.7	10.5	13.3	15.6	19.3
Cyclobalanopsis	19.4	43.8	49.3	44.5	58.9	53.7	30.7
Quercus		4.9	5.0	10.9	5.7	6.8	3.7
Fagus			0.5				
Myrica	2.0	1.5	0.5	1.3	0.4		
Carpinus	0.9	0.4				0.5	0.5
Celtis		2.3			0.4		
Ulmus		0.4					0.5
Tilia							0.5
Acer		0.8	0.5			0.5	0.5
Symplocos		0.4				0.5	
Ilex	8.2			0.4			
Ligustrum				0.4			
Rhus		1.5		1.4			
Elaeocarpus				0.9	4.4	2.4	
Styrax		0.4					
Salix		0.4		0.9		1.0	
Ericaceae			0.9				
Oryza	46.2	39.7	20.8	19.7	16.5	6.8	
Triticum	3.4						
Gramineae	20.3	20.2	10.2	10.9	16.5	10.7	3.2
Cyperaceae	2.0	2.3	0.5	2.2	2.0	1.5	
Typha			0.9		2.8	0.5	
Compositae		1.1	8.2	0.4	1.6	12.7	
Artemisia	3.7	3.0	1.4		1.2		0.5
Polygonum	1.4						
Persicaria	0.3						
Rumex		1.5					
Chenopodium		0.4			2.8		
Stellaria	0.9		0.5	0.9	7.3	5.9	
Sagittaria	1.1	0.8		0.4	0.4		
Potamogeton				0.4			
Rotala		2.3					
Umbelliferae		1.5				0.5	
Epilobium				0.4			
Gleichenia			1.4		1.2	0.5	2.3
Pyrrosia			10.1	10.9	1.2	2.4	10.1
monolete type	3.7	5.2	17.4	26.6	22.2	36.6	61.9
trilete type	1.4	10.9	7.3	7.0	12.9	5.9	13.8

第6章　福岡市四箇J—10区出土の種子について

粉川昭平（大阪市立大学）

四箇J—10区のうち，a・e・f地点の次の資料を検討する機会を与えられた。（　）内の760604などとあるのは1976年6月4日のことで，資料の採集日をしめす。

1）四箇J—10a地点の杭列の中の泥炭層中よりえられたもの。一部に760518と記してある。

2）四箇J—10f地点（760603）の資料。これも上記と同じ杭列の中の泥炭層中よりのもの。

3）四箇J—10f地点（760604）の資料。砂層の下の下部泥炭層中よりのもの。

4）四箇J—10a地点，南—16（760528），1～35。

5）四箇J—10e地点，BT—1（760528），1～28。

資料1，2，3は柳田純孝氏，二宮忠司氏が発掘中に採取されたもので，1㎜のフルイで植物片をとり出し，シャレーの中で洗別された。混入には充分注意がはらわれ，水づけあるいは湿った状態で保存された。従って保存はきわめてよい。

資料4，5は花粉分析のため，畑中健一氏が，柳田・二宮両氏の協力のもとに，地表面より約160㎝の深さまで5㎝毎に採集された土壌の資料である。おのおのの資料を折半し，半分の資料をもちいて畑中氏が花粉分析を行われた（結果はこの報告書に報告されている）。他の半分の資料が種子分析のため，筆者に提供された。合計63個の資料で，弥生時代から現在の耕作土におよぶ。種子等の洗別は終了し，興味ある結果が予想されるが，たしかな同定および考察は，ついに今回の報告に間にあわなかった。今回はやむなく上記の1，2，3の資料についてのみ報告する（PL．39～43参照）。

四箇J—10区は早良平野の南端近くに位置する。A・B・Cの杭列によって示される弥生時代ではないかと思われる水路，およびその一部をおし流した弥生時代と古墳時代の洪水の堆積物（砂層および流木群）からなる。今回の資料は，この水路にたまった砂泥の中からえられた弥生～古墳時代のものと思われる。おのおのの資料について同定結果をのべる。

J—10a地点（760518）の資料からは次のがみられた。

イヌガヤ（*Cephalotaxus drupacea S. et Z.*）—種子1個。

ブナノキ（*Fagus crenata* Blume）—殻斗の完全なもの1個，破片2個，種子1個。

イチイガシ（*Quercus* (*Cyclobalanopsis*) *gilva* Blume）—堅果241個，幼果12個，殻斗も多い。

クヌギ（*Quercus* (*Lepidobalanus*) *acutissima* CARR.）—大形の幼果1個。大形不規則形の虫えい1個。後者については，クヌギのものか否か再考を要する。

シリブカガシ（*Pasania glabra* OERST.）—殻斗つき堅果1個。鱗片よりなる殻斗に小さな不実の果が2個くっついている。

オニグルミ（*Juglans sieboldiana* MAX.）—クルミ類の核（内果皮）は，中央部の縫合線を境にして，左右の両片にわかれる。両片ともそろったものが5個（このうちに，虫穴のあるもの，ネズミなどのけっ歯類にかじられた穴のあるもの，焼けてこげたあとのあるものがそれぞれ1個づつある。また1個は両端の尖った珍しい型である）。片方だけのものが7個（うち1個は焼けこげている）。小破片が1個。

カナムグラ（*Humulus japonicus* S. et Z.）—完全な種子1個と，半分だけの種子1個。臍点がハート形をしており特徴的である。ビールのホップをつくるカラハナソウと同属の縄文以降の史前帰化荒地人里植物。蔓性の雑草。

クスノキ（*Cinnamomum camphora* SIEB.）—種子が44個。うち2個には外側のうす皮（外果皮）ものこっている。

イスノキ（*Distylium racemosum* S. et Z.）—特異な逆日本バサミ形の内果皮が1個。

モモ（*Prunus persica* BATSCH.）—核の半分のものが1個。長さは2.5cm，巾は2.1cm，厚さは半分で1cmある。

アカメガシワ（*Mallotus japonicus* MUELL. ARG.）—種子3個。しわのある扁球形の小種子。

ムクロジ（*Sapindus mukurossi* GAERTN.）—普通の大きさの種子2個。小さな種子1個。この黒くかたい種子は羽根つきの羽根に使うものである。直線状の臍点が特徴。

ノブドウ（*Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTV.）—種子2個，破片1個。背面の模様に特徴がある。

ヤブツバキ（*Camellia japonica L.*）—未成熟の果実2個。リスなどにかじられたあとがある。普通の大きさの種子5個。小さい種子1個。ツバキ属の果実は完熟すると大きく3裂（胞背裂開）して種子をとばし，短いが丈夫な果梗をつけた外果皮が落下することになる。従って種子をも含んだいまだ裂開しない未熟の果実が，まるのまま自然に落下することはなく，そのような状態の遺物を自然状態で期待することはできない。この場合はリスなどによって幼果がかじられた例外的な結果である（この間の事情は和歌山県下の友ケ島の自然林などの観察で，筆者は充分に体験した）。

ゴキヅル（*Actinostemma lobatum* MAX.）—種子2個。半凸レンズ形。水ぎわに生えるウリ科の雑草。

エゴノキ（*Styrax japonica S. et Z.*）—種子83個。三条の稜とその間に三条の浅溝をも

ち，著しい臍点に特徴ある紡錘形のもの。

ミミツバイ（*Symplocos glauca* KOTDZ.）—種子破片1個。特異な壺形の種子の破片。

クサギ（*Clerodendron trichotomum* THUND.）—特異な半月形の種子1個。

以上のようにJ—10a地点からの資料には，15科17属18種の植物があった。このうち裸子植物は，イヌガヤの一種のみ。他はすべて被子植物の双子葉類である。そのうちエゴノキ・ミミツバイ・クサギの3種は合ベン花類であり，他はすべて離ベン花類に属している。生態的特性については，J—10f地点のものと一緒にして後にのべる。

次に**J—10f地点（760603）の資料**からは次のがみられた。重複するものの学名は省略する。

クロマツ（*Pinus thunbergii* PARL.）—球果2個。

イヌガヤ—種子半裂したもの1個。

カヤ（*Torreya nucifera S. et Z.*）—種子1個。

イチイガシ—57個の堅果と，冬芽1個。

クヌギ—大形の幼果2個。

ヤマモモ（*Myrica rubra S. et Z.*）—種子2個。

オニグルミ—頂端の食害されたもの1個。

カナムグラ—種子2個。

クスノキ—種子58個。うち3個には外果皮も保存している。

マルミノヤマゴボウ（*Phytolacca japonica* MAKINO.）—特徴のある腎円形の種子1個。同心円状の模様がある。

イスノキ—果実5個。大きな特徴のある虫えい2個。これは柵状の組織よりなり，イスノキの指標となる。

モモ—核の半片1個。

アカメガシワ—種子4個。

ヤマビワ（*Meliosma rigida S. et Z.*）—竜骨状の隆起があり，全面に粗大な凹凸のある堅い種子1個。

ホルトノキ（*Elaeocarpus decipiens* HEMSL.）—大形の内果皮4個。全体の形，表面の彫刻に特徴がある。

ノブドウ—種子3個。

ヤブツバキ—果実4個。けっ歯類にかじられたあとあり。1つはツバキ類としては細長く1つは花被片の着点の痕のある特徴のある丈夫な果梗をつけている。種子4個。

ゴキヅル—種子18個。

エゴノキ—種子51個。

クサギ一種子１個。

ハトムギ？（*Coix lachryma-Jobi L.* var. *ma-yuen* STAPF.）—12個の果。母種ジュズダマとは変形した葉鞘の先端部の状況がことなるので，ハトムギではないかと思われる。遺跡から出土するような資料では，硬軟その他現生種についての区別点が，そのままつかえない場合もある。さらに検討をすすめている。

J—10 f 地点下部泥炭層（砂層下）（760904）の資料。これは１個のシャーレに保存された不完全な数枚の葉片であり，次のものを認めた。

イチイガシ－３枚の葉。

タブノキ？（*Machilus thunbergii S. et Z.*）—葉の破片。

ヤブニッケイ？（*Cinnamomum japonicum* SIEB.）葉身の下半部の破片。

この資料は前述の資料（760603）と同じ層位のものとして考えて差支えないものと思われるので，一緒にして考える。

J—10 f 地点では，上記のように，19科21属23種を認めた。このほか（760603）の資料に，完全な小種子であるが，わからないものが２種７個体ある。23種のうち裸子植物は，クロマツ・イヌガヤ・カヤの３種があり，他の20種は被子植物である。そのうちハトムギ？は単子葉類であり，他の19種は双子葉類である。双子葉類のうち，エゴノキ・クサギは合ベン花類であり，他の17種は離べん花類である。

J—10 a 地点の資料と，J—10 f 地点の資料とをくらべてみると（760604）の葉片の資料はのぞく），クロマツ・カヤ・ヤマモモ・マルミノヤマゴボウ・ヤマビワ・ホルトノキ・ハトムギ？の７種は，J—10 f 地点にのみみられ，J—10 a 地点にはなかった。ブナノキ・シリブカガシ・ムクロジ・ミミツバイの４種は，J—10 a 地点にのみみられ，J—10 f 地点にはなかった。イヌガヤ・イチイガシ・クヌギ・オニグルミ・カナムグラ・クスノキ・イスノキ・モモ・アカメガシワ・ノブドウ・ヤブツバキ・ゴキヅル・エゴノキ・クサギの14種類は，J—10 a 地点，J—10 f 地点に共通であった。J—10 a 地点の資料とJ—10 f 地点の資料とで層位が異なるような重要な組成の差異は認められない。弥生時代のある時期の水路に流されてきた植物遺残群集の一つの相を示している。全資料を一括すると27種類の植物が認められた。また早良平野中心部に近く位置する全くよく似た鶴町遺跡の第Ⅱ号溝（弥生後期）の植物遺物（鶴町遺跡 pp. 50～53の「福岡市鶴町遺跡出土の種子について」[註(1)]を参照）とくらべてみても，よく似た組成を示している。

J—10 a 地点・J—10 f 地点を通じての植物27種のうち，カナムグラ・マルミノヤマゴボウ・ゴキヅル・ハトムギ？の４種類だけが草本で，他の23種は木本である。好湿性草本の小種子

註(1)　福岡市教育委員会『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第３集　　1976年

が少ないようである。これは資料の洗別法にあるいは問題があったのではなかろうかと思う。*資料4・5（今回は間にあわなかった）には，多くの草本・水草が認められた。木本23種のうち，ブナノキ・クヌギ・オニグルミ・モモ・アカメガシワ・ムクロジ・ノブドウ・エゴノキ・クサギの9種が落葉性で，他の14種は常緑樹である。そのうちイチイガシ・シリブカガシ・ヤマモモ・クスノキ・タブノキ？・ヤブニッケイ？・イスノキ・ヤマビワ・ホルトノキ・ヤブツバキ・ミミツバイは，いずれも西南日本暖帯の照葉樹林を構成する重要樹種である。落葉樹の中でもアカメガシワ・ムクロジ・クサギなどは暖帯性のものであり，草本の中でも特にマルミノヤマゴボウは，照葉樹林の中のやや陽光のあたる所に生ずるものである。全体としてみて，現在の当地方の潜在植生とにた照葉樹林が近くによくのこっていたと推定される。現在近くの早良の山々は全く植生が破壊されてしまっている。そこで，牛尾準一氏・柳田氏をわずらわして，近くの社寺林をみてまわった。いずれもあまり豊かなものではなかったが，イヌガヤ・クスノキ・タブノキ・ヤブニッケイ・ツバキ・ムクロジ・イスノキ・ミミツバイなどは認められた。イスノキ（俗名サルヒョウ）は，飯盛山より移植されて，金武公民館前に植えられていた。

ここに注目されるのは，わずかながらブナノキがJ—10a地点の資料中にまじっていたことである。ブナノキは北海道西南部以南九州（高隈山まで）に至るまでの温帯林の代表樹種であって，九州では900から1500m位の高山の山地に生じている。イチイガシなどの暖帯の樹種と共存していたとはとうてい考えられない。J—10a地点のブナノキの殻斗や種子は，上流の背振山塊の高地から流されてきたものに相違ない。量がわずかな事もこの推定を支持している。資料4の30番などの土壌中にはサワグルミ（*Pterocarya rhoifolia S. et Z.*）の堅果があったが，これも同様に上流から流れてきたものであろう。こういう事は，ほとんど全く人為による自然状態の大きな改変のなかったであろう弥生時代の状況下では，大いにありうる事であったと想像される。

27種の植物を食糧という点からみてみると，カナムグラ・クスノキ・タブノキ・ヤブニッケイ・イスノキ・アカメガシワ・ムクロジ・ゴキヅル・エゴノキの9種以外は一応食べる事が可能であろう。中でもイチイガシ・ヤマモモ・オニグルミ・モモ・ハトムギ（同定が正しいとして）は，良好な食用植物であり，少なくともモモ・ハトムギは栽培品であったろう。オニグルミの核の一部には焼けこげた跡があり，自然遺物ではなく人為の加えられたものであろう。

以上J—10区のうち，J—10a・J—10f地点の弥生時代と思われる種子類を同定，検討した結果，近くにイチイガシやクスノキその他の照葉樹林がよく発達していただろうことを推定した。ごくわずか混入する温帯林の要素（ブナノキ・サワグルミなど）は，上流より流されてきたものと考えられる。また焼けこげたオニグルミの核やモモ・ハトムギ？などに人間の営為の片りんが示されていた。

＊　今回の報文の資料に小種子が少ないのは，発掘作業中に注意された大形種子に限られていることによる（柳田）。

第7章　まとめ

本年度は四箇周辺地域の緊急調査としてJ—9区2カ所，J—10区7カ所合わせて9カ所の試掘及び発掘調査を実施した。その結果J—10区のa・e・f・gの4地点で立杭が認められ，a・f地点の杭列は連続する遺構の一部であることが確認されたほか，J—10a地点からJ—10f地点中央部にかけて多くの流木群とともに土器なども出土しているが，そのほとんどは大量の土砂とともに押し流され二次堆積したもので，出土量も少なく，発掘調査によってもたらされた知見は多くない。遺構としては杭列だけであり，杭列の時期がどの時代に相当するかを決めるのは難問である。杭列遺構が生産可耕地における水利施設の構築を目的としたものであれば，出土遺物が乏しいことはむしろ当然のことであるが，前述の調査の結果わかったことと残された問題点を整理して一応のまとめたい。

最初に**J—10区付近の地形**をみると，J—10a地点の中央部から北西隅へつながる微高地の南端はJ—10g地点で終っていることが確認された。J—10f地点の北西側ではJ—10c地点の中央部に微高地の東端が認められ，微高地は西側に広がる。J—10d地点は微高地でJ—10a地点南東隅からJ—10f地点北西隅，更にJ—10c地点の東側へとつづく流れは，J—10d地点より東側に位置することをしめしている。

以上により，微高地の東端はJ—10g地点中央部北側からJ—10a地点中央部 ➡ J—10f地点南西隅 ➡ J—10c地点中央部 ➡ J—10d地点の東側へとJ—10g地点より北西方向につづき，その西側に微高地の広がりが認められる。

一方，J—10b地点北側のトレンチからも微高地の端部が認められた。これは北側に近接する四箇遺跡A地点（縄文時代）・B地点（弥生時代）に広がる微高地の南端にあたると思われるものである。J—10b地点の表土中に含まれる縄文時代後期の土器（第7図—1）や弥生時代中期の土器（第7図4・6）はこれを裏付けるもので，縄文時代後期・弥生時代中期の遺構はJ—10b地点まで広がることが予想され，その間の空地の事前調査は急務の一つである。微高地の西端は確認されていないが，J—10f地点西側の微高地に対向してJ—10b地点より北西方向へつづくと思われる。J—10a地点中央部とJ—10b地点での微高間の距離は約35mで，J—10a地点南東隅からJ—10f地点北西隅 ➡ J—10c地点東側へとつづく流れは，二つの微高地の間をぬける旧河道と考えることができよう。J—10a地点微高地の標高は20.50～20.65m，J—10b地点微高地端部の標高は20.30mを測る。これに対し，微高地間の中央に近いJ—10a地点北東隅礫層の標高が20.00m，J—10f地点北東隅礫層の標高は19.70mである。J—10a・10f地点の種子分析行なった粉川昭平氏の報文中（p．87）にブナノキ・サワグルミが上流から流されたものであろうという指摘はJ—10区付近の地形を考えれば，理解で

きることである。

K—11区に位置する四箇東遺跡では，1976年3月の第一次調査により縄文後期の包含層が検出され，遺構の中心部は第一次調査地点より南側の微高地に広がることが予想された。第二次調査は第一次調査地点より30m北側の四箇集会所建設予定地で行なわれたが，ここには縄文後期の包含層はなく，J—10a・10f地点と同様な土層の堆積状況がみられた。第一次調査地点B—5トレンチ包含層の標高が21.66～22.14mに対し，第二次調査地点D—11トレンチ基盤礫層の標高は20.65mである。四箇東遺跡第二次調査地点は，J—10a・10f地点の流れのほぼ延長線上におくことができる（第3図）からJ—10a地点　➡10f地点　➡10c地点東側をとおる旧河道の上流にあたるとみることができるのではあるまいか。とすれば，四箇東遺跡は旧河道に沿った微高地上に展開された縄文時代後期の集落址と考えられ，第一次調査地点は旧河道に面した微高地端に相当する部分であろう。

このようにみてくると，四箇遺跡A・B地点の縄文～弥生時代の遺構をのせる微高地，J—10f地点の西側に広がる微高地，四箇東遺跡をのせる微高地と，小さな微高地が点在していたのであろう。四箇東遺跡第二次調査地点からJ—10a地点　➡10f地点　➡10c地点東側をむすぶ流れは，これらの微高地間の低地を南東から北西へ流れる旧河道の一つであろう。平坦な現水田面の下に微高地や旧河道あるいは凹地などの旧地形が残されていることが判明したことは，今後の四箇周辺地域の調査の上で重要な手がかりの一つとすることができよう。特に，弥生～古墳時代における微高地上の集落址と水田可耕地とみられる低地の杭列遺構との関係を究明できる可能性は高いと考えている。更に縄文時代後晩期から弥生時代への生産活動の推移をも究明できるのではないかとの期待がもたれ，それ故に四箇周辺地域における開発以前の事前調査の必要性と重要性が指摘されるところである。

次に**J—10a地点・10f地点の土層の堆積状況**を検討しよう。この一帯の基盤を構成する礫層（Ⅻ層）から遺物を包含しない粘質土（Ⅴ層）までの間は砂と泥炭層との互層といってよく複雑な堆積状況をしめしている。これは低湿地という立地条件を反映して，泥炭層を形成するような静かな流れか，淀みのような立地にときどき洪水などにより一時的に大量の土砂が流出堆積し，このくりかえしにより土層が形成されたと考えることができる。第10図の土層柱状図は黒田登美雄氏によって作成されたものであるが，Ⅹ層，Ⅷ層，Ⅶ層は砂の上にピート層が形成され，Ⅹ層は下部砂層（Ⅸ層）によって，Ⅷ層・Ⅶ層は上部砂層（Ⅵ層）によってそれぞれ押し流されており（付図—1・2参照），以上のような土層の形成過程をよくしめしている。

砂層はⅤ層をカットした新しい時期の砂（Ⅳ層）を除けば，三つに大別できる。一つは基盤礫層上の浅い砂層（Ⅺ層）で，これには縄文時代後晩期，弥生時代前期の土器（第23図）が少量含まれる。これがⅩ層からの落ち込みでないとすれば，杭列が構築される前のもので，杭列遺構の上限を考える資料となる。二つは下部砂層（Ⅸ層）で，J—10a地点北東隅からJ—10

f地点の北断面中央部から北西隅にかけて杭列をおおうように堆積している（付図—4）ほか，各断面で観察できる（付図—1・2）。10a地点・10f地点杭列遺構の杭のうち，上端に打ち込み痕を残す完形品の上端はいずれはX層に位置しており，他の杭もIX層を超えるものはない。IX層には弥生時代中期以前の土器（第24・25図）を包含するが，これより新しい時期の土器は含まないようである。IX層の堆積時期をIX層中の最も新しい土器の時期とすれば，弥生時代中期の氾濫をしめすことになる。J—10a地点・10f地点の杭列遺構は弥生時代中期より新しくない時期（XI層の板付II式土器がX層からの落ち込みでないとすれば，弥生時代前期後半かよ中期中葉の間）に構築されたと考えられる。杭列遺構の杭はIX層により斜めに倒れたり，上端を欠失したり，流失するような被害を受けたようである。J—10a地点・10f地点の流木群の出土遺物にはIX層によって流され二次堆積したものが含まれている。出土土器のうち弥生時代中期の土器が大半を占めること（第11表）もこれをしめすものであろう。

三つは上部砂層（VI層）で，J—10f地点北東隅とJ—10a地点南東隅からJ—10f地点南断面から西断面にかけて厚く堆積している。VI層はVII層・VIII層ばかりでなく，一部でIX層やX層をも押し流しており，部厚い砂の堆積は下部砂層（IX層）以上に大きな氾濫をしめしている。IX層より砂層の幅は狭く，J—10a地点・10f地点中央部に集中しているのが特徴で，それだけに被害も大きかったのであろう。VI層には縄文・弥生・古墳各時代の遺物が含まれているが，その最も新しい時期の土器は古墳時代の土師式土器（第26図）で，須恵器を含まない。VI層を同じ層の最も新しい土器の年代に対比すれば，5世紀前半の氾濫をしめすことになる。VI層によっても多くの流木群が流され二次堆積している。特にJ—10f地点中央部の杭列はVI層の被害によるものと思われ，そのあとに流木群が集中している。これは杭列遺構が5c前半まで存在していたことをしめすことになる。

ところでJ—10a地点の流れの中心に近い南—16における土層の^{14}C年代測定にれば，X層は2410±50y.B.P.，VIII層は2360±50y.B.P.となっている。これは縄文時代晩期頃に相当する年代で考古学サイドのIX層・VI層の堆積時期とは一致しない。^{14}Cの測定資料はX層・VIII層のピート層が形成される時期の小木や植物起源の有機物によるもの（第10図）で，誤差は少ないと思われるが，同地点の花粉分析を行なった畑中健一氏の報文（P．78）によれば，中・下層部は無花粉帯であるという。ピート層を形成するような時期にもたえず静かな流れがあり，花粉がピート層中に残留しなかったと考えられ，ピート層を構成する小木や植物起源の有機物も上流からもたらされたものと解釈するのが自然であろう。

次に**J—10a地点・10f地点の杭列遺構**について考えてみよう。J—10a地点からJ—10f地点につづくA・B・Cの三つの杭列は，J—10d地点とJ—10b地点の二つの微高地をむすぶ中心よりやや西側に位置する。10f地点では北東隅から西側へゆるく傾斜しており，A列の西側が流れの中心と考えられる。従って杭列は流れの中心より東寄りに構築されたものであ

る。

本文中で記述した杭を一覧表をまとめると第11表のようになる。3つの杭列はA列に丸木杭を，B列・C列には割杭を多く使用しており，B列は割杭—1をC列は割杭—2が多い特徴が指摘できる。A列が流れに面していることを考慮すれば，流れに面するA列に杭の中でも最も強い丸木杭を打ち込んでいることになる。A列の杭とB列の杭は横木によって補強・固定する工夫がみられる。A・B列の立杭は概ね1.2～1.5mの幅で，横木をわたしてこれを補強・固定して土盛りして堤防状につくられたものであろう。C列はA列・B列と平行して位置するから同一時期と考えてよい。J—10a地点でのB列～C列間の距離は約1.6m，J—10f地点北西側では約3.0mと幅広くなっており，この間が水路状の溝と考えた。3列の杭は溝の両側に打込まれたものと思われるがJ—10a・10f地点では流れから溝に水を引き込むような施設はみあたらなかった。

第11表　J—10a・f地点杭一覧表

杭 ＼ 出土地点		J—10a	J—10f 南側	J—10f 北側	TOTAL
A列	①	20	16	9	45
	②	8	0	4	12
	③	0	2	2	4
	不明	7	9	9	25
	小計	35	27	24	86
B列	①	16	52	15	83
	②	19	17	14	50
	③	8	1	7	16
	不明	5	3	10	18
	小計	48	73	46	167
C列	①	0	0	0	0
	②	1	12	0	13
	③	0	2	0	2
	不明	1	2	1	4
	小計	2	16	1	19
TOTAL	①	36	68	24	128
	②	28	29	18	75
	③	8	5	9	22
	不明	13	14	20	47
	小計	85	116	71	272

A・B・Cの杭列はJ—10a地点では南東隅，J—10f地点では南東隅と中央部の杭列が失われ，そのあとに流木群が集中している。これは大量の土砂によって杭列が被害を受け，そのあとに流木群が堆積したことをしめすもので，杭列は流木群より古い時期のものであったことが知れる。また上端を欠き先端のみが残る杭がA列に目立って多いことも流れに面して特に被害を受けやすかったことをしめしている。J—10f地点中央部は杭列が方向を転換し最も張り出す地点である。この部分はA列ばかりでなくB列の杭も流出したものが多く，最も被害の大きかった地点である。J—10a地点中央部からJ—10f地点のトレンチ中央部へ向う流れは中央部から西壁中央部へと方向を転換していることからも，トレンチ中央部のA列・B列の杭列が流れの被害を受けたことをしめしている。

杭列遺構と土層との関係はすでに述べたが，杭列遺構の杭がⅨ層より以前に打込まれていること，その上限はⅪ層中の土器より弥生時代前期後半から弥生時代中期中葉の間に構築されたものであると考えた。そして杭列遺構はⅪ層とⅥ層の被害を受けていることから，古墳時代の5c前半までは水利施設としての役割を果していたものと思われる。いつまで利用されていたかは推論の域を出ない。ただ注意されることは杭の上端と先端の位置で，杭の上端のレベルは一定したものではなく，X層の

下部に位置するものやⅨ層中に位置するものがある。

杭の中には先端が礫層（Ⅻ層）上面より40～50cm下まで達するのは杭の中でも古いと考えられるもので，打込まれたあと砂礫の堆積で埋設したのであろう。また杭の先端がⅩ層中に位置し礫層まで達していないものの中にはあとから打込れたものも含まれていると思われる。このように，杭列遺構が構築されたあとも被害を受けたところはたびたび補修されたと考えられる。板付遺跡[註(1)]では弥生時代前期前半の矢板列が検出され，中期中葉には堰などの生産施設が構築されており，鹿部山遺跡[註(2)]では弥生時代前期後半の水利施設構築の可能性が指摘されており，弥生時代の杭列遺構の発掘例を一つ追加することができた。

次に出土遺物についてまとめておこう。

土器は縄文・弥生・古墳各時代のものがある。J—10区から出土した土器をまとめると第12表のようになる。第7図，第23～26図にしめしたものが図示できる程度で，他はいずれも小片・細片が多く，この数量がそのまま個体数をしめすものではないが，大体の傾向を知ることはできる。弥生土器が圧倒的に多く，全体の80%を占める。J—10a・10f地点に弥生時代中期と考えられる杭列遺構があること，弥生時代中期の氾濫をしめすⅨ層によって流されたものが含まれていること，更にⅥ層によって流された中にも弥生土器が含まれていることなどによるのであろう。古墳時代の土師式土器は出土量も多くなく，縄文土器は十数点にすぎない。いずれも流れ込みと考えられるものである。

第12表　J—10区出土土器一覧表（表土中の土器を除く）

		J—10a	J—10b 砂層	J—10c 砂層	J—10e 砂層 AT	J—10e 砂層 BT	J—10e 砂層 CT	J—10f	農道1	出土地不明	TOTAL	
縄文土器	口縁部	7	0	0	0	0	0	3	0	0	10	19
	胴部	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4	
	底部	3	1	0	0	0	0	1	0	0	5	
弥生土器	口縁部	85	0	3	0	0	2	30	1	3	124	1338
	胴部	759	11	2	8	7	4	374	0	0	1165	
	器台	19	1	0	0	0	0	17	0	1	38	
	底部	4	0	0	0	0	0	2	0	0	6	
	高杯	4	0	0	0	0	0	1	0	0	5	
土師式土器	口縁部	8	2	0	1	2	1	2	0	1	17	227
	胴部	130	11	0	2	0	10	36	0	20	209	
	底部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	高杯	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
TOTAL		1022	27	5	12	9	17	466	1	25	1584	

縄文時代　土器は少量で後期の土器と晩期の夜臼式土器に分けられる。最も古い時期の土器は第23図—1にしめした後期前半の磨消縄文土器で，J—10f地点の上部砂層（Ⅵ層）から出土した。磨滅が著しく上から流されてきたものである。四箇周辺地域ではまだ後期前半にさかのぼる遺跡は発見されていない。

次に後期前半の土器（第7図—1）は北側に近接する四箇遺跡A地点と同時期のもので，四箇遺跡A地点がJ—10b地点まで広がっていることを示唆する

資料である。第23図—2はJ—10a地点砂層から出土したもので，ローリングを受けている。J—10a・10f地点の延長線上には四箇東遺跡が近接しており，三万田式土器の遺跡であるところから，四箇東遺跡のものが流されてきたのであろう。四箇周辺地域において夜臼式土器の遺跡は確認されていないが，低地に集落址がいとなまれていたのは確かなことであろう。早良平野の中では，鶴町遺跡[註3]，原・談議遺跡[註4]，牟多田遺跡[註5]，湯納遺跡[註6]のような低湿地遺跡からの出土例が多いことが注意される。いずれも流れ込みの資料が多く，同時期の実態は明らかでないが，今後の四箇周辺地域における調査でも注意すべき資料である。

弥生時代　土器は中期のものが大半を占め，前期の土器は数点しかない。後期の土器も少ない。弥生時代の最も古い時期の土器はJ—10f地点上部砂層から出土した前期前半のものである。板付Ⅰ式の甕形土器（第23図—7）で，夜臼式土器と共伴する資料であろう。前期後半の土器には甕形土器（第23—8）がある。いずれもJ—10a地点の砂層から出土したもので，杭列より以前の堆積であろう。J—10a・10f地点の北側に近接する微高地には縄文時代後期の遺跡（四箇遺跡A地点）の上に弥生時代前期後半から中期の集落遺跡（四箇遺跡B地点）があり，住居址，溝などが調査されている。J—10a地点から出土した前期後半の土器は磨滅が著しく上から流されてきたもので，四箇遺跡B地点のものではないと思われるが，四箇遺跡B地点以外にも付近に同時期の集落遺跡があったことを示唆している。中期の土器は最も出土量が多い。いずれも上からの流れ込みと思われるるが，D—12区（第1図）の字船石には支石墓があり，付近から中期の甕形土器片が表採される中期の遺跡（四箇船石遺跡）である。J—10a・10f地点の杭列遺構は弥生時代中期と考えたが，四箇遺跡B地点の東側にも中期と考えられる杭列遺構が調査され，石包丁，平鍬などが出土している（四箇遺跡E地点）。現在発掘調査を進めている四箇遺跡C地点（B地点の東側に隣接した地点）にはいくつかの杭列が検出されているが，その中の杭列間から杵，手斧柄頭が出土し，杭列直上の砂層に弥生時代後期の土器が含まれていることから，この杭列もあるいは弥生時代中期ものかも知れない。このように四箇遺跡B地点の周囲にもいくつかの弥生時代中期と考えられる杭列遺構が検出されているから，四箇遺跡B地点，四箇船石遺跡のほかにも同時期の遺跡が点在している可能性は大きいように思われる。J—10a・10f地点から出土した多量の弥生時代中期の土器は，これらの遺跡のものが流され堆積したものであろう。あるいはJ—10a・10f地点の杭列遺構が四箇遺跡B地点と関連する可能性もあるが，今年度の調査でこれを明らかにすることはできなかった。

弥生時代後期の土器は出土量が少なく，いずれも終末期に近い時期のものである。甕形土器のほかに叩目をもつ大型甕棺の口縁部片（第26図）もあり，沓形器台や高杯も出土している。いずれもJ—10a・10f地点の上部砂層（Ⅵ層）から出土し，流されてきたものである。その中で注意されるのはJ—10c地点砂層から出土した甕形土器（第7図—7）で，口縁から胴部へつづく破片は刷毛目調整がよく残り，磨滅を受けていない。付近には後期の遺跡はまだ確認

されていないから，今後に残された課題である。

古墳時代 土器は全て土師式土器で，須恵器は出土していない。いずれも上部砂層（Ⅵ層）出土で流されたものであるが，J—10a地点から出土した甕（第26図—41）はほぼ完形の状態で出土した。大量の土砂を押流したⅥ層の中に内面篦削の器壁のうすい甕形土器がほぼ完形の状態で出土した（PL．12—2）ことは，あまり遠くない地点に5c前半の遺構があったことを示唆するものとして注目される。早良平野の中でも前述の鶴町遺跡，牟多田遺跡，湯納遺跡から同時期の資料が出土しているが，四箇周辺地域においても平野の中の低地に5c前半まで集落が展開されていたことが確められた。第26図—42は5c後半の資料であるが，この時期の資料は他になく，上からの混入の可能性もあり，特にふれなかったが，5c後半以降における平野部の集落のあり方を考える上で無視できないものである。

土器とともに少量の**石器**も出土している。いずれも黒曜石製の石器で，ローリングを受けたものが多い。これらの石器が5c前半を下らない時期のものとして上限をおさえることはできるが，個々の石器がどの時期のものか検討を要する。砂層から出土した土器は縄文・弥生・古墳時代に及んでおり，上流には各時代の遺跡の存在が予想されるからである。その中で，土器のうち四箇東遺跡と関連する資料が出土していることに注意しておきたい。第27図の中には縄文後期後半の石器に比定しうるものも含まれているようであるが，四箇東遺跡の資料の整理作業に合わせて検討してゆきたい。

木製品の出土量も少なくない。木器（農具，手斧柄，容器，網枠，用途不明木器），杭，建築部材のほか加工小片，自然流木などがあり，杭列中の杭や横木が流失したものを除けば，ほとんどが上流から流されてきたものである。これらの木製品が弥生時代（Ⅸ層）と古墳時代（Ⅵ層）の二度にわたる氾濫によって流され混在しているところから，個々の時期を明らかにすることはできない。流木群の中に多量の杭が含まれている（第6表）のは，上流の低地に構築されたJ—10a・10f地点と同様な杭列遺構を押し流されてきたものではないかとも考えられる。山本輝雄氏には出土建築部材の考察をお願いしたが，これら建築部材と類似した資料は鶴町遺跡や湯納遺跡に出土例がある。湯納遺跡は4c前半，鶴町遺跡は4c後半と考えられる建築部材であるが，二又状に分れるものや欠き込みをもつほか，枘孔を有するなど精巧な加工材がある。これに対しJ—10a・10f地点の建築部材はJ—10a地点出土土師器と同時期の5c前半考えられるが，湯納遺跡や鶴町遺跡に比べると加工の簡単なものである。農具の出土例は鶴町遺跡，湯納遺跡，下山門遺跡[註(7)]，板付遺跡や鹿部山遺跡などにみられ，形態の類似する資料もあるが，時期を明らかにできるものはない。その中で第28図のf—370はJ—10f地点北西隅の下部砂層から出土した船形突起をもつ四又鍬は，弥生時代のものである可能性が強い。a—123やf—250は全長が60cmを超える大形の三又鍬で，湿田の深耕に適した農耕具と考えら

れるものである。網枠と考えたものは里田原遺跡[註(8)]（弥生中期前半），板付遺跡（弥生中期中葉）に類似資料があり，弥生時代に比定してよいのかも知れない。第30図の木器は下山門遺跡や湯納遺跡に類似資料があるが，その用途は類例の増加をまって検討したい。第８図―２（Ｊ―10ｅ地点），第29図―１（Ｊ―10ａ地点）の木器は類例に乏しい資料で，御教示をあおぎたい。

以上本年度の調査結果をもとに主に四箇周辺地域との関連を意識して記述したのは，今後の四箇周辺地域における調査の出発点としたいと考えたからである。現段階における一応のまとめとして御教示をあおぎ，今後修正補足してゆくことにしたい。

出土材のうち自然流木を除いた約600点の資料について，嶋倉巳三郎先生に樹種の同定をお願いしている。依頼時期の遅かったことが大きな理由であるが，出土点数が多いことも重なって出土材の樹種や特徴などについて報告を間に合わせることができなかった。木器・杭・建築部材などの出土材の樹種について特にふれなかったのは以上のような事情による。木器・杭・建築部材のような加工材の樹種と自然流木との比較も必要であり，これにはなお時間を要する。また，花粉分析結果と対照すべきＪ―10ａ地点（南―16）の種子分析結果も間に合わせることができなかった。これらは来年度の報告書の中にまとめて報告することにしたい。

低湿地という遺跡の性格を反映して問題点も多い。調査上の問題としてはまずＪ―10ａ地点とＪ―10ｆ地点の杭列を連続するものであり，Ａ・Ｂ列とＣ列の間が水路状をなした水利施設と考えたが，Ｊ―10ｆ地点南側のＣ列杭の残存状態が悪く，Ｊ―10ａ地点では北東隅で２本の杭を確認したにすぎない。これはＪ―10ａ地点と10ｆ地点の間に位置する四箇503―７の発掘調査によって確認することが必要であり，今後に問題を残した。次に，Ｊ―10ａ・10ｆ地点のようにⅨ層の堆積物がⅥ層に切られ混在した出土状態をしめすことから各々の出土遺物の時期を特定できないものが多かった。今回の調査で杭と横木を緊縛するようなものは見あたらなかったが，ＰＬ．14―(2)のようなことが行なわれていたとすれば，なお一層の注意を払った調査が必要であり，留意すべき点である。多くの出土材は現在簡単な木枠の水槽に収納したままの状態で，四箇遺跡各地点の出土材を含めると２×４ｍの収納ケースが30個以上にのぼる。定期的に水替えをしたり，おおいをするなどの配慮をしているものの冬期には霜や氷の被害を受け，破損の著しいものもあり，破損は日々進行しているといってよい。資料整理までの期間はもちろんのこと，資料整理終了後の出土材の保在方法と維持管理は今後の大きな難問である。

四箇周辺地域における開発事業は今後ますます多くなることが予想され，これに対応できる調査体制を整備することが当面の急務であるが，四箇東遺跡や字船石の支石墓を含めた周辺遺跡の保存対策をも策定すべきであろう。

参　考　文　献

註(1) 福岡市教育委員会『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告第35集　1976年

(2) 九州大学考古学研究室『鹿部山遺跡』日本住宅公団福岡支社　1973年

(3) 福岡市教育委員会『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第37集　1976年

(4) 1975年夏に調査会によって発掘調査され，現在資料整理中。

(5) 福岡市教育委員会『牟多田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第27集　1974年

(6) 福岡県教育委員会『福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集　1976年

(7) 福岡市教育委員会『下山門遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第23集　1973年

(8) 長崎県教育委員会『里田原遺跡展』　1975年
里田原遺跡の資料については長崎県文化課正林護氏の教示を受けた。

最後に，最近の四箇遺跡及び四箇周辺地域の調査に関する発表・文献をまとめると次のようなものがある（1977年3月現在）。四箇遺跡の調査は3年目を迎えてなお継続中であり，発表後の新たな知見などにより，一部に修正・補筆すべきものもあることをおことわりしておく。

1. 賀川光夫「縄文後期黒色磨研土器」――所謂磨研土器の系譜とその背景――
『考古学論叢』3　1975年5月

2. 二宮忠司「四箇遺跡」　『ふるさとの自然と歴史』第53号　福岡　1975年10月

3. 柳田純孝「福岡市西区四箇遺跡の調査」九州史学会昭和50年度研究発表要旨
『九州考古学』51　1975年12月

4. 山崎純男ほか「1975年の考古学界の動向」―縄文時代―
『考古学ジャーナル』123　1976年6月

5. 柳田純孝「福岡市四箇周辺における縄文遺跡の調査」
日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨　1976年11月

6. 「九州の原始文様展―縄文土器にその原点を探る―」図録　佐賀県立博物館　1977年1月

この他，昭和51年度特定研究「古文化財」年次報告（1977年1月）の中に四箇遺跡及び四箇周辺遺跡関係分として次のものがある。

B－1　稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究（代表研究者　中村　純）
――四箇南遺跡（福岡県）――

B－2　古代における栽培植物および利用植物の残存遺物に関する研究（代表研究者藤原宏志）

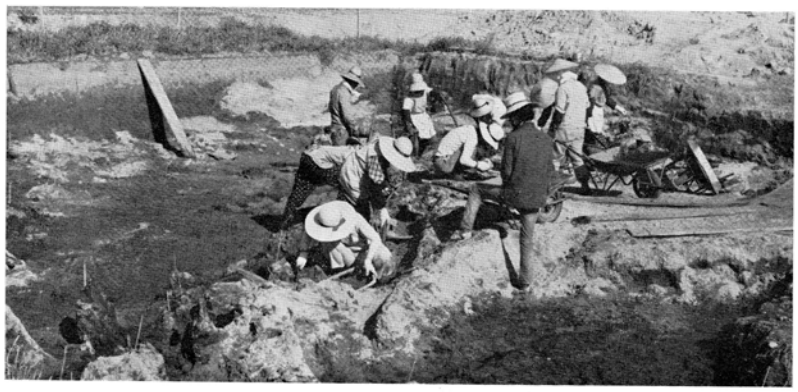
(1) プラント・オパール分析の方法的確立と古代遺跡土壌　藤原宏志
――福岡・四箇東遺跡（一次）――

(2) 古代遺跡の発掘植物とくに種子から見た利用植物と農利形態　笠原安夫
――福岡　四箇遺跡――

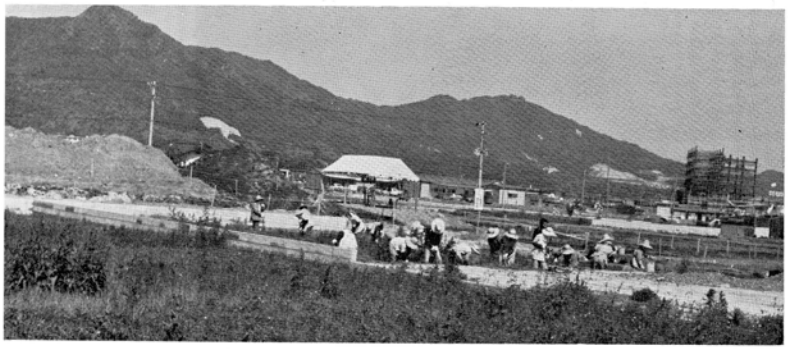
(4) 〝生物組織低温灰化プラズマ灰化法〟による出土植物種の同定ならびに古代植生の推定
――四箇遺跡，四箇東遺跡（2次）――　梅本光一郎

B－5　植物性遺物による古代人の生活と環境についての研究（代表研究者　粉川昭平）
――四箇南遺跡，四箇A地点――

図　　版



J—10a地点
（1976年5月）



中・下　J—10e地点（1976年6月）

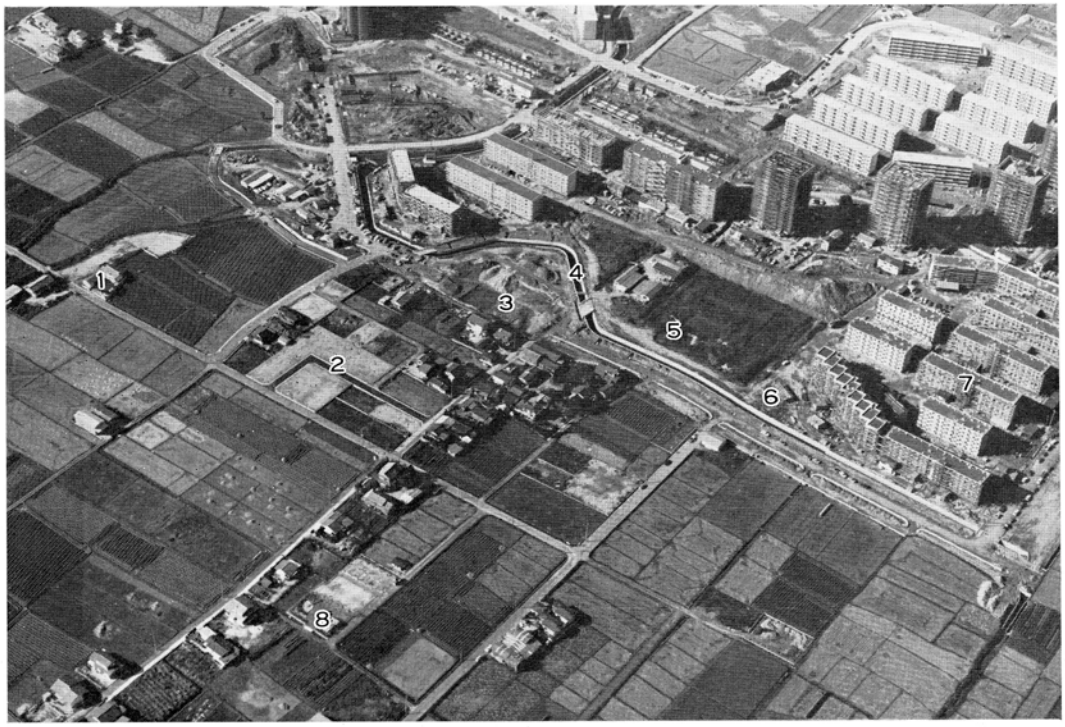
J—10区発掘調査風景

（1）四箇周辺遠景　　（後方は博多湾　南から　1976年11月）

1　J—10区　　2　四箇船石遺跡　　3　灰（拝）塚

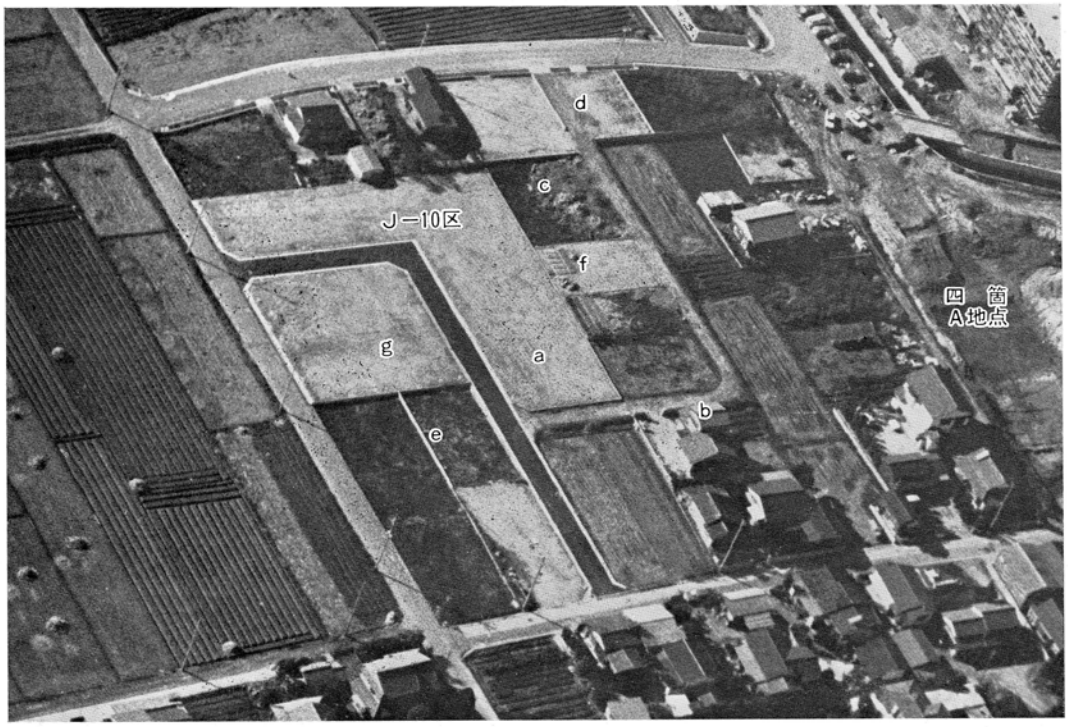
（2）四箇周辺遠景　　（手前は室見川　西から　1975年6月）

1　J—10区　　2　四箇遺跡（A～E地点）中央荒地は日本住宅公団造成区域



（1）四箇周辺全景　（南東から　1976年11月）

1　J－9区　2　J－10区　3　四箇遺跡A地点　4　B地点　5　C地点
6　E地点　7　D地点　8　四箇東遺跡



（2）四箇J－10区発掘地点全景　（発掘終了後　南東から　1976年11月）

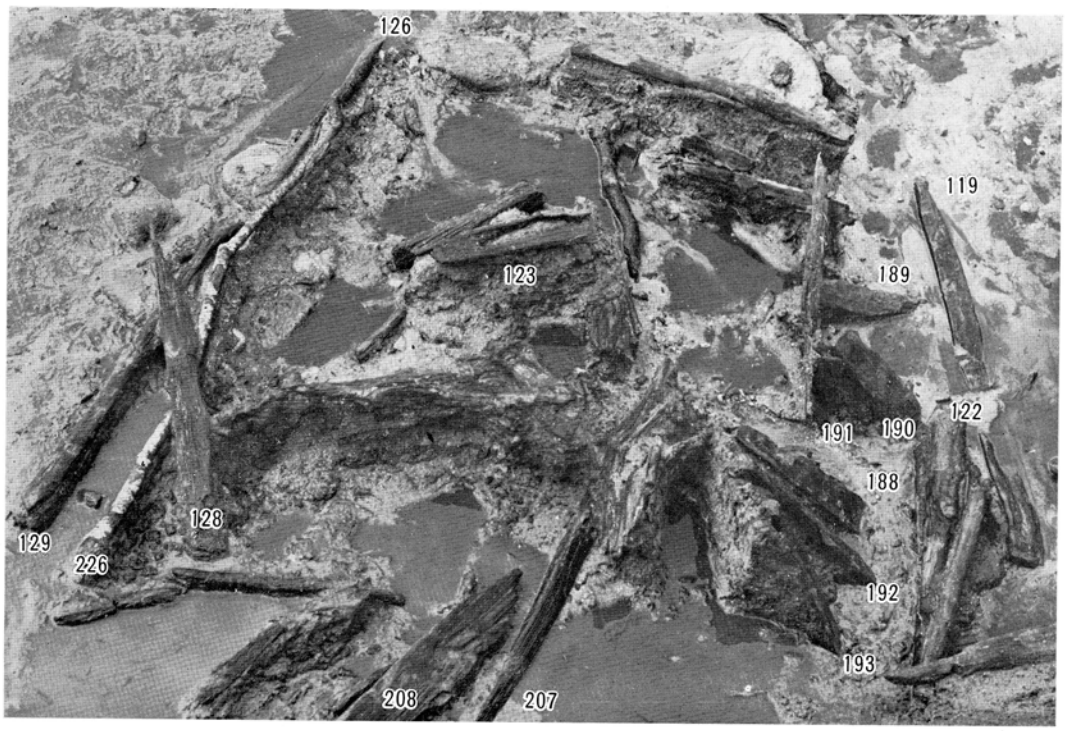
（1）J—10a 地点全景　（南西から）

（2）J—10a 地点全景　（北西から）

（1） J—10a 地点流木群出土状態　（南東から）

（2） J—10a 地点流木群出土状態　（北東から）

（1）J—10a 地点流木群出土状態　　（西から）

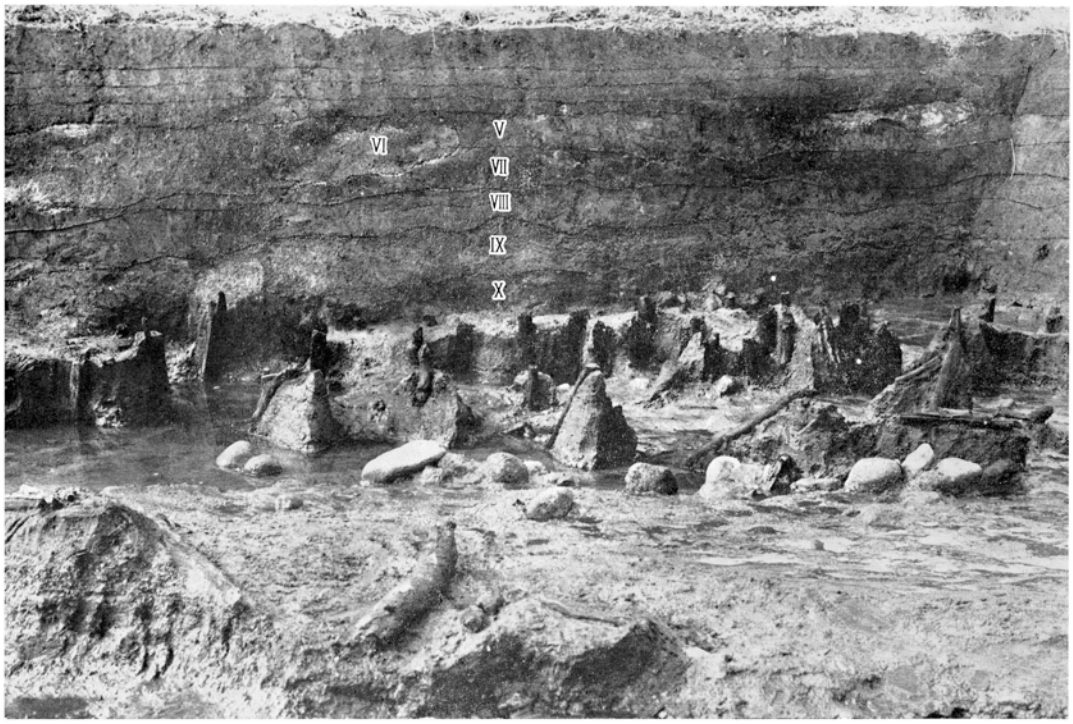


（2）J—10a 地点A列南側の杭及び流木出土状態　　（南から）

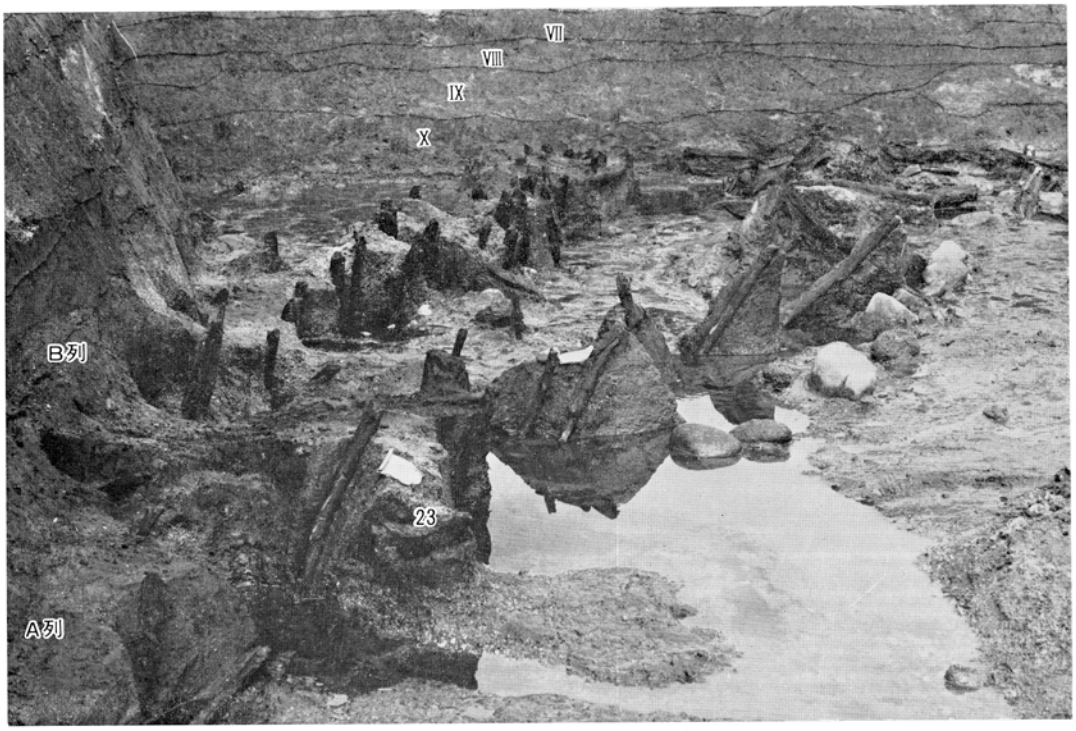
123（28㎜）　190・192（12㎜）　119・208（31㎜）　226（自然流木）

（1） J—10a 地点遺物出土状態　　Ⅵ層出土の土師式土器（第26図—41参照）

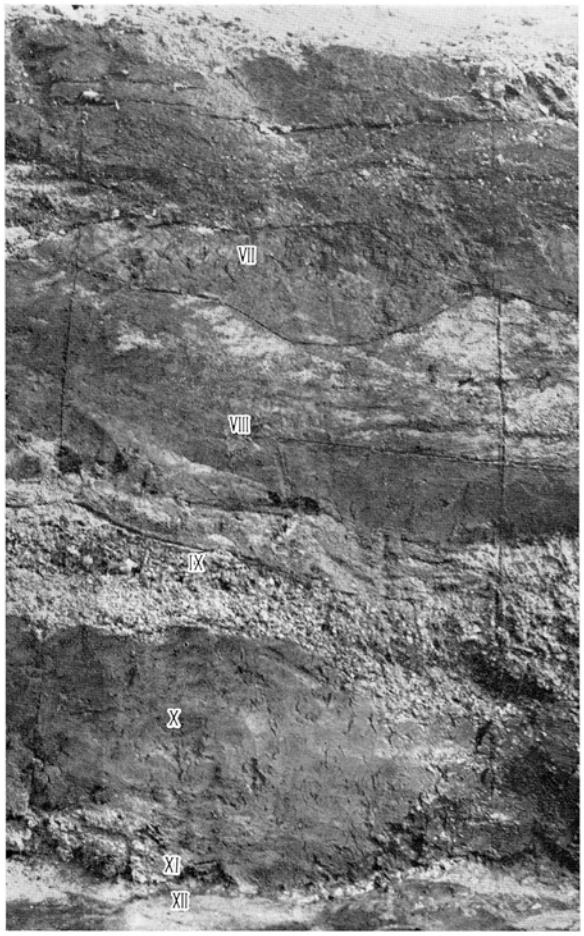
（2） J—10a 地点遺物出土状態　　Ⅵ層出土の三又鍬（第28図 a —15参照）

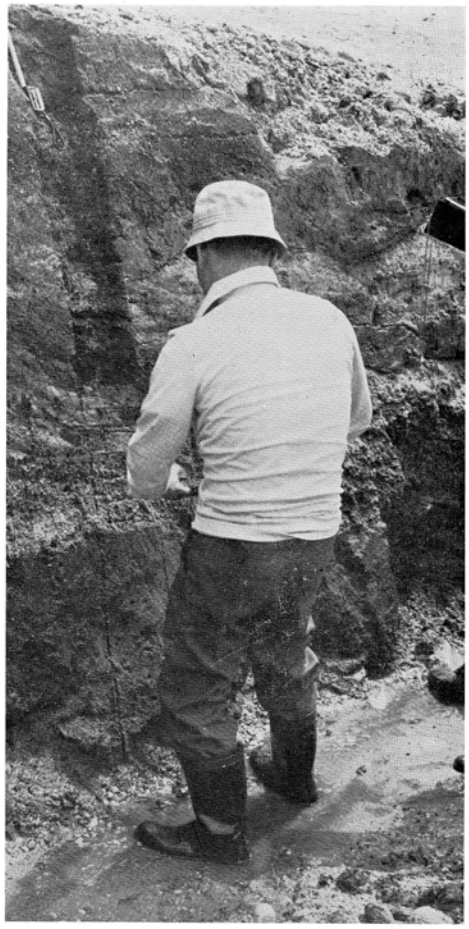


（1） J—10a 地点杭列と土層（北断面）の関係　　（南から）

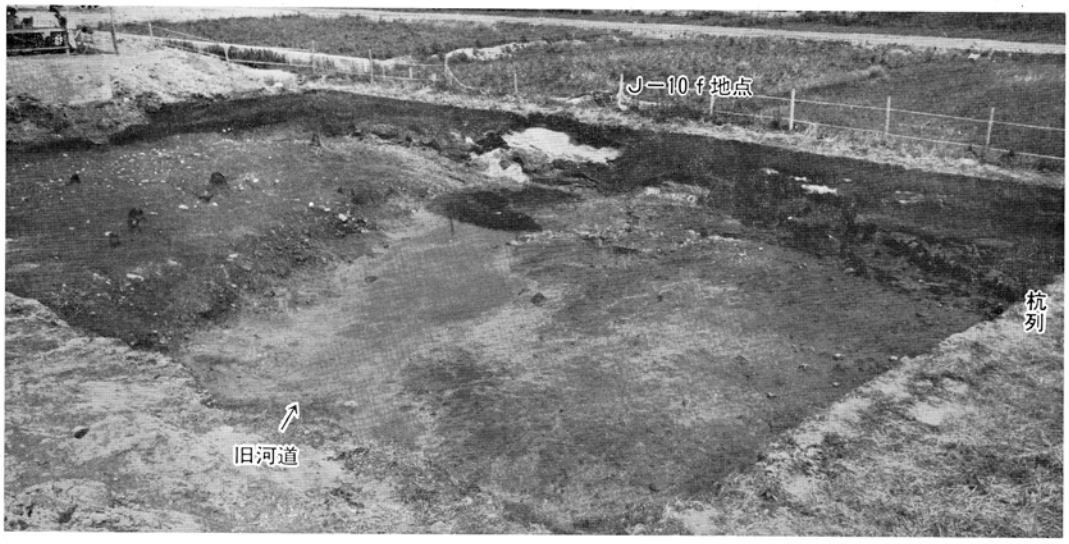


（2） J—10a 地点杭列と土層（東断面）の関係　　23（第24図—23参照）（西から）





（1）J—10a 地点南断面（南—16）の土層と土壌採取風景　（1976年 5 月28日）

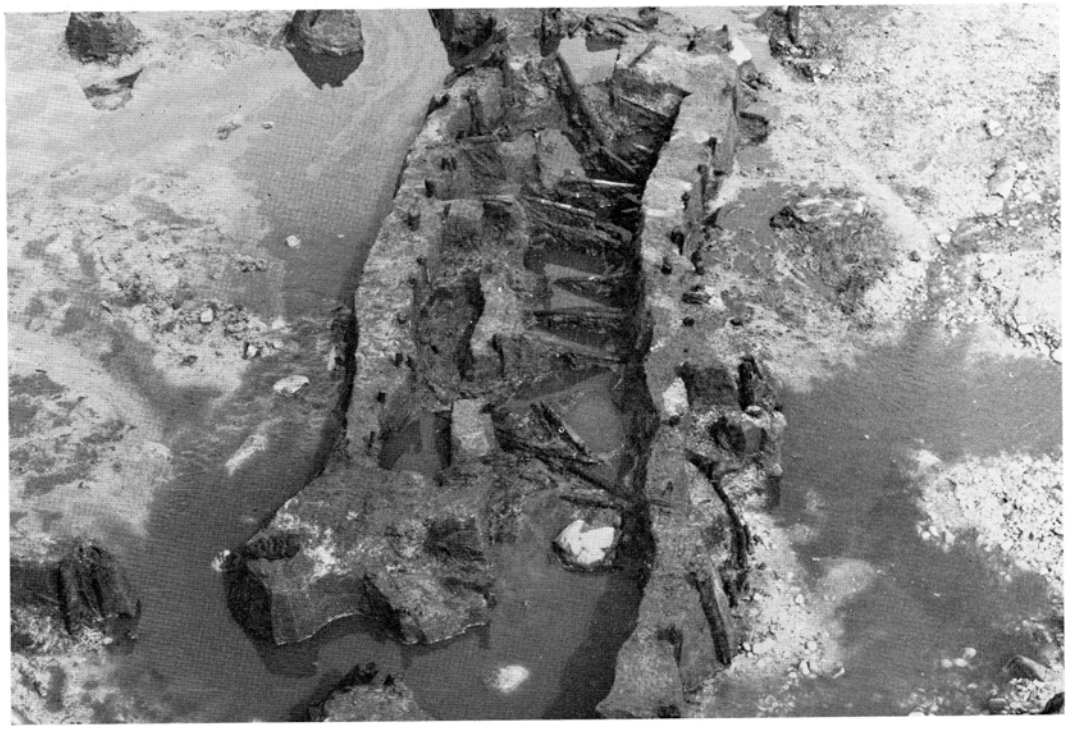


（2）J—10a 地点流木群取上後の旧河道と杭列の関係　（南東から）

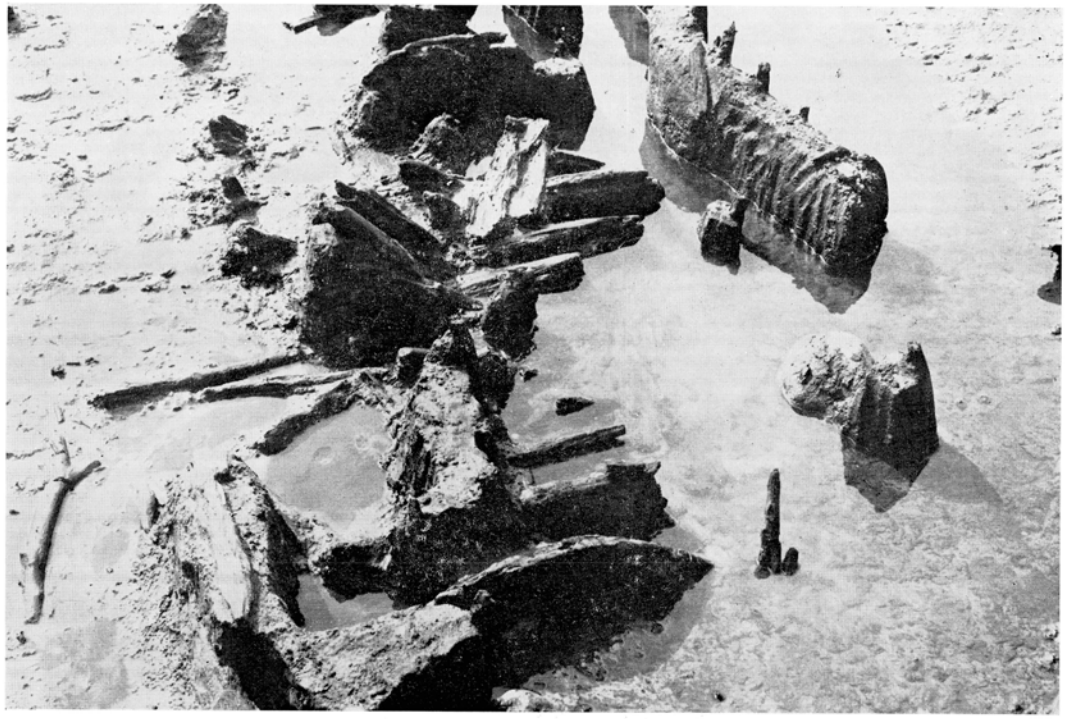
（1） J—10 f 地点全景　（南西から）

（2） J—10 f 地点全景　（南東から）

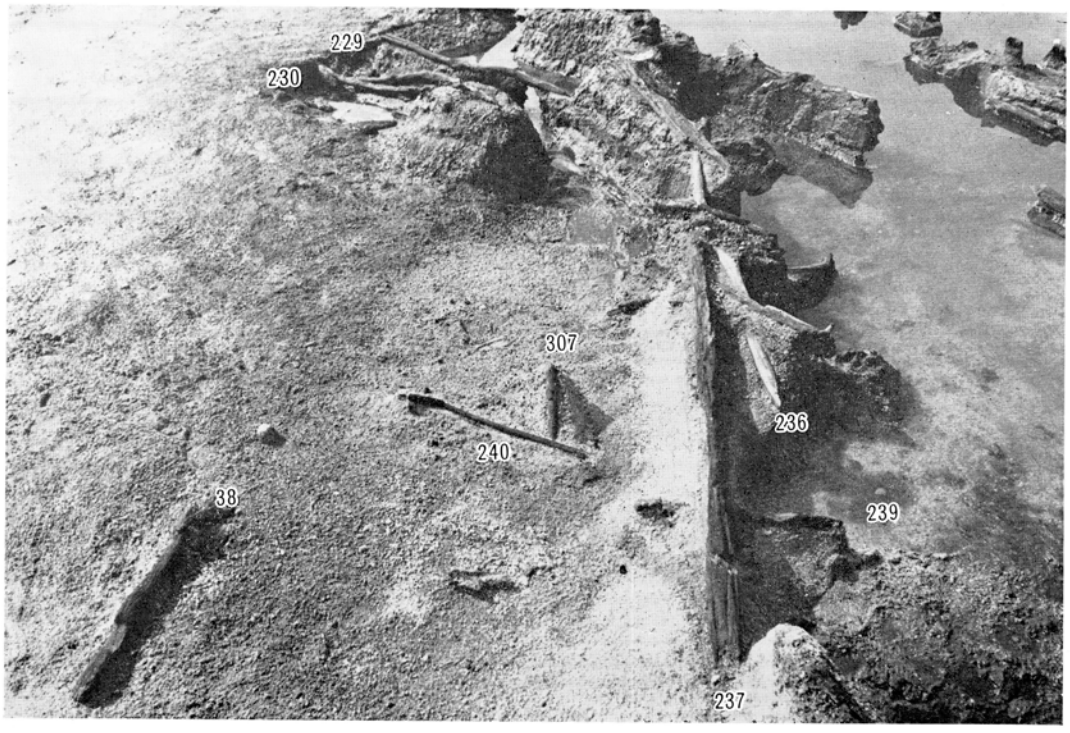
（1） J—10 f 地点の杭列　　（北西から）



（2） J—10 f 地点北側A・B列の杭と横木出土状態　　（北から）

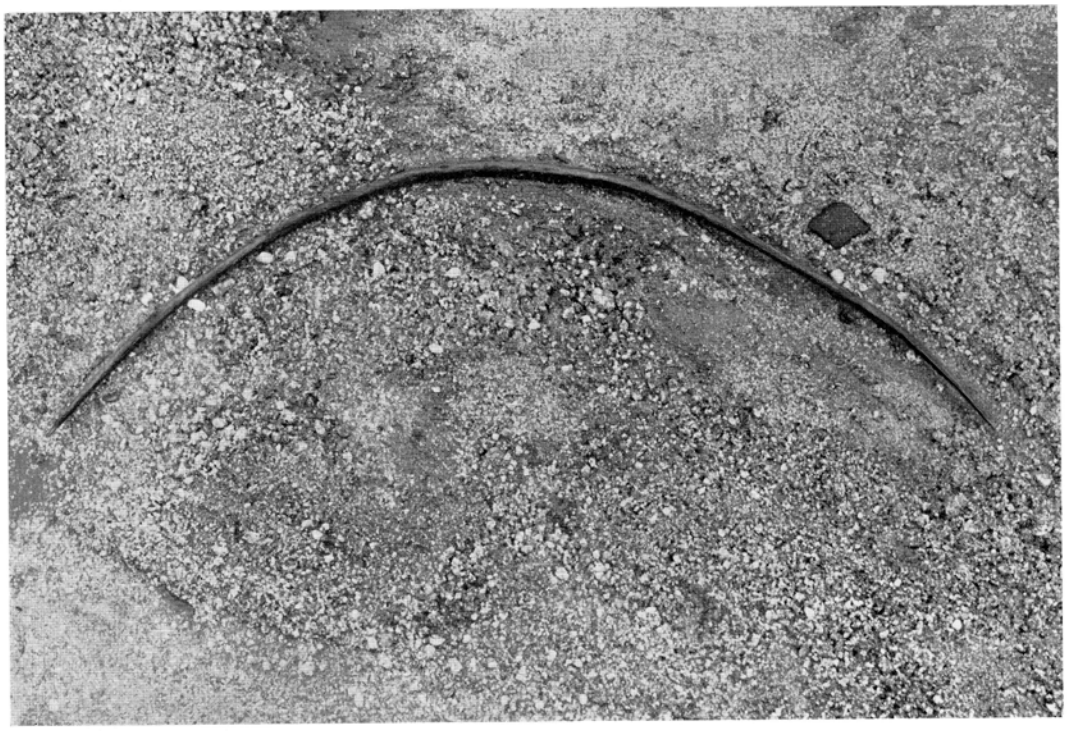


（1）J—10f地点南側A・B列の杭と横木出土状態　（南から）



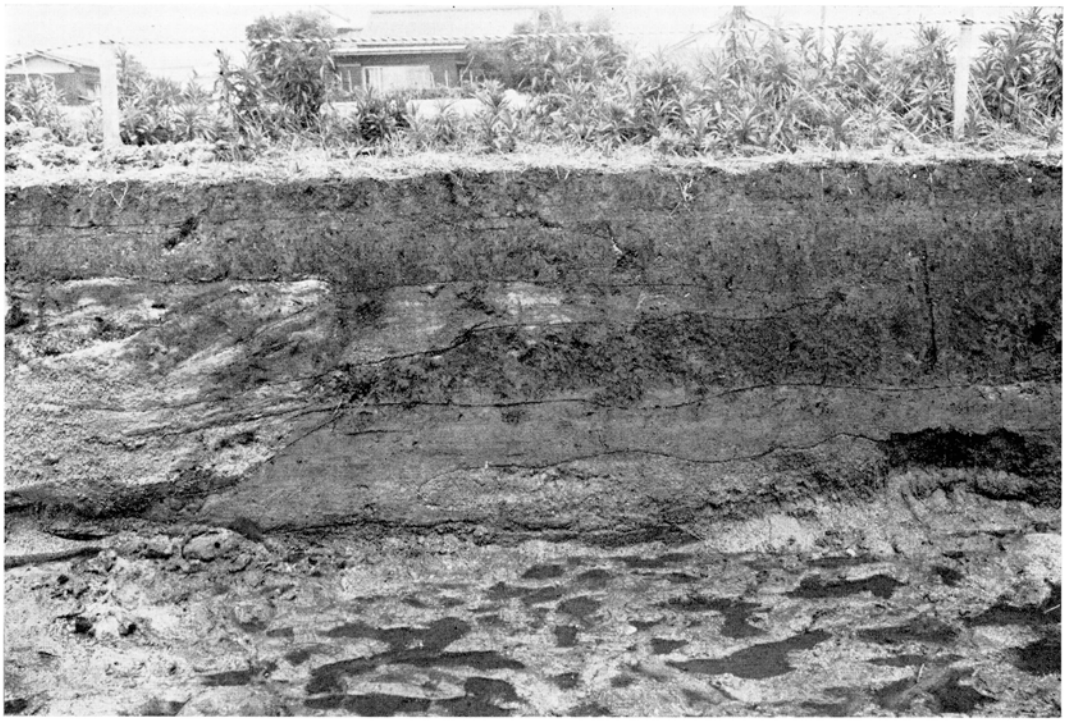
（2）J—10f地点流木群出土状態　（南から）

240（30図）　38・236（32図）　229・230（33図）



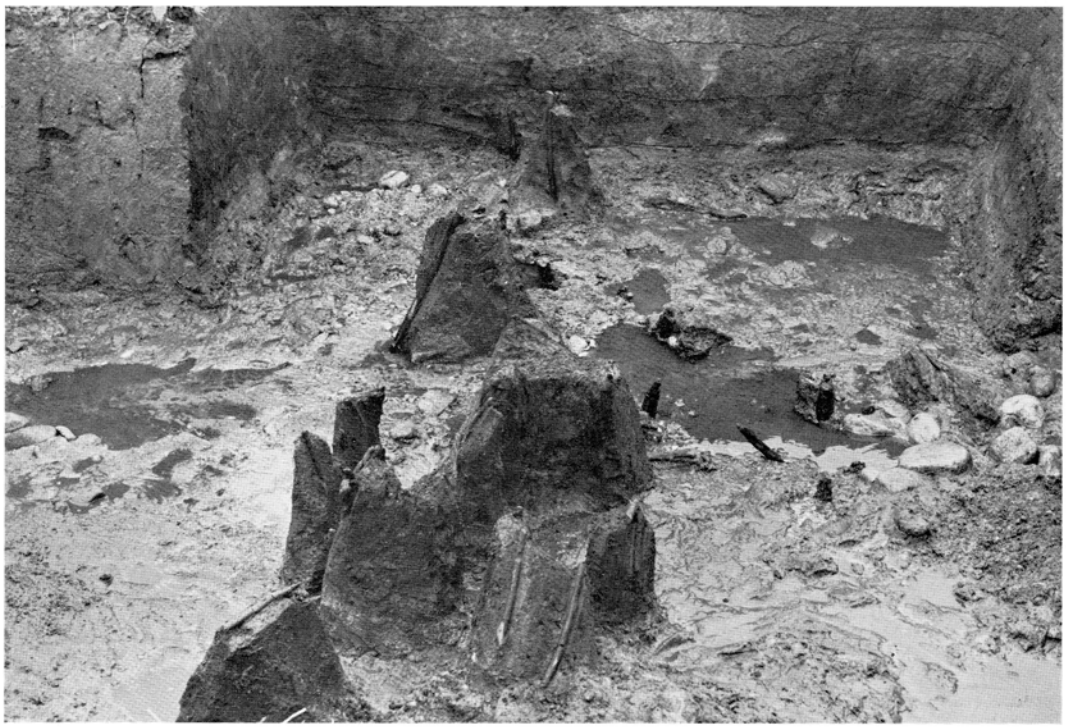
（1） J—10 f 地点遺物出土状態　　VI層出土の網枠（第29図 f —367参照）

（2） J—10 f 地点遺物出土状態　　VI層出土の容器（第29図 f —368参照）



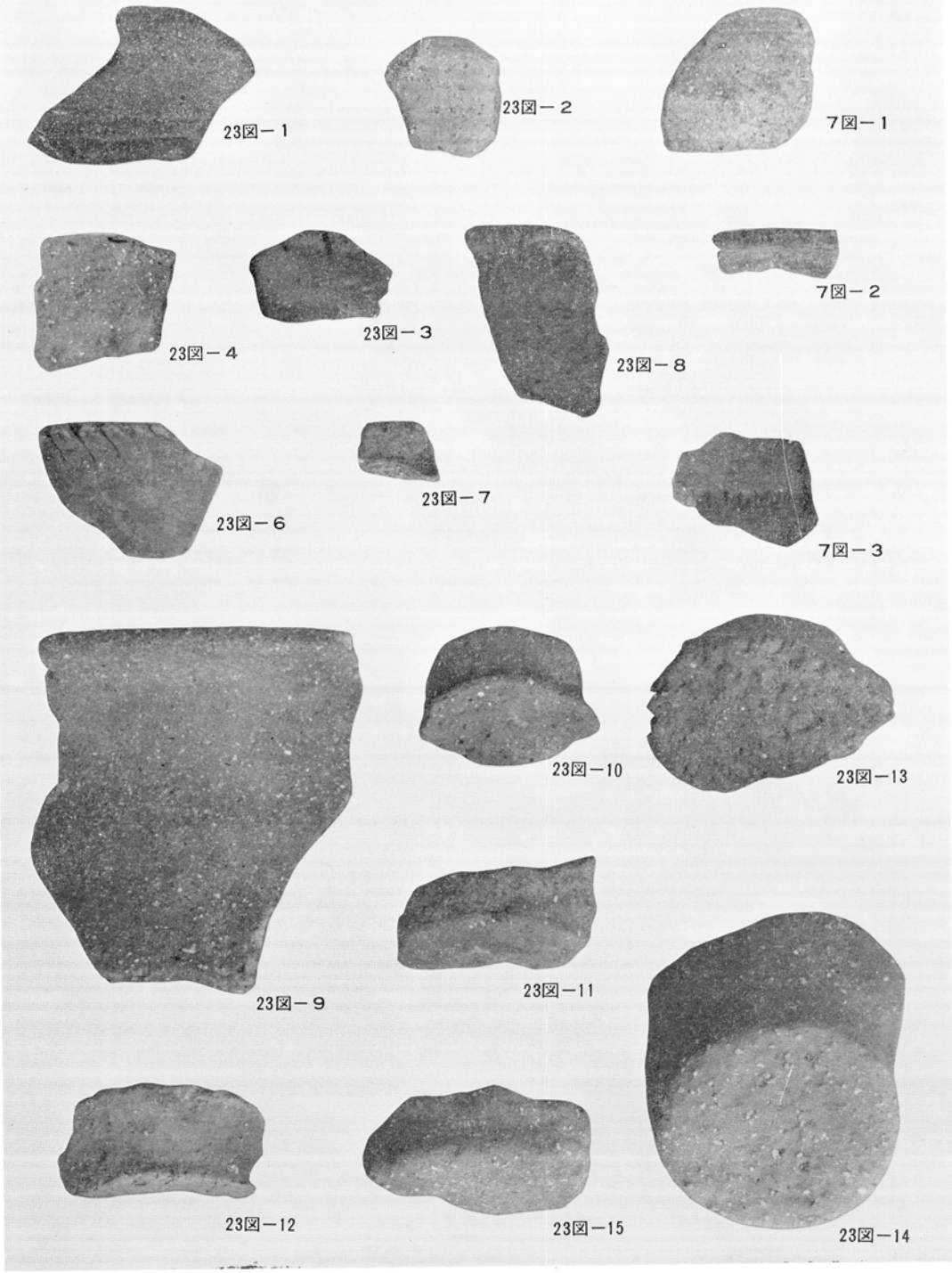
（1） J—10 f 地点東断面の土層　　（西から）

（2） J—10 f 地点東断面の杭出土状態　　（西から　P.30参照）

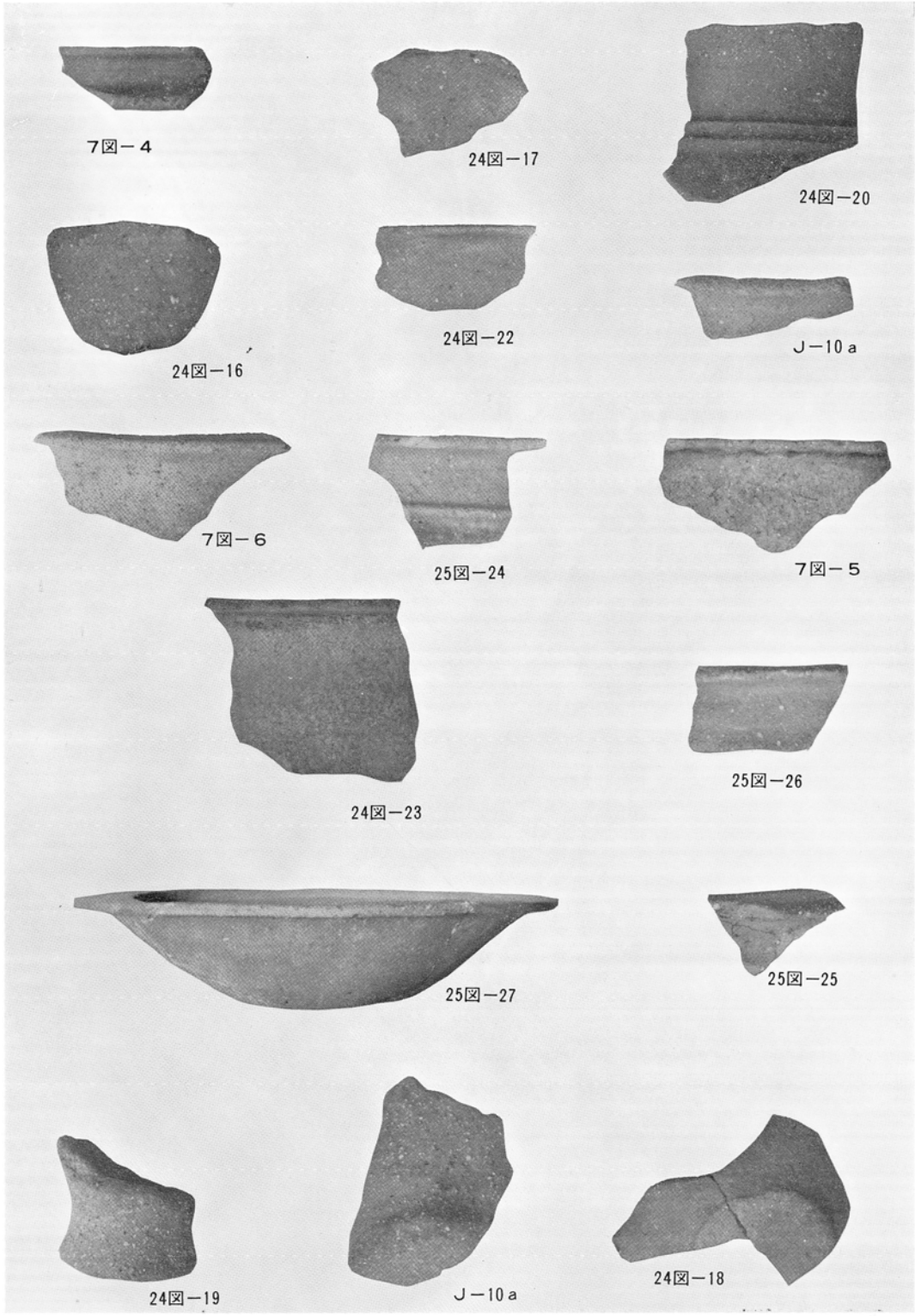


（1） J—10e 地点AT杭出土状態　（東から）

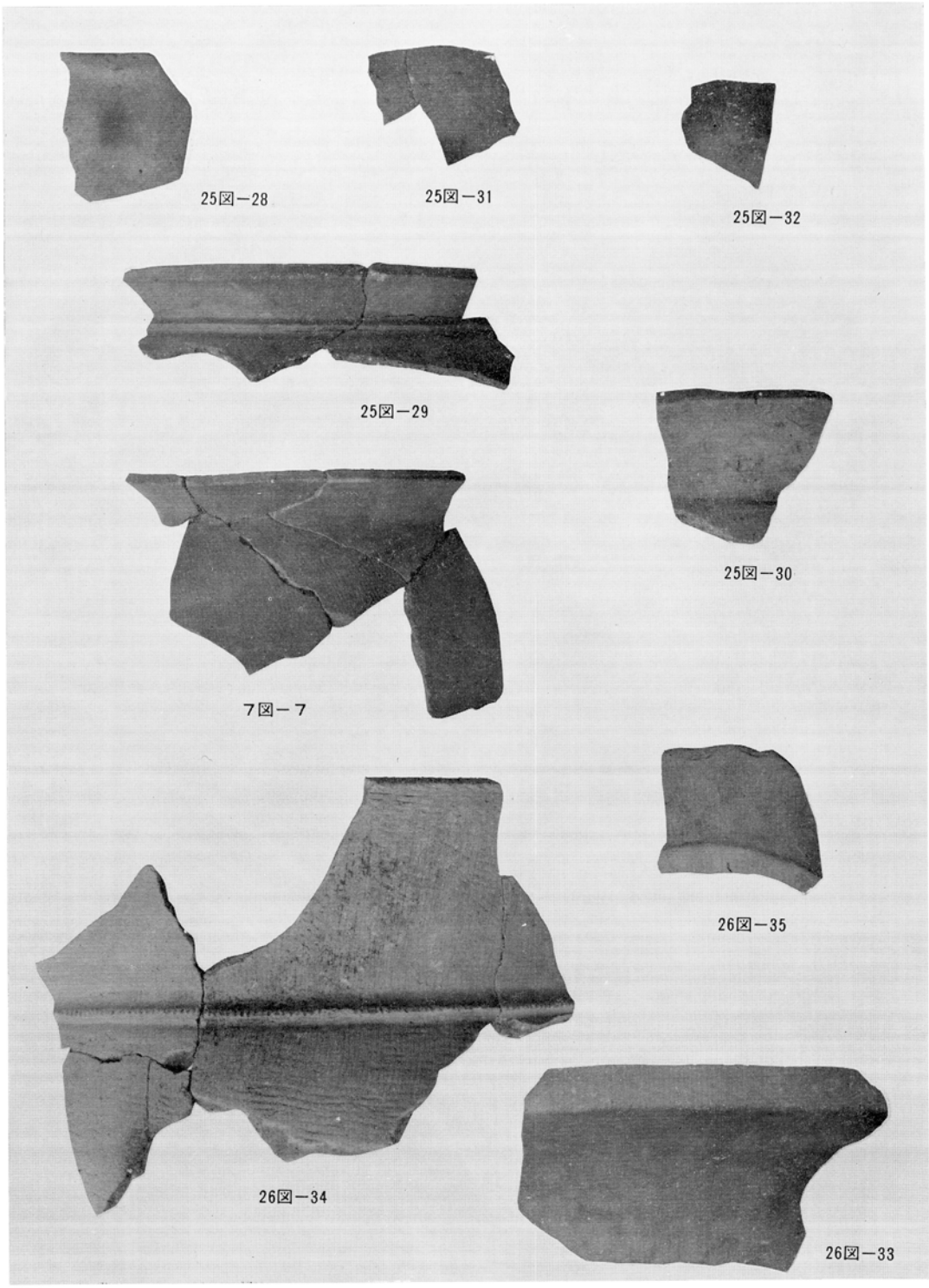
（2） J—10g 地点全景　（北東から）



J—10区出土土器—1　（第7・23図参照）（縮尺1/3）



J—10区出土土器— 2　（第 7 ・ 23 ・ 24 ・ 25図参照）（縮尺1/3）



J—10区出土土器—3　（第7・25・26図参照）（縮尺1/3）

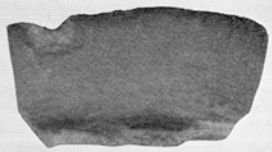
26図－41

26図－37

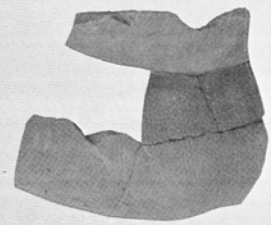
26図－40

26図－36

7図－8



26図－37

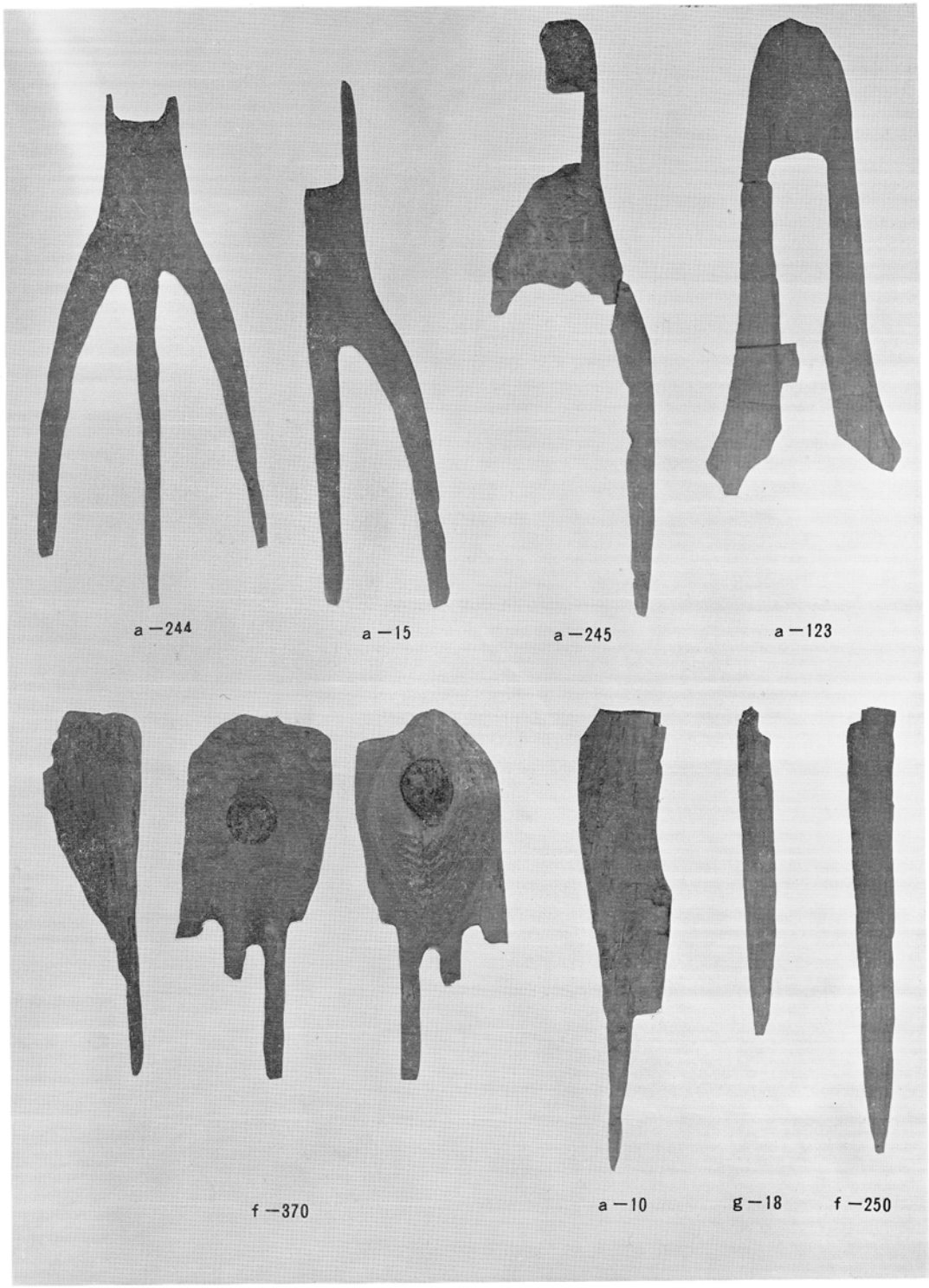


26図－38

J—10区出土土器—4

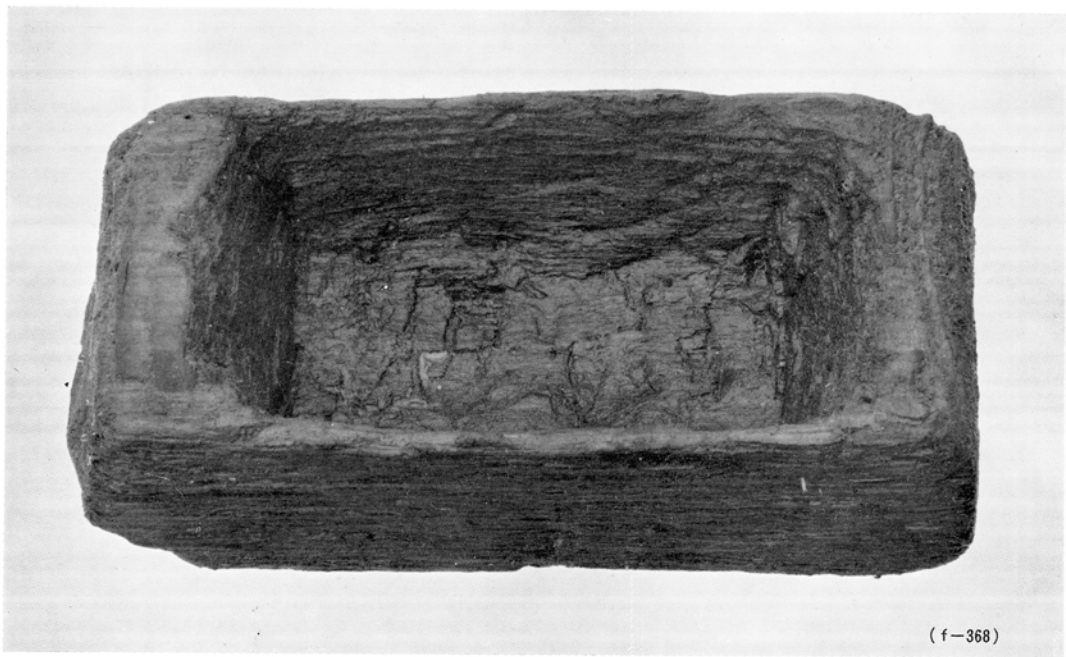
（第7・26図参照）（縮尺1/3）

J-10区出土石器　（第27図参照）（縮尺1/1）

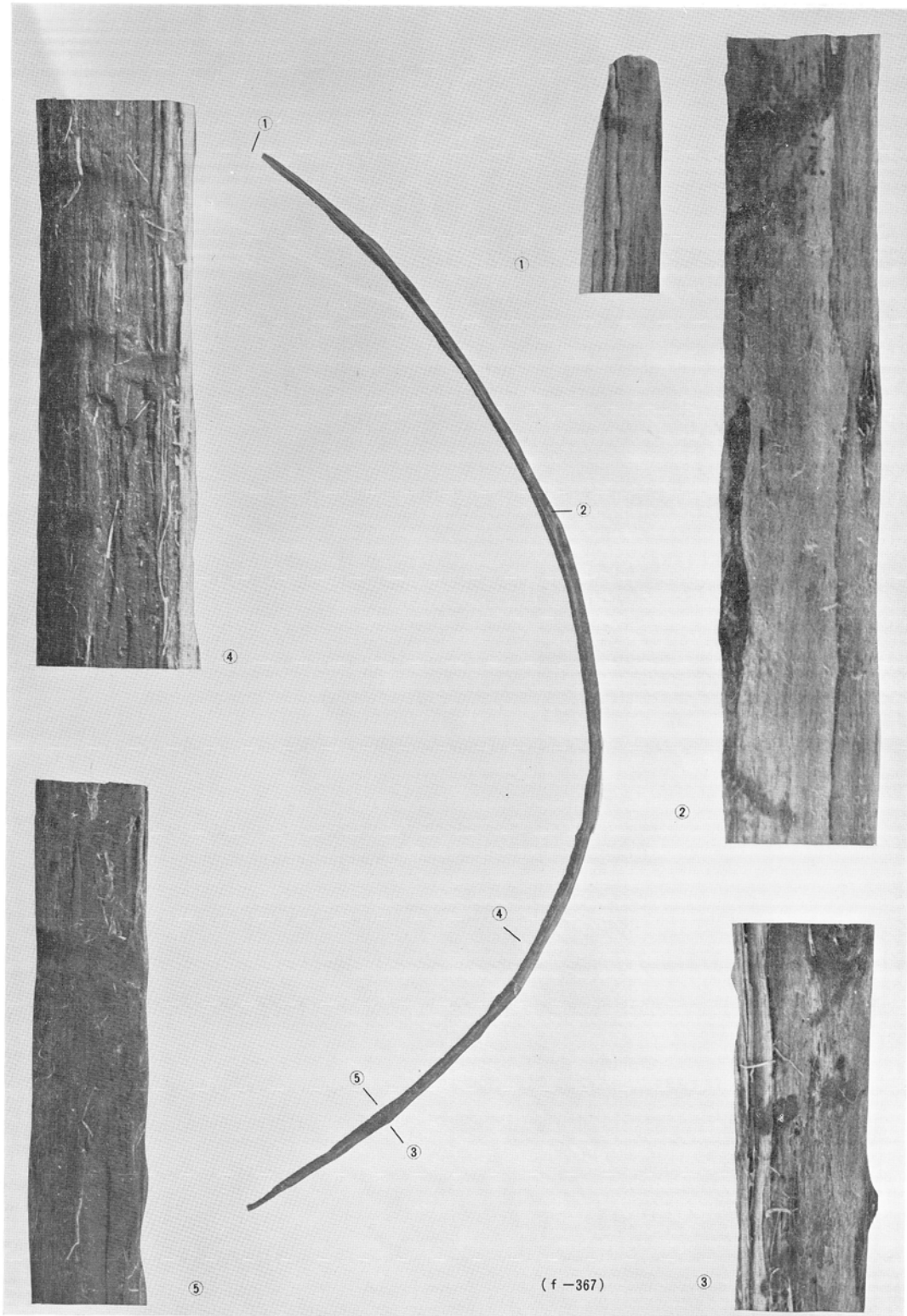


J—10区出土農具　（第28図参照）（縮尺1/4）

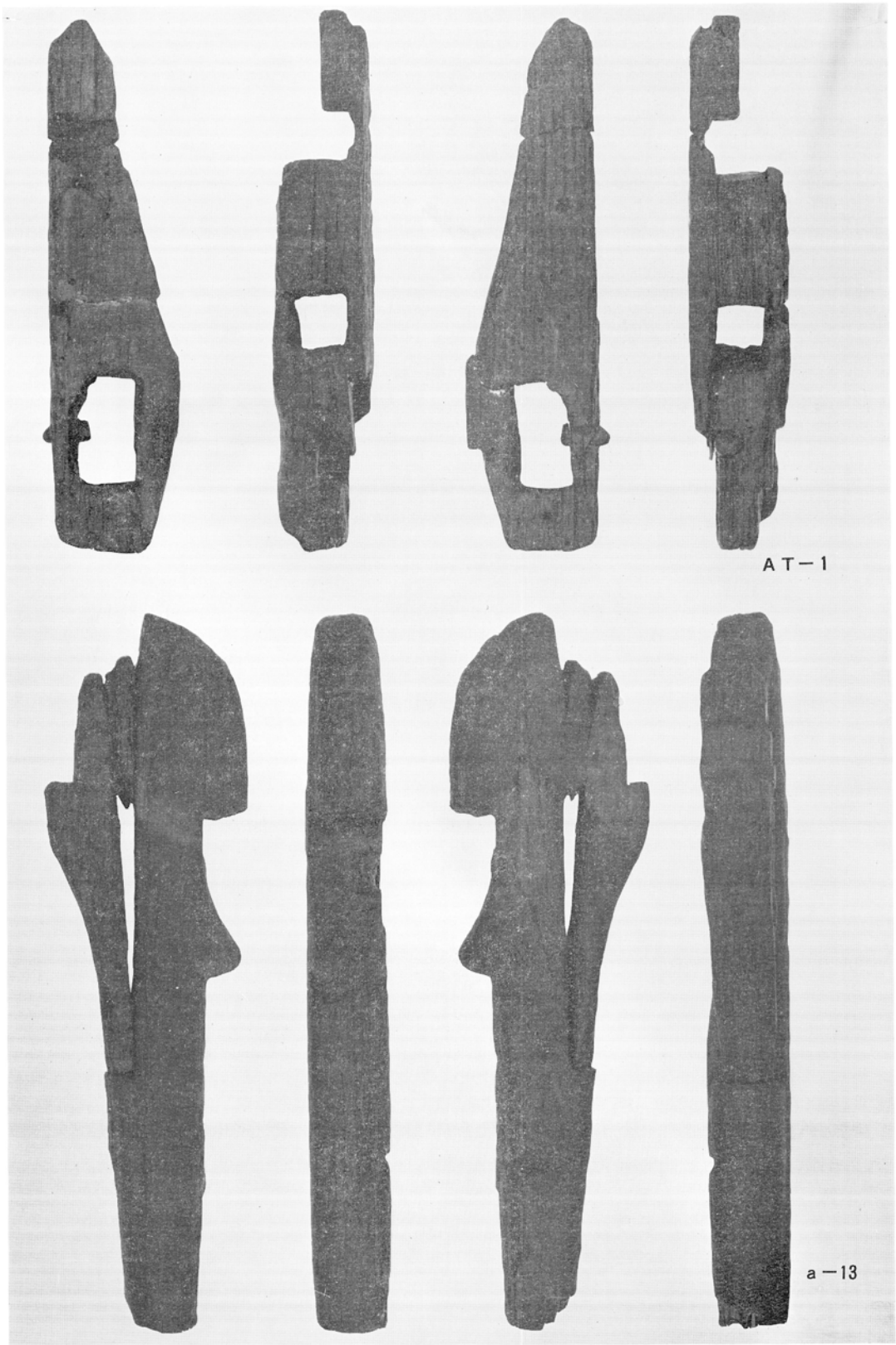
（1）J—10e地点出土木器未製品　（第8図参照）（縮尺4/5）



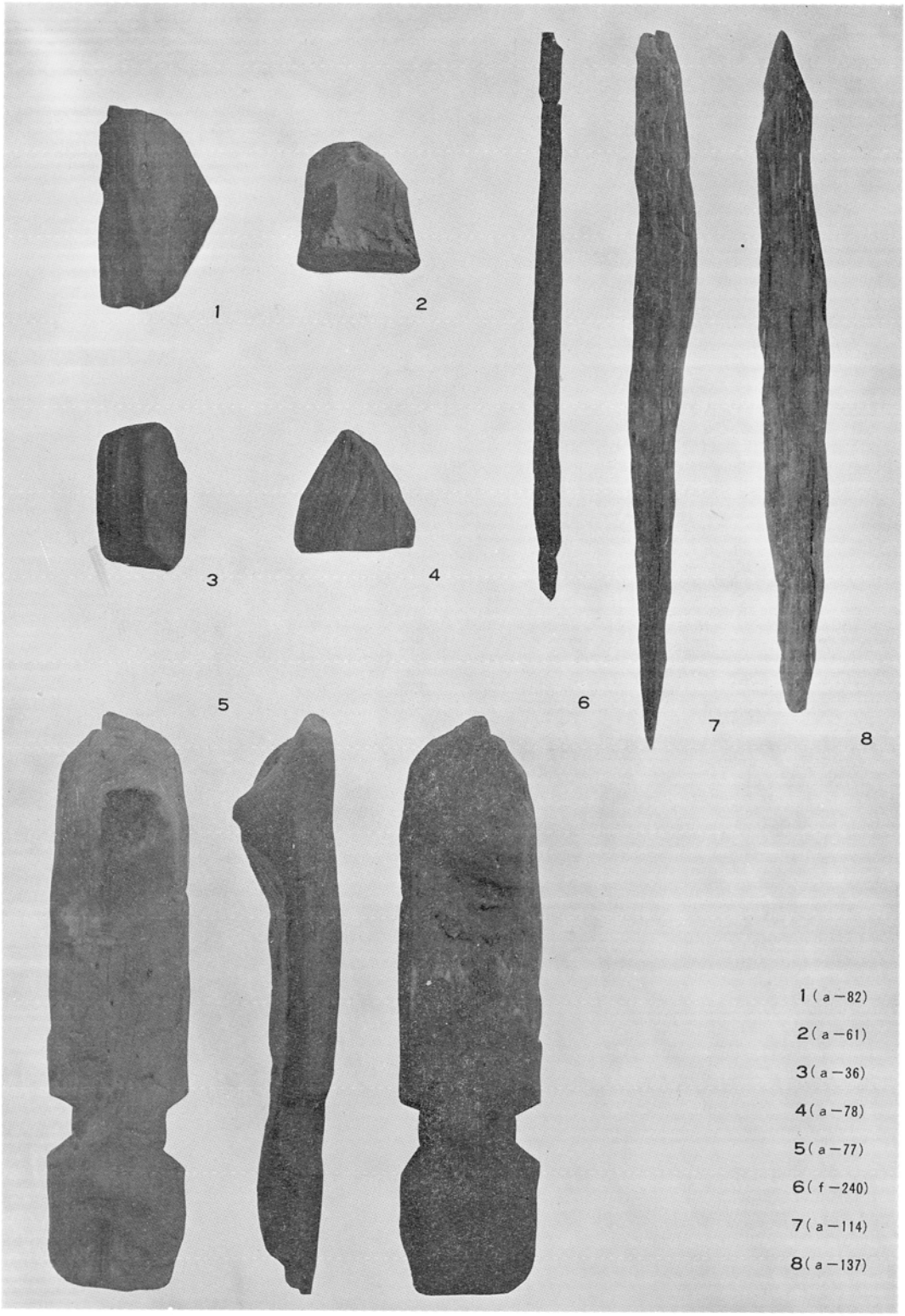
（2）J—10f地点出土容器　（第29図参照）（縮尺4/5）



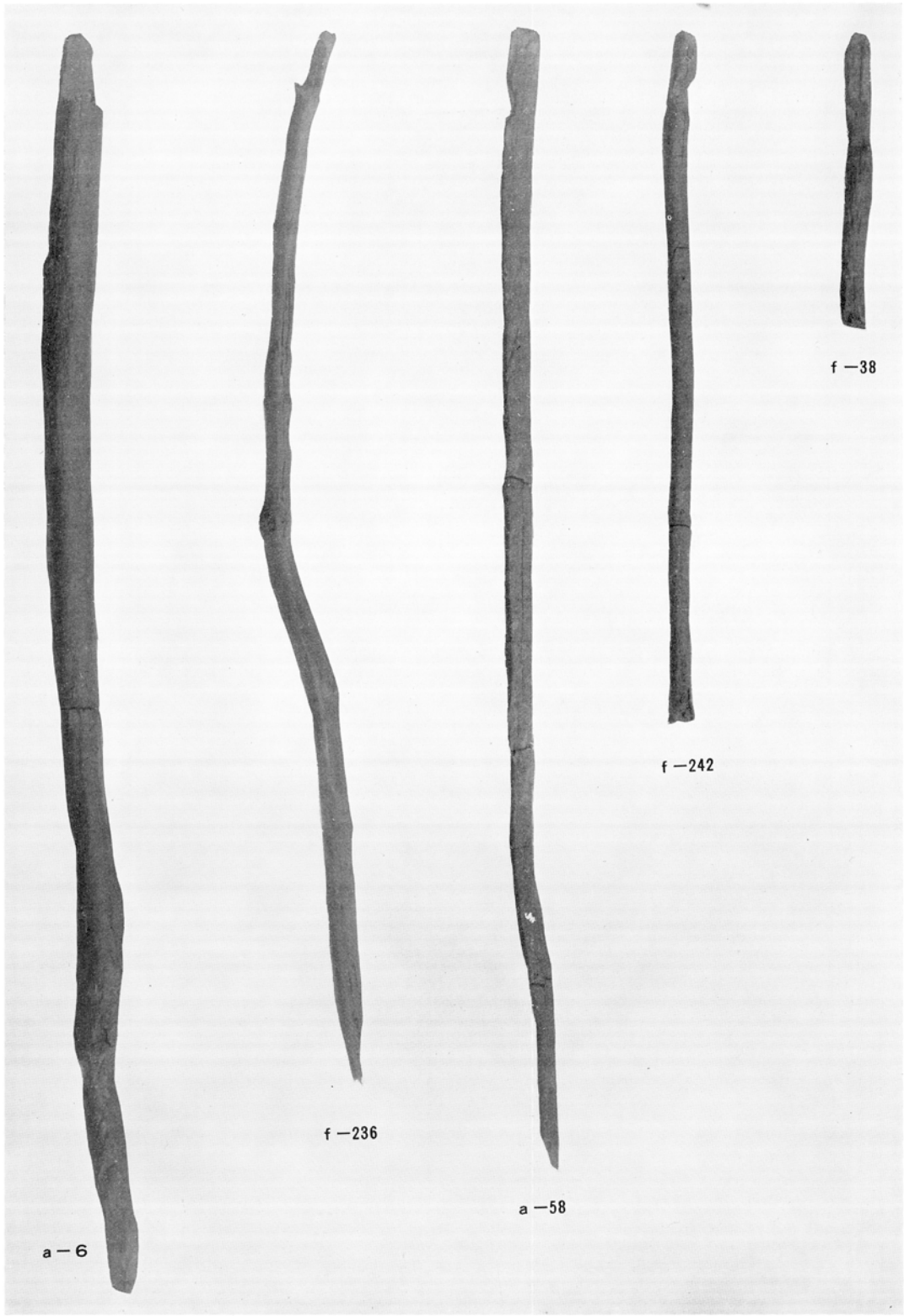
J—10 f 地点出土網枠とその細部　（第29図参照）（全形は縮尺1/4）



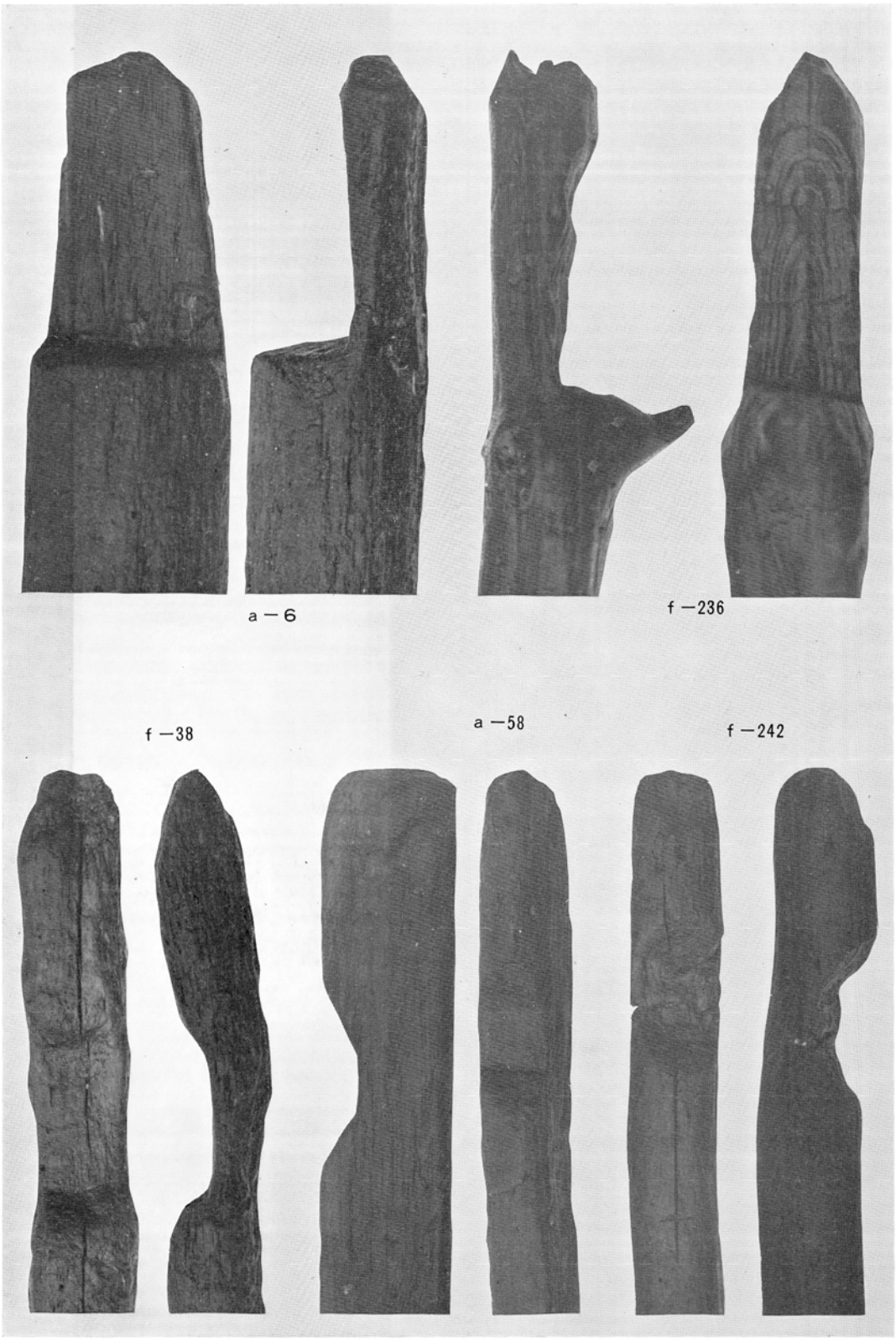
J—10区出土用途不明木器—1　（第8・29図参照）（縮尺1/2）



J—10区出土用途不明木器—2　（第29・30図参照）（縮尺 1～5 は1/4　6～8 は1/5）

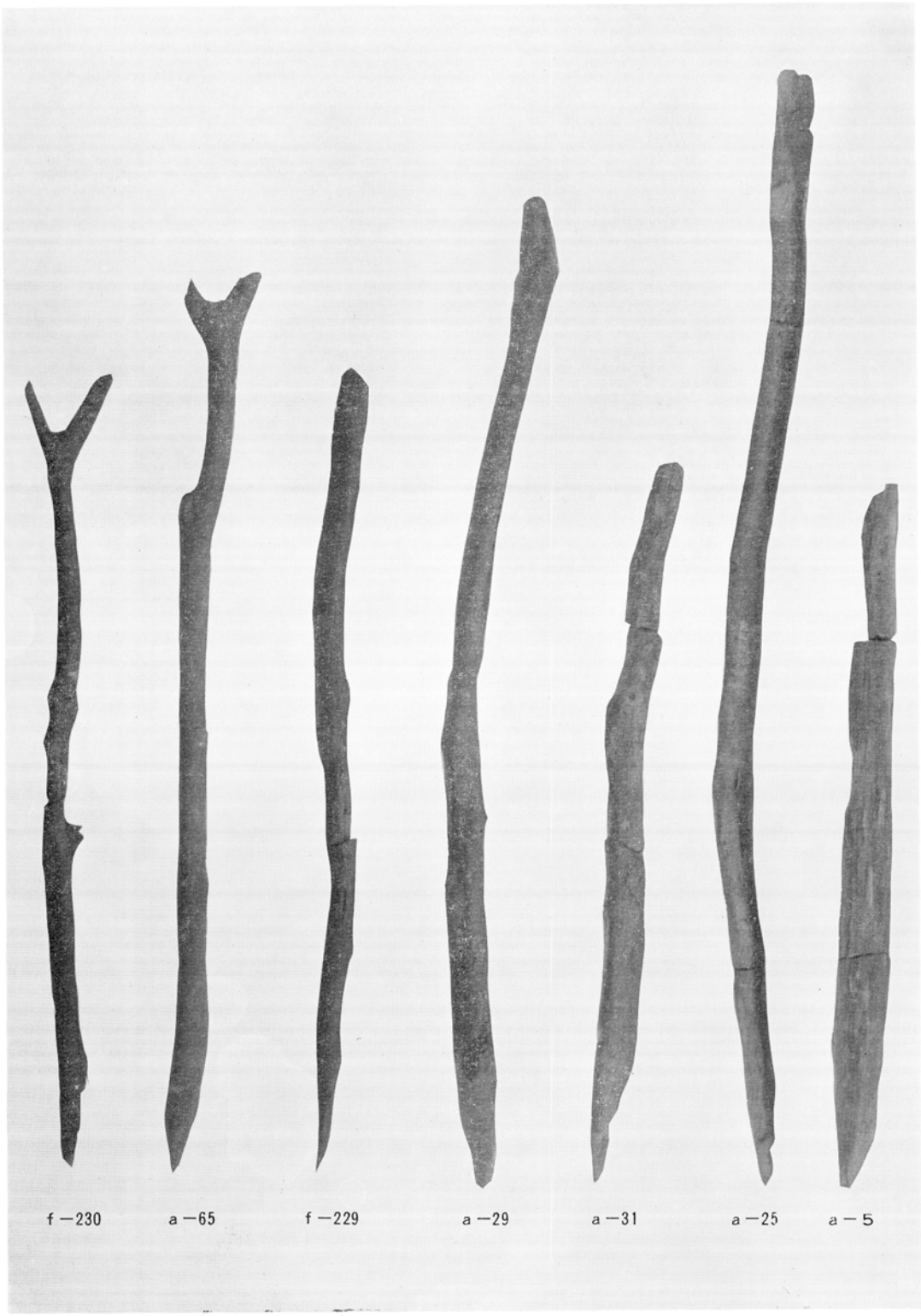


J—10区出土建築部材—1　（第32図参照）（縮尺1/10）

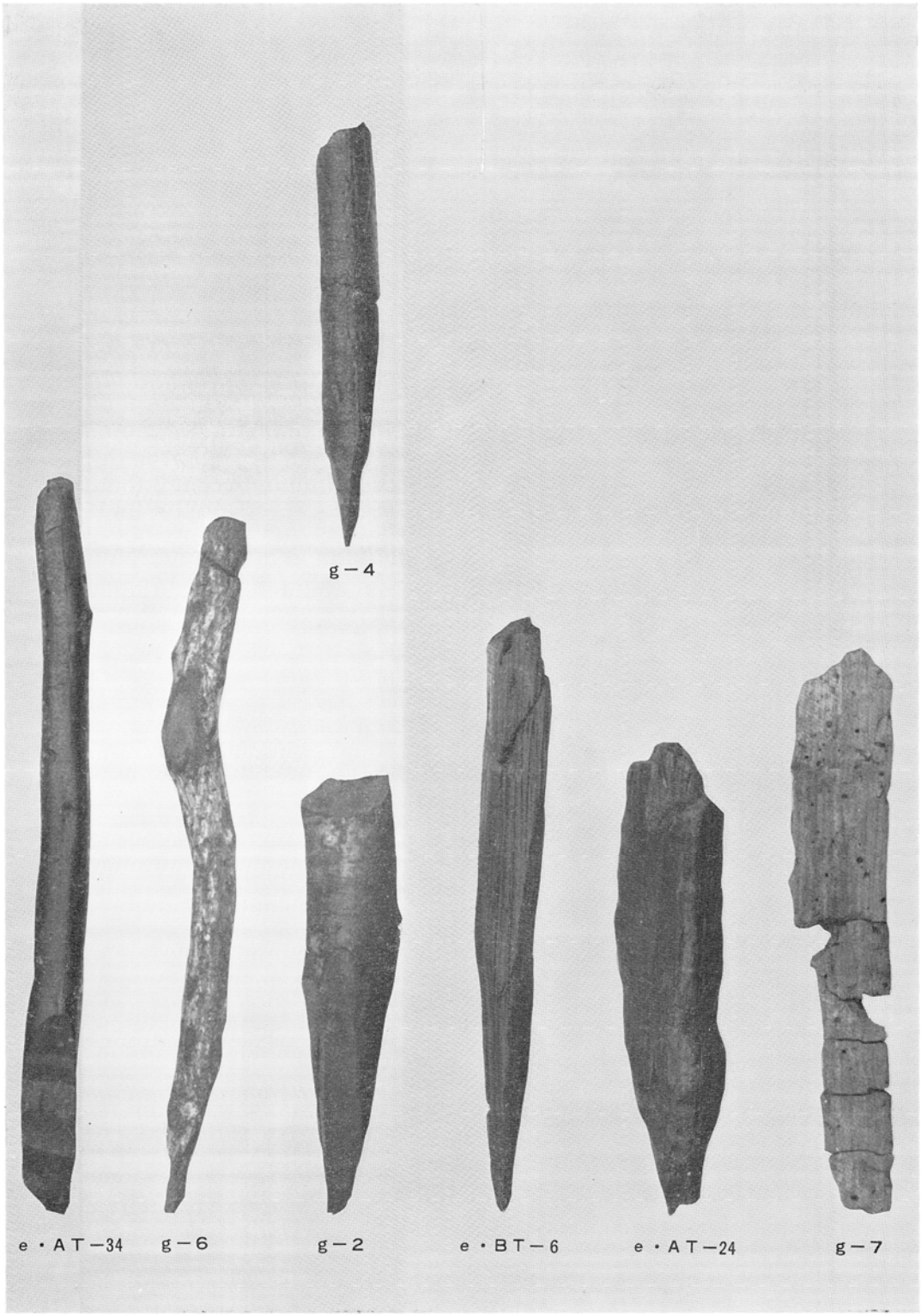


J—10区出土建築部材細部

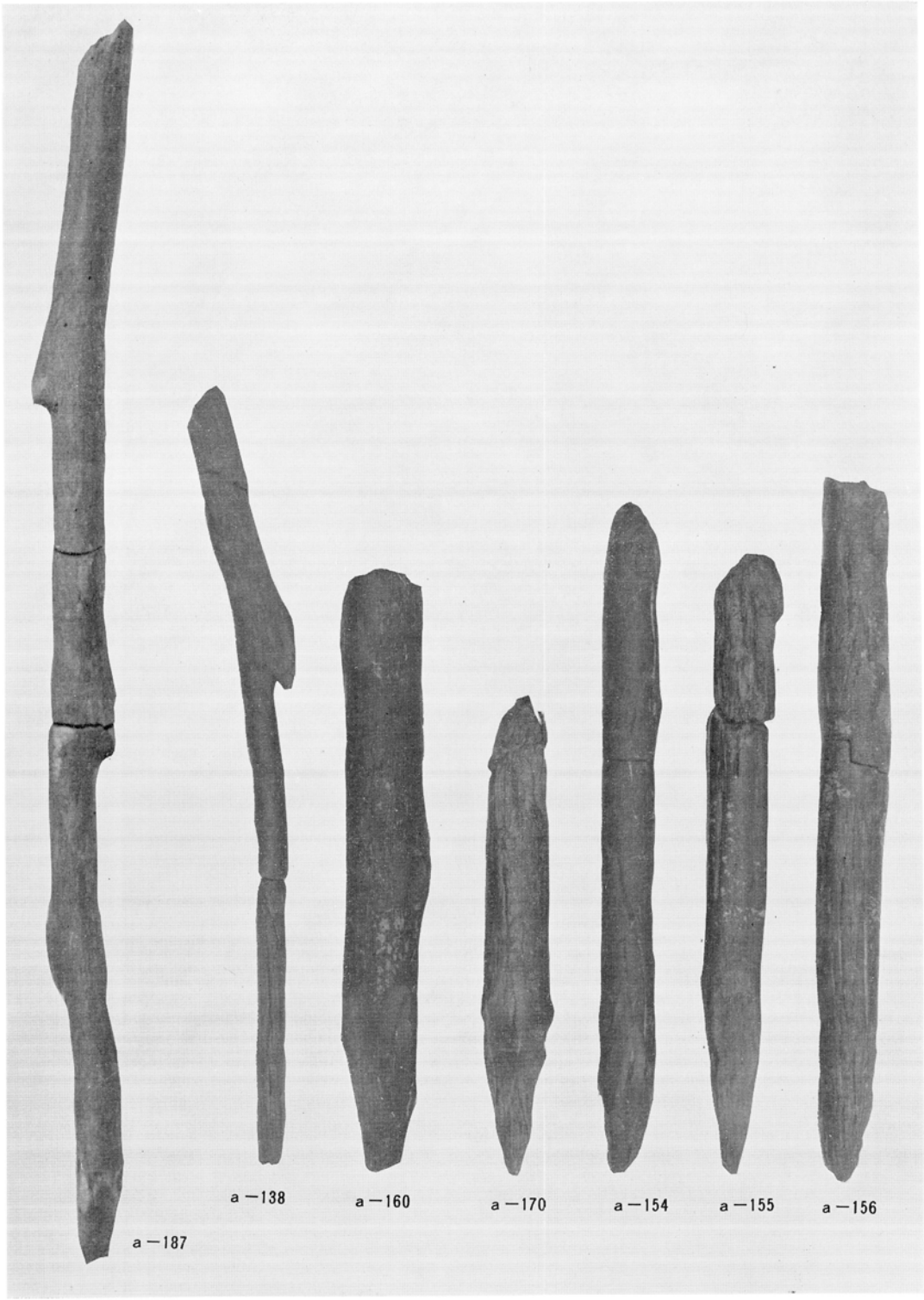
（縮尺不統一）



J—10区出土建築部材—2　（第33図参照）（縮尺1/10）

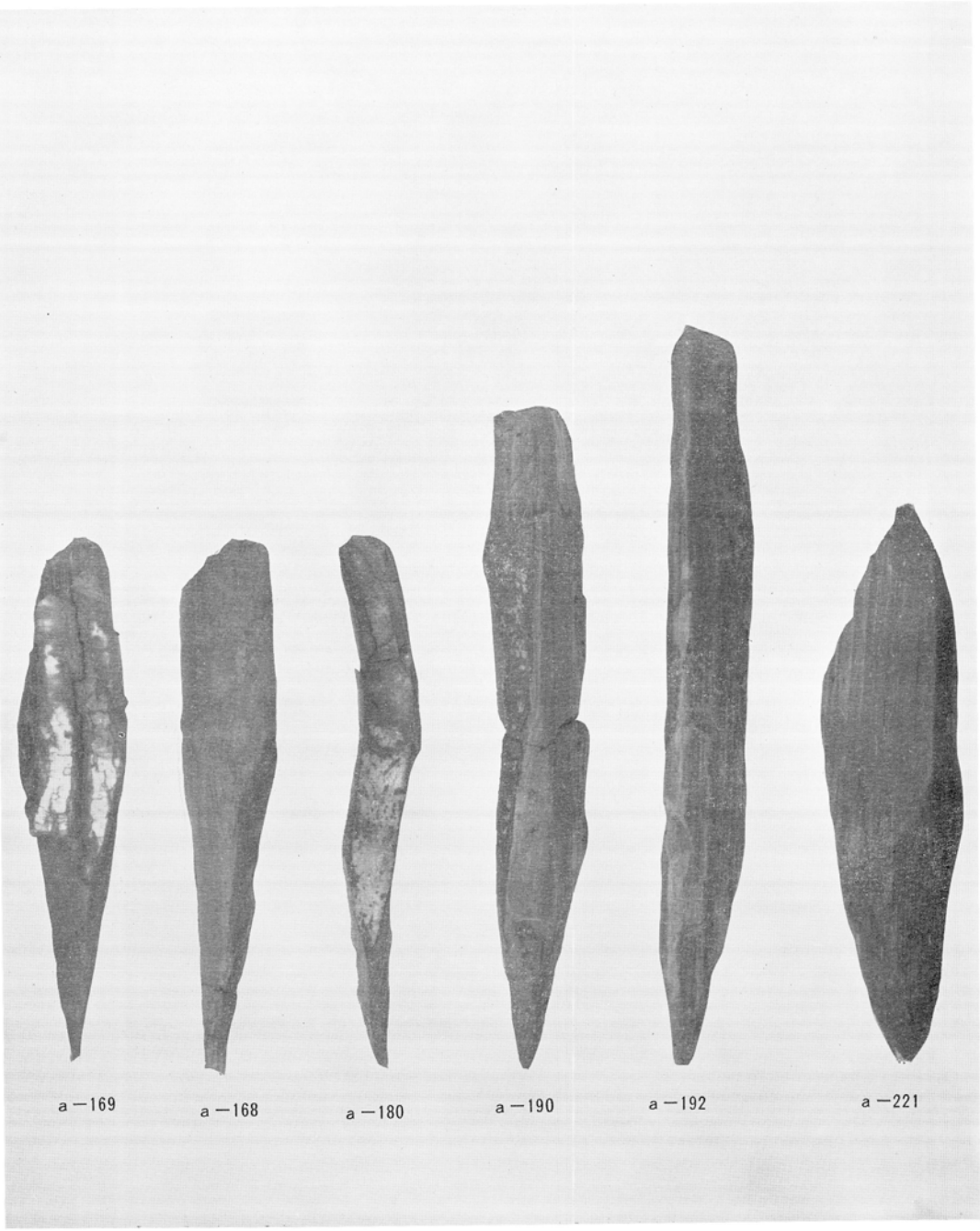


J—10e・J—10g地点出土杭　（第6図参照）（縮尺1/5）

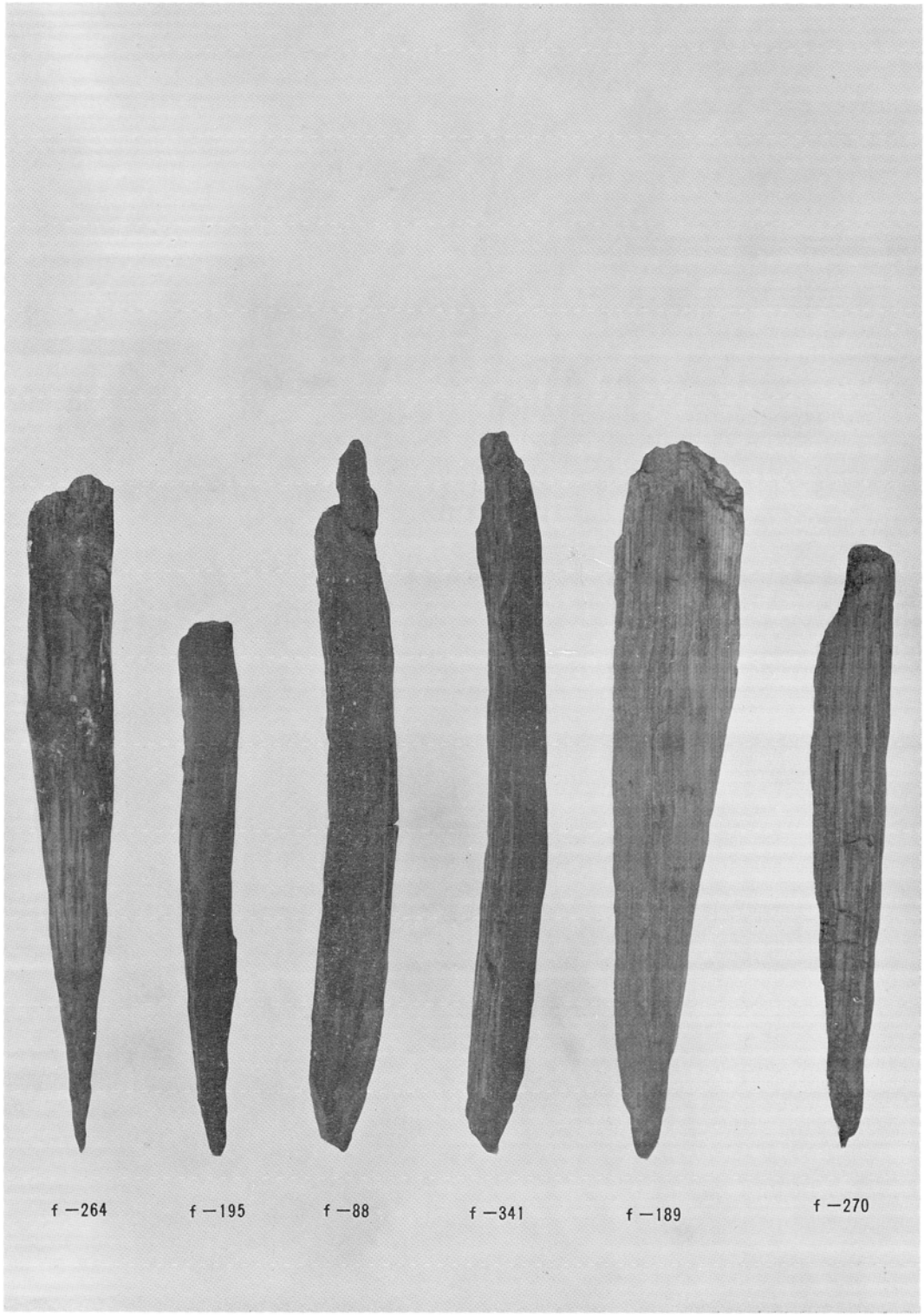


J—10a 地点出土丸木杭　（第11図参照）（縮尺1/5）

J—10 f 地点出土丸木杭　（第18図参照）（縮尺1/5）

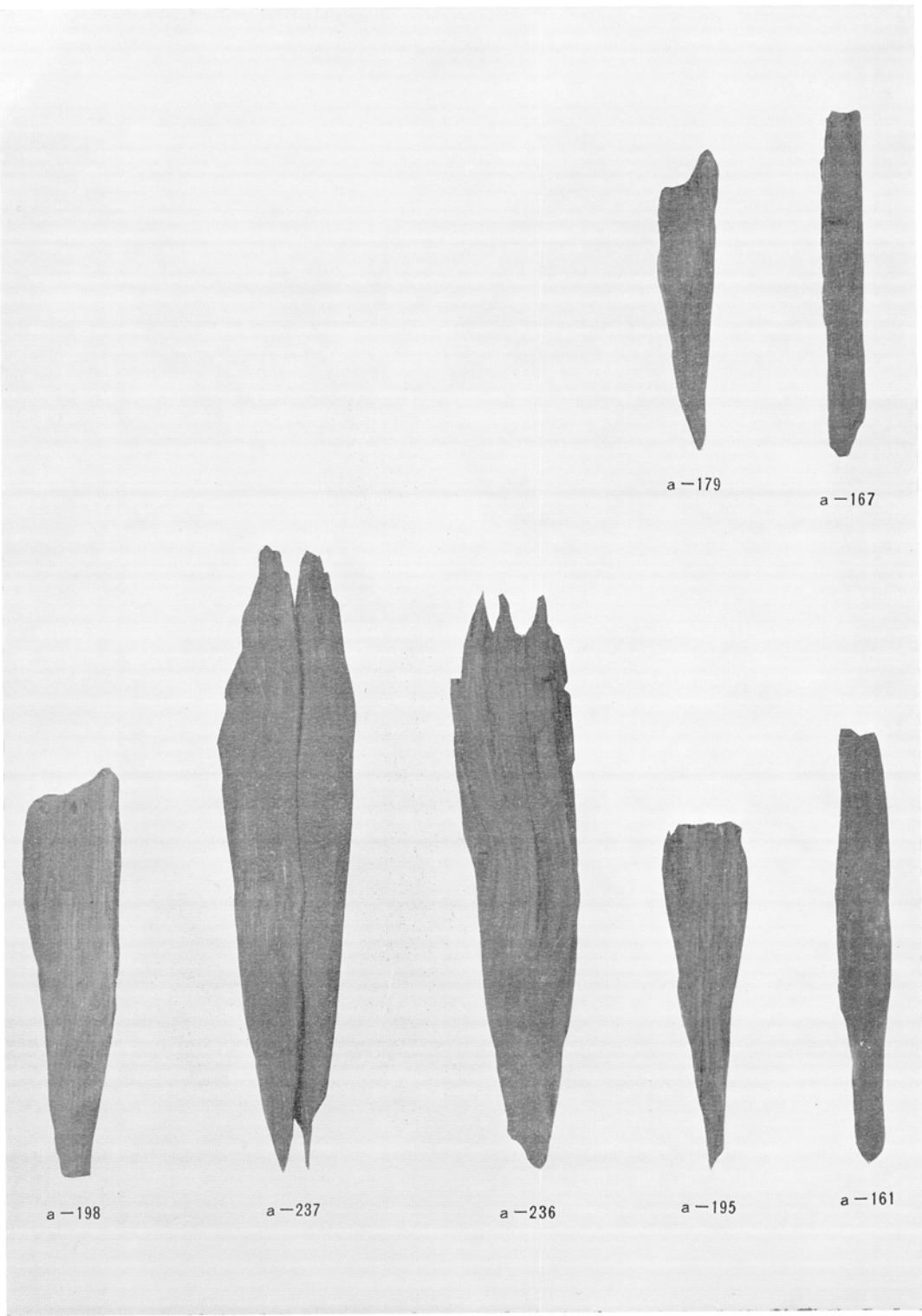


J—10a 地点出土割杭—1　（第12図参照）（縮尺1/5）

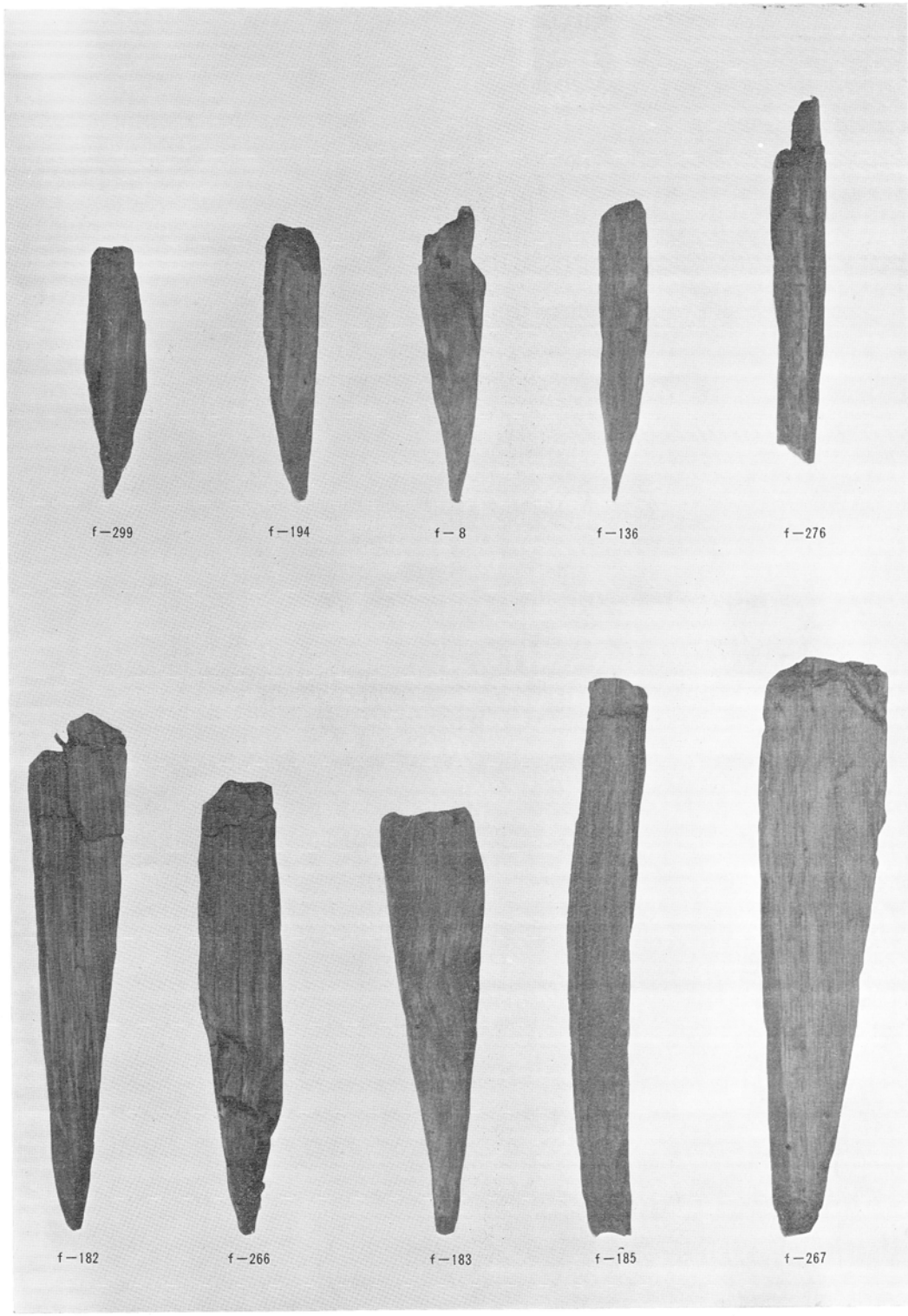


J—10 f 地点出土割杭—1

（第19図参照）（縮尺1/5）

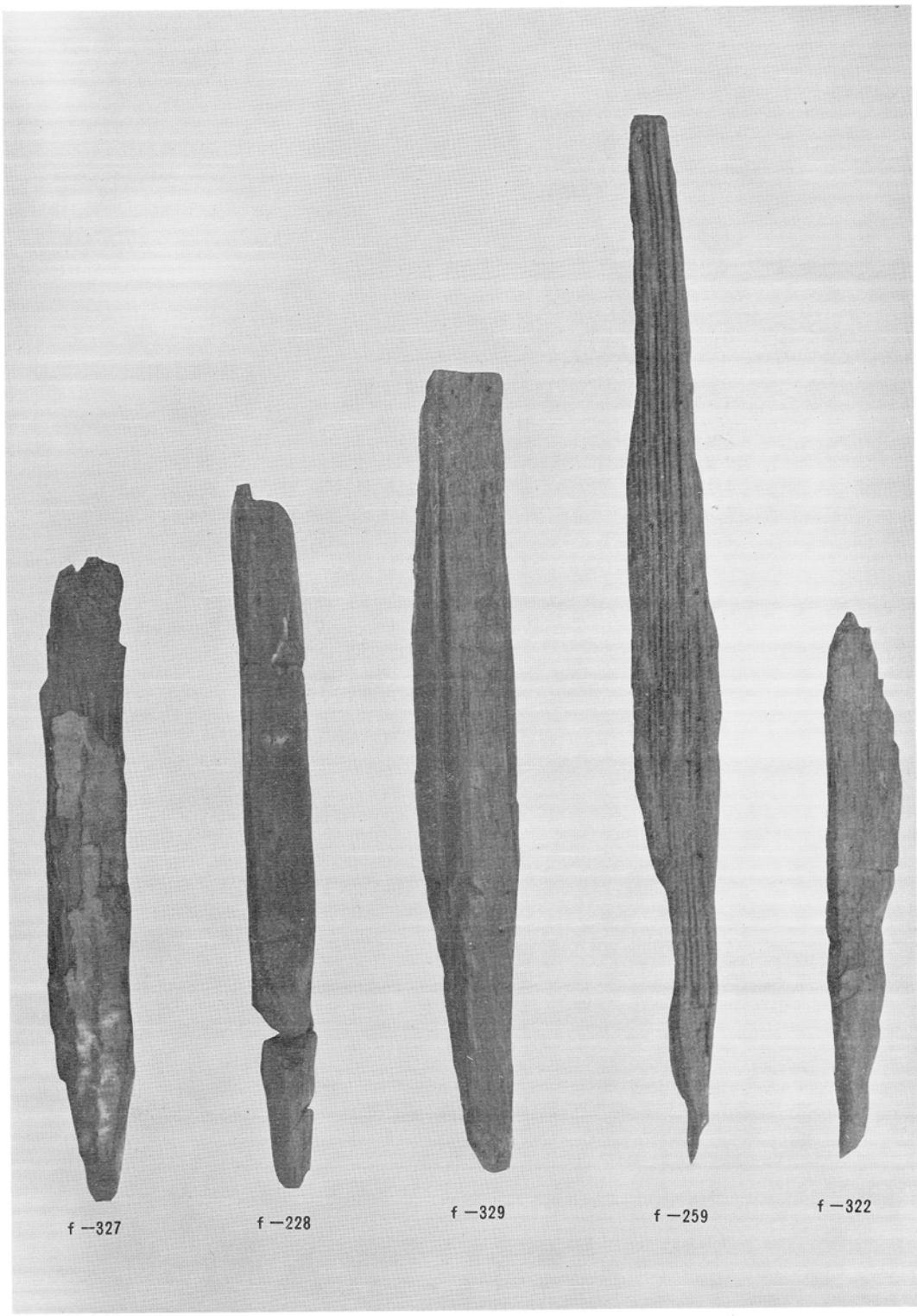


J—10a 地点出土割杭—2　（第13図参照）（縮尺1/5）

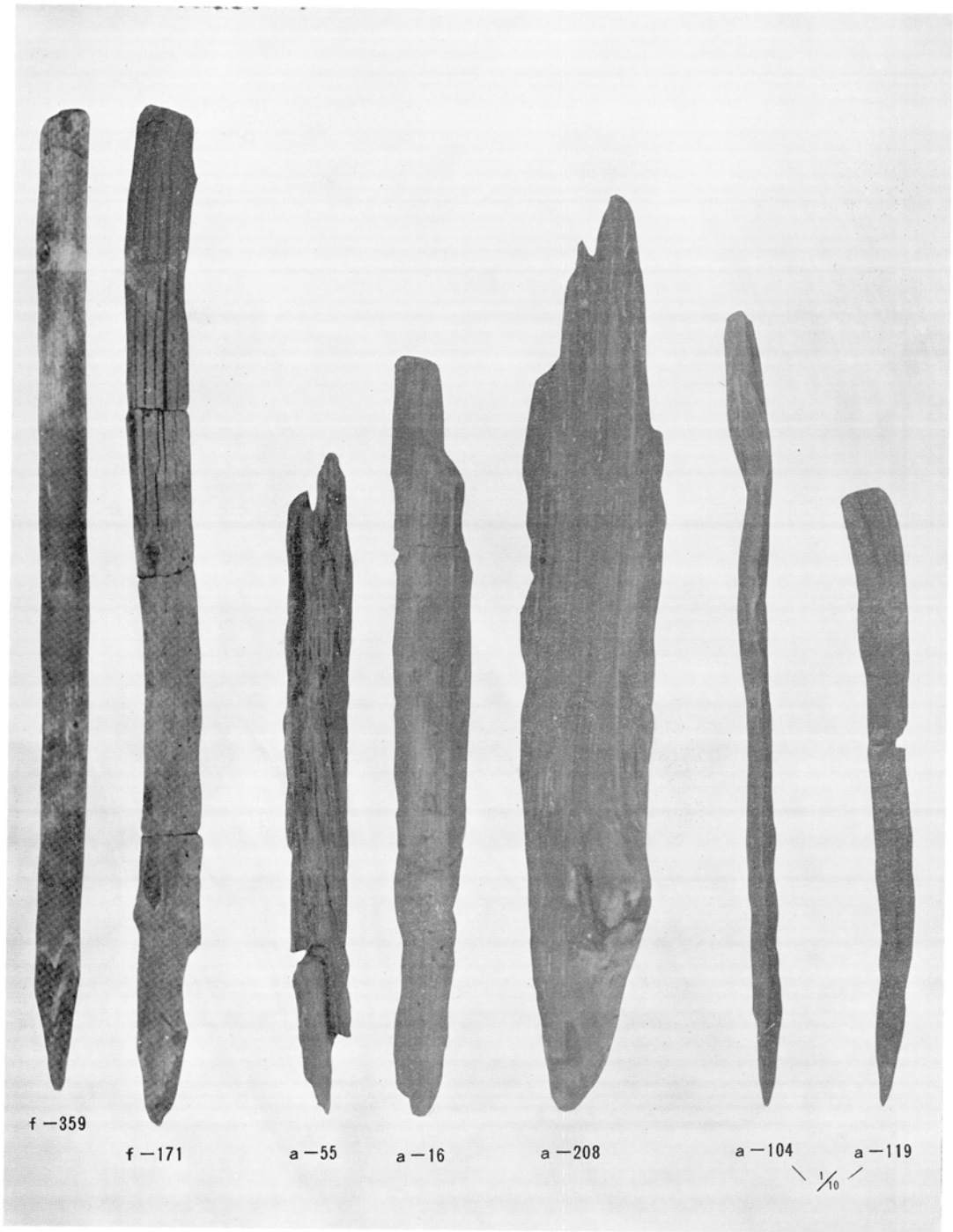


J—10 f 地点出土割杭—2　（第20図参照）（縮尺1/5）

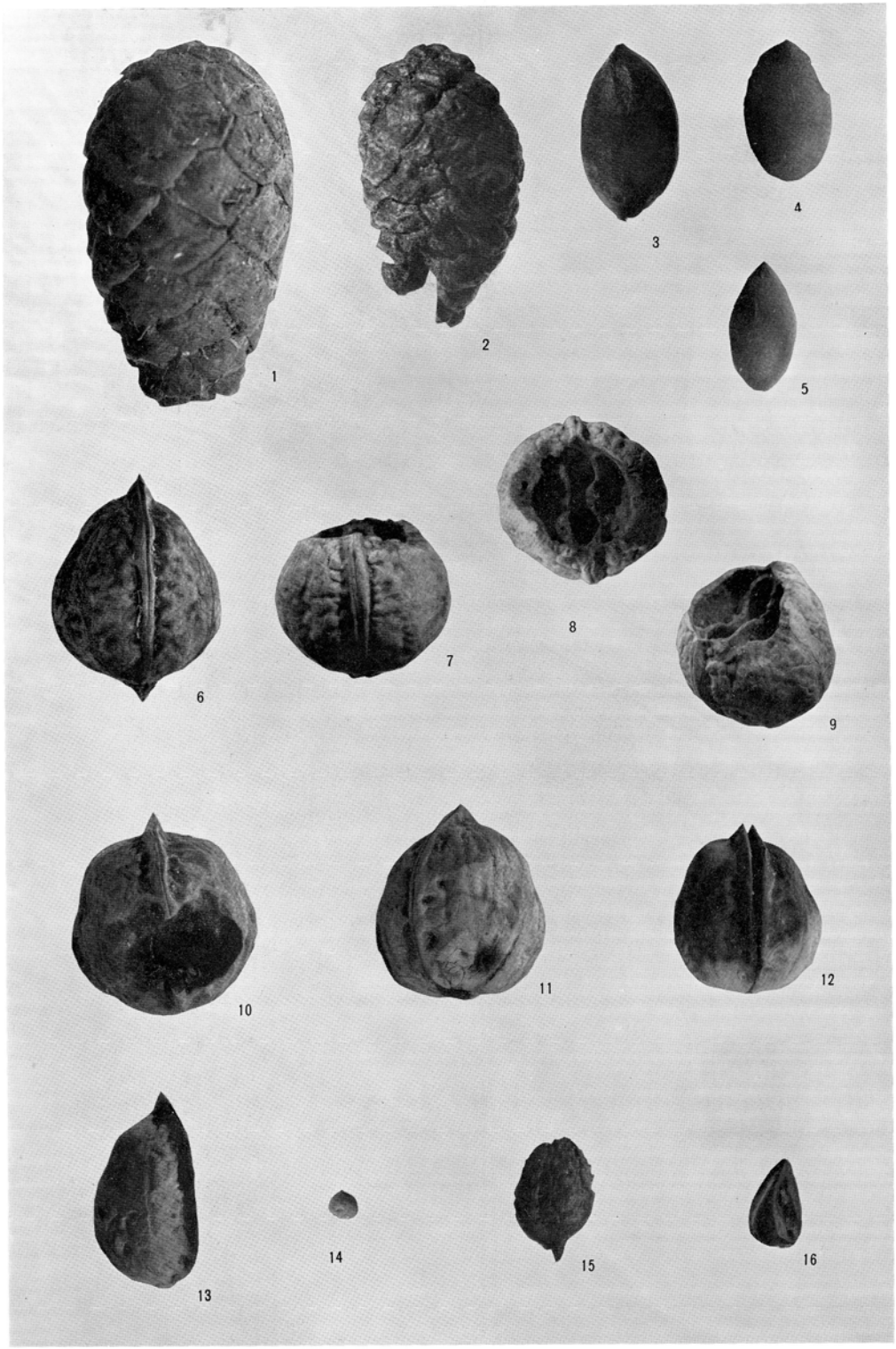
J—10 f 地点出土横木—1　（第21図参照）（縮尺1/5）



J—10 f 地点出土横木—2　（第22図参照）（縮尺1/5）



J—10区出土流木群の杭　（第31図参照）（縮尺1/5・1/10）



J—10区出土種子—1

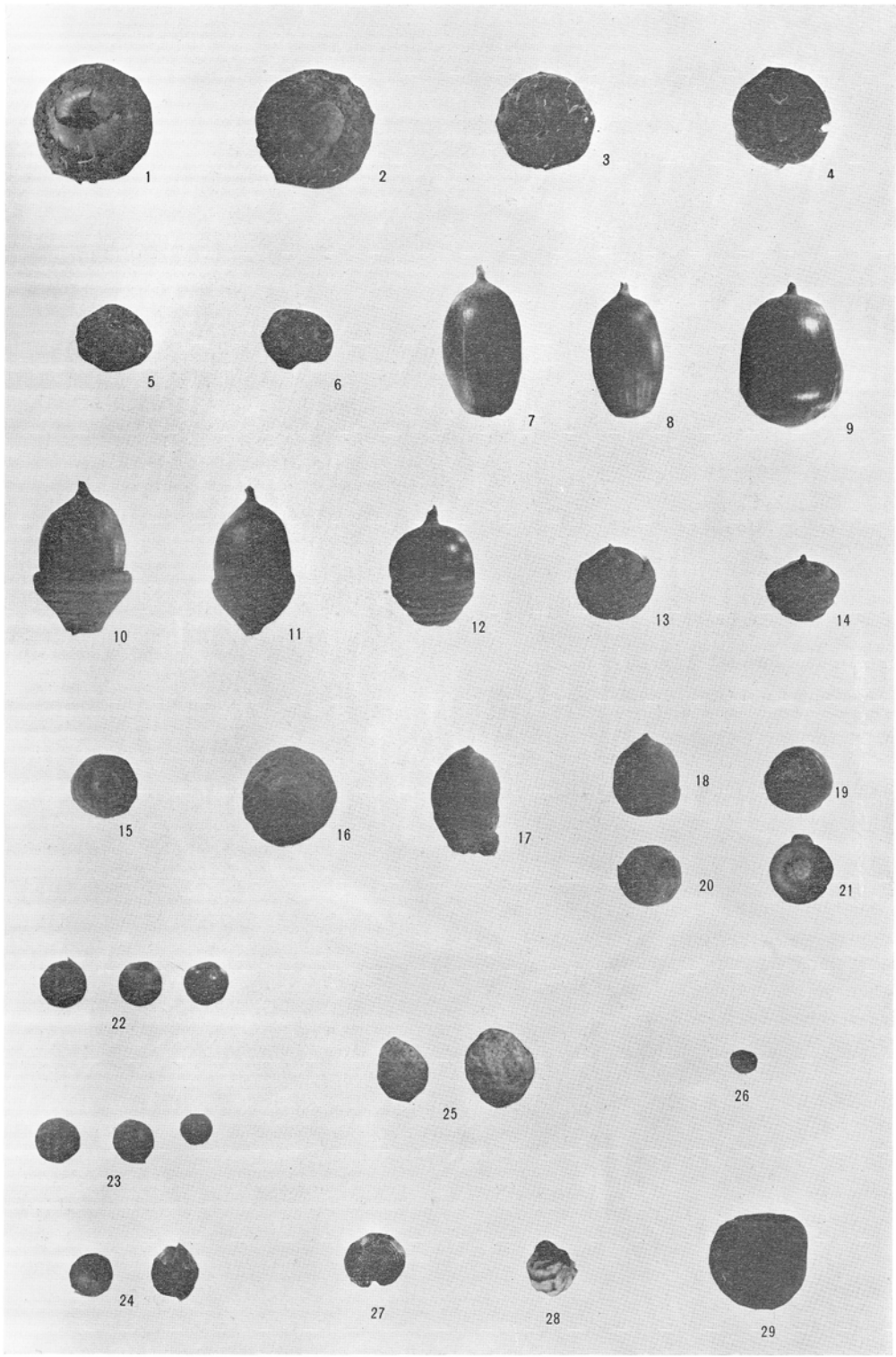
（図版説明は裏面参照）

PL. 39

1. クロマツの球果（J—10f地点）×1.1
2. 同上（J—10f地点）×1.1
3. カヤの種子（J—10f地点）×1.2
4. イヌガヤの種子（J—10f地点）×1.2
5. 同上（J—10a地点）×1.1
6. オニグルミの核（J—10a地点）×1
7. 同上（先端部を野ねずみにかじられる。J—10f地点）×1
8. 同上（上面より）×1
9. 同上（斜上より）×1
10. 同上（側面をかじられたもの。J—10a地点）×1
11. 同上（下方に虫くいの穴あるもの。J—10a地点）×1
12. 同上（焼けこげたもの。J—10a地点）×1
13. 同上（縫合線にそって焼けこげたもの。J—10a地点）×1
14. カナムグラの種子（J—10a地点）×1.2
15. ブナの果（J—10a地点）×1
16. ブナの種子（J—10a地点）×1

PL. 40

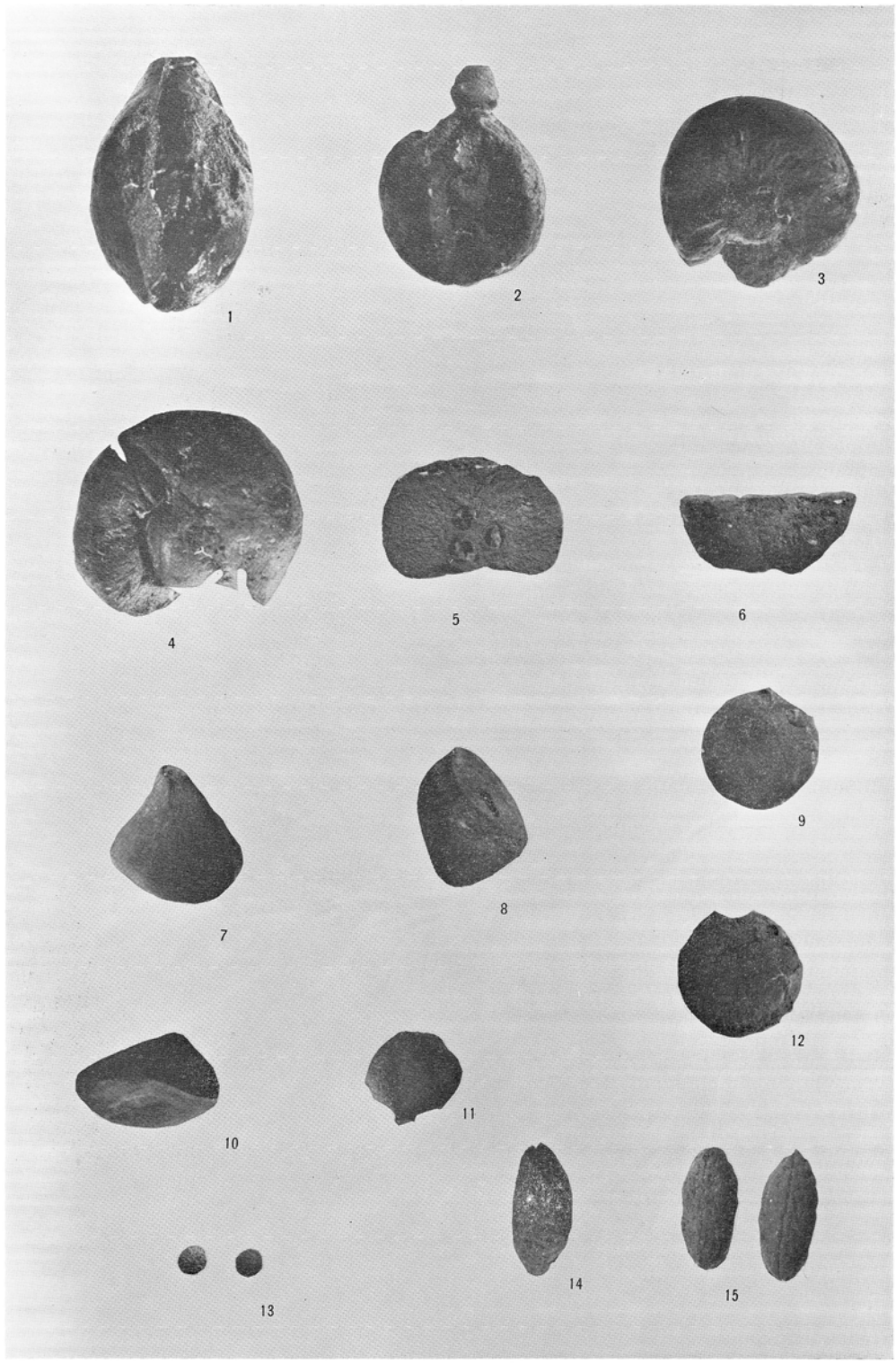
1. クヌギ（?）の幼果（上面より。J—10a地点）×1.1
2. 同上（下面より。）×1.1
3. 同上（上面より。J—10f地点）×1
4. 同上（下面より。）×1
5. 同上（上面より。J—10f地点）×1
6. 同上（側面より。虫の穴がみえる。）×1
7. イチイガシ（J—10f地点）×1.1
8. 同上（J—10a地点）×1.1
9. 同上（J—10f地点）×1.1
10. 同上(殻斗つき。J—10a地点）×1.1
11. 同上（J—10f地点）×1.1
12. 同上（J—10f地点）×1.1
13. 同上（幼果。J—10f地点）×1.1
14. 同上（幼果。J—10f地点）×1.1
15. 同上（上面より。J—10f地点）×1.1
16. 同上（殻斗を下からみた状。J—10f地点）×1.1
17. シリブカガシ（殻斗つき。J—10a地点）×1
18. 同上（殻斗をはずした状。）×1
19. 同上（下面のへこんだ隣点の状。）×1
20. 同上（殻斗の下面。）×1
21. 同上（殻斗の上面。不実の小果をつける。）×1
22. クスノキの種子（J—10a地点）×1
23. 同上（J—10f地点）×1
24. 同上（右のものは外果皮もつけている。J—10a地点）×1
25. ヤマモモの種子（J—10f地点）×1.2
26. ノブドウの種子（J—10a地点）×1.2
27. マルミノヤマゴボウの種子（J—10f地点）×2.9
28. ヤマビワ（J—10f地点）×1.6
29. ムクロジの種子（J—10a地点）×1



J—10区出土種子—2

PL. 41

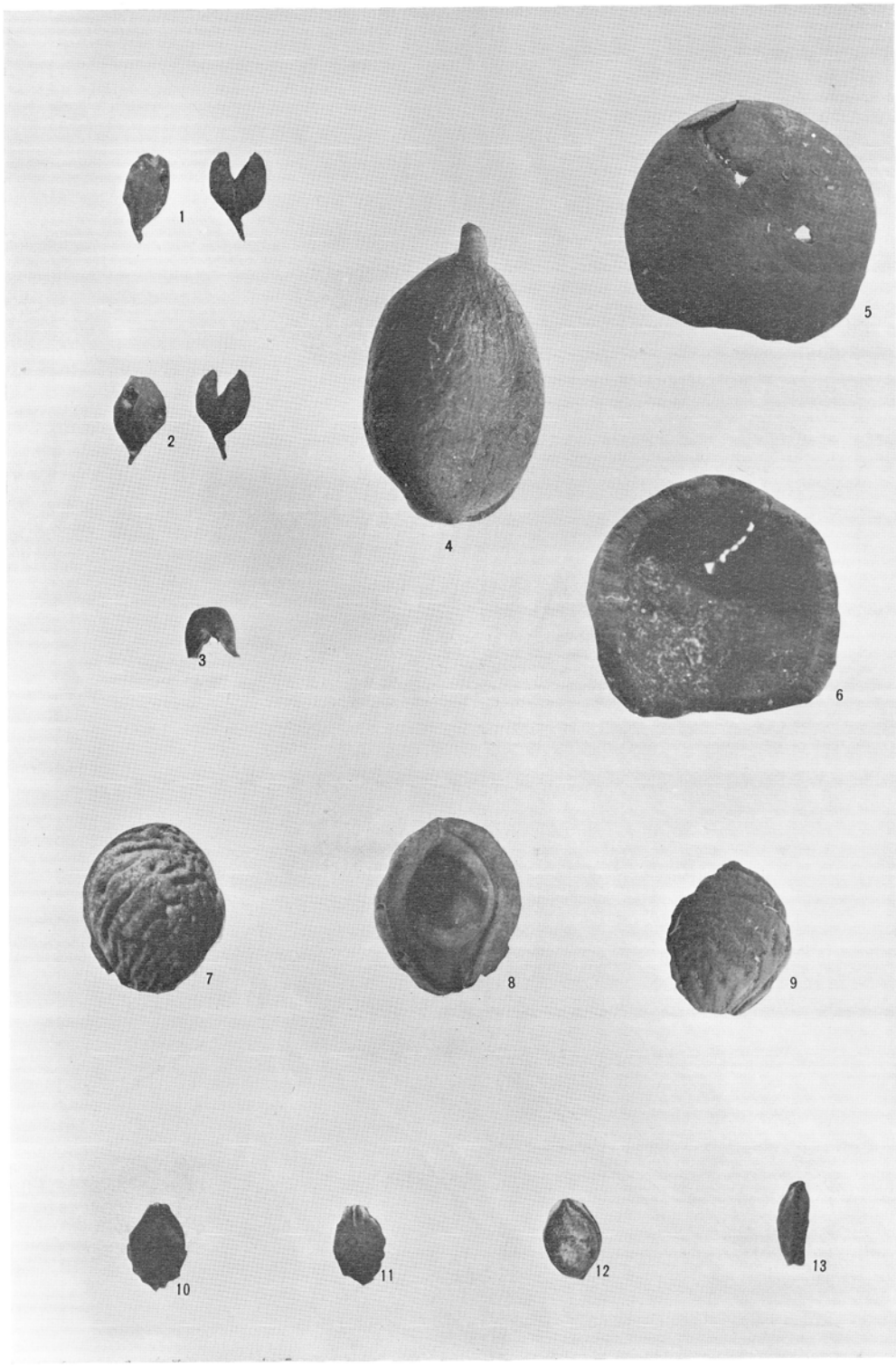
1．ヤブツバキの未熟の果実（J—10f地点）×1.1
2．同上（果梗を保存している。J—10f地点）×1.1
3．同上（かじられたあとあり。J—10f地点）×1.1
4．同上（J—10f地点）×1.1
5．同上（横断面で，未熟果であることがわかる。J—10a地点）×1
6．同上（側面。）×1
7．同上（種子。J—10f地点）×1.1
8．同上（J—10f地点）×1.1
9．同上（J—10a地点）×1.1
10．同上（J—10a地点）×1.1
11．同上（J—10a地点）×1.1
12．同上（J—10a地点）×1.1
13．アカメガシワの種子（J—10a地点）×1.2
14．ホルトノキの種子（J—10f地点）×1.1
15．同上（J—10f地点）×1.1



J—10区出土種子—3

ＰＬ．42

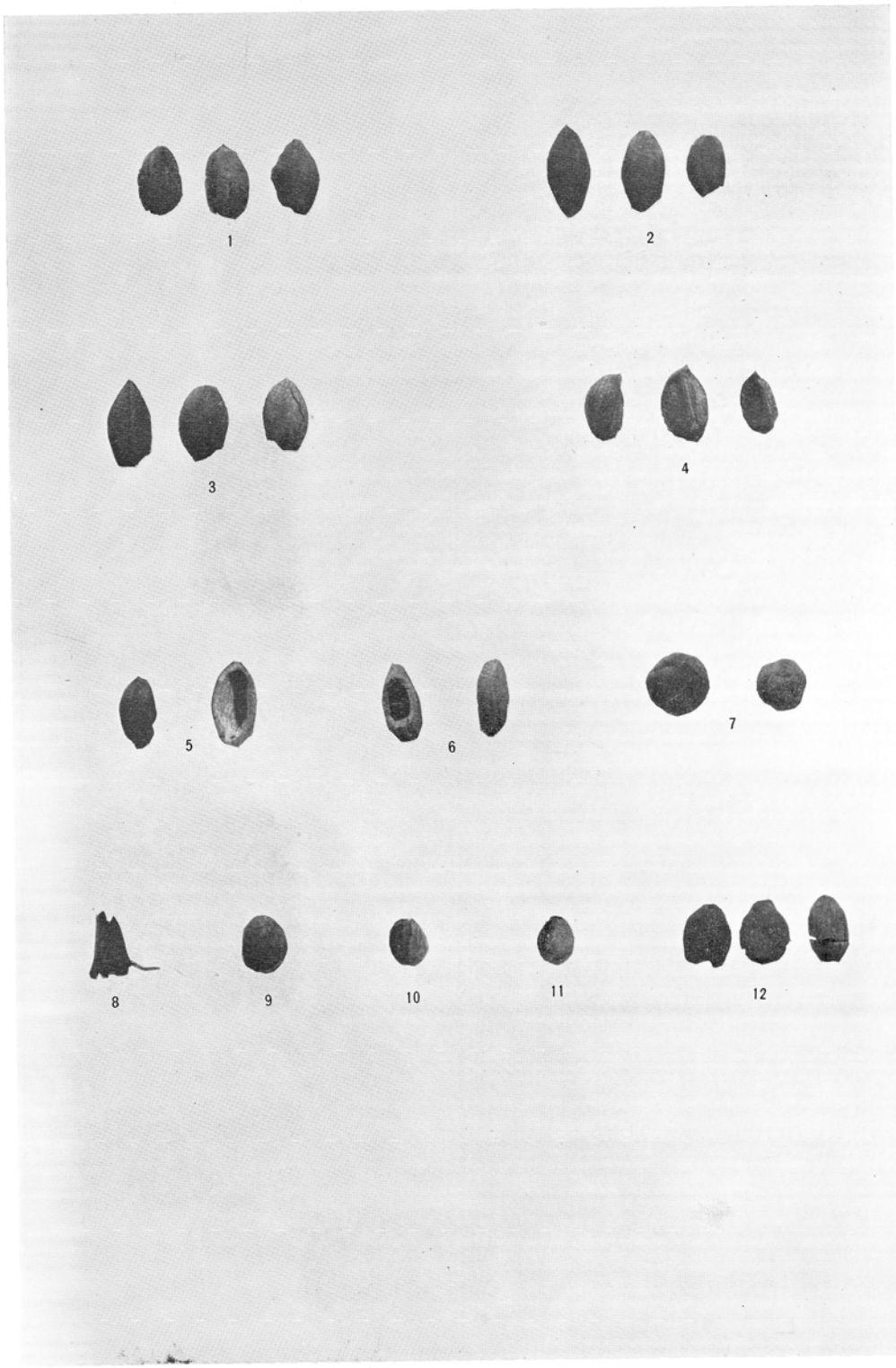
1．イスノキの果実（Ｊ—10ｆ地点）×１
2．同上（裏側，左側のものには，虫くい孔あり。その為開裂しない。）×１
3．同上（内果皮。Ｊ—10ａ地点）×1.2
4．同上（虫こぶ。Ｊ—10ｆ地点）×1.1
5．同上（虫こぶの破片。Ｊ—10ｆ地点）×1.1
6．同上（内側。）×1.1
7．モモの核（Ｊ—10ａ地点）×１
8．同上（断面。）×１
9．同上（Ｊ—10ｆ地点）×１
10．ゴキヅルの種子（背面。Ｊ—10ａ地点）×1.1
11．同上（腹面。Ｊ—10ａ地点）×1.1
12．同上（断面。Ｊ—10ｆ地点）×1.1
13．同上（側面。Ｊ—10ｆ地点）×1.1



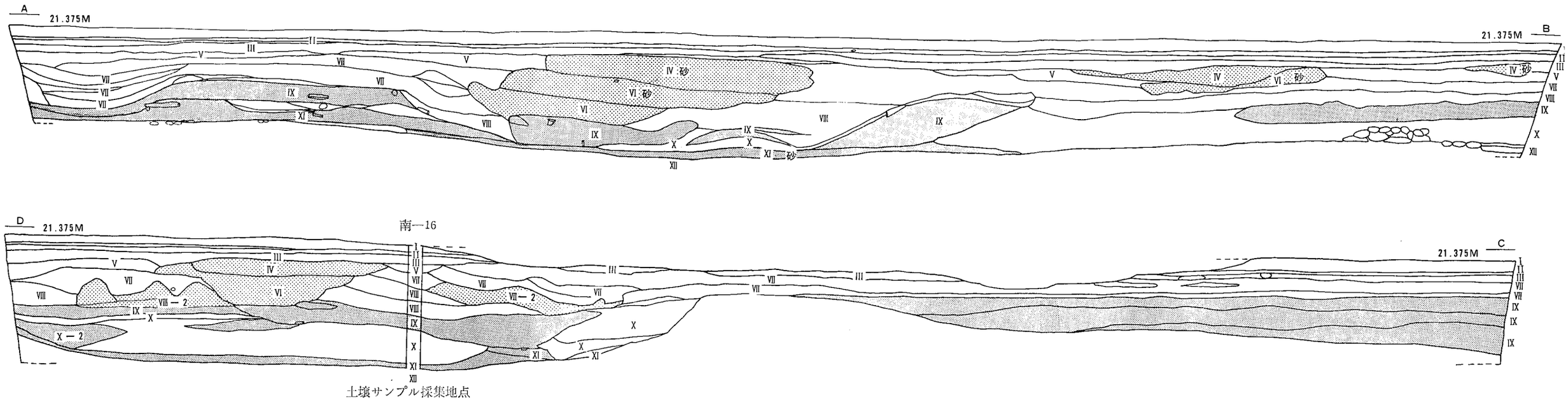
J—10区出土種子—4

PL. 43

1．エゴノキの種子（J—10a地点）×1.1
2．同上（J—10a地点）×1.1
3．同上（J—10f地点）×1.1
4．同上（双子性のもの。一面が平面となっている。J—10a地点）×1.1
5．同上（やや異形のもの。J—10a地点）×1.1
6．同上（右側のものは，著しく異形。J—10f地点）×1.1
7．同上（下面より。大きな臍点を示す。J—10f地点）×1.3
8．ミミツバイの種子断片。（J—10a地点）×1.3
9．クサギの種子背面（J—10f地点）×1.6
10．同上（J—10a地点）×1.2
11．同上（腹面）×1.2
12．ハトムギの種子（J—10f地点）×1.2

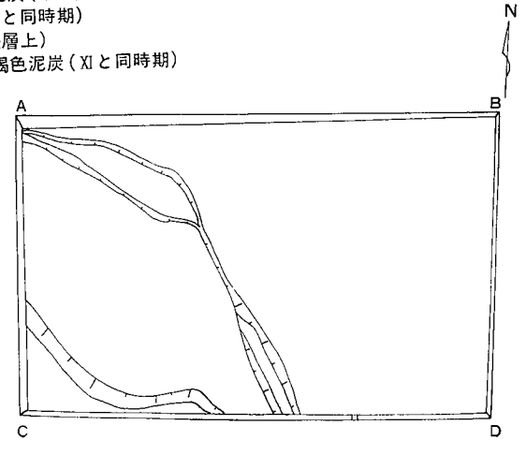


J—10区出土種子—5

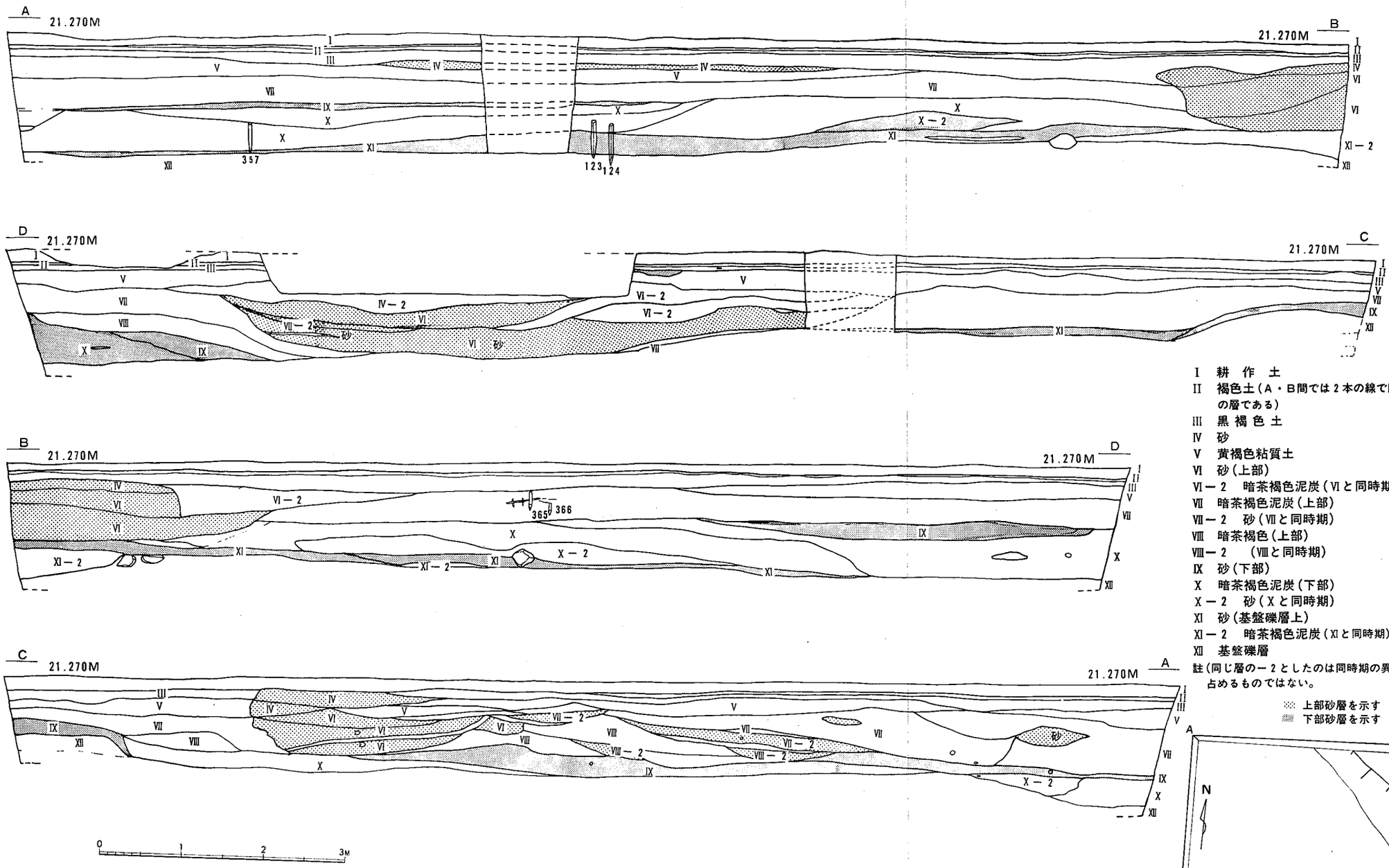


I　耕　作　土
II　褐　色　土
III　黒褐色土
IV　砂
V　黄褐色粘質土
VI　砂（上部）
VII　暗茶褐色泥炭（粘質が強い、上部）
VII－2　砂（VIIと同時期）
VIII　暗茶褐色泥炭（上部）
VIII－2　砂（VIIIと同時期）
IX　砂（下部）
X　暗茶褐色泥炭（下部）
X－2　砂（Xと同時期）
XI　砂（基盤礫層上）
XI－2　暗茶褐色泥炭（XIと同時期）
XII　基盤礫層

上部砂層を示す
下部砂層を示す



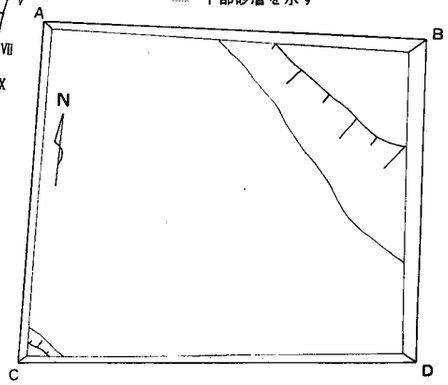
付図－1　J－10a地点土層実測図（縮尺1/60）



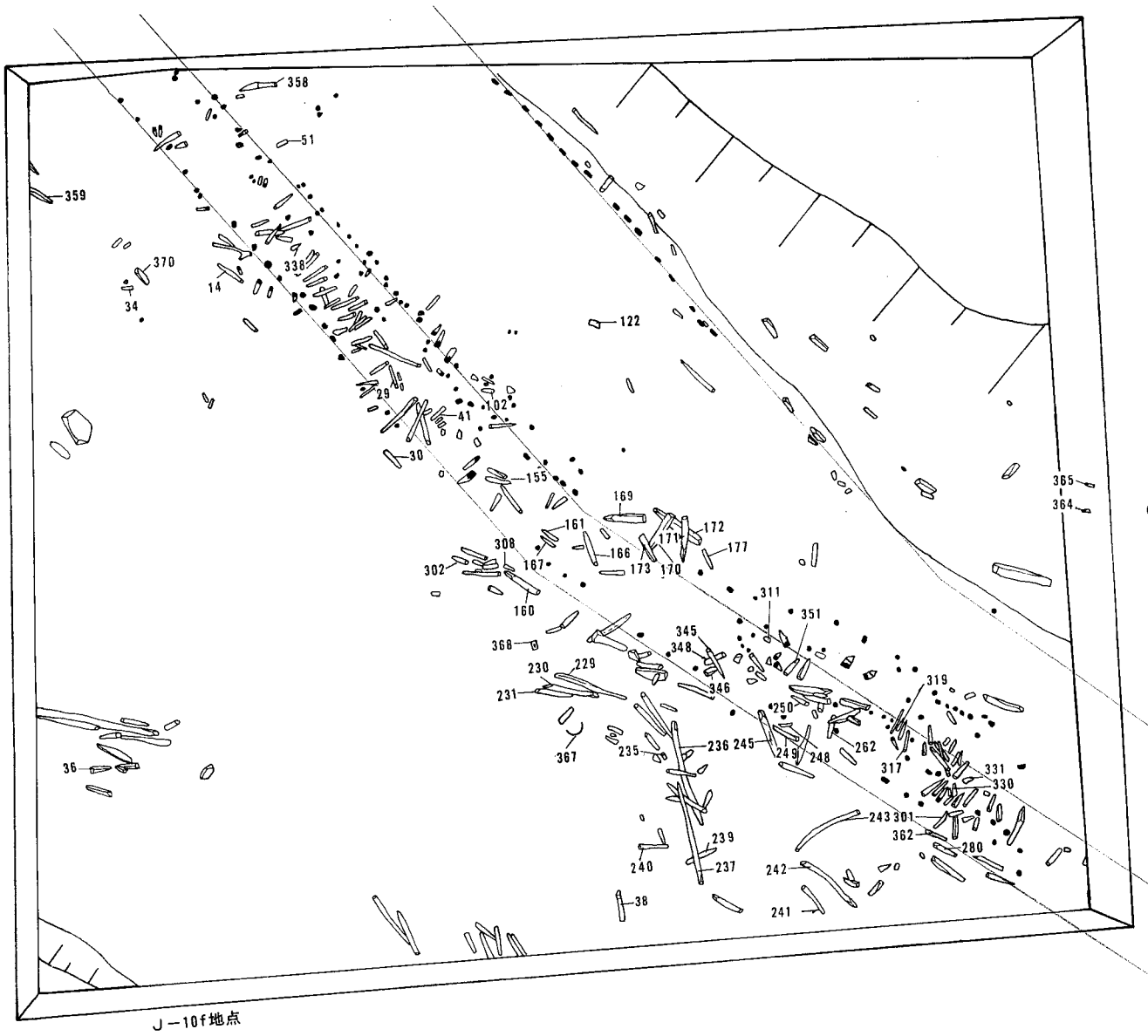
I　耕　作　土
II　褐色土（A・B間では2本の線で区別してあるが1つの層である）
III　黒褐色土
IV　砂
V　黄褐色粘質土
VI　砂（上部）
VI－2　暗茶褐色泥炭（VIと同時期）
VII　暗茶褐色泥炭（上部）
VII－2　砂（VIIと同時期）
VIII　暗茶褐色（上部）
VIII－2　（VIIIと同時期）
IX　砂（下部）
X　暗茶褐色泥炭（下部）
X－2　砂（Xと同時期）
XI　砂（基盤礫層上）
XI－2　暗茶褐色泥炭（XIと同時期）
XII　基盤礫層

註（同じ層の－2としたのは同時期の異質の層で主体を占めるものではない。

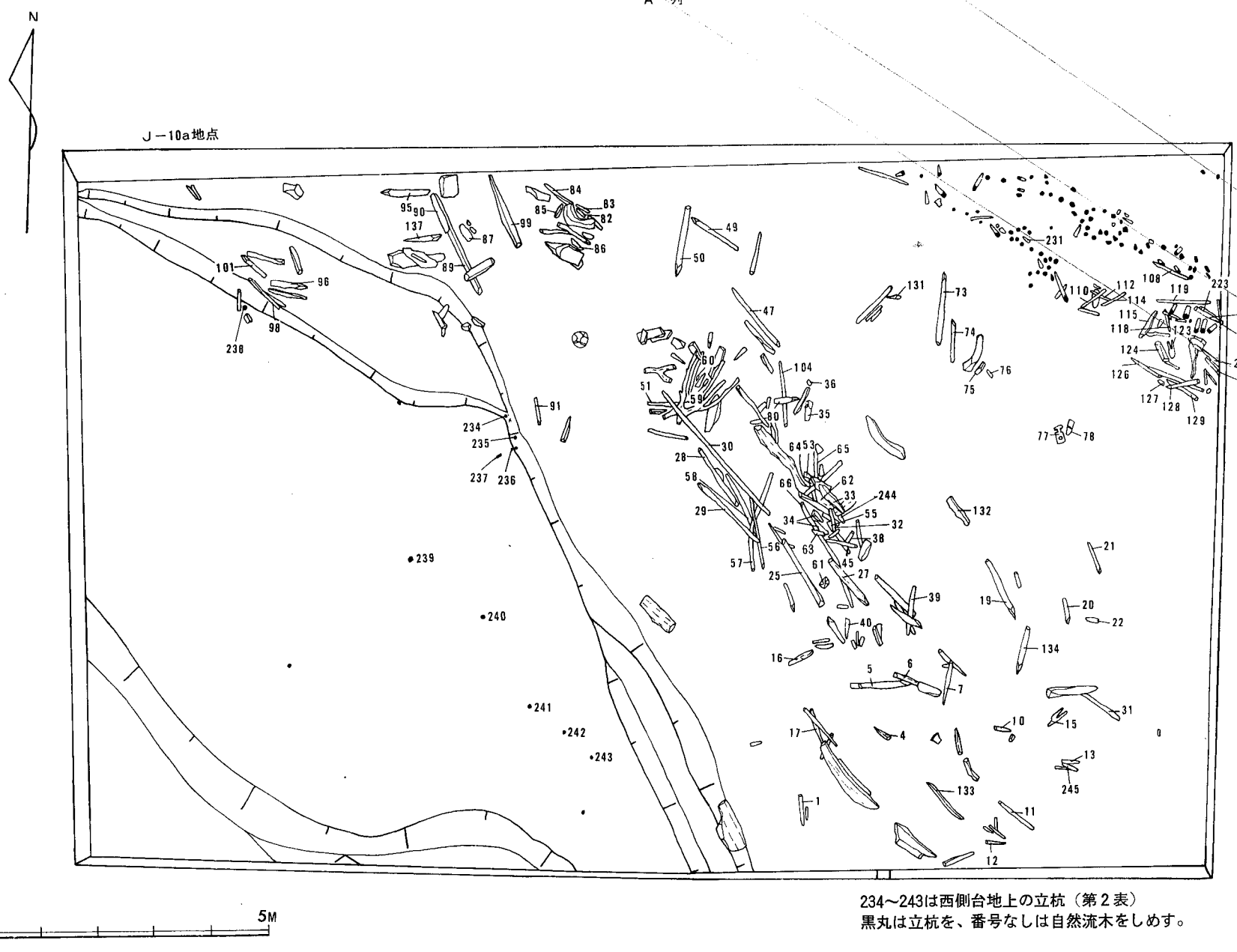
上部砂層を示す
下部砂層を示す



付図－2　J－10f地点土層実測図（縮尺1/60）

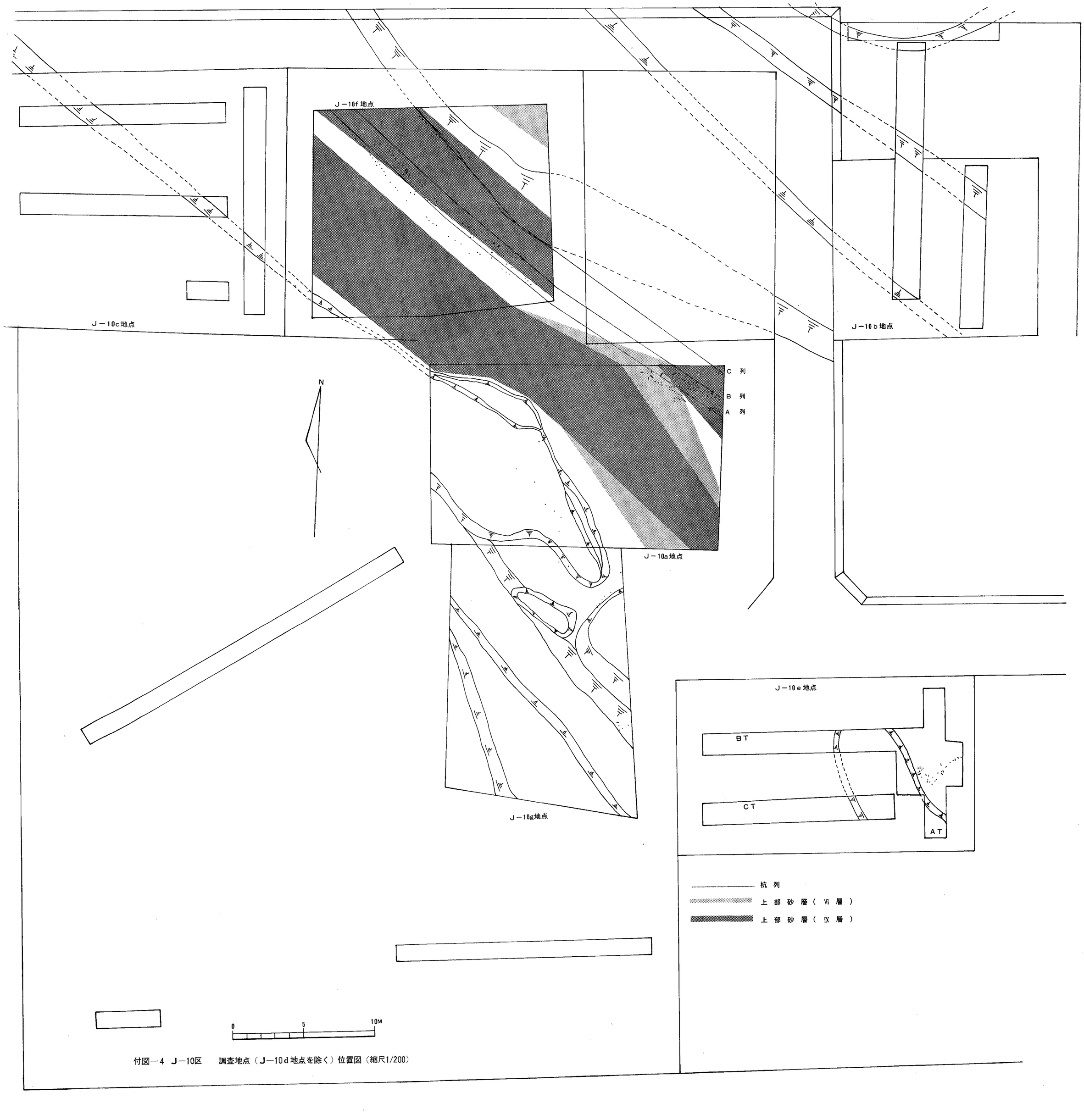


（364・365は新しい時期の立杭）



234～243は西側台地上の立杭（第２表）
黒丸は立杭を、番号なしは自然流木をしめす。

付図－３　Ｊ－10a ・ Ｊ－10f 地点流木群（縮尺1/100）



付図―4　J―10区　　調査地点（J―10ｄ地点を除く）位置図（縮尺1/200）

福岡市西区
四箇周辺遺跡調査報告書
(1)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集

1977年（昭和52年）3月31日
発行　福岡市教育委員会
印刷　株式会社チューエツ